
MUGENな日常

雨季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MUGENな日常

【Nコード】

N0580X

【作者名】

雨季

【あらすじ】

とにかく八チャメチャな世界、MUGEN。そこに暮らす人々の生活をカオスに描いていきます。

これは対戦格闘エンジン『M・U・G・E・N』を題材にしています。過度なキャラ崩壊、原作無視、多重クロス、ニコニコ動画ネタなどが含まれています。嫌悪する方はバックをお願いします。それとニコニコ動画のMUGEN動画を見ていないと分からないキャラも多数出演します。それらを『MUGEN故致し方なし』と考えられる心の広い方はどうぞ。

始まりの日（前書き）

いろいろと酷い状態ですが、詳しく考えず、適当に流す程度に読んで下さいね。

始まりの日

ここは無限の可能性とカオスが折り混ざる世界。ここでは神もいれば人もいる。怪獣もいれば無機物もいる。それでも平和（？）なこの世界にも春が訪れました。

「ふわあゝ、よく寝た」

小さな学生寮の一部屋で目を覚ましたのは青い鉢巻に胴着を着た青年、カンフーマンである。寝間着くらい着ろ。

「ご主人、今日は始業式ですよ」

この二本足で歩く猫はアイルー。カンフーマンのペットであり大切な家族でもある。

「そうだったな。んじゃ行ってくるか」

彼も一応高校生なので学校へと行かなければならない。特に今日は始業式。新しいクラスとクラスメートを確かめるためには行く必要性がある。カンフーマンはカバンを担いで部屋を出た。胴着のままだが彼の学校は特に指定の制服がないので問題ない。

「カン君おはよう。今登校？」

「美鈴さん、おはようございます」

寮を出て行くこととしたカンフーマンに話しかけてきたのはチャイナ服を着た女性、ホンメイリン紅美鈴。この寮の寮長である。

「今日から新学期だっけ？ 大変ね。頑張ってね」

「美鈴さんはいつだって大変でしょう」

「そうなのよ。クリザリッドさんったら最近ね」

「行ってきます」

美鈴の惚気話が始まりそうになったのでカンフーマンは逃げ出した。

――

美鈴さんも新婚じゃないんだから惚気はやめてほしいな。あの人の話は長いんだよ。

「ようカンフー、何を疲れた顔してんだ？」

「おう七夜。もうクラス確認したか？」

こいつは腐れ縁の七夜。自称ロリコンだ。黙ればいい男なんだけどな。

「なんだ、お前はまだまだだったのか。早く確認してくるといい」

「なら見てくる」

どうなってるかな。げっ、また七夜と一緒にかよ。他には誰がいるんだ？

「結構知り合いがいるな」

下手に知らないのがいるよりいいが、せっかく二年生になったのに新鮮味がない。

「見終わったなら体育館に行くぞ。そろそろ始業式だ」

「あいよ」

そついや今年度から校長が変わるんだつたな。新しい校長か。まあ校長なら俺らに直接は関係ないだろ。

――

始業式に何故か漫才や劇をやっていたが、ようやく新しい校長の出番らしい。

「それでは校長先生、お入り下さい」

「ハハハハハ！ よく聞け貴様等！！ 私がこの夢弦ゆまづ高校の新しい校長の大道寺きら様だ！！」

『……………』

壇上に立ったのは小学生くらいの少女だった。しかも何故かスク水。これは固まるしかない。生徒は全員固まって

「素晴らしい！！！！」

七夜、お前すげえよ。

「そこのお前！ 私が素晴らしいのとーぜんだ！！ だがその心意気を買って私の僕一号に認定してやろう！！」

「有り難き幸せ！！」

もう帰ってもいいだろうか。こいつらの世界に俺らを巻き込まないでくれ。

――
無事(?)に始業式も終わって新しい教室へとやってきた。

「カンフー、しっかり七夜の手綱を握つとけよ」

「ロック、それは無理だ。スイッチが入ったあいつは止められない」

この金髪君はロック・ハワード。ハワードコネクションってデカい会社の社長の息子らしいが、本人は継ぐ気はサラサラないらしい。将来安泰なのに。

「このクラスの副担任は新任らしいぞ」

「マジか。校長みたいじゃないといいな。担任は？」

「担任は「座りなさい。時間ですよ」「ご覧の通り」

去年と変わらずナイア先生か。ナイア先生ってのはフルネームは確か、ナイア・ルラトホテップだったかな？ 本人曰く本名じゃないらしい。巨乳で胸元のぱっくり開いた修道服を着ていて、傍らには常に棺桶が浮いてる。

「おんや？」

棺桶だけじゃない。今日は神社でよく見るおみくじみたいのも浮いてる。

「知ってると思うけど、私はナイア・ルラトホテップよ。このクラスの担任をする事になったわ。そしてこちらが「またあんたか。懲りないね、どうも」……七夜」

「いい加減あんたの顔も見飽きた。そろそろ自重するのが礼儀ってもんだろ」

あんな事言ってるが、家が隣なんだからしょうがないだろ。

「そう。でも私も貴方の変態行為はそろそろ止めないと思っただとところなの。消えなさい！ 虚数の彼方へ！！」

「悪いね 俺は校長に会う使命があるんだ」

ナイア先生は棺桶から大剣を取り出し、七夜はナイフを構える。クラスメートは全員そそくさと退出し、二人の試合はどちらが勝つか賭けをしていた。

「行け！！」

「隙だらけだ！！」

ナイア先生が棺桶を飛ばすも七夜が得意の体術で一瞬でナイア先生の前に移動し、ナイフを振るう。しかし大剣で受け止められ弾かれる。その先には棺桶が口を開け、中から禍々しい刃が二本、ハサミのように七夜に斬りかかる。

「止せつての！！」

七夜はそれを魔力を開放して弾き返す。だがこれでしばらく同じ事

は出来ない。

「墜ちなさい!!」

「蹴り穿つ!!」

いつの間にかジャンプしていたナイア先生は上から体重を乗せて大剣を振り下ろす。七夜はそれに対し斜めに蹴り上げるも、威力の差だろう、飛ばされて壁に激突した。当然だ。聞くところによると大剣を持ったナイア先生の体重は500kg。七夜のあの蹴り上げは強力だが対抗出来るはずがない。

「それでは、さようなら」

ナイア先生は七夜の襟元を掴んで持ち上げる。

「何か言い残す事は？」

「くっ……こんな、熟女なんぞに」

「誰が熟女か!!」

七夜は棺桶に放り込まれてしまった。一体どうなってしまっつものやら。

「さて、改めて新しい副担任の紹介です。こちらに浮いているのがSTGf0394先生です」

「えっと、さっきの子は」

「気にしないで自己紹介を」

「……………初めまして皆さん。STGf0394です。教師という仕事自体初めてですので優しく接してくれると大変嬉しいです」

変な浮遊物だと思ったけど常識人……………常識あるんだな。

「ちなみにSTGf0394というのは呼びにくいのでオム君と呼びましょう」

「ちよっ！？ ナイア先生どこからその名前を！？」

「司令という方です」

「司令……………」

よく分からんがオム君先生と呼ぶようにしよう。ちなみにSTGf0394はシューティングファイターおみくじと読むぞ。

「今日は特に連絡もありませんのでまた明日。ロック君、挨拶を」

「きりーっ、礼、さよーなら」

『ちよーなら』

――

「ただいま」

「お帰りなのによご主人」

家に帰ってきたカンフーマンをアイルーが出迎える。

「疲れた」

「半日なのですかにゃ？」

「濃かったんだよ」

「そんなのいつもの事ですにゃ」

「いつも以上なの」

この時カンフーマンは既に分かっていたのかもしれない。これから
の生活は今まで以上に苛烈でカオスなものになると。

「アイルー、飯だ。とにかく沢山」

「了解なのにゃ！！」

だから彼はやけ食いで現実逃避する事にした。

始まりの日（後書き）

後書きではこの小説に出てきたキャラの説明でもしていきます。

カンフーマン

出演：MUGEN

この小説の主人公。そこまで強くもないが弱くもない。地味だが交友関係はなかなか広い。夢弦ゆめじま高校二年生。

アイルー

出演：モンスターハンター

見た目はアイルー村のあれ。カンフーマンのペットで家事はなんでもこなすスーパーキャット。戦う事だつて出来るぞ。

紅美鈴

出演：東方project

カンフーマンが住む夢弦寮の寮長。既婚者でクリザリッドという夫がいる。惚気話が酷い。

七夜

出演：メルティブラッド

ロリコン。変態。残念なイケメン。原作と一番かけ離れた人。しかし作者の大好きな人。悲しみを背負うとある姿へと変貌する。七夜志貴ではなく七夜。

大道寺きら

出演：アルカナハート

何故か高校の校長をやっているスク水小学生。天才である。今回校長になれたのは誰かの後押しがあったとか。

ロック・ハワード

出演：餓狼MOW

大会社の社長の息子。だがそういうのが嫌いなのか寮で暮らしている。常識人。よくゲーセンに入り浸っている。

ナイア・ルラトホテップ

出演：MUGENオリジナル

カンフーマン達の担任。七夜の家のお隣さん。いやらしい服装で人気。だがそんな事を言うと大剣を軽々と振り回す腕力で殴られる。片思いの人がいるとかいないとか。

STGF0394

出演：MUGENオリジナル

カンフーマン達の副担任。通称オム君。しかし本人はこの名前を嫌っている。おみくじみたいのが飛んでいる姿で、イメージ画像は猫みたいの。見た目によらず高い戦闘能力を持つ。

では次回もお楽しみに。

怖すぎる人々(前書き)

七夜はやりすぎた。だが後悔も反省もしていない!!!

怖すぎる人々

ワイワイ ガヤガヤ

今日からちゃんとした授業が始まる。一時間目は社会科だったな。

「皆さんにお知らせがあります」

「どうしたんですか、オム君先生」

「社会科を担当していたバルバトス先生ですが、戦地に赴いたため……戦地!？」

「オム君先生、バルバトス先生ならしょーがないっすよ」

「えっ、あ、そう。では、戦地に赴いたため代わりの先生が来ます」
代わりか。バルバトス先生はよく休むから代わりじゃなくて本格的に交代しそうだな。

「カンフー、誰だと思う？ 俺は幼女と」

「ねーよ」

七夜め、ナイア先生にお置きさされたらるうに懲りないか。まあこいつが懲りたら世界の終わりだな。

「それでは授業開始まで待って下さい」

バルバトス先生の代わりとなると、誰か知らないけどバルバトス先生よりはマシだよな。バルバトス先生は……

――

「貴様あ！！ 宿題を忘れてんじゃねえええええ！！！！」

「この程度の問題を解いた程度で調子に乗るなあああ！！！！」

「今日のテストは紳士的だ、運が良かったな」

「赤点なんぞ、取るんじゃねえ！！！！！！」

「俺に怒られるために立ち上がったか！！」

「満点だど！？ ありえん、ありえんぞおおおお！！！！！！」

――

うん、バルバトス先生は濃いな。あれより濃くて危険な先生は来ないだろ。

「邪魔するぞ」

そう言つて教室に入ってきた人は背が高く、銀髪で、黒いスーツを着ていた。かなり鍛えているのはちよつと格闘技をかじった人間なから分かるほどだ。

「「ジョンスさん!？」」

その新しい先生の姿に即座に反応したのは博麗霊夢とロックだった。

「あ? 霊夢にロックか。お前らこのクラスだったか」

「博麗とロックは知り合いか? 紹介してくれよ」

「ちよつどいい。自己紹介なんてのは面倒だから二人に任せる」

「えつと、彼はジョンスさんって言つて私の従姉妹で先代博麗の巫女をやつてた霊姫姉さんの旦那さんよ」

「んでその娘の都古ちゃんの遊び相手を俺がよくやつてたんだ。カノンフーは知ってるんじゃないか?」

「あの都古ちゃんのオヤジさんか。似てないな」

今でもよく寮に遊びに来るから知ってるが、都古ちゃんは母親似だったのかな。

「カンフー、都古ちゃんというのは幼女か？」

「……………」

「幼女なんだな。可愛いのか？」

「……………」

「無言は肯定と理解する！ お義父さん！ 娘さんを下さい！！！」

「お前が何かは知らんが、言いたいのは一言だ。本気にさせたな」

ドガアアアアン

「か……………はっ……………！？」

一撃、それだけで七夜を吹き飛ばし壁にめり込ませた。

「八極拳！！」

あれは正統派の八極拳。一撃必殺を主に置いた技。多分ジョンス先生はそれを極めてるんだろうが、極めた人なら吹き飛ばした相手でコンクリの壁すら粉碎するという。七夜は咄嗟の回避でめり込むあの程度に抑えたのだろう。そういえば都古ちゃんもタイプは違うが八極拳使いだっただな。

「一撃で沈められなかったのはいつぶりか。やるな、小僧」

「毎度、年増にいびられて、るんで……ね。ガクッ」

「余裕があるようだな。授業を始める」

また凄い先生が来たもんだ。でも授業はごく普通だった。

――

次は化学か。

「皆さんこんにちは、お久しぶりですね」

やってきたのはナイア先生とは違うちゃんとした修道服を着た女性、Wind先生だ。この高校の数少ない癒し系でもあるが、ある問題を抱えている。

ブーン

「ひっ！ 虫！？ いや、来ないで……！」

「みんな逃げろ!!」

「駄目だ! 間に合わない!!」

「いやああああ!!」

Wind先生の背中から翼が生える。この状態のWind先生は楽園モードと呼ばれ、非常に問題である。何が問題か?

『うわああああああああ!!!!?』

常時全画面攻撃状態なのである。俺らは軽くお陀仏さ。次の授業はなんだっけ?

――

体育でした。体育の先生である大門先生なら特に何も無いな。

「今日は三年生との合同授業だぞ」

「どうしてですか? 三年生には三年生担当の体育の先生がいるでしょ」

「いい質問だカンフーマン。実は三年生担当の範馬先生は麻醉銃に撃たれてしまったそうだ」

「何故？」

「人間ドッグから逃げようとしたらしい」

それくらい我慢しようよ、地上最強。しかし三年生か。三年生にも濃い人が多いんだよ。

「大門先生、準備終わったぜ」

「ご苦労、京君」

「普通な京先輩じゃないっすか！！」

「本当だ！！ 普通な京先輩だ！！」

「普通にカツコイイ普通な京先輩だ！！」

「普通な強さの普通な京先輩だ！！」

「てめえら普通普通うつせえ！！」

でも普通なんだからしょうがない。普通な京先輩はそんな普通に怒るのも魅力だ。

「何をしておる京。先輩として後輩に怒鳴るなど恥を知れ、この戯けが」

『 すごい漢だ』

次に来たのはご存知(？)すごい漢、不破刃先輩。とにかくすごい漢だ。

「では全員組み手を始める」

「大門先生！ それ無茶です！！」

「やってみないと分かんぞ」

「普通に強くて普通に俺らを薙払って普通に俺らの攻撃が効かない
普通の京先輩にどうやって勝つんですか！？」

「普通普通うつせえ！！ 喰らいやがれええええ！！！！」

『ぎゃあああああああ！！！！』

やっぱり普通の京先輩は普通に強かった。

酷い目にあつた。だが幸いにも今日は四時間授業。これ乗り越えれば帰れる。高校なのに四時間なのは不思議だが気にしてはいけない。

「授業だよ」

……あれ？ 今日には数学だよ。どうして日本史のGM諏訪子先生がいるんだ？

「教員免許があればどの教科をやっても許される！ まあ数学のワラキーは海外の学会だから代わりに来たんだよね」

ワラキア先生……数少ない良心がないなんて寂しいです。時々狂ってるけど。

「諏訪子先生結婚して下さい！！」

「ななやんは消えてね」

「ガボボボツ……！！？」

諏訪子先生が手をかざすと強力な水流が七夜を校外まで押し流した。あれだけの事を範囲限定して出来るなんて、流星は神キャラ。

「みんなも悪い事したらああだよ」

『サーイエツサー！！』

「それで数学の授業って何するの？」

「知らないのかよ!! ハッ!？」

「先生にタメ口なんて、教育がいるね、カン君」

「い、いえ、今は「流れちゃえ!!」ブバツ!! ガブブツ……」

気がついた時には七夜が隣にいた。こいつと同じ場所まで流されたのか………帰ろう。

怖すぎる人々（後書き）

ではキャラ紹介をしていきます。

バルバトス・ゲーティア

出演：ティルズオブデステイニー2

有名なアナゴ。みんなのトラウマ。実は教師としてはよく出来た人。体罰しそっだがしない。只今戦地。

博麗霊夢

出演：東方project

カンフーマン達のクラスメイト。賽銭に飢えたりはしていないが、もし金欠で収入が全くなかった時、中の鬼が目覚める。

博霊霊姫

出演：東方project、MUGENオリジナル

先代の巫女さん。霊夢と名字が違うのは分家だから。霊力は少ないが肉体派なので問題ない。霊夢に姉と慕われる。

博霊ジョンス

出演：エアマスター

霊姫の旦那。婿入りしたので名字は博霊。正統派八極拳の使い手で大抵の相手は一撃で沈める。ユーモアが空回り。

博霊都古

出演：メルティブラッド

霊姫とジョンスの娘。なんちゃって八極拳の使い手。その技は父であるジョンスと違い、軽いが速い。ロックが大好き。

Wind

出演：MUGENオリジナル
風を使う癒し系。極度の虫嫌いで虫が寄ってくると無差別全画面攻撃の楽園モードになる。

大門五郎

出演：KOF

吸引力の変わらない人。体育教師として生徒にも保護者にも慕われている。

範馬勇次郎

出演：グラップラー刃牙

三年生の体育教師。注射や麻酔が大嫌い。それでいいのか地上最強。

普通な京先輩

出演：KOF、MUGENオリジナル

MUGENでは普通京としている普通な京先輩。普通に強く、普通に勝つ。普通に留年しているけど普通に評価が高い。普通に人気な普通な人。

不破刃

出演：龍虎の拳外伝

すごい漢だ。

GM諏訪子

出演：東方project、MUGENオリジナル

とても美しい幼女。神様。その高い戦闘能力から戦いになる事すらない。子供っぽい部分もありよく力を使うが相手が怪我をする事は少ない。

ワラキアの夜

出演：メルティブラッド

数学教師。気が狂ってるような言動をするけどいい人。時々虚言の王という本気モードになる。

遊びとエロ本（前書き）

今回もやっちゃったぜ

遊びとエロ本

おいーす、ロック・ハワードだ。今日は休みだからカンフーでも誘ってゲーセンに行くぜ。

ピンポーン

「はいにゃ」

「ようアイルー、カンフーはいるか？」

「裏で鍛錬中ですよ」

「そか。あんがと」

「ご主人にこれ渡して下さいにゃ」

「気が利く猫だなお前は。じゃあな」

早速寮の裏に行くと汗塗れで型の練習をしているカンフーがいた。俺はアイルーから渡されたスポーツドリンクを投げ渡す。

「おっと、いきなりだなロック」

「お前なら取れるのは分かってるからな。しかし朝から頑張るな」

「俺には特別な力とか技はないから鍛えるしかないんだ」

「分かってんよ。ゲーセン行くから準備しろ」

「はいはい、着替えてくる」

着替えるってもどうせ新しい胴着にするだけだろう。もうちっとなのかね、まともな私服とかは。

「ロツクお兄ちゃん!」

ドンッ

「うっ……都古ちゃん、いきなりのタツクルはやめてくれ」

「へへっ、ごめんなさい」(ロツクお兄ちゃんの匂いハアハア)

「分かればいいんだ」

「ん」(ロツクお兄ちゃんが撫でてくれてる。ロツクお兄ちゃんの指チュパチュパしてペロペロしたいよお)

都古ちゃんは元気過ぎるところがあるけど素直でいい子だ。ジヨンスさん達の教育の賜物だろう。ただたまに俺の布団の中に潜り込んだりしてるが、甘えたい盛りなのかな?

「準備してきたぞ。あれ? 都古ちゃんいつの間にな?」

「さっき来たんだよ」

「カンフーお兄ちゃんこんにちは」(邪魔が……まあカンフーお兄ちゃんなら許そう)

「ゲーセンに都古ちゃんも連れてくか？」

「そうはいかないだろ。都古ちゃんは小学生だぞ」

「お前は昔の堅物か。都古ちゃんは行きたいよな？」

「うん!!」(でもゲーセンなんかよりロックお兄ちゃんとホテルの方がいいな)

「……………やっぱり」

「さあ行くぞ」

「おー!!」

「話を聞け!!」

何が起こるか分からないこの世の中、俺らがついているとはいえゲーセンなんて場所に連れて行ったら七夜みたいな変態に襲われるかもしれない。そんな事になったらジョンズさん達に顔向け出来ない。もちろんそんな事をさせるつもりはないが。

「っってお前ら早いつて!! 待てよ!!」

――
結局都古ちゃんまで一緒に来てしまった。

「都古ちゃん、俺と一緒にいなさいよ」

「はい」(ロックお兄ちゃんったらダ・イ・タ・ン)

「俺は『辻斬りみよんみよんむ』をやってくるな」

「ああ」

あれ見てる分には楽しいんだけど俺は苦手だな。やるなら格ゲーだろ。

「何にするかな。おっ『ストリートハンター』の新作じゃん」

「ロックお兄ちゃん子供みたいだよ」(でもそんなロックお兄ちゃんも可愛い)

ストハン、今回の新キャラはどんなのがいるかな。なっ！こいつ復活したのか！？持ちキャラだったから嬉しいな。

「早速やるか。都古ちゃん、隣に座って」

「うん」(もたれ掛かっちゃお)

とりあえず再登場した持ちキャラのボレックスのストーリーモード

でもやるかな。

『challenger!!』

おっと乱入か。いいぜ、相手をしてやる。相手が使ってるのはリユ
ーか。正統派だな。

『波動撃!! 波動撃!!』

遠距離で攻めてくるか。それは待ちガイズの戦法だろ。だがボレッ
クスに遠距離攻撃がないからといって油断するなよ。

『フン! フン! フン!!』

ブロックをしながら近付く。これなら上籠拳を喰らってもブロ
ッキング出来る。

『ふっ!!』

『オウツ!?!』

しまった!! 投げか!! 投げ技はボレックスの十八番だつての
に。

『雷神波動撃!!』

『オオオオウ!?!』

やられたが、まだ勝負は始まったばかり。ゲージを吐くなんて勿体
無いぜ。

『Hei!!!』

近づいてボレックスのゲージ乱舞を発動させる。2ゲージの乱舞は効くぜ。

『ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！』

「嘘だろ!？」

乱舞を全てブロッキングしやがった!! なんてスキルだ!! これで相手のゲージも一気に貯まっちゃった!!

『はあああああああ』

これは3ゲージからの超乱舞! ボレックスの体力で耐えきれぬ自信がない。ここはガード……

「そんな事出来るかよ!!」

『Let's go!!!』

カンカンカンカンカンカンカンカンカン

「馬鹿な!?! 全てJDだと!?!」

JD、ジャストディフェンスと呼ばれるそれを成功させると体力とゲージが回復する。乱舞をJDしたボレックスの体力は全回復。ゲージもマックスだ。

「お返しだ!!」

まずはボレックスのノーゲージコンボを決めていく。そして空中コンボの締めはもちろんゲージ投げだ!!

『ボツ!!』

「そこ!!」

ボレックスの投げは一切のコンボ補正を受け付けない。そして3ゲージある場合、追加コマンドで相手を離す事なく連続投げが出来る。

『ボツボツボツボツボツボツボツ!!』

「ラストオ!!」

『スーパーボツ!!』

これで相手の体力は9割吹っ飛んだ。そしてピヨッている相手にコンボを決めて決着を着けた。

「ワンチャンアレバカテル」

「ロックお兄ちゃん流石だね!!」(でも油断したら駄目だよ。あれなら私だって勝てちゃう)

「見事だ。まさか10割りで切り返されるとは思わなかった」

「JDが決まらなかったらやられてたよ」

箱体の向こうから出てきたのは銀髪の和っぴい男と同じく銀髪の犬っぴい女。カップルみたいだが、男が俺を見た瞬間に目つきが変わった。

「青龍、このような場所で出会うとはな」

「はい？」

「刹那、何を言ってるんだ。この人は楓とやらじゃないぞ」

「久那岐、この髪、顔付き、どう見ても青龍だろう」

「服装、帯刀していない」

「……………誰だ貴様は!？」

なんでか怒鳴られた。そこまで似た人がいるのかよ。

――

ロックの奴相変わらず格ゲーやってのかな。俺はガンシューティングとか自分がキャラになるのが好きなんだが、絶対こっちのが楽し

いのこ。

『千二百十九人斬り！！ まさに一騎当千みよん！！』

まあまあな記録か。だが一位のセイリユウさんにはまた届かなかった。

「なかなかだが、未熟だな。交代しな」

「あ、すみま……えっ？」

俺と交代した人ってどう見ても……うわっ、どんどん記録伸ばしてく……！

『千五百六十人斬り！！ にゅーれこーどみよん！！』

すげえ……すげえけど……

「ロック！ ロックじゃないか……！」

「はっ？」

「都古ちゃんはどっしたんだよ。はぐれた、というのはないか。一人なのか？」

「何言ってるんだよ。第一誰だよ、あんたもロックつてのも」

「お前が言ってる事がよく分からないな。遊んでんのか？」

でも何かいつものロックと雰囲気が違うような……ああ、見た目だ。

こんな服ロックは着ない。

「って誰だお前は!？」

「いい加減苛ついてきたぞ」

「サーセンwww」

人違いだったなんて、でもよく似てるな。

「カンフー!」

この声は……

「ロック? ロックなのか？」

「なんで疑問系なんだよ」

本物のロックと都古ちゃん、それと銀髪のカップルがやってきた。

「青龍が二人!？」

「刹那、別人だ。落ち着け」

「でも本当によく似てるね」(でも都古には分かるよ。こんなのとロックお兄ちゃんを見間違えるはずないもん。匂いとか筋肉の付き方が全然違う)

「青龍が一人、青龍が二人」

「ファイナル分身!!」

『帰れ』

突然割り込んでくるとは、汚いなさすが忍者きたない。

――

集まった全員で昼飯食ったり、ゲームしたりしながらいろいろ話した結果、ロックとロックそっくりの奴、楓は全く関係ない事が分かった。

「紛らわしいな。ここまで瓜二つなのに血縁ですらないとは」

「よく言うだろう。世の中には似た人間が三人はいると」

「俺は久那岐を間違えるなどない」

「私もだ、刹那」

そこのバカップルは少し黙ってる。

「お前ら漫才師目指せよ」

「「なんでだよ!!」」

「息ぴったりじゃん。全ての鍵にぴったりハマる、笑いの鍵穴『ツ
ーロック』ってな感じだよ」

「ツーロックってこいつメインじゃねえか!!」

「それになカンフー、笑いってのは」

「「ツッコミだけでは成り立たない!!」」

うん、やっぱりいいコンビだ。勿体無い。これなら大阪に出しても
恥ずかしくないのに。

「今日は迷惑を掛けたなロックとやら。また（格ゲーで）手合わせ
しよう。青龍、今回は見逃してやる」

「ああ、またやろうぜ」

「あんたとの因縁は特になんだがな」

「俺らもいい時間だし帰るか」

いつもなら飯も食わずにロックに付き合うんだが、今日は都古ちや
んもいる。早めに帰ろう。

「だな。じゃあな楓」

「じゃあなロック」

ゲーセンから出ると空は暗くなり始めていた。

「都古ちゃん、時間大丈夫か？」

「さっきケータイで連絡したらロックお兄ちゃんが一緒だからいいって」（これってつまり親公認って事になるよね）

「最近の小学生はケータイも持ってるのか」

ロック、それは本気でそう思っているのか？ 現代常識は備わっているか？

「……………カンフー」

「どうした？」

「ここはどこだ？」

「どっかって……………」

どこだ？ 大通りを歩いていたはずなのに知らない道にいる。この街に生まれ育った俺やロックが知らない道なんてないはずなのに。

「あらあ、可愛い獲物達」

「……………!?!?」

突如水溜まりから女が出てきた。いや、暗くて見難かったが、あれ

は水溜まりじゃない、血溜まりだ!!

「震えちゃって、可愛い」

女は血のような赤い服と帽子、ピンクの髪をしていた。こいつ、危険だ。

「都古ちゃん下がってる!!」

「私だって戦えるよ!! ちょうしんちゆう!!」

都古ちゃんは一瞬で女の後ろに回り込み、肘打ちを入れようとした。

「血風を纏う」

「へっ?」

「抱け!!」

「キヤアッ!?!」

血の守りなのか何か知らないが、都古ちゃんの攻撃が止められて吹き飛ばされた。

「都古ちゃん!?! てめえよくも!!」

「ふふふ、貴方は私を良くしてくれる?」

「デッドリーレイブ!!!!」

「もつとよおー!」

なっ!?! ロックのデッドリーレイブ・ネオを受けきっている!?!

「うおおおおおおおおおおおおおー!?!?!?!」

「もう終わりなのお?」

最後の気の衝撃波ですら効いていない。どんな化け物だよ。

「灼熱の血を孕む、爆ぜよ!?!」

「ぐあああああああああ!?!?」

血でロックは捕捉され、血の龍がロックを飲み込んだ。だがこんな大技を使ったんだ。僅かだろうが反動で動けないはずだ。その際に叩き込む!?!

「うおりゃあ!?!」

後ろから三連撃の掌底を女に叩き込んだが、女は血となって弾けた。ダミーだったか!?!

「こつちよお」

「セイヤツ!?!」

後ろから聞こえてきた声に振り返ると同時にアップパーを放つ。だがそれも顔をズラすだけで避けられた。

「アハハ、痛いでしょう!?!」

ズドン

「うがあっ!!!?!?」

胸ぐらを掴まれ、走りながら壁へ叩きつけられた。

「もうイっちゃったの?」

「勝手に……終わらせるな!!」

「ああ……まだ……終わっちゃいない!!」

俺とロックは立ち上がったが、それが限界だ。ただどこでもし
ないでやられるわけにはいかないんだ!!

「いいわあ、もっと高ぶらせて! さあ、愛してあげる!!」

「悪いがそのような事をさせるつもりはない。テュホンレイジ!!」

「アアン!?!?」

「「クリザリッドさん!!」」

「ハッハッハ! 君、先ほどの運送技、荒削りではあるがなかなか
だったよ。どうかね、我が社の試験を受けてみないか?」

「社長、こいつはうちの嫁の寮生を襲った奴ですよ。勧誘しないで
下さい」

ルガール運送のルガール社長までいる。俺らじゃ相手にもならなかつたけど、この二人なら……

「強者が出て来ちゃったわね。残念、引かせてもらっわ。今度はイかせてね、ボーヤ達」

逃げたか。流石にこの二人は分が悪いと踏んだか。

「大丈夫か、カンフー君、ロック君」

「なんとか」

「すみません、みつともないとこ見せて」

「この若さであれだけ出来れば十分だろう。この娘は私が家に送り届けよう」

「あ、都古ちゃんの家の場合」

「ジョンスと霊姫の娘だろう。知ってるから安心しなさい」

そう言うトルガール社長は都古ちゃんを抱きかかえて行ってしまった。相変わらずの速さだ。

「二人も帰るぞ。肩を貸そう」

「はい」

「ありがとうございます」

俺らはクリザリッドさんに肩を借りながら寮へと帰った。しかしあの女、一体何だったんだ。

――

とある地下バー。そこには二人の女がいた。そしてそこに先ほどの女がやってきた。

「ごめんなさい。若い子と遊んでたら遅れちゃった」

「また通り魔紛いの事をしてたの？ いい加減になさい」

女の一人、ナイア・ルラホテップがそう言う。

「楽しそうですね。それに引き換えナイアさんは教職者になって変わりましたね」

もう一人の女、間桐桜がナイアに対して嫌みのように言う。しかしナイアは気にしてもいないようにワインを飲んでいた。

「いいじゃない桜ちゃん。お陰で愉しかったわよ」

カンフーマン達を襲った女、アナザーブラッドがそう言った瞬間にその首に大剣が突き付けられたら。

「私の生徒に手を出したわね」

「ウフフ、どうかしら。赤ワインをお願い。血のように真っ赤なのをね」

大剣を突き付けられているというのに何でもないようにアナザーブラッドは注文をする。すると誰もいないカウンターに赤ワインが置かれた。

「あの子達、伸びるわよ」

「私の生徒だから当然よ。問題は貴女が手を出した事よ。無事なんでしょうね」

「途中でルガル・バーンシュタインとクリザリッドって邪魔が入っちゃったもの」

「残念ですね、アナザーブラッドさん。一人ならともかく、その二人の相手は私もしたくないですから」

「桜ちゃんは分かってくれて嬉しいわぁ」

「ふん」

自分の生徒に手を出されて、立腹なナイアは仰ぐように酒を飲んで
いた。

「あらあら、ナイアちゃん可愛い」

「それでは始めましょうか。音頭はどうします？」

「簡単よ。三人の再会を祝って」

「乾杯」

「……乾杯」

遊びとエロ本（後書き）

都古ちゃんが変態というのを見ないから変態にした。後悔はしていない。

そしてストリートハンターは分かったと思いますが、ストリートフアイターのパロです。
ではキャラ紹介いきます。

刹那

出演：月下の剣士

ご存知せつちゃん。久那岐の彼氏。別に楓と因縁があるとかじゃないが、同作品のキャラとしてやっておくべきかと思っただけらしい。

天楼久那岐

出演：大番長

ご存知くなく！。刹那の恋人。物事を冷静に判断する。よくよく神キヤラに変身する。

楓

出演：月下の剣士

ご存知ロック！ ロックじゃないか！！ この作品では常時覚醒モードで金髪だが、普通は黒髪なのでロックではない。

アナザーブラッド

出演：機神飛翔デモンベイン

ご存知エロ本。鬼畜当て身でMUGENで大活躍。ナイアや桜とは旧知の仲。時たま今回のような行動をする。気になる人がいるらしい。

クリザリッド

出演：KOF

美鈴の旦那。ルガル運送の中間管理職として活躍している。その高い戦闘能力でどんな運搬物でもしっかり守ってお届けします。

ルガル・バーンシユタイン

出演：KOF

ルガル運送の社長。安い、速い、安全、そして強いをモットーの会社運営をしている。勿論本人も高い戦闘能力有している。

間桐桜

出演：Fate/stay night

ご存知黒桜。普段は普通に一人暮らしをしている。だが戦闘になると『この世全ての悪』の力を使っていたのでその影響が、普段も少し歪んだ考えをするように。心に決めた人がいるらしい。

オム君頑張る(前書き)

タイトル通りオム君メインです。

オム君頑張る

僕が学校の教師になったのはこの世界を調査のためという名目なんだけど、きつと司令は面白いから送り込んだんだろうな。

「では皆さん、さようなら」

『さよーならー』

みんないい子だな。この高校も僕に送る資料はデータ化してくれたり、本当にいい世界だ。

ジツ ジジツ

おや？ テレビが突然砂嵐を起こした。壊れたのかな？

『き………か…？』

「今、声が」

テレビを見ていると映像がはつきりしてきて人の顔が見えてきた。

『おっ、繋がった』

「パッチエさん！！」

テレビに映ったのは黄色い服を着たCパチュリーさん、僕はパッチエさんと呼んでる人だ。普段は通信とかが出来ないからこうやって話す事は珍しい。

「どうしたんですかパッチェさん？」

『珍しい事をしていると聞いて。どうなんだ？　しっかり出来てる？』

「うん、みんないい人だから」

『本当にか？　オム君はお人好しだからな』

「大丈夫だ「わ・わ・わ・忘れも」あ、七夜君」

パッチェさんと話していたら七夜君が教室に入ってきた。忘れ物をしたみたいだ。

「……………浮遊物のオム君先生が逢い引きだとお！？　これは新聞部に売り込みだ！！」

「えっ！？　な、七夜君！？　違うよ！　待って！！」

追い掛けようとしたけど七夜君はもう廊下にはいなかった。こんな一瞬でいなくなるなんて。

『おうおう、あれがいい人か？』

「いや、いい人なんだよ。普段から変わってるけど、その、きっといい人だよ！！」

七夜君はロリコンだったり、変態的だったりするけど、いい生徒なんだよ。

『そうかあ？ それにしてもあんなに否定するなんて、私と恋人になるのは嫌か？』

「パッチェさんまで何言ってるのさ！！」

『悪い悪い。冗談だ。だから変な気起こすなよ』

「起こさないよ！！」

どうしてこんなにイジるのかな？ それに僕は肉体がないんだから恋人なんて出来てもなあ。

『パッチェさん、そろそろ時間だよ』

『了解だ妹様。じゃあな、オム君』

「うん、またね」

今度誰かと通信する時は一人だけの時にしよう。他人に見られるとさっきみたいなお事になりかねない。

――

職員室で書類整理を終わらせて帰る準備をしていたら、きら校長先生がやってきた。

「やあオム君先生！ 頑張ってるな！！ うちの教師だから当然だがな」

「きら校長先生、何かご用ですか？」

「うむ。君も部活の顧問をやってみないか？」

「顧問、ですか。僕に出来ますかね？」

僕はこんなおみくじみたいに見える目だし、出来そうな部活といえばパソコン部とかかな？

「まあどこの部活になるかは教頭に任せよう」

「そうですね」

そういえばこの高校の教頭って会った記憶がないな。でもこんな学校の教頭なんだ、きっととても立派な先生に違いない。

この部屋が教頭室か。早速入ってみよう。

「失礼しま、うわっ!？」

扉を開けると神々しい光が目に入ってきた。この輝きは一体!？

「ようこそ、そして初めましてオム君先生。私がこの夢弦高校の教頭、マハヴィロです」

こ、このお方が教頭先生。なんというか、神様だ。神様が降臨してらっしゃる。

「オム君先生、貴方の顧問をする部活決めます」

「は、はい!！」

「そうですね……貴方なら戦闘部でもやっていけるでしょう。お願いしますね」

「了解しました！ 全力を尽くします!！」

引き受けたけど、戦闘部って何なんだろう？ 言葉だけ聞くと戦う部活みたいだけど僕でも大丈夫なんだよね。

――
教頭先生から部活動は外でやっているって聞いたけど、外っていつてもこの高校広いからな。

「何をしているのですか？」

「えつと君は？」

「二年生の山本無頼です。STGF0394先生ですよね」

「うん。あのさ、戦闘部ってどこで活動してるか知らないかな？」

「自分がちょうど行くところですからついて来て下さい」

「ありがとう」

部員にたまたま会えるなんて、僕って運がいいな。

「先生は何故戦闘部に？」

「実は顧問を頼まれて」

「それは凄い。強いんですね」

「そうでもないよ。そういえば戦闘部ってよく知らないんだけど、教えてくれない？」

「分かりました。戦闘部はこの高校に入学した全員が強制入部する部活です。こつと聞くと聞こえが悪いですが、活動は参加自由なので全く参加しないまま卒業する生徒もいますが、大抵は参加します」

「どうしてかな？ 戦闘部なんだから戦うんだよね。痛い事は自分からしたくないんじゃない？」

「そうです。簡単に言ってしまうえば戦って強くなる部活です。もちろん怪我人も出ますが、この世界では力が重視される事が多いです。ですから戦闘部で鍛えて社会に出ても大丈夫なように備えるわけです」

「そういえばこの前の席替えの時も被った人は戦いで決めていたな。それがこの世界の風習って事なんだな。」

「見えてきましたよ」

「おお」

そこはとて広い平原で、沢山の生徒が試合をしていた。中にはどう見ても生徒じゃない人もいる。

「山本さん、お待ちしておりました」

「それは悪かったね、巫浄さん」

「そのような事はございません。そちらは、STGF0394先生

ですね。初めまして、巫浄翡翠と申します」

「初めまして。二人は恋人？」

「な、ななな！？／／／／」

「ち、違います！！ 私と山本さんはパートナーです！！／／／／」

「パートナー？」

パートナーって恋人とか夫婦とかそういうのじゃないみたい。

「パートナーというのはタッグを組む相手の事です。戦闘部は試合の時、主にシングル、タッグ、チームに分けられます。今日は俺と巫浄さんがタッグを組むだけです。恋人とか、そんなのでは」

「そうなんだ。誤解してごめんね」

「「いえ」」

こういうのを誤解されるのはいい気分じゃないよね。反省しないと。

「ぬあああ！ なんだこのおみくじは！」

「うわっ！？」

突如現れたのは筋骨隆々とした巨漢の人。なんだこの人は、部外者か！？

「ラオウ君、こちらはSTGF0394先生。新しく顧問に就任さ

れる方だよ」

「なんとお！？ これは無礼しました！！ 自分はラオウ、この高校の一年生です！..！」

「一年生！？」

お前のような一年生がいるか！！ ハッ、今のセリフは一体……

「山本先輩！ 自分はバイトがありますのでお先に失礼します！！」

「頑張つてね。無理して身体を壊さないように」

「ご心配感謝します」

凄い一年生もいたもんだ。いや、本当に一年生なのか？ もしかしたら留年しまくってるだけかも。

「ラオウ君には困りましたね。悪気はないですから勘違いしないでよっにお願ひします」

「うん」

「おう山本、今日はタッグか？」

「ソル先輩、そうですね。シングルも悪くないですが、タッグは普段見えないものも見えますし」

今度はツンツンした茶髪に鋭い目つき、赤いヘッドギアを着けて剣を持った人が来た。この人も学生っぽくないけど、さっきのラオウ

君に比べたらマシだね。

「いい考えだ。一人だけでは限界があるからな。それで、こっちは確か……オム君先生とやらだったか？」

「初めまして。戦闘部顧問を任されたんだ」

「三年のソル・バッドガイだ。しかしあんたが顧問か。どれ、一試合やってみるか？ 顧問なんだ、相手してくれんだろ？」

「ちょっとソル先輩、いきなりは」

「大丈夫だよ山本君。よろしくね」

「覚悟は出来てるようだな。遠慮なく行くぜ！！ ドラゴンインストール！！」

身体から炎が出たという事は炎を使うのか。それにあの剣は速く攻撃するものじゃなくて力で攻撃するもの。まだ情報は少ないけど、これだけあれば多少の戦略は組める。だけど最初は……

「おみくじシステム起動！！」

僕の側面で文字がルーレットのように回り出す。これで出る文字は大吉、大凶まであり、出た文字によって使える武装が決まるのだ。

「余裕こいてんのか？ ガンフレイム！！」

ソル君が剣を地面に突き刺すと炎が地面から出てきた。僕がそれを避けると追撃がやってきた。

「ヴォルカニックヴァイパー!!!」

「うくつ!?!」

地面を剣で抉るような対空攻撃。掠っただけだけど、直撃してたらやられてた。

ピコーン

おみくじが決まったか。出た目は……大凶!!

「反撃させてもらっつよ」

僕の身体からビットやら小型砲台やら、沢山の兵器が出てくる。おみくじシステムの特徴は占うのは相手の運勢であり、大凶はその中でも最悪。僕にとっては最高の出目なのだ。その内容は僕が使える武装を無制限に使用可能になる事。

「くつ!?! なんだこの弾幕は!?!」

「耐えきれるかな?」

レーザー、小型爆弾、エネルギー弾、とにかく様々な攻撃がソル君を襲う。もちろん僕自身も攻撃をする。

「あまり……舐めるなあ!?!」

この弾幕の中突撃してきた!?!

「タイ」

右手に持った炎を纏った剣で殴るように攻撃してくる。もちろん避ける。

「ラン」

次は炎を纏った左手で殴ってくる。これも避けるけど、左右にはまだ炎が残っている。

「レイブ!!!」

逃げ場のない僕にソル君は剣を振り上げてきた。左右に逃げ場はなく、上空に逃げるのは間に合わない。それでも手はある。

ガキイン

「なんだと!?!」

僕の隣を剣が通り抜けていく。剣の側面をエネルギー弾で撃って軌道をズラしたんだ。そして僕はソル君とゼロ距離になるように近づいた。

「喰らえ!?!」

「うぐおあっ!?!」

ゼロ距離レーザー。これを喰らったソル君は後ろに飛んだ。

「そこまで!?!」

いつの間にかいた黒子の人々が止めに入る。僕は武装を収めた。

「つつつ、予想以上だよ、あんた」

「ありがとう。大丈夫？」

「この程度ならな。あー、腹いて」

「凄いいじゃないですか0394先生。ソル先輩を倒すなんて」

「運が良かっただけだよ」

「だがその運が戦いでは重要な要素となる。あんたは強い、オム君先生。荒くれ者も多いが、これからよろしく頼むぜ」

「こちらこそ」

新しい職場に新しい仕事、慣れない事だつて多いけど、優しい人が多いから頑張つていける気がする。

余談だけど次の日に僕に彼女がいると報道されて生徒にも先生にも質問攻めをくらいました。

「悪いね」

オム君頑張る（後書き）

オム君頑張ってます。オム君って本当にいい性格してますよね。ではキャラ紹介していきます。

Cパチユリー

出演：東方project、MUGENオリジナル
パチエさん。戦闘中はオム君と同じような通信能力で様々なサポートを受ける（自爆とか自爆とか）。オム君とは交流はそれほどないが仲はいい。だが恋心は一切ない。

マハヴィロ

出演：MUGENオリジナル
論外教頭。これまでに撃破記録はない。この高校は彼がいないと成り立たない。

山本無頼

出演：大番長
糸目男爵。ボクシング部がメイン部活。ボクシング部が休みだとたまに戦闘部に来る。女性が苦手だが翡翠は大丈夫なため、周りはカッパルと認定。本人は否定。

巫浄翡翠

出演：メルティブラッド
メインは家庭科部。無頼に誘われると戦闘部に来る。男性恐怖症だが無頼は大丈夫。姉にはさっさと付き合えと言われているらしい。

ラオウ君

出演：北斗の拳

インパクトのある一年生。メインはパソコン部。現代社会において情報は必須と考えているらしい。戦闘におけるポテンシャルは三年生以上とも。そりゃそうだ。

ソル・バッドガイ

出演：ギルティギア

戦闘部に入り浸る三年生。かなりの強さを持つ。意外に丸い性格をしている。戦闘部で出会った彼女がいるらしい。

こんな七夜（前書き）

今回は七夜メインでやってみた。まあカオスだから見ていって
くれるかい？

こんな七夜

.....子供が遊んでいる。あれは、ガキの頃の俺とカンフーか。となるとこれは夢という事になるな。

「じゃな〜」

「またね」

俺には親がない。仕送りをしてくれる誰かはいるが、家で待つてくれている人間はいない。だからなのか、俺が狙われたのは。

「七夜君、こんにちは」

「こんにちは！ ナイアお姉ちゃん！」

「これからお夕飯だけ一緒に食べる？」

「うん！〜！」

独りきりの俺にこの誘いはどれだけ嬉しかった事か。だがいけない。これは甘い甘い罠なんだ。行くな俺！！ せめて夢の中でくらい変わってくれ！！

「さあいらっしやい」

「お邪魔しま〜す」

「お姉ちゃんのお友達もいるけどいいわよね？」

――

「止めろおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」　八

ア……ハア……」

なんとかギリギリのところまで悪夢は終わった。良かった。

「騒がしいな。どうした？」

俺の叫びを聞いたのかとある奴が部屋に来た。白の長髪に紫のリボン、赤い服を着たガキ、煉だ。実際はガキなんて年齢じゃないんだが見た目がな。

「煉、か。なんでもない」

「そんな凄い寝汗をかいてか？　大方悪夢でも見たんだろう。タオルと水を持ってきてやる」

「助かる」

煉がうちに住み着いたのは三年前なのでそう長い付き合いではないが、互いの事はよく分かる。

「ほじ」

「ングング、プハア」

「七夜、少し外を歩いてきた方がいい。朝ご飯は僕が作っておこう」
「ああ、そうする」

気遣いも家事も完璧にこなす。容姿だって俺のタイプにど真ん中ストライクだ。一つの問題を除けば求婚していた。

「ああ……」

「どうかしたか？」

「何故煉は男の娘なんだ」

「いい加減しつこいな君も!!」

サクッ

煉の投げたトランプが頭に刺さる。痛いです。こんな事する子はモロッコに行け。

――

流石に早朝だからか人が少ない。しばらくしたら出勤通学で騒がしく……今日は日曜日だ。

「七夜か。こんな早朝からどうした」

「それはこっちのセリフだカンフー。何をしている」

「早朝ランニングだが」

真面目、いやこいつは趣味か。好き者だね、どうも。

「お前は どうしているんだ？」

「夢見が悪くてな。なに、もう帰るさ」

「無理すんなよ」

こいつに心配されるようでは俺も駄目だな。早く帰ってもう一寝入りするか。

――

帰り道にあの公園の前を通る。それだけで嫌な思い出がこみ上げてくる。

「未熟」

こんな事をいつまでも引きずっていても成長出来ない。さっさと捨て去ろう。

「や――っ！！ もりやんのバカーー！！」

「いや、アンノウンお嬢様。お嬢様が大人しく帰ってきてもらえれば」

「絶対やだ！！」

なんか幼女がジャングルジムの上で籠城してるな。あの男はお嬢様と呼んでいたのをみる限りはボディガード的な存在か。あんな和服で刀持つてるボディガードは初めて見たが。

「！ その通りすがりのお兄ちゃん！ 助けて！！」

「いいだろう」

「！？ いや、いきなり来て何を言うんだ君は！？」

「幼女に助けを求められて拒否する人間はいない。違うか？」

「……成る程、変態か。貴様のような男をお嬢様に近付けるわけに

はいかない。己の器を知れ」

「斬刑に処す」

――閃鞘・八点衝

「十六夜月華！！」

俺がナイフで無数の斬撃を放つと男も刀で無数の斬撃を放ってきた。数は俺が上だったが、威力は向こうが上。まあ相打ちだったってわけだ。

「出来るな。俺は御名方守矢。お前の名を聞こう」

「七夜。ちょっとクールなイケメンだ」

「ふっ、大口を叩くだけの實力はありそうだ。だが負けん」

男、守矢は一瞬で俺の後ろに回ってきた。瞬間移動、ではなく歩法か。だがそういう移動が出来るのはお前だけじゃない。

――閃鞘・八穿

「なっ！？」

「寝てな！！」

また同じ歩法で避けたか。

「貴様も歩月を使えるのか？ いや、歩月では宙に跳ぶなど出来な

い

「これは我流だよ。ま、技なんていちいち気にする事でもない」

「……全力でやらせてもらう」

「なら見せてもらおうか。斬る！」

――閃鞘・七夜

「甘い!!」

キーン

弾かれた!? マズい、さっきの剣速を考えると一気に叩き込まれる。

「ハッ! セイツ!!」

「ぐうあつ!?!」

峰打ちとはいえその連撃は速く鋭い。

「乱れ雪月花!!」

「ぐあああああああ!?!」

最後に更に強力な連撃。ああ、負けるのか。………負ける? 幼女を前にしてカツコイイとこも見せられずに負けるのか? そんなの認められるか!!

「始めるか」

――

変態ではあったが見事な強さだった。だが倒したはずの男、七夜の
声が聞こえ振り返ると七夜は立っていた。

「！ まだ立てるとは……それに雰囲気か」

「行くか」

ナイフを投げてきた！？ しかも数が並ではない！！ 避けきれ
るか？

「逃げるなら……」

消えた！？

「もう遅いか」

「うおおお！？」

一瞬にして全身に傷を付けられた。何をされた！？　だが七夜は後ろにいる。この機を逃すな！！

「十六夜月華！！！！」

「止せつての！！」

「ぐっ！？」

弾かれ、いや吹き飛ばされた！！

「極彩と散れ」

「がつ……！！？」

強力な斬撃をほぼ同時に二撃受けて俺は倒れた。

――

弾幕モードを使うのは久しぶりだったな。身体が軋む。慣れない事はすべきじゃない。

「ほら、もう大丈夫だ」

「お兄ちゃんやりすぎー!! もりゃんかわいそうー!!」

「いや、助けてくれと言ったのは君で」

「嫌い!! あっち行って!!」

ガーン

こんな、幼女に、嫌いと言われた。ふ、ふふふ、いいんだ。どうせ俺は変態だからさ。

――

今日も美味しい味噌汁が作れたというのに七夜は遅いな。

「……ただいま」

「お帰り。暗いぞ、どうした」

「幼女に、嫌いって」

「いつもの事だろう。落ち込まない落ち込まない」

「うん……」

七夜のこういうところが母性をくすぐられるんだよな。って僕は男じゃないか。何を考えているんだ。

「煉、女の子になって癒してくれ」

「君はそろそろ爆死するかい？」

僕は持っているトランプ全てを七夜の周囲に投げつけた。

「ごめんなさい。家が爆発したら困ります」

「自分は爆発してもいいんだね。まあ僕としても家がなくなると困る。さあ朝食にしよう。今日は和食だよ」

「それは嬉しいな」

元気のない七夜のために作ったからね。たぐんと食べてほしいな。

こんな七夜（後書き）

いろいろやりすぎたかな。まあ気にする事はないさ、MUGENだもんね。
ではキャラ紹介をしよう。

煉

出演：メルティブラッド、MUGENオリジナル
レンの改変キャラ。トランプと炎を使う。本作ではまさかの男の娘。
理由はこの子の作者兼CVの人が男だからさ。

アンノウン

出演：EFZ
本当は英語で書くが、なんか英語は小説では微妙だと思ってカタカナにされた子。幼女。

御名方守矢

出演：月下の剣士
アンノウンのボディガード。優れた剣術で敵を倒す。僅かな隙も見逃さず逆転劇を披露する事もしばしば。

弾幕七夜

出演：メルティブラッド、MUGENオリジナル
七夜の弾幕モード。常時全開で好き勝手に技を使える。ナイフを使った無数の弾幕。強力な回復。無敵のセブンスなど、狂キャラ代表の一人。

アイドルコンサート(闘)(前書き)

なんだか書くのが止まらないんだ。

アイドルコンサート(闘)

学校の昼休み。俺とロックと七夜は何でもありのババ抜きをしていた。

「「「……………」」」

ちなみにジョーカーを持っているのは俺なんだが、どうやって二人にくれてやるうか。このジョーカーには小さな傷がある。それを二人も気付いているはずだ。運では取ってもらえない。負ければペナルティーがある。どうする……

「あんた達！ 良い物を持ってきたわよ！！」

「うおっ!?!」

突然やってきた博麗に驚いたフリをしてジョーカーを落とす。ナイス博麗。

「あゝ、バレちゃった。これじゃあゲームの続行なんて出来ない。お開きだ」

二人は俺がわざとやったのに気付いているのだろう。ジト目で見てくるが、何でもありだからいいんだよ。

「さて博麗、何が良い物なんだ？」

「はるかっかのコンサートチケットよ。どう、欲しいでしょ。今なら安く譲ってあげるわよ」「

「……別にいらないな」「」

「なんでよ!! 今話題の新ジャンルアイドルじゃない!! 知らないわけじゃないでしょ!?!」

まあ有名だからな。テレビでも何度も見るし、コンサートチケットだってネットで高値で取引されると聞く。けどな……

「ロリじゃないし」

「ゲーセンで金使ったし」

「もう持ってるし」

「あんたらは、ってカンフー! なんて純粋に興味を持たなさそうなあんたがチケット持ってるのよ!!」

「それは俺も気になるな」

「お前も昨日、俺とゲーセン行ったじゃないか」

ロック、俺はお前のように湯水の如くゲーセンには注ぎ込んでないぞ。

「簡単だよ。貰ったんだ」

「これを貰った? 誰からよ」

「クリザリッドさん。美鈴さんと一緒に行く予定だったみたいだけ

ど、急遽別の用事が入ったからって」

だから二枚持っている。それで俺とアイルーで行く予定だったんだよな。あいつが結構好きだし。」

「……やはり買おう。二枚あるか？」

「四枚、私のは除くと三枚あるわ。でも七夜つたらいきなりどうしたの？」

「煉が行きたがってたのを思い出してな。なに、軽い恩返しさ」

「みんな行くのかよ。博麗、後払いでいいなら買っ」

「毎度。じゃあコンサート開始2時間前に闘狂ドームに集合ね」

「早くないか？」

「多少早い方がいいの」

もしかしたら一番楽しみにしていたのは博麗かもしれいな。

「博麗はチケットどうやって手に入れたんだ？」

「私も貰ったの。それでタダでくれてやるのもなんかやだから売ってあげるのよ」

セコいな博麗の巫女。巫女がそんなに強欲で許されるのか？

――

ここが闘狂ドーム。テレビとかでは見るけど実際に来たのは初めてかもしれない。

「ご主人！ 凄い人ですニヤー！！」

「そうだな」

「カンフー！ こっちだ！！」

「おう、お待たせ。七夜と博麗は？」

「七夜は煉に引っ張られて出店に、博麗はグッズでも買いに行ってるんじゃないか？」

それぞれが楽しんでるな。お祭りだからそれが正しいか。

「ご主人……」

「ははっ、いいぞ。好きにやっつていい」

「ありがとうございますニヤー！！」

小遣いは持たせたから大丈夫だろう。何かあればケータイに連絡も来るだろうし。

「ロツク、俺らも行くか？」

「だな。見て回ろう」

――

「ふふふ」

「そう引っ付くな。歩きにくい」

「いいじゃないか」

七夜が僕のためにチケットを取ってきてくれたんだ。こんなに嬉しい事は他にない。僕は幸せ者だ。

「たこ焼き食べるか？」

「もちろんだとも。あゝん」

「自分で取れよ。ほら」

「ハフツハフツ、ふふっ、おいひ」

「そうか」

こんな滅多にない事は楽しまないかね。いっぱい遊んでいっぱい食べて、楽しい思い出を作ろう。

「綿アメだ！ 食べよう！」

「好きだな煉も。煙草は吸わないのか？」

「こんなところで吸つのはマナー違反だし、無粋だろう」

僕は確かによく煙草を吸うけど、禁煙すべき場所ではちゃんと禁煙するよ。

「それもそうだ」

「なら早く買おう。七夜も一緒に食べような」

「甘いのは苦手なんだがね」

「はるかつかのグッズが沢山。やっぱりこういうイベントはいいわ。ネットだと偽物もあるし。」

「あ、これ二つ頂戴」

「はいどうも」

鑑賞用、保存用。これは基本よね。使用用？ 嫌よ勿体無い。

「ん〜」

お金が無くなってきたわ。巫女って仕事がある分、バイトとかあんまり出来ないからお金が貯まらないのよね。普段アイドルグッズを大量購入してるのも理由だけど。

「そこのお嬢さん。これどうだい？ はるかつかのサイン入り生写真
真」

変な男が話しかけてきた。サイン入り生写真か。

「本物だとしたらどこで手に入れたの？」

「悪い事はしてないから安心しな。俺の同級生が芸能関係者でね。デビュー前の貴重なサインだぞ」

「ふーん、見せて」

「いいぜ」

この手のものは偽物が多いからね。私はループを取り出して観察を始める。写真自体は本物、よくイベントとかで配られるコピーじゃない。撮った日付も入ってる。

「サインはどうかしらね」

ちゃんと人の手によって書かれたもののような。筆跡も私の持つてるデビュー前後のはるかっかのサインと合致するわ。

「最後に、同級生と貴方が写っている写真はあるかしら？」

「疑り深いな。見たとして芸能関係者と分かんたらうに。いや、こいつなら分かるか」

「いいから見せなさいよ」

「これで満足」買った！」「はやっ！？」

一目見れば分かるもの。写真にいる男の隣にいる存在が何かなんて。いい掘り出し物を見つけたわ。

「誰も信じてくれなかったからおじさん嬉しいぜ」

「そりゃ普通はそうよ。それに貴方があの独眼Pの同級生なんて誰も考えないもの」

「そうか？ これでもそこそこな有名人だと思うんだが」

「そうよ。というかおじさん見た事ないわよ」

独眼Pといえは芸能界でも指折りのビッグプロデューサー。その同級生がそこらへんでアイドルの生写真を売るなんて初耳よ。

「おじさん、メアド交換しましょう。芸能関係者の知り合いがいるとグッズ集めが楽だわ」

「がめついこつた。お嬢さんの名前は？」

「博麗霊夢よ。おじさんは？」

「ザンギエフだ」

――

開始30分前、既にドーム内は熱気に包まれていた。

「博麗、入り口でもらったクジはなんなんだ？」

「さあ？　今回初の試みだそうよ」

初めてか。今まで前例のない事をすると考えてもいいのかな。

「七夜、疲れてるな」

「煉に振り回されてな」

うちもアイルーがはしゃいでたが、あつちはそれ以上だったみたいだ。煉のホクホク顔を見れば分かる。

「時間まで暇だな。ジュース買ってくる。みんなはどうする？」

「俺は麦茶で」

「なら俺はスポーツドリンクで」

「僕はコーラがいいな」

「私は持ってきてるからいいわ」

「僕もありますニヤ」

「了解。七夜が麦茶でカンフーはスポーツドリンク、煉はコーラな。戻ってきたら金渡せよ」

「「「えー」「」」

「お約束な反応ありがとう」

もうちよっといいいッロミを楽しみにしていたのにな。ロックのッロミは安くないという事か。

――

コンサート開始の時間になって、台上にはるかつかが上がってきた。

「みんな、今日は来てくれてありがとう！… 藤堂晴香です！…」

『はるかつか……！……！……！』

「今日は楽しんでってね！……！」

『フ……！……！……！……！』

流石今話題の寄生型アイドル。人気だな。さてうちのメンバーの様子はどうなってるか。

「zzzz」

七夜は寝てるな。興味がないのは分かっていたが、この中寝れるとは。

「」

あ、ロックは意外に乗ってる。楽しんでるならいいか。

「「はるかっか————!!!」」

博麗とアイルーと煉はまさにファンの行動だ。特に博麗はお手製の法被なんて着てるよ。まあ俺もほどほどに楽しもうか。

——

パンフレットではコンサートももう終わり。生はテレビと違って臨場感が凄かった。はつきり言って面白かった。そんな中放送が流れた。

『それでは最後にお客様にも参加をしていただきます。入場時に貰ったクジはお持ちでしょうか？ そのクジの番号とこれからモニターに表示される数字が同じの方は舞台へ上がって下さい』

ほほう、当たれば間近ではるかっかが見れるのか。これはファンにはたまらないだろう。

「当たるかなニヤ？」

「当たると良いな」

モニターに8つの数字が表示される。どれどれ。

「当たったー!!!」

いきなり博麗と煉が叫ぶ。随分運が良いな。ってマジか。俺も当たってやがる。

「……アイルー」

「にやんでしょう?」

「行ってきな」

「ニヤ!? でもそれはご主人の」

「いいんだよ。目の前に行きたそうにしてる奴がいるんだ。まあこれが格闘家、例えばザンギエフさん辺りだったら譲らんがな」

「ザンギエフさん? あのおじさん格闘家だったの?」

「知っているのか博麗。意外だな」

「だってはるかっかのサイン入り生写真売ってたわよ」

「嘘だろ!? ロシアの英雄だぞ!!! 今は世界修行に出てるって

話なのに!!!」

「……メアドあるわよ」

「くれ!!」

どうして俺は博麗と行動を共にしなかったんだ。ああ勿体無い。しかしあのザンギエフさんがそんな事をしているなんて。

「さあアイルー、煉、舞台へ行くわよ」

「はいニャ!!」

「うん!!」

三人は仲良く舞台へ向かった。

「……………カンフー」

「どしたロック」

「俺にもザンギエフさんのメアドくれ」

「分かったよ、友よ」

――
――
舞台に行くと私以外の参加者は全員集まっていた。ってあら。

「スペランカー先生」

「やあ博麗君。君も来ていたんだね」

「スペランカー先生も。少し意外です」

「ハハハ、実は私だけじゃなくて教師一行で来たんだよ」

教師も暇ね。他のは知らない顔ね。ここまで見知った顔がこれだけの観客の中から集まるのが珍しいんだけど。

『それでは皆さんには4対4のチーム戦をしてもらい、勝った方はるかつかと楽屋で談話が出来ます。負けてもこの場で生写真です』
なっ、アイドルと楽屋で談話？ 負けても決して美味しくないわけではない。こんなイベントに参加出来るなんて。

「さあお前ら！ この箱からカラーボールを引きな！！」

「独眼P！！」

確かにるかつかのプロデューサーは独眼Pだけど、まさか出てきてくれるなんて。もう幸せ。

「ニヤ、赤ですニヤ」

「僕も赤だね」

「私は青だ」

アイルーと煉は同じチーム、スペランカー先生は違うチームね。私は……

「赤よ」

どうやらアイルー達と同じだったみたいね。残りは誰になるのかしら。

「……………赤」

なんだかイケメンだけど寡黙な人が同じチームになったわね。

「……………若き博麗の巫女が仲間、か」

「！ あんた、何？」

「サイキカル」

サイキカル……………知らないわ。でも実力はありそう。いいわ。何かは知らないけど今は協力しないとね。

『ではチームが決まったようなので試合を始めましょう。まず初戦は、こちら……！』

アイルVS(、・・、)

「……可愛い」

「えっ」

この男、本当に何？

――

にゃんだかお饅頭みたいにゃ人(？)が相手だけど負けないうにゃ！！

『Ready Fight!!』

「行くよ」

「にゃ!?!」

消えたにゃ!?!

「ていつ!?!」

「フニヤ!?!」

後ろから殴られて飛ばされる。消えた時に後ろから来るのを想定するのは当然なのに油断したニヤ。

「そいつ!?!」

ゲシッ

「ニヤンツ!?!」

「てやあああああ!?!」

「フニヤアアアアア!?!」

蹴り上げからの空中コンボ。この人(?) 凄い強さニヤ。でも僕だつて何もせずに負けるわけには行かないのニヤ!?!

「フツ!?!」

また高速移動からの攻撃。でも今度は受けるのニヤ。

ガンッ

「盾!?!」

「カウンター突きニヤ!?!」

「おっと」

逃げられたけどその瞬間に爆弾を作っておくのニヤ。小タル爆弾完成ニヤ。

「今度はこっちの番なのニヤ!!」

装備は速くて手数が多い双剣。一気に攻め立てるのニヤ。

「えいつ! ニヤア!!」

「こっちだよ」

あ、当たらない。こつなったら……

「喰らうのニヤア!!」

爆弾を投げつけて周りに砂埃を巻き上げる。これでお互いに場所は分からないはずニヤ。僕は太刀を取り出してブン回す。

「ニヤアアアアアア!!」

……手応えが全くないニヤ。

「悪いけど僕の勝ちだ。楔!!!!」

「フニヤアアア!!?」

――

『そこまで!!』

アイルーが空から降ってきたお饅頭さんにやられた。あのお饅頭さん、まだ本気じゃなかったな。

『お見事でした。それでは次の対戦はこちらです!!』

煉VSスペランカー

僕の出番か。スペランカーって人は七夜達の先生みただけど、負けないよ。それにしても小さな人だよな。

「よろしく願いしますね」

「勝たせてもらうよ」

「私だって負けません」

『Ready Fight!!』

「ハッ!!」

僕がトランプを投げつけ、それが爆発する。

テッテレテレテッテレッテッテ

『……………えっ?』

会場が変な空気に包まれる。もしかして、これで終わっちゃった?

「スペランカー先生は体力が53万、防御力は5000。しかし一撃で負けるのよ!」

『え、ええ』

霊夢の発言に全員が絶句する。何その飾り能力。意味ないじゃん。

『え、とりあえず次の対戦にいきましょう。こちらです』

博麗霊夢VSペットショップ

――

私の相手は鳥なのね。鳥がアイドルのコンサートに来るってのもおかしい話だけど、鳥でも理解出来るなんてくらい素晴らしいという事ね。

「クエクエクエ」

「勝ち譲らないわよ」

「クエエ」

『Ready Fight!!』

「クエエ!!」

氷柱が落ちてきた!? 鳥のくせに氷なんて扱えるの!?

「クエエ!」

しかも氷柱を落とすだけじゃなくて飛ばしてきた!! いいわ。この博麗の巫女に弾幕勝負を挑む愚かさを思い知らせてあげる!!

「封魔針!」

細く、連射能力の高い針で落ちてくる氷柱を避けながら飛んでくる氷柱を撃ち落とす。

「ホーミングアミュレット!!」

針から逃げる鳥に追尾性のあるアミュレットを撃つ。

「クエツ!？」

へえ、あれを撃ち落とせるんだ。だけど前ばかり見ていて大丈夫かしら？

――神霊『夢想封印 瞬』

「はい捕まえた」

「ギエ!？」

私は鳥を捕まえて針を突きつける。そこで敗北を理解したのか大人しくなった。

『そこまで!! 霊夢さんが一枚上手でしたね。それでは最終試合です』

サイキカルVS前原圭一

「へへっ、あんた強そうだな。だけど男として負けられないぜ!!」

「倒してみせよ……」

『この試合で圭一さんが勝った場合、それぞれのチームからランダムで選ばれた選手による勝者決定戦が行われます』

そういう方式なのね。でもその必要はなさそうね。あの男、サイキカルが戦闘態勢に入った瞬間に雰囲気が変わった。相手には悪いけど、多分この場にいる誰も勝てないわ。

『Ready Fight!!』

「そこ」

「なあ!？」

サイキカルが後ろを向いた瞬間に相手は何度も打撃を受けたように吹き飛んだ。あれは霊撃!？ しかも不可視なんて。

「ふふふふ」

影に溶けるようにサイキカルが消え、そして地面に無数の紫の光点が出てきた。ヤバい!!

「全員こつち来なさい!! 早く!!」

私の必死さが伝わったのか全員近くにきた。そして私が結界を張るとほぼ同時に光点から紫の光の柱が上がった。舞台はボロボロ。相手は大丈夫なの？

「ぐう……」

無事みたいね。サイキカルつてのに文句言わないと。

「あんた!! ……いない?」

相手だけ倒して消えたっていうの? 一体何だったの?

「凄かったじゃねえか!! サイキカルはどこだ!! スカウトしねえと!!」

『独眼P、そんな事言ってる場合じゃないですよ!』

「っとそうだったな。勝者は赤チームだ!! 赤チームは晴香の楽屋にいけるぞ!!」

『ですから!!』

「でも本当に凄かったですね」

『晴香さんまで』

この時誰も気付かなかったけど、スペランカー先生もいなくなっていた。

――

ドームの外、そこに先ほどのサイキカルが歩いていた。

「面白い。若き博麗の巫女は才に溢れ、その友も可能性に満ち溢れている」

「そういう君もその才を覚醒させたね」

「先生……」

サイキカルの前にスペランカーが立っていた。

「あのペテン師がこんなに成長するとは思わなかったな」

「止めて下さい。恥ずかしい。今は霊媒師として売ってるんですか
ら」

「しかし相変わらず可愛いもの好きなのは変わってないね」

「先生も好きですよ」

「ありがとう」

「では、後輩の育成を頑張ってください」

そしてサイキカルは影に溶けていった。スペランカーはそれを見届け空を見上げていた。

アイドルコンサート(闘)(後書き)

霊夢がアイドルオタクというのは新ジャンルとしてハヤル(＊、＊)
ではキャラ紹介しましょう。

ザンギエフ

出演：ストリートファイター

スーパープロデューサー独眼Pの同級生。ロシアの英雄。世界修行中だが最近金欠で独眼Pに頼んで、貰ったアイドルの生写真などを売って生計を立てている。

藤堂晴香

出演：寄生ジョーカー

新ジャンル、寄生型アイドル。最近人気が出てきた。体内に寄生体がいるらしい。

独眼P

出演：アイドルマスター(？)、MUGENオリジナル

スーパープロデューサー。戦いの中でこそアイドルは成長するといふよく分からない考えを持つが、それでアイドルが成長しているから困る。自身ももちろん強い。

スペランカー

出演：スペランカーみんなの先生。一撃で死ぬ。高い能力のため数日徹夜しても大丈夫。

(、・、・、)

出演：A A

シヨボン。可愛い。でも強い。作者はこのキャラとあるキャラのタッグが大好き。

ペットシヨップ

出演：シヨジヨの奇妙な冒険

氷を操るスタンドを持つ鳥。ある人のペット。

前原圭一

出演：ひぐらしのなく頃に

アイドル大好き学生。いじよ。

サイキカル

出演：KOF、MUGENオリジナル

霊媒師。遠距離戦においては敵無しともいえる高い能力を持つ。夢弦高校のOBにしてスペランカー先生の教え子。可愛いもの好き。

今、貴方はどうしてますか（前書き）

この作品の高校名、夢弦ですが。どっかで見た事あると思ったらとあるストーリー動画と同じでしたorz

今、貴方はどうしてますか

授業前、みんなで購入で買った魚肉ソーセージを食いながら談話していた。

「コンサートの男凄かったな」

「寝ていたから分からん」

七夜はよく寝てたよな。もしあのチーム戦に幼女が出ていたら即座に起きて応援していたろうな。そして煉にトランプを投げつけられるのだろう。

「苦手なタイプだったな」

「ロックはいいだろ。俺はロックみたいな遠距離技があるわけでもなし、七夜みたいな高速移動があるわけでもないんだから」

「そうだよな」

モグモグ

「あ、カンフー、ロック、あのおじさんのメアドあげるからアイドルグッズ代出してよ」

「「もちろんだとも」」

「そんなに価値あるかなあ？」

分からんだろうな。博麗からすればアイドルのメアド、七夜からすれば幼女に匹敵する代物なんだけど。

「お前ら、授業だ」

ジヨンス先生が教室に入ってきた。早く魚肉ソーセージ食わないと。

「まず、バルバトス先生から絵葉書が届いてる。それを読んでやる」
バルバトス先生が絵葉書。意外な事をするな。

「『貴様らあ、こおの手紙を読んでいる時にはあ、俺はもう、この世にいないだろお』」

「『嘘だ!』!』」

「『ツツコミご苦労お、ロックウ、カンフー』」

「『読まれてた!?!』」

「いや、今のは俺のアドリブだ」

「『ジヨンスさん(先生)か! しかし声真似上手すぎでしょ!』!』」

「娘にユーモアが足りないと言われて練習してみた」

充分ユーモア足りてるよ。ああ、ロックとのシンクロツツコミは疲れる。やっぱり俺はボケがいい。

「続けるぞ。『貴様らが知っている通りい、俺は某国の戦地にいる』」

――

「貴様の死に場所は、ここだあああああああああ……！」

「ぎいやあああああああ！？」

「ば、化け物だあああああああ！！」

「弱い……！」

戦地の兵の質のなんと低さ。教師である俺に負けるとは。これなら生徒達の方が余程齒ごたえがある。

「この村も、既に廃村か」

人がいなければいる意味はない。人は人を呼び寄せ、そこから争いが生まれる。争いのない場所には、興味の欠片もない。

ガツガツ

「んん……咀嚼音？」

まあだ生き残りがいるのか。仕方がない。俺も、あくまで教師だ。生きている命があるのなら、せめて保護団体に届けてやろう。

「そこか」

「！」

そこには俺の髪色とよく似た髪の女がいた。歳は俺が担当している生徒程度か。

「！……」

「又ルいわぁあああああ……！！」

「！？」

女が鎌を振ってきたが、俺の愛斧、ディアボリックフアングで砕いてくれたわ。

「女ぁ、俺を殺せると、思ったのかぁ？」

「……………」

まるで獣の目だな。さっきまで食っていたのは犬か。人でないだけマシか。だが生きるためには何でもするな。放っておけば周りに被害を出すだろう。

「死ぬか？」

「……」

こいつは保護団体になんぞ連れて行けば全てを食らってから逃げる。死を与えるのも、また慈悲か。

「！！！！」

俺がディアボリックファンクを振り上げた瞬間に女は飛びかかってきた。確実に殺すためか首を狙って腕を突き出してきた。

「見え見えなんだよう！！」

「！！！！？」

俺は女の腕を掴んで投げ飛ばした。女は家にぶち当たり倒れたが、その目は死んでおらず、逆に生きようとする光が強くなっていた。

「いいぞ！ 面白いぞ！！ もつとだ、その気持ちをもつと高ぶらせる！！！！ 俺の渴きを、癒やしてみせろおおおお！！！！」

そこから一方的な蹂躪は続いた。だがそれでも女は絶望せず、生きようとしていた。いや、絶望にいるからこそ生きようとしているのだろう。

「女、俺の娘になれ」

「？」

「お前を育てるのは楽しそうだ。雑魚を払うより余程楽しめる。さあ、名を名乗れ。そしてついて来い!!」

「……………あたしは……………」

――

「という事で娘と戦地を駆け巡っているようだ」

という事で済ませないでもらいたい。あのバルバトス先生に娘とか。ギャグだよな。ギャグと言ってくれ。

「フハツハツハツハ!!! ここがオヤジの働く学校とやらか!!!」

どこからか聞こえる女性の声。そして教壇の前に現れる底の見えない黒い球体。嫌な予感しかしない。

「っと。ようやく着いたぞ」

「……………どちら様でしょうか?」

「なにに? あたしを知らないのかあ? あたしはコマチ・ゲイテ

「イア。バルバトス・ゲーティアの義理の娘だよ」

「ですよ。あの球体はバルバトス先生が移動によく使ってたもんだから覚えてるよ。」

「これから授業だ。部外者は出て行ってもらおう」

「こんな状況でも冷静なジョンス先生が素敵です。でももっと冷静に、そして常識的に考えて下さい。部外者ってレベルじゃねえから！！」

「部外者あ？ 違うな。これを見てみる」

「……確かに。ならカンフーマンの隣に座れ」

「これはもしかしなくてもあれですね。」

「今日からクラスメートが増える。仲良くしろ」

「オヤジが教師だからって遠慮することはない。あたしの渴きを見
てみるおおおおお！！」

「また濃いのが増えたよ。助けて。このままでは俺とロックの影がど
んどん薄くなっていく。」

今、貴方はどうしてますか（後書き）

バルバトスさんに娘が出来ました。シリアスっぽくしたかったのに、俺には無理だ。

ではキャラ紹介です。一人だけだけど。

コマチ・ゲーティア

出場：東方project（？）、MUGENオリジナル

バルバトスが戦地で拾って鍛えた娘。技などはバルバトスと同じだが、圧倒的にバルバトスの方が上。胸がデカイ。

今回は都古ちゃんか、普通の京先輩メインにしようかな。どっちがいいだろ。

普通（前書き）

普通なある日常を取り上げてみました。

普通

これは普通な男の話である。

ジリジリジリジリ

「……うつせえ」

普通の目覚ましで普通に起きたこの男こそ、普通な京先輩である。ちなみに三年生なのに他の三年生にも普通な京先輩と呼ばれている。普通に留年しているのが理由だ。

「アニキ、さつさと起きろ」

「起きてる」

「なら着替えて飯食え」

彼女は普通な京先輩の妹である京子。普通な京先輩の家族は普通な核家族。父親、母親、普通な京先輩、京子という家族構成であるが、両親は普通に海外旅行でいない。いい加減普通が普通にゲシュタルト崩壊してきた。だが普通に自重しない！！

「アニキ、今年は留年するなよ。留年してるの兄貴と不破さんだけなんだから」

「仕方ねえだろ。俺もあいつも裏が忙しいんだ」

「だからって学業を疎かにしていいと思ってるの？」

「お前は街の平和と俺の卒業。どっちが大事だと思ってるんだ」

「卒業に決まってるでしょ！！それでも裏の仕事優先するなら中退しちゃえ！！」

「中退したら就職に支障でんだろ！！」

はつきり言って留年し過ぎるのも普通に就職に支障が出るはずであるが、普通の京先輩は普通にそんな事考えにないようだ。

ブルルル

「あいよ、京だ」

『京君、私だ』

「詐欺か？」

『……………塩くれて「ベガさん何か用か？」今晚仕事を頼みたい』

ケータイに電話を掛けてきたのは裏の仕事を回してくる塩の第一人物、ベガである。

「アニキ、また仕事？」

「夜だから気にするな。で、内容は？」

『簡単だ。エルクウ狩り。君なら容易いだろう？』

「はいよ」

エルクウとは個体名ではなく種族名である。人の姿と黒い鬼の姿の二つを併せ持つ種族、宇宙人とも言われているが、元々は狩猟をして生活をしてきた。だがそれを快樂とし、人を狩るようになってしまった。

『今回の報酬は2000でどうかね？』

「多いな。どうしたんだ？」

『最近新聞やニュースで見なかったかね？ 毎夜の如く人が失踪しているのを』

「ニュース見ねえし。だがその犯人がエルクウってのは分かった」

『うむ。充分気を付けてくれ。後でメールで目標の写真を送ろう』

ピッ

京先輩は普通に学校へ行く準備を始める。だがエルクウ狩りというとてもない仕事を普通に受けて普通に学校に行くなんて、流石京先輩である。

――
ベガさんもエルクウ狩りなんて他の奴に任せりゃいいのによ。

「京、何やら疲れた顔をしているな」

「刃か。京子に説教食らって、更にエルクウ狩りの依頼が来てよ」

「それは難儀であるな。拙も手伝ってやるうか？」

「お前も卒業ヤバいだろ。気にすんな」

こいつも俺と同じようにたまに裏仕事をしているせいで出席日数がヤバい。だがこいつって忍者（自称）だから裏仕事の本職なんじゃないかなろうか。

「そろそろ授業だな。寝るわ」

「たまの授業くらいちゃんと受けた方が良くぞ」

授業なんてのはちゃんと受けなくてもテストでいい点を取ればいい常識だな。

「何を普通に寝とか！ 阿呆があ！！」

「いてえ！！」

一時間目が保健体育なのを忘れてた。範馬先生の一撃をキツすぎる。

――

深夜。目標の写真を元にエルクウを探す。どうやら昼間は会社員らしいな。しかしせめてどんな会社に勤めているかくらい情報くれよ。

「いやあああああああああああ!!!」

女の叫び声。エルクウか？ まあ違ったとしても助けるぐらいはしてやるか。

「そこの変態。何をしている」

「オオオオオオオオ」

「つと、マジでエルクウだったか。そこの姉ちゃん逃げな。これの相手は「ガアアアアア」！」「うおつと」

相変わらず好戦的な種族だ。ま、そうじゃないと面白くない。

「行くぜ」

「アオオオオオオオ!!」

エルクウは自慢の爪で俺を引き裂こうとしてくる。俺はそれを受け止めてやる。

「!？」

「どうした？ 自分の爪が効かないのがそんなに怖いか？」

「オオオオオオオ!!!!」

「そうカツカすんなよ。だが熱いのは嫌いじゃねえ。さあ、喰らいやがれえええ!!!!」

腕を振ると巨大な炎が巻き起こり、エルクウを飲み込んだ。そこからエルクウは飛び出してきたが、その身体は大半が炭のようになっている。

「オオオ……ハアアア……」

「みつともねえな。天下の狩猟民族エルクウが学生一人に瀕死か？」

「グウウウ……」

「終わりに……まだいたか」

建物の影から出るわ出るわ。そっぴやエルクウは群れでの狩りをするんだっただか？

「何者？ そのエルクウがいくら若くとも人間の手に負える代物で

はない」

「喋れるのもいたのか」

「エルクウの雌で鬼となるものは少ない。だからと言って弱くわな
いわよ」

女は爪を俺に見せつける。確かにあの爪はエルクウのそれだ。

「危険な貴方はここで死んでもらいます」

「そうかい」

俺は片腕を高く掲げ、拳を握りしめた。

「あめえな」

ドオオオオオオン

たったそれだけで大量にいたエルクウが爆発をした。あの女も含め
数体生き残ったようだが、殆どは肉片となり、その肉片も燃え尽き
た。

「ハアハア！！ 何よ、本当に何なのよ！！」

「別に。ただ普通に攻撃した。それだけだ」

俺にとってはこれが普通。異常な力だろう。だが周りはそれを受け
止め、普通としていてくれた。最近はただの渾名みたいになっ
てるがな。

「夢よ。そうよ、こんな夢」

「現実見た方がいいぜ。そうだな。最後に名前ぐらい聞いといてやるうか？」

「ふざけるなあ……！」

ヒステリックを起こした女ってのはこええな。

――

ピッポッパ プルルル ガチャ

『私だ』

「報酬の値上げを要求する」

『京君か。どついう事が理由を言ってくれ』

「エルクウが大量に出てきてな。大体3〜40くらいだったか。一人女もいたな」

『なんと……おそらく女はエルクウ一族を統括していた一人、千鶴だろっ』

統括していた？ ならこんな事させたら駄目だろっ。

『私の予測だが、一族でその街を支配しようとしていたのかもしれない。君が始末した数もその街にいるエルクウの総数と合う』

「やって良かったのか？」

『もちろんだ。感謝する』

「なら謝礼は」

『倍だ』

「何！？ 待て！！ それは」

ガチャ プー プー

「切りやがった……」

こんだけやって400万ドルかよ。割に合わねえ。

普通（後書き）

とても普通ですね。次回は都古ちゃん回になりそうです。
ではキャラ紹介をしましょうか。

京子

出演：MUGENオリジナル

普通な京先輩の妹。家の事は大抵彼女がこなしている。留年している兄を恥と思っている。二年生なので今年兄が留年したら来年には兄と同級生になってしまう。

ベガ

出演：ストリートファイター

裏の仕事を様々な人に提供し、解決してもらう塩の人。やってくれる人がいない時には自分がやる事も少なくない。

エルクウ

出演：痕

人を殺す鬼。宇宙人とも。男は惨殺、女は犯してから殺す。人として社会に紛れている場合もあるが、そんなエルクウは余程の理由でもない限り殺人はしない。

千鶴

出演：痕

エルクウ一族を統括していた女。徐々に人を殺していき、街をエルクウのためのものにしてしようとしていたが、京先輩によって殺される。

都古ちゃんと授業参観（前書き）

今回の都古ちゃんは変態臭はありません。

都古ちゃんと授業参観

都古side

今日は学校の授業参観の日。みんな落ち着きがあんまりないなんて子供だよね。

「都古ちゃんのおうちはお母さんが来るの?」

この子は私の同級生の橙ちゃん。ネコミミと尻尾がフサフサして気持ち良い子。

「そつだよ。橙ちゃんは? やっぱり藍さん?」

「えへへ、今日は紫様ゆかりが来るんだ」

あのボーダー商事社長が来るんだ。仕事が忙しいだろうに。そこはやっぱり式の式である橙ちゃんが気になるのかな。

「俺は兄さんが来るそつだ」

彼はケンシロウ君。小学生とは思えない体格に、なかなか複雑な家庭事情を持った人。確かお兄さんは夢弦高校に入学したんだっけ?

「お兄さんも学生でしょ。学校はどうするの?」

「許可が出たらしい」

「良かったね」

いつもはあんまり見ないケンシロウ君の嬉しそうな顔。でも交流がない人が見れば気づかない程度の些細な変化だ。

「みんないいな。うちは親とか兄弟がいないから牧師さんが来てくれるみたいけど」

「でも牧師さんはブリちゃんの家族でしょ」

「ちゃんはやめてよ」

この子はブリジット。男の娘だ。ケンシロウ君以上に複雑な家庭事情があるみたいで、今はとある牧師さん家族と暮らしているらしい。

くぱあ

突然変な空間が口を開き、そこから紫のゴスロリ服を着た金髪の女性が出てきた。

「橙、来たわよ」

「紫様！ 嬉しいけどちょっと早いよ」

「いいじゃない」

本物の八雲紫だ。ボーダー商事なんて大規模会社の社長だから今までテレビでしか見た事なかったけど綺麗な人だな。

「みんな、うちの橙がお世話になってるわね」

「そんな事ないですよ」

「貴女は、霊姫の娘さんじゃない。大きくなったわね。胸以外」

「グサアツ!!」

痛いところ突いてくる。でもまだ成長期だもん。すぐにお母さんみたいなのバインバインになってロックお兄ちゃん………むふふ。

「っってお母さんと知り合いなんですか!？」

「まあね。赤ちゃんだった頃の貴女も知ってるわよ」

「すみません遅れました!!」

扉を開けて飛び込んできたのはうちのお母さん、博霊霊姫だった。

「お母さん、まだだよ」

「えっ? あらあら、間違えちゃったわ。時間だと思ってメイクを簡単にやっつきちゃった」

メイクなんていいんだよ。問題はその横乳を異様に主張している巫女服。巫女の仕事を切り上げて来たね。男に襲われるよ。

「霊姫は相変わらず天然ね」

「紫! 久しぶりじゃない!! テレビでよく見るわよ」

「久しぶりね。貴女はまだ巫女を続けているのかしら?」

「えっへん」

別に誉められてないから胸を張らないで。男子の大半が前屈みにな
ってるから。

「おやおや、私は三番手ですか」

「牧師さん!!」

「ブリジット、今日は貴方の授業をしつかり見学させてもらいます
よ」

「はい!!」

この人がブリちゃんの家族の牧師さん。名前はゲーニッツさんだっ
け？ 娘さんがロックお兄ちゃんの学校の先生をやってた気がする。

「兄さんはまだか」

「気が早いよ、ケンシロウ君」

「そつだな。授業までまだ30分もある」

授業参観は5時間目。お昼休みを挟むから時間がある。この人達は
早く来すぎなのだ。

ブオンブオン

「車の音？ 随分大きかったけど」

「外に車が止まってるね」

「本当だ」

校門に赤いフェラーリが止まっていた。そこからなんか大きな人が降りてきた。

「兄さん」

「あの人がそうなんだ」

「筋肉モリモリなのはケンシロウにそっくりですけどね」

「筋肉は鍛えればどうともなるよ」

でもブリちゃんは永遠にそのままじゃないと大きなお友達が号泣するけど。

「ケンシロウ、参ったぞ」

「兄さん、さっきのは？」

「友人のエドワード・エルリックに送ってもらったのだ。ケンシロウの大事な授業参観故にな」

「そこまでして、嬉しいよ」

「いい話ね」

「イイハナシカナー？」

「ハツハツハ！ゼノン、パパが来たよ！！　　っていないではないか」

びっくりした。誰かと思ったらルガル社長だ。そういえばうちのクラスのゼノンちゃんのお父さんだったけな。

「お久しぶり、ルガル君。元気そうでなによりだわ」

「ゆ、紫さん！？　何故！？」

「橙の授業参観よ」

この二人、どういう関係なのかな？　社長同士にしてはフランクすぎる。

「お母さん、二人の事知ってる？」

「ええ、二人は同級生なのよ。学園のマドンナだった紫に陸上部エースだったルガル君が憧れてたの。結局告白する前に紫が転校しちゃったんだけど」

「君は何故それを！！　　って博霊！？」

「久しぶり。そう嫌そうな顔しないでよ」

「君は昔から変わらんな」

「何が？」

「そんな天然に人の恥部を抉る所だよ!!」

天然なお母さんはどうしようもないよ。お父さんも若干天然だから釣り合ってるけど娘の私が大変だよ。

「あら？ お父様いらしてましたの？」

「あ、ああゼノン。今来たのだよ」

彼女がルガル社長の娘さんのゼノン・バーンシュタインちゃん。とてもお嬢様な性格をしている。

「もうすぐ授業だね」

いろいろ騒がしかったから気づかなかったけど、もう10分もない。他の保護者も集まってきてるし、準備してよ。

――

なんだか先生遅いなあ。いつもならさっさと来てテキストに終わらせるのに。

「こんにちわ。さあ授業を始めましょう」

『……………』

「あら皆さん、どうしました？」

やってきた担任のベール・ゼファー先生を見てみんな固まっていた。だってバリバリに化粧して、服だって普段着ないようなスーツだし。少女みたいな見た目でそれはどうなの？

「ポンコツ先生、気合い入れすぎ」

「誰がポンコツよ！！」

「君がだ。ベール・ゼファー君」

「し、シン校長！？」

いつの間にか教室にいたのはうちの小学校の校長、シン校長がいた。

「この貯まった書類は何かな？」

シン校長が指を鳴らすと他の先生が沢山の書類を台車に乗せてきた。これは酷い。

「えっと、でもほら、今日は授業参観ですし」

「……………だが断る！！ 南斗獄屠拳！！」

「べぶつ!？」

ぼっこーん

「それでは保護者の皆さん、代わりの先生がきますので。サラバダ
ー!!!」

ベール……ポンコツ先生は窓から蹴り落とされ、シン校長もそこから飛び降りていった。あれって自殺技だけど大丈夫かな？ それに代わりの先生って。

「失礼します。ってベール・ゼファー先生は？」

「ロックお兄ちゃん!? 代わりの先生ってもしかして」

「代わりの先生!？ 俺は職業体験に来たんだが!？」

「それも体験だ。いいではないか若者」

「良くないです。ってルガルさん!? 霊姫さん、は都古ちゃんのお母さんだから当然か。それにしても凄い保護者だな」

それは言えてる。間違いなくいろんな分野のトップクラスが集まってるもん。

「そういえば若者。クリザリッド君から聞いたのだが、君はギース社長の御子息だそうではないか。ギース社長にはお世話になっているよ」

「貴方がそうなの。うちのボーダー商事もお世話になってるわ」

「今度親父に言っておきます。それより授業はどうするか。とりあえず教科は何だったんだ？」

「道德ですわ」

「ありがとう。道德か。また難しいな。道德って言うてルールなんだよな。みんなはちゃんと守れるだろうし」

ロックお兄ちゃんはしばらく考えた後に何かを決めたように話を始めた。

「みんなには家族や友達っていう大切な人がいるよな。俺はみんなにその人を大切にしてもらいたい。当たり前的事だけど、これが出るのは人は立派な人だと思う。人ってのは勝手な生き物だ。自分を中心に考える。だからって忘れないでほしいのは自分は一人で生きていくんじゃない。周りに支えられてるって事だ。まあこんなセリフは定番だけどな。まあ定番になるくらい大切なんだ」

少し息を吐いた後、ロックお兄ちゃんは話を続けた。

「でも俺が家族や友達って言ったのは、人はそこまで出来てないからだ。人がどれだけ頑張っても世界どころか街中の人だって救うのだって出来ない。だから自分と大切な人は守ってほしい。これは他の人を守らなくていいって理由じゃない。何かしらの力を手に入れ、余裕が出来た時に他人を救えばいいと思う。まあ最終的に言いたいのは」

『……………』

言いたいのは何なのか。みんながそれを黙って待った。

「道德なんて人に押しつけられるもんじゃないから今の恥ずかしい話は忘れる」

『え、ええ』

なんだかいい感じの話だと思ったら最終的にオチが付いたよ。まあロックお兄ちゃんだからいいけどね。

「もう話も疲れたな」

元々職業体験なんだからこんな事する必要ないから覚悟してなかったよね。なら疲れてもしょうがない。

ガラガラ

「いや、すまんのお。いきなり授業があると言われて遅れてしまったわい」

あれ？ どうしてジヨセフ先生が来るの？

「んん、君は誰かな？」

「職業体験に来たロックという者ですけど」

「職業体験に来た子が何故授業を？」

「……………勘違い？」

私達も完全に勘違いしてた。でも冷静に考えたらそんなのあるはずがない。これも全部ポンコツ先生のせいしよう。

都古ちゃんと授業参観（後書き）

新キャラいっぱい。でもそろそろカンフーマン主体の話を作らないと。でも別の話も書きたい。ではキャラ紹介をしましょう。

橙

出演：東方project

都古の同級生。ネコミミと尻尾を持つ少女。純粹で騙されやすい。八雲紫の式の式。

ケンシロウ

出演：北斗の拳

都古の同級生の少年（？）。小学四年生（？）。一応クラス委員長。ある物を使うと橙と合体して……

ブリジット

出演：ギルティギア

都古の同級生。とても可愛い男の娘。ヨーヨーを持ち歩いている。とある事情があり、牧師であるゲーニッツにお世話になっている。

ゼノン・バーンシュタイン

出演：アイ・舞・ミー

都古の同級生。ルガールの娘。とてもお嬢様。父と同じでいろいろな技を使える。今回の事でロックに興味を持ったようだ。

八雲紫

出演：東方project

ボーダー商事の社長。境界を操る能力で事業を拡大している。ルガ

ールとは同級生。実は紫もそこそこ気があつたらしい。

ゲーニッツ

出演：KOF

ブリジットを預かっている牧師。Windの父。ちなみにゲーニッツというのは苗字らしく、Windの本名はジェミニ・W・ゲーニッツ。Windはミドルネームである。

エドワード・エルリック

出演：鋼の錬金術師

ラオウの友人。特別に免許を取って個人でニーサンタクシーというのをやっているらしい。タクシーは赤いフェラーリ。理由は目立つから。

ベール・ゼファー

出演：ナイトウィザード

魔王で先生。それ以上にポンコツ。なので生徒からはポンコツ先生と呼ばれる。

シン

出演：北斗の拳

校長先生。(学)カこそが正義、とかは別に考えていない。

ジヨセフ・ジヨースター

出演：ジヨジヨの奇妙な冒険

おじいちゃん先生。生徒からも人気が高い。

カンフー田舎へ行く(前書き)

勝手に手が動いてこようになった。後悔も反省もしていない。

カンフー田舎へ行く

ゴールドデンウイーク。俺は父方の爺ちゃんと婆ちゃんのうちに行くため、電車に乗っていた。

『次は平凡、平凡。お出口は右側です』

次みたいだな。しかし相変わらずの駅名だ。普通よりかはいいかな。普通だったら京先輩に取られてるし。

『平凡、平凡。お忘れ物のないようご注意ください』

電車を降りて駅を出る。以前来た時と変わらないボロっちい駅前商店街。変わってたらそれはそれで嫌だ。

「おばちゃん、コロッケ一つ」

「30円ね」

「はい」

「ありがとうございます」

商店街の揚げ物屋で安いコロッケを買って食いながら歩く。しばらくすると見えてきたのはこの田舎で一番の高校。やっぱり立派だ。

「田舎にしちゃデカイ学校じゃねえか」

「ああ……………ああ!?! コマチ!?!」

「よう」

「なんている！？ 転移してきた！？ それとも尾行！？ 後者だったら気づかなかった自分が情けない。」

「帰れよ」

「か弱い娘にい、一人で帰れとお？」

「かあよおわあいい？ 笑わせて「ジェノサイド」コマ子様はか弱い少女です。はい」

「よろしい」

何もよろしくないよ。帰れよ。

「それで、こおんな田舎に何をしに来たんだあ？」

「爺ちゃんと婆ちゃんに会いに来たの」

「強いのか？」

「メチャクチャでハチャメチャだ」

「なら会ってやるっ」

「なんでだよ！！」

「戦いが好きだからに決まってるだろうっ？」

もうやだこの女。やっぱりバルバトス先生に子育ての才能はなかったんだ。

――

着いてしまった。この暴力娘を連れて帰ってきてしまった。

「平屋か」

「悪いかよ」

「悪いと誰が言ったあ？」

「なんじゃ。誰か来とるのか？」

俺達の話し声が聞こえたのか爺ちゃんがやってきた。

「爺ちゃん、久しぶり」

「カンフー、やっと来おったか。んん？ そっちの子は、まさか彼女か！？」

「ちげえから。しかし爺ちゃんは相変わらず細いな。ちゃんと食ってる?」

「待てい、カンフー。あれが細い? あれは細いとは言わずに『棒』と言っただろうがあ!」

いや、まあナナーマン爺ちゃんは棒みたいに細いけど、棒ってはつきり言わなくてもいいだろ。爺ちゃん気にしてんだぞ。

「最近の若者は手厳しいの」

「どうしたんじゃ爺さん」

「おっ、婆ちゃん。久しぶり」

「カンフーじゃないかい!! そっちは彼女さんかい?」

「違っつて。爺ちゃんと同じ事言わないでよ」

こっちがイングリッド婆ちゃん。昔はコードホルダーって力でバリバリ言わせてたらしい。

「しかし女の子を連れてくるとは間が悪い。お前が来ると聞いてお見合いを用意したのに」

「どづいつ事だよ婆ちゃん!」

「ほほう、カンフーのお見合い。面白そうだ」

「面白くねえから!!」

コマチの野郎、いや女郎。人の苦勞も知らずに勝手な事を言いやがって。

「まあ会ってみなさい。いい子じゃよ。スレンダーで美人さんじゃ」

「爺ちゃんみたいなスレンダーはやだよ」

「わしも嫌じゃ。イングリッドももうちっとボンキュッボンじゃったら」

「目の前に本人がいるのによと言えるの、爺さん」

あ、婆ちゃんがキラキラし出した。これは危険だ。昔何度かみた事あるけど家がぶっ飛んだ記憶がある。

「弾ける!!」

「フッ！ ハッ！ ハッ！ ハ！」

婆ちゃんの攻撃を爺ちゃんは防ぎきっていた。流石自称ながらブロッキングのナナーマンと言っただけある。

「強いな。お前の祖父母とは思えん」

「俺だってあれだけの力があればと思っさ」

両親が言うには俺にも才能はあるらしい。でも覚醒出来るかは分からないとか。

「爺さんもしぶといの」

「まだまだ死ねんわ。カンフー、居間に見合い相手がおるから行きなさい」

「了解」

俺が望まないとしても相手は望んで会いに来ているのかもしれない。だったらせめて会うぐらいはしないと失礼だ。

「お前の見合い相手がどんなのかあたしも確認してやろう」

お前は来るな。

――

そつえば服が正装じゃないが、しょうがないよな。

「失礼します」

「はい」

居間には和服を着た美人さんと、強面のおっさんがいた。

「初めまして。カンフーマンです」

「お市と申します」

「我はあ、市の兄の信長である」

「お兄さんですか」

声！ 声がバルバトス先生と同じだよ！！ コマチも流石に目を丸くしてるよ！！

「して、カンフーマン。そこな娘は何者だ？」

「刀抜きながら質問はやめて下さい！！ ただの学友です！！」

「ならばよい」

おっかない人だ。市さんは大人しいのに信長さんは逆だな。

「あの、カンフーマンさん。少しお話でもしませんか？」

「ああ、お見合いですもんね。ほらコマチ、出て行け」

「仕方ない」

「兄様も、少し席を外して頂けませんか？」

「良かるう」

二人だけになった。こうなると緊張するけど、まあお見合いするだけで付き合うわけじゃない。気負う必要はない。

――

「……が……して……」

「ふふ……ですね」

部屋の中から二人が話しているのが聞こえてくる。内容はよく聞かないが、話は弾んでいるようだ。

「ふうむ、悪くはないようだな」

「……ああ」

オヤジと似た声のおっさんは嬉しそうだが、あたしはそういい気がしない。決して長い付き合いではないが、カンフーには隣の席になってから世話になっていた。普段そんな事はこっぴどく言えないが、カンフーの事は……嫌いではない。

悪いのはあのおっさんだ。

――

コマチの奴何をしてんだ。廊下ごと信長さん吹き飛ばしたりしてさ。結局市さんとまともに話を出来た時間は短かった。

「カンフーマンさん、今日は楽しかったです。あんなにお話したのは初めてです」

あれだけしか話してないのに？ 普段それだけ話さないという事なんだろうか。

「それで……よろしければ、連絡先を交換致しませんか？」

「いいですよ。メルアドでいいですか？」

「あ……携帯電話は持っていませんので。お家のお電話でも。それと……厚かましいようですが、ご住所も」

「分かりました」

市さんと連絡先を交換しているとなんだか不穏な視線を感じる。後ろを見るとコマチがこっちをジト目で見ていた。

「デレデレしやがって。いいご身分だなあ？ あゝ？」

「デレデレしてねえよ」

なんか突っかかってくるようになったな。それもいつもより過激に。

「カンフーマンさん、あの人はあまりお友達としては」

「あゝっ!?!」

「ひっ!?!」

「おいこら！ 市さんが怖がってるだろ!?!」

「ったく、うるせえんだよ」

やっぱりおかしい。そりゃ乱暴の奴だがここまでの奴ではなかったんだが、まあ今は早く二人を離そう。

「じゃあ市さん、俺らは帰りますんで。コマチ、帰るぞ」

「……………」

帰る途中もコマチは不機嫌なままだった。次の日には普通に帰ったが、なんだったのか。

カンフー田舎へ行く(後書き)

どうしてこうなった？ 次はとにかくギャグに走るかな。
ではキャラ紹介をしましょう。

ナナーマン

出演：MUGENオリジナル

カンフーマンの父方の祖父に当たる棒人間。凄まじいブロッキング能力を持つ。年老いても衰える事はない。どうやって子供を作ったかは謎。

イングリッド(コードホルダー)

出演：CF、MUGENオリジナル

カンフーマンの父方の祖母。見た目は少女。でもお婆ちゃん。たまにコードホルダーという神状態になる。

お市

出演：戦国BASARA

カンフーマンのお見合い相手。普段は暗く大人しいが、カンフーマンと話している時はそこそこ明るい。

織田信長

出演：戦国BASARA

CV若本。お市の兄。乱暴ではあるが、妹には優しく気のいい兄。そして結構気遣いが出る。

武道会（前書き）

今回はギャグと言ったな。あれは嘘になった。

武道会

明日は学校で武道会というイベントがある。別に大会とかではなく、二年生による一年生の少し遅い歓迎会みたいなものだ。

「去年は凄かったよな」

「本気の勇次郎先生VS普通の京先輩&不破刃先輩のあれか。あれには衝撃を受けたな」

「そんな事より幼女を観察したい」

「私はアイドルがいいわ」

「幼女……」

「アイドル……」

「「アイドル幼女!! これは流行る(*´、*´)」」

「「アイドル幼女は流行るかもしれないが、その顔文字は流行らな
いし流行らせない」」

WボケとWツッコミ。別に戦いなんて披露しなくともこれで十分な気がする。でもこれは一年生以外にも外部の人に見せるものでもある。強さを見せれば会社採用へのアドバンテージにもなるとか。

「時間も時間だ。行くか」

「腕が鳴るな」

「眠い」

「ほどほどにね。痛いのは嫌よ」

――

カンフー達は舞台となる校庭に着くと二年生の席に座った。校庭には試合用のステージが用意されていた。

「今回ってどんな感じなんだ？」

「知らないのか、カンフー。今回は基本的にタッグだ。だけど前回、勇次郎先生が一人で戦ったような状況もあるらしい」

カンフーとロックは形式について話しており、霊夢はアイドル写真集を見ており、七夜は……

「zzzz」

寝ていた。そんな七夜の後ろに人が立った。

「トラペゾン」

ガンッ

「~~~~っ!? 誰だ!! 快眠を邪魔するのは!!」

「私ですが」

「……………なんだ、あんたか」

「担任をあんた呼ばわりするな!!」

ガンッ

「いった~~~~っ!!」

七夜を起こしたのはナイア先生。方法は棺桶をぶつけたのだ。これは痛い。

「もうすぐ始闘式です。起きなさい」

「面倒な」

「犯しますよ」

「……………チッ」

あの思い出は七夜にとってはやっぱりトラウマらしい。そして始闘式とは大会やイベント前に行われるMUGEN恒例の行事である。

「ナイア先生、今年は誰が？」

「オム君先生と外部ゲストです。始闘式に限った事ではなく、今年は外部ゲストが沢山出場するそうですよ」

これは学校行事なので外部ゲストはあくまで観戦者が基本なのだが、今年は違うようだ。

「おつ、始まるみたいだぜ」

ステージにオム君が上がる。しかしながら相手は出てこない。

「あの、僕の相手は？」

『もうすぐ来ます』

バババババツ

「ヘリコプター？」

「とっつ！ シャキン！！」

「パッチェさん！？ 何してるんですか！？」

「お呼ばれたから」

ヘリコプターから飛び降りてきてポーズを決めたのはCパチュリー。

「私が呼んだのだ！ 彼女と戦えて嬉しいだろう？」

「何してるんですかキラ校長！！ それに僕とパッチェさんは恋人同士なんかじゃありません！！」

「違うのか？ 校内新聞に載ってたぞ」

「あれは七夜君が勝手にやった事です！！」

「悪いね」

「悪いなんて思ってないよね！？」

哀れオム君。しかし世の中勘違いのまま進むのである。そして七夜に反省と自重の二文字はいらぬ。

「おーい、早く始めてくれ」

「あ、ごめんねパッチェさん。すぐに……凄く震えてるよ！！ どうしたの！？」

「そ、そんなのはいいから」

パッチェさんは最初ブルブルと震えていたが、それが縦に横に、更には回転までし始めた。

「レミ姉さん待って！！ 死にたくない！！ 死にたくないあああああああああ！！！！！！！！！！」

デデーン

「パッチエさああああああん!!!!!!?」

K O

「KOじゃないから!!」

突如パッチエは空へ飛んでいき大爆発を起こした。その様子はまるでフリーザ様に殺されたクリリンのようだった。

『ええと、よく分かりませんが始闘式を終わります』

「終わったらダメエエエエ!!!!!!」

オム君の虚しい叫びが校庭に響き渡った。

――

ここからはランダムで選ばれた二年生が試合をする事になる。

『では次は山本無頼君&巫浄翡翠さん。そしてクリザリッドさん&紅美鈴さんです』

「いくら美鈴さんが寮長だからって武道会に出演するなんて」

「強敵です」

「そう強張る事もない。俺も美鈴も手加減はしよう」

「それにこれはお祭りなんだから楽しまないかね」

緊張している無頼と翡翠の緊張を解すかのようにクリザリッドと美鈴は話しかけるが、実力ある有名タッグの二人相手では仕方ないだろう。

『準備はよろしいですか？』

「はい」

「いつでも」

「さあやりますよ」

『では、試合開始!!』

「ハアッ!」

「そこです」

試合開始の合図と同時に無頼は二人に突撃し殴りかかるように、翡翠はそれを援護するように物を投げつけた。

「テュホンレイジ!!」

「っ！！」

しかしそれもクリザリッドの蹴り上げによって起こった竜巻に止められる。

「いけえ！！」

攻撃を止められた二人に美鈴は虹色の弾幕を撃ち放ち、動きを完全に固めた。

「フツ」

「ぐっ！！」

クリザリッドは無頼を脚で器用に後ろに投げる。これで無頼と翡翠は分断された。だがこれは無頼達にもチャンスである。上手く挟み打ち決めればクリザリッド達を一気に沈める事も可能だからだ。

「行きます！！」

「うおおおおおお！！」

それを理解している二人は攻撃を繰り出す。翡翠はフォークを使った連続突きを、無頼はそのボクシングで鍛えた強力な一撃を放つ。

「気符『星脈弾』！！」

「見せてやる！ 我が力を！！」

それに対して美鈴は気の巨大な砲弾で翡翠を吹き飛ばし、クリザリッドは炎を巻き上げ、両手に溜めたそれを無頼にぶつけた。

『そこまでですー!』

――

流石にクリザリッドさんと美鈴さんは強かったな。無頼と巫浄さんのタッグも強いんだけど、年季の違いだな。

「カンフー、お前選ばれたらどうする?」

「タッグ相手がいるなら喜んでやるんだけどな。ロック、やるか?」

「いいな」

だけど本音を言えば七夜と組んだ方がやりやすいんだろうな。ガキの頃からの付き合いで互いの戦いの癖もよく分かってるし。

『はい? どうしました? はい、はい……本当にですか!?』

なんだか本部の方が騒がしい。トラブルという雰囲気ではないだろ

う。

『突然ですが、特別試合が組まれました』

特別試合……何故か汗が出てくる。

「どうしてだろうな。身体が震えてきた」

「……！！」（ガタッ）

「変な空気がするわ」

ロックも七夜も博麗も不穏な雰囲気を感じたらしい。特に七夜なんか寝てたのに起きたぞ。

『世界四大会社の社長の要望で我が校の生徒と社長方の対決が決定しました！』

世界四大会社だと！？ ルガル運送のルガル社長にボーダー商事の八雲紫社長、ロックの実家であるハワードコネクションのギース社長とネスツ医療のイグニス社長か！？

『では社長方、選手を指定して下さい！！』

「では私はカンフー君で頼もう」

「私は霊夢かしら。霊姫の跡を継いだ巫女の力を見たいわ」

「当然ロックだ。さあわしに貴様の成長を見せてみる」

「七夜とやら」

「待て！！ 俺はイグニス社長と交流がないぞ！！」

「クリザリッドの推薦だ」

「クリザリッドさん！！」

「すまないな、七夜君。校長の頼みで誰がいいかと聞かれた時に君が思い浮かんでな」

校長？ そういえば思い出した。ネスツ医療は大学も経営してて、クリザリッドさんはその卒業生でルガール運送に入った超エリートだった。

『では4人はステージに上がって下さい！！』

「「「嫌だ（よ）！！」「「「「

『出ないと単位はないそうです』

「「「この学校最低だ！！」「「「「

もうやるしかない。怪我しないように手加減してくれるよな。

――

ステージに上がるカンフー達。その前に立ちふさがるは世界トップクラスの社長達。

『試合は乱闘形式です』

「乱闘って。誰でもいいから倒して立っていたチームが勝ちなのか？」

『その通り！ では、試合開始！！』

カンフー達の心の準備が出来る前に試合は始まった。その中でも最初に動いたのは七夜だった。

「斬刑に処す！！」

――閃鞘・八点衝

「元気がいいけど、後ろががら空きよ」

イグニスに向かって無数の斬撃を放つ七夜。だがその技の弱点である背後を紫が隙間移動で取る。

「カンフー」

「分かってる」

「むっ!？」

霊夢が亜空穴でイグニスの上から膝蹴りを入れる。イグニスは避けるも追撃のサマーソルトで飛ばされた。

「いいタイミングだ!! レイジング「レイジングストーム!!」
くおおおお!？」

飛んできたイグニスに更なる追撃のためにロツクはレイジングストームを使おうとしたが、ギースのレイジングストームによって上に飛ばされた。

「本当の追撃を見せてあげよう。ジエノサイドカッター!!」

「がっ……!!」

「スキマツアーへご案内」

ルガールの蹴り、ジエノサイドカッターによって地面に叩きつけられそうになったロツクは紫の隙間に取り込まれる。その隙間の出口はルガールの前だった。

「さあ、これが私の運送技だ!! ギガンティックプレッシャー!!
!?!」

「ガハアツ!!?!」

ルガールはロツクを掴んで走ると、ステージの柱に叩きつけた。ロツクは柱からずり落ちると動かなくなった。

「「ロックー!!」」

「カンフー！ 博麗！ まだだ!!」

「七夜君の言う通りだよ」

「ロックがやられて動揺するカンフーと霊夢を七夜が怒鳴る。まだ試合は終わっていないのだから。」

「博麗の巫女よ。先ほどの一撃は見事であった」

「効いてないの!?!」

「ネスツ製のマントだ。トラックがぶつかっても問題ない」

「ネスツは医療関連の会社のはずだが何故あのような物を作れるのか。霊夢はそう思った。」

「ロックがやられたなら全開でやるしかないか。仕留める「フンツ!?!」なあっ!?!」

「七夜が弾幕モードになろうとした時、ギースの真空投げによって宙を舞った。」

「「デッドリーレイブ!!」」

「ぐあああああああ!?!」

「「ハアアアツ!!!!」」

「うあああああああああ!!?」

真空投げからのデッドリーレイプ。元々身体が頑丈な方ではない七夜は連撃から最後の気の放出を喰らい倒れた。

「七夜!!」

「どこを見ている？」

「あ……!!?」

霊夢が七夜の方を見た瞬間にイグニスが霊夢を黒い球体に封じ込めた。

「終わりだ。天から墮ちよ!!」

その球体にイグニスが巨大な光球をぶつけると球体は割れ、霊夢も倒されてしまった。あまりに早く倒される仲間。カンフーは呆然としてしまった。

「危ないわよ」

プオッ

「はっ? って電車!??」

ドガッ

「ウオオオオオオ……ウオオオオオオ……ウオオオオオオ……」

――

………いつ！

「あれ？　ここは……」

「保健室よ」

「ああ、博麗か。大丈夫か？」

「私が一番軽傷だからね」

俺の隣には七夜が、博麗の隣にはロックが眠っていた。ロックは特にヤバい連撃を受けたから心配だ。

「あんた電車で弾かれたのによく大丈夫だったわね」

「生命力には自信がある」

「そういえばそこ」

「そこ？」

博麗の指差す先にはコマチとナイア先生、それにオム君先生も寝ていた。

「ナイア先生は七夜のベッドに入ろうとしたそうよ」

「ナイア先生が？」

「七夜が無意識に蹴飛ばしたそうだけど」

ナイア先生がそんな事をするなんて。まさか七夜に気があるのか？
いや、そんな馬鹿な。

「オム君先生はいろいろ傷薬とか用意してくれたみたい。コマチはあんたを心配してたわよ」

電車で弾かれたとなるとそりゃ心配だろうが、ロックを一番心配してやってほしい。あれオーバーキルコンボだろ。

「ふわあ」

「眠いなら寝たら？ 明日休みだし」

「そつする。博麗は？」

「もうちょっとというわ。オム君先生が起きたら任せて帰るから」

「そか。じゃあ……また」

俺は睡魔に身を任せ二度寝についた。

武道会（後書き）

どうしてこうなった。こうなったら次回はギャグキャラを集めてやる。

ではキャラ紹介と会社紹介です。

ギース・ハワード

出演：餓狼伝説

ハワードコネクションの社長。会社をロックに継いでほしいらしいが上手くいっていない。今回の試合で近づこうと思ったがますます逃げられた。

イグニス

出演：KOF

ネスツ医療の社長。医療分野においてトップクラスの実力を持ち、50を超えてもまるで20代。医療分野以外にも手を出している。

四大会社

ルガルル運送

運送ならなんでもお任せ。写真があればどこにいるか分からなくても荷物を届ける。子会社にマスターアジア空輸というのがある。

ボーダー商事

なんでもします。隙間の力で事業を拡大。規模で言えば四大会社の中でもトップ。でも社長はあまり働かず、式神の藍任せ。

ハワードコネクション

人材派遣会社。質がいい人材が多く、派遣される側にとっても確実

に信頼出来る仕事場に飛ばされるので安心。

ネスツ医療

様々な医療に携わる会社。クローン技術で移植だってすぐ出来る。ネスツ大学という大学もやっている。

MUGEN商店街(前書き)

ギャグ……？ 書いてると面白さが分からない。

MUGEN商店街

ども！ 都古です！ 今日友達の橙ちゃん、ブリちゃん、ケンシロウ君、そしてたまたま会ったゼノンちゃんと一緒に商店街へ遊びに来てるよ。

「何買う？ 私は靴が欲しいな」

「私はね、マタタビ！」

「橙ちゃん、それいいの？」

マタタビで興奮とか暴走とか発情期になったりとかしない？ マタタビ渡されたら変な人にもついて行きそうな橙ちゃんの未来が心配だよ。

「うちは新しいお人形さんが欲しいかな」

「奇遇だなブリジット。俺も人形が欲しい」

「ケンシロウ君も？」

ブリちゃんはいろんな人形、特にテディベアとか集めてるの知ってるけど、ケンシロウ君にもそんな趣味があったんだ。

「超神戦隊アリエンジャーのフィギュアだ」

「ああ〜」

「面白いよね」

「橙も観ているのか。ブリジットは観ていないのか？」

「うちはちょっと」

超神戦隊アリエンジャーっていうのは最近男の子の間で人気爆発の戦隊物。戦いは合体ロボとか出ずに個々の能力で敵を圧倒。でも最後にはイグのんって女の子にいちやもん付けられて一人一人殴られて、ありえん（笑）って言って言って終わる。観た時には理解が追いつかなかったね。ブリちゃんは女の子寄りだから観ないのかな？

「皆さん子供ですわね」

「むむつ、ならゼノンちゃんの大人って何なのさ。もしかしてピ
ーーツとかズキューーンとかして最後には ホアタアッ
とかするのを大人と思ってる？」

「「「？」「」」

「ひ、ひ、卑猥ですわ！！！！／／／／／／」

他の三人はキョトンとしてたけど、ゼノンちゃんは知ってたんだ。
なかなかの耳年増だね。ちなみに今言ったのは私がロックお兄ちゃ
んにしてほしい事だよ、キャッ

「わ、私が買いたい物は舞踏会用のドレスですわ」

「武道会なら終わったよ？」

「橙ちゃん、武道会じゃなくて舞踏会」

「でもそれが大人なな？　うちには分からないなあ」

「大人の買い物か。アリエンジャーウエハースの箱買いは大人だろうか」

「それはただの大人買い」

そんな事を話ながら商店街を歩いているとロックお兄ちゃんとカンフーお兄ちゃん、それと霊夢お姉ちゃんまでいた。

「ロックお兄ちゃん！！」

ズドン

「ぶぐつ！？　み、都古ちゃん？」

「都古じゃない。おつきくなったわね。胸以外」

「霊夢お姉ちゃんほどじゃない。私はまだ希望があるもん」

「それなら私だって」

「博麗は「カンフー？」希望がない！！」

言い切った！？　霊夢お姉ちゃんの殺気を至近距離で受けながら言い切った！！

「アハハハハ、死になさい！！」

「生きる!!」

カンフーお兄ちゃんは逃げ出し、霊夢お姉ちゃんはそれを追いかけていった。

「あいつは何してんだか。んで都古ちゃんも買物かい？」

「友達とね」(そんなのいいからもっと強く抱きしめて。むしろ抱いて)

「ロック先生だ!!」

「ロック先生こんにちは」

「お久しぶりですロック先生」

「皆さん、ロック先生はもう先生じゃないんですわよ」

「ゼノンちゃんも先生って言うてるよ」

「あらやだ」

あの職業体験事件以来、ロックお兄ちゃんは先生と呼ばれるようになっていた。ロックお兄ちゃんって呼んでるのは私だけでちょっと優越感。

グルルッ

「？」

「……腹減ってるみたいだ」

何の音かと思ったらロックお兄ちゃんのお腹の音か。可愛い

「飯にすっかな」

「ロックお兄ちゃん、私達もいい？」

「ああ。奢ってやるよ」

「」「」「」「ゴチになります」「」「」

「それは悪いのでは」

「ゼノンちゃんも先生に甘える。安い店なら知ってるから」

「……それでは」

――

商店街を少し横道に逸れた場所にロックお兄ちゃんの言う安い店が

あつた。ラーメン屋みたい。

「やってますか？」

「ロツクか、やってるぜ。そっちのガキンチョ達は？」

「職業体験の時の生徒達ですよ。さあお前ら、好きな頼め」

「ラーメンは醤油しかないけど勘弁な」

店長さんは銀髪の外人さんだった。意外だな。

「チップ店長は元はアメリカで忍者を目指してんだと」

「そうなの？」

「ああ。だけどラーメンを食った瞬間に衝撃が走ったな。それまで日本はスシ、スキヤキ、ニンジャ、サムライ、ゲイシャ、ハラキリ、そんなイメージしかなかった。そんなイメージをぶち壊してくれたのがアメリカで食った日本のラーメンだった」

思いつきり日本を勘違いしてる外人さんだね。それにしたって腹切りはないよ。

「それから日本に直接来ていろいろ食ったさ。ラーメン以外にも、カレー、牛丼、トンカツ、アメリカが本場と思ってたステーキまで日本の方が美味かった。だけどやっぱりラーメンが印象深くてな。ラーメン屋を始めたんだよ」

「チップ店長はこの店始めて一年なんだが、めちゃくちゃ美味しいぞ。」

天才だ」

「よせやいロック。褒めてもチャーシューしか出ないぞ。さあ注文を言ってくれ」

「俺はラーメン大盛」

「私はラーメン」

「私はラーメンのネギ抜き」

「うちはラーメンのもやし増し」

「俺はラーメン、もやし増し増し、麺増し増し」

「ケンシロウさんは自重なさい。私は普通のラーメンで」

「はいよ……………お待ち」

「……………はやつ!?!?」「……………」

いくらなんでも早すぎるよ。三分クッキングじゃあるまいし、作ってあったとは思えない早さだよ。

「うちは早い、安い、美味いが基本だ」

「シツシヨーを忘れてますよ」

「表に出る」

「サーセン」

――

美味しかった。満足満足。

「たまには庶民の食事も悪くありませんわね」

「ゼノンちゃんはツンデレだなあ」

「誰がツンデレですか!!」

ゼノンちゃん以外には誰もいない。まさにツンデレの極み。なのかな？

「泥棒だ!!」

そんな声が聞こえてきてこっちに魚をくわえたタヌキが走ってきた。
……………タヌキ？

「これはいかん!! 橙、あれをやるぞ!!」

「任せて!!!」

ケンシロウ君と橙ちゃんが何かゴソゴソしてる。何をしてるのか確認しようとしたら二人を眩い光が包み込み、光の中から出てきたのは……

「俺の八雲神拳は無敵だ」

橙ちゃんっぽい見た目でケンシロウ君っぽい声の何かが出てきた。

「キヤーチェンシロウ!!」

「ブリちゃん知ってるの!?!」

「なんだか勝手に言葉が……」

「ホアタアツ!!」

「たぬきにくつくばいばー」

よく分からないけどチェンシロウとタヌキの戦いが始まる。とかあのタヌキ強いよ!!

「あれは……」

「ロックお兄ちゃん、どうしたの?」

「いや……まさかな」

「たぬきでいっばー」

「八雲の先人達よ……」

「……」「負けたー!?」「……」

早い、早すぎるよチエンシロウ!!　まるでさっきのラーメン屋並みだよ!!　あ、元に戻った。

「やはり慣れない身体では北斗神拳を使うと動きづらいか」

「それに二人で一つの身体を動かすのは大変だね」

そういう仕組みだったんだ。どこかの仮面ライダーより面倒だね。

「じゃあ俺がやるか」

ロツクお兄ちゃんが前に出る。なら私達は……

「まあああああああてええええええええええ!!!!!!」

「iiiiiiiiiiやあああああああだああああああ!!!!!!」

「たぬうううううう!!!!!!?」

弾かれた!!　タヌキが走ってきたカンフーお兄ちゃんと霊夢お姉ちゃんに弾かれたよ!!　っていうかまだやってたのあの二人!!

「このバカ狸が!!!!」

「ひゃっ!？」

物凄い怒号が聞こえた。そこにはタヌキの首根っこを掴んでいるお兄さんがいた。

「やっぱりソル先輩のペットでしたか」

「ロックか。うちのバカがみつともないとこ見せたな」

「それよりお店に行つた方がいいですよ」

「ああ」

……………そういえば買い物してない。

「ロックお兄ちゃん、買い物しよ」

「だな。みんなでデパートでも行くか」

この後元々の目的をしっかりと達成。そして私はちゃっかりロックお兄ちゃんの部屋にお邪魔したのであった。

MUGEN商店街（後書き）

これでいいのかな？ まあチェンシロウ出したから満足満足。
ではキャラ紹介です。

チップ・ザナフ

出演：ギルティギア

ラーメン屋の店長。ラーメンは早く、安く、そして美味しい。本人は
速く、安く、そして紙。

たぬき

出演：MUGENオリジナル

ソルのペット。手癖が悪い。

チェンシロウ

出演：東方？ 北斗？ いいえ北東の拳です

橙とチェンシロウがネスツ製簡易ポタラで合体した姿。肉体は橙ベ
スなため、北斗神拳を慣れない肉体で使うため合体前より劣化して
いるとの噂も。

トラウマ克服（前書き）

七夜がロリコン脱却を目指すそうです。

トラウマ克服

俺はこれでいいんだろうか。いつまでも現実逃避をして幼女ばかり追うのが正しいのだろうか。いや駄目だ。いい加減トラウマ克服をしないとイケない。

「煉、俺は戦いに出る」

「何をボケかましてるのさ。今日は七夜の大好きなチーズオムレツを作ったよ」

「おっ、それは嬉しいな。って違う!! ボケでもない!! トラウマを克服するために根源を倒しに行くんだ!!」

「根源？」

そうだ。これは俺とあいつら以外には誰も知らない事なんだ。煉になら話してもいいだろう。

――

「とまあ、簡単に纏めるとガキの俺は強姦されたんだ」

「それは……」

あまりの事に言葉も出ないようだ。当然だ、こんな壮絶な経験を聞かされたらな。

「じゃあナイアさんも倒すの？」

「ああ、当然だろ」

「でもなあ……」

ピンポン

こんな時に客か。まあ客はこっちの事情を考えてくれるはずもないからしょうがない。

「出てくるね」

「頼む」

さて、あいつらをどう倒すか。ナイアはともかく、アナザーブラッドと間桐桜の力はよく知らん。せいぜい血と黒い泥を操るといふ事ぐらいしか。

「な、七夜あ」

「どつし、いきなりか」

煉が連れてきたのは件の三人。向こうから出向いてくるとは予想してなかったな。

「あーあ、出会っちまったか」

「いい殺気ですね。ソクソクします」

「本当にね。これだけでイッちやいそう」

「あんた達は黙りなさい。七夜、今回は別に襲いにきたわけじゃないわ」

「ならなんだ？」

「そのロリコンを治しにきたわ」

面白い事を言う。俺にトラウマを植え付け、ロリコンにした元凶共がロリコンを治すと？

「私なんて七夜好みの体型じゃないの？」

「ふざけるな。体型が少女でも心が腐っているだろう。俺が求めるのは穢れを知らない無垢でピュアな幼女だ」

「話に聞いていた以上に重症ですね。というか七夜君も腐ってません？」

「だからかもしれないわね。さあ七夜、この棺桶に入りなさい。しっかり治してあげる」

……虎穴に入らずんば虎子を得ず。罨であろうと全て殺す。念のため弾幕の用意はしよう。

「一つ、危険は？」

「七夜!？」

「大丈夫だ煉。戻ってくる」

「危険ならいいわ。死にもしないし怪我もしない」

「ならやってやる。そして俺が戻ってきた時にはお前らの終わりだ」

「楽しみにしているわ」

この気味の悪い棺桶に自分から入るのは初めてだな。さてはて、鬼が出るか蛇が出るか。

――

七夜入っちゃった。本当に大丈夫なのかな？ 心配だよ。

「大丈夫よお、煉ちゃん」

「僕は男です」

「あら、ごめんなさい」

この赤い人、分かってて言ってるよね。性格悪いなあ。

「煉君、今七夜君が何をしていると思いますか？」

「知らないよ」

「小さな女の子と遊んでるんですよ」

「えっ？」

ロリコンを治すためなのにどうして小さな女の子と遊ぶの？ それに、この黒い人が言うのと、なんだかいやらしく聞こえる。

「悔しいですか？ 大好きな七夜君が知らない女の子と楽しく遊んでいるのは」

「そんな事ない！！ それに僕と七夜は居候と家主の関係だ！！ 変な気持ちはない！！」

「そうでしょうか？ 世の中にはその手の趣味の人がいっぱいいますから」

「いい加減に「桜、そこまでしなさい」「ナイアさん……」」

「は〜い」

僕がランプを取り出して投げつけようとするとなイアさんが間に入った。ナイアさんが止めるなら落ち着こう。

「ナイアさん、本当に甘くなりましたね」

「甘いのはいいけど、甘すぎると損しちゃっわよ」

「私の自由よ。あら、もう終わったみたいね」

ナイアさんが棺桶を開けると、中からフラフラしながら七夜が出てきた。

「七夜！！ どうしたの？」

「あれが……あんたらのやりたかった事か？」

「怖かったでしょう？ さあ、お姉ちゃん達が愛して「ふざけるなよ？」「！！」」

なんだか、雰囲気が違う。いつもの七夜じゃない。

「認めない。あんなもの認めない。幼女はピュアなんだ。純粹だから俺を気持ち悪いと言つのもいる。嫌いと言つのもいる。当然落ち込むが、純粹な心だからこそ俺は許せる。だがあんな穢れだらけの見た目幼女の痴女軍団を真の幼女と認めるか！！」

何があったの！？ いつも以上に変態度が増してるよ！！

「あら、もしかしたら大変な事しちゃったかしら？」

「ここまで根深いなんて、私の悪アンリマム以上ですよ」

「今回は完全に私のミスよ。煉、逃げなさい」

「でも」

「斬刑に処す」

七夜を中心に魔法陣が浮かび上がって、七夜も宙に浮く。そして魔法陣からは大量の刃物が無差別に辺りを破壊し始めた。

「煉！ 棺桶に入ってなさい！！」

ナイアさんに首根っこ掴まれて棺桶に放り込まれる。外の音も聞こえない真つ黒な世界。だけど少しすると光が見えてそこから外に出た。

「……………」

言葉が出なかった。だってそこには瓦礫しかなかったから。

「煉……………」

「あ……………七夜……………」

「ハアハア！ なん、とか、収まったみたいね」

七夜は僕と同じで何があったか分かっていない顔をしていて、ナイ

アさんは服をボロボロにしながら大剣を支えに何とか立っていた。他の二人も倒れてはいるけど無事みたい。

「煉は守ってくれたか。感謝する」

「だったらロリコンを治しなさい」

「……………どうだか」

「まあ、期待せずに待ってるわ」

倒れている二人をナイアさんは抱えて隣にある自宅に帰っていった。被害はうちだけか。

「……………煉。俺、俺……………!!」

「落ち込んでるの？ 大丈夫。七夜には僕がいるよ」

「淫乱な幼女にもちよつと惹かれちゃった!!」

「死ね」

僕の爆炎が七夜を飲み込んで七夜は倒れた。ハア、家どうしよ。

トラウマ克服（後書き）

棺桶の中で何があったかはとてもじゃないけど書けません。ただ七夜のロリコンは治らなかつた。

今回新キャラは出てないけど、七夜の暴走について説明します。

七夜（葬式モード）

MUGENで正しくは葬志責。深い悲しみを背負った七夜の暴走状態。飛んでくる刃物は非常に危険。一瞬で大抵のものは消し去る。

作者が大好きな某ゴルゴの人の動画では圧倒的な印象を視聴者に植え付けた。

可愛い子鬼（前書き）

今回はカンフーが主人公だよ。いや主人公（笑）かな？

可愛い子鬼

今日は早起きをしたんで優雅な朝食だぜ。とはいっても普段食わないハムエッグを食ってるだけなんだがな。

「ご主人、お手紙ですニヤ」

「市さんか。相変わらずお堅い手紙だな。なにになに……………へえ」

「どんな内容でしたかニヤ？」

「要約すると、もうすぐ遊びに行きます、だとさ」

最初の頃は市さんの手紙はよく分かんなかったが、最近は解読も簡単になってきた。そのせいか古典の成績も上がった。

ピンポン

「フニヤ？」

「こんな早くから誰だ？」

「出てきますニヤ」

気になる。こんな早くから活動するなんて部活の朝練してる奴らぐらいだろう。まあ俺もたまにランニングとかしてるから一概には言えないか。

「ご主人……………なんだか無口な人が来ましたニヤ」

「無口……………なんでお前がいる」

そこには黒いワンピースを着た少女が一人。頭には小さな二本の角がある。

「……………めっ?」

「いや、怒りはしないから。とりあえず学校あるからアイルーとお留守番な。頼むぞ」

「了解しましたのニヤ」

どうして来たかは帰ってきてから聞く。

――

おかしいな。周りの視線が痛かったり微笑ましかったり、なんぞ?

「おはよう」

「おうカンフー、おはよ……………」

いつものメンバーに挨拶したら固まった。マジでどうした。

「カンフー」

「なんだ七夜」

「こちらの世界へようこそ。だが学校まで連れてくるとは俺への当てつけか？ 極彩に散らすぞ」

「お前ついに頭が……」

ギョツ

俺の後ろには胴着の裾をギョツと握り締める彼女がいた。

「お留守番してなさいって言ったよな!？」

「何か知らないけど、あんたその子と一緒に住んでるの？ ロリフーマン」

「誰がロリフーマンだ!! こいつはな」

「ほおっ、こいつは、なんだ？」

いつの間になっていたのか。物凄い殺気を出すコマチが後ろにいた。肉食獣が目の前にいるより怖いです。

プルルル プルルル

け、ケータイ？ この空気の中で出るのはあれかもしれないが、大

切な電話だといけないし。

「出る」

「は、はい」

コマチ様からお許しが出たから電話に出よう。

「もしもし?」

『もしもし。私ですよ』

「あ、市さん。どうしまし『浮気は嫌ですよ?』……………」

ブチッ プープー

こ、こええええええ!!?!? コマチが動物的恐怖としたら市さんからは霊的恐怖を感じたぞ!! 二つの恐怖で俺の寿命がストレスでマツハなんだが? てか市さん見てるの!?

「さあ、説明しろ」

「鎌を向けるな!! 別に変な関係じゃないから!!」

「でも流石に怪しく思うぞ」

「ロック、お前もか。ってか七夜は覚えてないのかよ!!」

「?」

「キョトンとすな！！ カルマだよ！！ 妹のカルマ！！」

「……い、妹！？」「……」

七夜まで驚くな。本気で忘れてたのだっいたらカルマが泣くぞ。

「似てないな」

「カンフーは落書きみたいな顔だもんね」

「誰が落書きだ」

俺だって頑張れば爽やかな感じになるんだぞ。イケメンになるんだぞ。

「カルマちゃんはカンフーに似てなくて可愛いな。ほらおいで」

ササッ

「あれ？」

「ロックは幼女の扱いがまだまだだな。おいで、俺が遊んであげよう」

ササッ

少しでも近づかれそうになるとカルマは俺の後ろに隠れた。

「カルマは照れ屋で引っ込み思案なんだ。許してくれ」

「それもまた良し!!」

「七夜は近づくな」

「カンフー、すまないな。まさか妹とは思わなかった」

「私も。ごめんね、ロリフォーマン」

「コマチは許すが博麗は全力で許さん」

「ただの冗談じゃない」

ただの冗談で人は傷つくんだぞ。七夜と同じ存在なんて俺は嫌だ。

「……にいちや」

「なんだ？ 手紙？」

カルマが手紙を出して渡してきた。それを広げるとみんなが寄ってきた。暑苦しい。

「えっと『脆弱なる我が息子カンフォーマンへ』。……親父か」

「なんか酷いお父さんだな」

「これが普通だ。じゃあ続き読むぞ。『俺は母さんの誕生日プレゼントとして母さんと一年間旅行に行く』。それじゃあ戻ってきたらまた母さんの誕生日じゃないか」

「ッッコミどころってそこかしらっ？」

「あたしにはカンフーの親の性格が分からんからなあ」

「『だが一年間もカルマを連れ回すのは問題だ。カルマにもちゃんと学校には通ってほしい。だからお前に任せる。手を出したら殺す。父より』。妹に手を出す兄がいるかよ」

「なら俺が」

「ナイア先生、お願いします!!」

「任せなさい」

「なっ!? いつの間に!?!」

「入りなさい」

七夜はナイア先生に捕まって棺桶に投げ入れられた。変態にはお帰り願わんとな。

「最後に何かあるな。『P・S・カルマは地元の中學に通わせるよ
うに』」

まあ当然だな。だけどカルマが上手く馴染めるかな? それだけが心配だ。

「カルマちゃんって中学生だったのか!?!」

「……………」

「ロック、カルマが怒ってるから謝れ」

「あ、ごめんな」

「ナイア先生、今日はここにいさせてもいいですか？」

「授業の邪魔になるなんて事はないでしょうからいいわよ。他の先生にも言っておくわ」

「良かったな。でももっついて来たら駄目だぞ」

「……うん」

仕方のない奴だな。今回だけは見逃そう。

可愛い子鬼（後書き）

まさかのカンフーマンの妹がカルマさんです。これではカルマちゃんですけどね。

ではキャラ紹介をしましょう。

カルマ

出演：MUGENオリジナル

無口で人見知りで引っ込み思案。でも能力はとてつもなく高い。角が生えて鬼っぽくなってるのは先祖帰りだとか。

夜遊びしよつよ（前書き）

18歳未満の深夜徘徊はいけませんよ。

夜遊びしようよ

放課後、突然七夜が夜の街に繰り出そうなんて言い出した。こいつは相変わらず馬鹿だ。

「俺ら高校だぞ。警察に補導されるっての」

「カルマちゃんも連れて来いよ」

「死ねえ!!」

「ぐほあ!?!」

七夜を殴り飛ばしてついでに踏みつける。カルマをなんだと思ってるんだ。

「放課後SMプレイ?」

「博麗!! お前は馬鹿か!?!」

「そうだ!! 男じゃなくて幼女ならバッチコイ!!」

「よし、死ね」

殴る。蹴る。そして投げ飛ばす!!

「うおおおお……」

ガラッ ふみっ

「ぐえっ」

「うおっ！？ 七夜、なんで入り口で寝てんだよ」

教室に入ってきたロックに七夜が踏まれた。ナイスタイミングだ。

「くそ……お前ら今晚絶対に商店街こいよ！！ こないとハブるか
らな！！」

間違いなくハブられるのはお前だがな。

――

結局来てしまった。律儀だよな、俺らも。

「なんだ、ちゃんと来たのか。このツンデレ共め」

「お前が犯罪をしないようにな」

「私は仕事よ。夜の街はどうにも霊的なものが多いし」

「一応俺も仕事な。街の防犯は大切だ」

博麗もロックもそういうのやってるんだな。意外だ。いや博麗は巫女だから当然か。

「しかしカンフー、ちゃんとカルマちゃんを連れてこい」

「はいはい、黙ってる」

しかし夜の街でやる事なんてないだろうに。幼女は夜にはいないぞ。

「やて……」

七夜が歩き出す。雰囲気もさっきまでのおちゃらけたものではない。

「どこへ行くんだ？」

「ちょっとな。ついてきてくれ」

まあいい。どうせ提案したのはあいつなんだから付き合っつてやろっつ。

――

七夜は小さな店に入っていく。そして店員を無視して席につく。

「あの、お客様」

「悪と血と混沌」

「……………」

店員に案内されて店の奥へ進む。七夜の目的が見えない。

「地下？」

「こんな所があるなんてね。賭博でもやってるのかしら？」

「待ってたわよお」

あの赤い女は！！

「てめえ、こんな所にいやがったか」

「えっ？ 何？ 知り合い？」

博麗はついてこれていないが、それはいい。問題は俺らを襲った女がいて、何故か七夜がその女のいる場所に來たって事だ。

「なんだお前。ロック達に手を出したのか？」

「私達は七夜一筋よ」

「俺は幼女一筋だ」

「七夜、説明して「なんで貴方達がいるの」ナイア先生！」

ナイア先生まで来るなんて、いよいよもって訳が分からなくなってきた。

「あら、七夜君とお友達が来るなんて聞いてませんが」

「私もよ、桜。大方アナブラの独断でしょう」

「いいじゃない。私だって考え無しじゃないのよお」

さつきから構えっぱなしだったが、ナイア先生も来たしひとまず落ち着こう。話を聞かない限りは始まらない。

「全員揃ったみたいだし、話してあげる。貴方達を理由は簡単。強くしてあ・げ・る」

「「「「お断りします」「」「」

「ああん、いけずう」

全員が一斉に断る。なんか怪しいからな。断りたくもなる。

「はあ、アナブラ。つまり私と桜はこの子達を強くする手伝いをさせられるのね」

「私は七夜君がいいです」

「ズルいわよ桜ちゃん」

「そうね。抜け駆けは無しよ」

これって七夜だけいねばいいんじゃない？ 俺らは俺らで勝手にやるから帰らせて。

「逃がしません」

「ちよっ！？ なんだ！？」

「何よこの泥！？ 悪霊よりも酷いわよ！！」

「逃げようとしたのカンフーだけだろ！？」

「せっかくだから七夜君ついでに鍛えてあげます」

なんだか知らないがこの桜って人も顔と名前に似合わず真っ黒です！！ 助けてカルマ！！

「で、こいつらを連れてきたんだ。まずは約束の物を」

「はい。相変わらず変態さんね」

「お前ほどじゃない」

どっちも変態だよこんちくしょうめ！！ ってかそのDVDはなんだよ！？

「さあ全員棺桶に入りなさい」

「マジですか？」

「比較的マジよ」

マジか、あの中ってどうなってんだろな。

――

黒だよ、真っ黒!! 七夜と違って初めてナイア先生の棺桶に入っ
たから分からない。

「よく来たわね」

「あ、ナイア先生」

「私はナイアじゃないわよ。ナイアだけどね」

「日本語でおk」

「私はナイアの分身。本体ほどお堅くないわ。おk？」

「おkおk」

これは分かりやすい。ナイア先生はこんな反応しないからな。

「ちなみにロックと霊夢のところに分身がいるわ」

「七夜は？」

「オリジナルがアナブラと桜と一緒に遊んでるんじゃないかしら？
感覚共有してるから喘ぐかもしれないけど許してね」

「了解しました」

つまりはそういう事だな。七夜乙。

「じゃ、やるわよ。まあ全員才能あるから死なないでしょ」

「死ぬ死なないの問題なの！？」

強くなるかならないかでしょ！？ これ修行だよ！？

――

パカッ ポイツ

「いてっ!？」

棺桶から放り出される。カンフーや博麗、七夜はまだか。なんかあんまり変わった気がしない。

ポイツ

「あたっ!？」

「博麗お帰り。お前も変わってないな」

「なんか私の場合変な可能性が中に沢山いるからほどほどらしいわ
可能性があるだけいいんじゃない？ 俺にはそれがあつたかどうかも
教えてもらえなかったしよ。」

ドゴッ

「ハアッ! ハアッ!！」

「「……激しかった?」「」

「黙れ!！」

七夜が棺桶を蹴り破って出てきて、その後からあの三人も出てきた。

「七夜、逃げすぎよ」

「そんなに私達が嫌なお？ 酷いわぁ」

「七夜君のためにいろいろ用意したのに」

「お前らの変態的な用意なんているかよー!!」

七夜が言うな。しかしカンフーは遅いな。

「ナイア先生、カンフーは？」

「ん……もうすぐかしら。彼が一番変わったわね。いろいろと」

変わったのか。あいつに抜かされるのは嫌だな。ダチとしては嬉しいんだが、ライバルとしてはな。

パカッ

「ただいま」

「……誰？」

「カンフーマンだよ」

ナイア先生以外が驚愕する。そこにいたのは爽やか系なイケメン。そつえば前回そんな事を言っていたような。本当だったのか。

「ナイア先生、ありがとうございます」

「それは元々貴方の中にあつた素質よ。自分でも気付いていたので

「しょうっ。」

「まあ、はい。でも自由には使えませんでしたし」

「なら手助けになって良かったわ。もう帰りなさい」

「」「はい」「」

「離せアナザーブラッド！！ 間桐桜！！」

「い・や」「」

「このまま溶け合いますよう」

もう七夜はほっといてもいいんじゃないかな？

――

帰り道。俺らの話題はカンフーだった。

「体格から変わったな」

「こんなに変わると逆に引かれるわよ」

「ペタペタ触るな」

「だって」

こんなに変わると変わってない場所を探そうと思うのが人間ってもんだろ。

「全くお前らはよ。そういえば七夜はDVD貰ってたよな。何なんだ？」

ああ、そんなのもあったな。大体の予想は出来るけどな。

「これが。これはな」

「君達！ こんな時間まで何をしている！！」

やべっ、オロミズ警察だ。逃げるか？ 待て、もっと確実な手がある。

「「「お巡りさん！！ こいつロリコンです！！」」」

「なんだとお！？」

「この裏切り者共め！！」

七夜は逃げ出し、警察はそれを追いかけた。俺らは無事帰宅。ありがとう七夜。裁判の傍聴はしてやるからな。

夜遊びしようよ（後書き）

おめでとう カンフーマンは しんかして ザ・カンフーマンに
なった

という事でこれからカンフーマンはザ・カンフーマンです。でもカ
ンフーマンって呼んでね。ザ・カンフーマンを知りたい人はググる
といいよ。今回はキャラ紹介がないけど組織紹介。そしてオマケを
少し。

オロミズ警察

全世界のオロミズ系が集まった地元密着型エリート（？）警察。強
いから弱いのも幅広い。

――

オマケ

あいつらめ。なんとか逃げ切ったからいいものの、捕まったらヤバ
かったぞ。

「ただいま、煉」

「お帰り、やつれてるね」

「ちよつと部屋で休む」

「うん」

せっかくだ、DVDを見よう。この『ロリロリハーレム』を本当に手に入れるとは、アナザーブラッドも侮れん。

「では……」

――

七夜は夜食食べるかな？ お味噌汁くらいは……

「れえええんー!!」

「わわっ!?! どうしたの!?!」

「ロリロリハーレムのDVDがあああ!! アナザーブラッドのストリップDVDになってるよおおお!!」

よく分からないけど騙されたんだね。全くもう。

「おーよしよし、七夜は本当に馬鹿だなあ」

「えっぐ」

「お味噌汁飲んで落ち着きましょうね」

「うう……」

こうやって普段から大人しかつたら本当にいいのに。本人は気付かないんだよな。勿体無い。

除霊バトル（前書き）

今回は霊夢メインになりもつした。

除霊バトル

………暇だわ。博麗神社がいくら微妙な立地にあるからってこんなに人がこないものかしら？ いつもなら除霊とかが来てもいいのに。霊つてのは夏のイメージがあるけど、それは涼しくなるためだもんね。

「すみません、博麗さんはいますか？」

「はいはい、どちら様？」

「除霊のお願いしたいんですけど」

「任せなさい。料金は霊にもよるけど最低5万円くらいね」

「高っ！！ 近くの霊媒師さんなんて1万円だったのに！！」

「なんですって？」

近くに霊媒師なんていたの？ なんて商売仇。これは懲らしめないといけないわね。

「そんであなたは どうしてうちに？」

「やっぱり歴史がある博麗の巫女の方がいいのかなと思って」

よく分かってるじゃない。除霊してあげたいけど、今は商売仇潰しが先よ。

「ちょっと出かけてくるわ」

「あの、除霊は」

「大丈夫よ。あんたに憑いてるの生き霊だから」

「大丈夫じゃないですよね!？」

「ここは博麗の陣地だつてのに割り込んでくるようなのには神罰よ。」

――

このテントね。ボロっちいくせに生意気な。

「ちょっと!?! 霊媒師はいるかしら!?!」

「……むっ、若き博麗の巫女か」

「なっ!?!? あんたサイキカル!?!」

そこにいたのはあのドームで滅茶苦茶やってくれた謎の男、サイキカル。

「成る程ね、納得したわ。あれだけの霊力が使えるなら霊媒師でもおかしくないって事ね」

「それが何か？」

「私の客を盗ってるからじゃない!?!」

「彼らは自身の意志で私を選んだ。君にとやかく言われる謂われはない」

「その態度が気に入らないわ。どっちが除霊が上手いか教えてあげるわ!?!」

この博麗霊夢の本気を見せてあげるわ!?!

――

とりあえずダルそうなサイキカルを連れ出して霊の居そうな場所を歩き回る。

「はいっ！」

「そこ」

むむっ、流石にやるわね。このままじゃ御札が足りなくなるわ。ここはデカい霊をぶっ潰して格の違いを見せつけないと。

オギヤー オギヤー

赤ん坊の泣き声？ 墓地よここ。こんな場所に赤ん坊を連れてくる親がいるかしら？ お墓参りなら分からなくもないけど。

「感じたか？」

「感じた？ ってああ」

泣き声ができる方からびっくりするくらいの霊気を感じる。それも悪霊の類だ。これは大物ね。

「行くわよ」

「いいだろう」

赤ん坊の泣き声ができる場所には確かに赤ん坊がいた。悪霊だけどね。

「赤ん坊の面するなんて生意気ね。消し去ってあげるわ！！ 霊符『夢想封印』！！」

色とりどりの霊弾が赤ん坊へと飛んで行く。しかしそれは当たる事なくかき消された。

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ

「こいつー!」

「待て」

私が更に強力なスペルカードを使おうとするとサイキカルに止められた。文句を言おうとするとさっきのキモイ笑い声とは違う奇妙な音がした。

ゴキゴキゴキ

「うわキモツ!」

赤ん坊の身体が折れたり曲がったり膨らんだりして3mはある巨人になった。見た目はガリガリの細い身体にボサボサな黒髪、そして能面のような顔。昨今の三流ホラーよりよっぽど怖いわ。

「そこ」

サイキカルが霊撃を叩き込むけど、多少ブレただけで効いていない。

「ふむ、流石は狂飢か」

「狂飢？」

「性悪説を信じていた親の赤子の霊だ。赤子は大概流産等で生まれてすぐ、もしくは生まれる前に死んでおり、親が性悪説を信じていたおかげで赤子も生まれてすぐには悪しか持っていない」

「赤子は悪だけしか持っていないから絶対に悪霊になるしかない。それも不純物の一切ない純粹悪」

「そのの寄せ集まりを古来より狂飢と呼ぶ。親の愛に飢え狂った悪霊。力は並の悪霊とは格が違う。……来るぞ」

狂飢とかいうのが巨大な腕を振ってくる。動きは単純、しかも遅い。まあ威力はあるでしょうけど避けるのは簡単。でも硬いのよね。

「払え！」

「神霊『夢想封印』!!」

サイキカルは動きは遅いけど強力な霊弾を一発。私はさっきの夢想封印の強化版を撃つ。

ドゴドゴドゴドゴッ バァン

「キイイイイイイイイ!!!!」

「流石に効いてるようね」

「だが終わりではない」

「そうね」

「カカカカッ……」

う、浮いた!? なんか体育座りみたいに丸まっている。まるで胎児

のようじ。

ドクン

「きゃあっ!?!」

「むうっ!?!」

心音が聞こえたと思ったたら私とサイキカルは吹き飛ばされた。今は霊力の波動!?!

ドクン ドクン

「つく!?!」

「甘い」

私はなんとか避けていたのにサイキカルの奴は以前のように地面に消えた。

「フフフフツ」

地面に紫の光点が出る。またあの技を使うようだ。そして光点は光柱となり狂飢を飲み込んだ。

「結局あんたが倒したわね」

「博麗の巫女。力を隠したな」

「何のことかしらね」

やばいやばい、まさかバレてたなんて。でもあの力は使用禁止なのよ。使ったら私が飲まれるかもしれないわ。

「負けちゃったし、もう帰るわ」

「では私も店をしまおう」

「なんでよ。勝ったからいいじゃない」

「あの場所に出したのは気まぐれだ」

そう言っただけでサイキカルは去っていった。気まぐれで、その気まぐれに私の商売は邪魔されたってどういうの？ はあ、帰ったらあの客の霊でも被ってあげますか。

除霊バトル（後書き）

狂飢はあんな書き方したけどMUGENではいろいろと人気だよ。霊夢の力が何かは皆さんのご想像にお任せします。ではキャラ紹介といきましょう。

狂飢

出演：MUGENオリジナル

とてもホラー。作中の設定は作者のオリジナル。特に書く事はないけど、とてもホラー。大事なことなので二度と言いました。

ネスツのかがくってすげー！！（前書き）

今回からちょっといつもとは違う方向へ。それと気が付いたら50
00アクセス突破しました。

ネスツのかがかくってすげー！！

今朝はクリザリッドさんに稽古をつけてもらっている。自分もナイア先生の修行で強くなったつもりだったが、この人はやっぱり強い。

「ここまでにしよう。カンフー君も学校があるだろ」

「クリザリッドさん、カン君、飲み物とタオルですよ」

「お二人共ありがとうございます」

「私も出勤前のいい運動になった」

「それにしてもカン君も強くなったわね。見た目も変わったし」

「そうですね」

謙遜はしないぞ。事実なんだから。だからって調子にも乗ってないけどな。

「クリザリッド」

「あ、校長」

「校長はやめよ。今のお前は我が校の生徒ではないのだ」

「はは、すみません」

こんな朝っぱらからイグニス社長がやってくるなんて。後ろには「ちやごちやオプションが付いてる車がある。」

「クリザリッドに実験してもらったが、仕事か」

「平日ですよ。当然です」

「では君、やりたまえ」

いきなり指名されてしまった。だが俺も学生なんだ。学校に行かないと。

「俺も学校が」

「学校になら伝えておこう」

「校ちよ、イグニスさん。流石に」

「では君か美鈴君がやるか？」

「「カンフー君（カン君）、頑張っ」

「裏切り者！！」

俺だって忙しいんだぞ。しかもネスツの実験ってなんだよ。人体実験とかじゃないだろうな。

「車の運転は可能か？」

「ATなら」

車に乗ってる時の交通ルールとかは知らないが、ATは親の運転を見ていて覚えた。動かすくらいなら簡単だ。

「よろしい。ならあの車に乗って全開で飛ばせ」

「はあ」

イグニス社長の後ろにあつた車に乗る。中もごちゃごちゃだ。本来は4〜5人は乗れそうだが、機械のおかげで運転席と助手席しか空いてない。

「渡し忘れていた。キーだ」

「どうも」

キーを差し込みエンジンを動かす。エンジンは問題なく動き始めた。

「あとはとにかく限界までスピードを出すのだ」

「限界までですか？」

「この寮から出なくともここは広い。直線で最高時速を出せる」

公道に出たら交通違反だもんな。流石にそれくらいは知ってるぞ。

「じゃあ行きます」

アクセルを思いっきり踏み込む。すると車はスピードをぐんぐんと上げていった。そして最高時速に達した時だった。

『タイムマシン起動』

「はい？」

俺は車ごと光に飲み込まれた。

――

「……………どっ？」

目を覚ますと寮の敷地とは違う場所にいた。変な機械的建物がいくつもある。……………現実逃避はやめよう。タイムマシンとか言っていたから多分ここは未来だ。

『起きたか？ カンフーマン』

「その声はイグニス社長。俺がいるのは未来なんですか？」

『察しがいいな。その通りだ。デリアンをモデルにタイムマシンを造ってみた。それと私はイグニスではなくイグニスボイスのA Iだ』

普通タイムマシンは造ってみたで出来ないだろ。それにこのAI、何故イグニス社長の声にした。

『そこが未来という証拠を探してみてください』

「探したら帰れます？」

『いや、エネルギー充電に3日はかかる。それまでは待て』

そんなにかかるのか。ならまずは食料確保だな。コインショップを探そう。過去の金なんて未来じゃ高値で売れるはず。

「行くか」

――

しばらく道歩く。景色は変わったが、道は変わっていないようだ。おっ、第一未来人発見。

「そこの人、ちょっといいですか？」

「俺？」

「!?!」

な、七夜？ いや、ここは未来だ。それに七夜は眼鏡はしてないし、緑の学ランも着ない。別人だ。

「どうした？」

「あ、その、この辺りにコインショップってありますか？」

「あるにはある。ただ教える前に試合でもしてもらおうか。なかなか強そうだし」

うわ、面倒なのを捕まえちゃった。今はそんな時間はないんだよ。

「なら別の人に聞きます」

「待てよ。分かった、試合はまた今度だ」

結局やるのかよ。まあ今じゃないだけいいか。

「じゃあ教えて下さい」

「ここを真っ直ぐ行って、突き当たりを左に曲がって、すぐに右に曲がるとある。目立たないから気をつける」

「ありがとうございます。えと」

「獅牙だ。敬語じゃなくてもいいぞ」

「分かった。ありがとう獅牙。俺はカンフーマンだ。じゃあな」

「おう、って連絡先!!」

悪いな獅牙。お前みたいのに関わるといい事ないんだ。ここはとんずらさせてもらっぜ。

――

この店だ。そんなに目立たない事はないと思うが、造りが古いからか？俺からすれば最新どころじゃないんだがな。

「すみません。ちょっと換金を」

「……なんで」

「ナイア、先生？」

「こっち来なさい」

何故か店にいたナイア先生に、店の奥まで連れて行かれて椅子に座

らされた。

「なんでカンフー君がいるのかしら？ 貴方が死んで何百年経った
と思ってるの？」

「どれだけです？」

「1000や2000ではないわ」

「どんだけ未来に来たんだ俺。ってかその間ナイア先生は生きてたの
か。そつちに驚きだ。」

「説明は？」

「話せば短くなりますが、ネスツ製の車型タイムマシンで来ました。
タイムマシンは今、寮のあった空き地にあります」

「ネスツ……あんな時からそんなものを。しかし生徒を巻き込むな
んて」

「3日はこつちにいないといけないそうです」

「そつ。ならつちで暮らさない。それくらいなら置いてあげる」

「ありがとうございます……！」

これで一気にいろいろな問題が解決した。ありがてえな。

「そついえば、七夜とか………やっぱいいです」

「賢明ね。未来の事なんか聞いてもどうしようもないものね。車は取って来てあげる」

「あ、これは聞きたいんですけど、どうしてナイア先生は生きてるんです?」

「乙女の秘密よ」

似合わねー。

ネスツのかがつてすげー！！（後書き）

さあ今回から未来編。未来でカンフーは何をするのか。ナイア先生もいるから安心だね。
ではキャラ紹介をしましょう。

獅牙

出演：MUGENオリジナル

七夜によく似た青年。過去にいた伝説のグラップラー、範馬勇次郎に憧れている。強者を見ると戦いたくなる困った人。

友達が出来ました(前書き)

未来でカンフーは何をするのか。

友達が出来ました

ナイア先生が車を取って来る間、俺は店番をしていた。まあ客が来ないから店のもんを掃除してたんだが、それで2つほど分かった事がある。

まず、未来でも諭吉さんは健在だ。流石諭吉さんです。そしてこの店はコインショップでなく骨董屋だ。獅牙め。

「ただいま」

「お帰りなさい。どうでした？」

「懐かしかったわ。タイヤがある車なんていつぶりかしら」

この時代の車にはタイヤがないのか。未来らしく空を飛ぶのだろうか。

「カンフー君、夕飯まで時間があるから外にでも行ってなさい。お金はあげるから」

「ありがとうございます」

せっかく未来に来たんだ。いろいろ見て回らないと損だよな。ただ自分の街とはいえ未来だからな。遠出すると迷子になりそう。

「自販機か。茶くらい買おう」

いろいろな種類の飲み物があるが、名前は違っても中身は俺が知るようなものが………

「どろり濃厚　く謎邪夢味く」

気になる。手を出したら危険な雰囲気はとてもあるが、気になってしょうがない。自販機なのにパツクなのも気になる。だが待てカンフーマン。せつかく未来に来たのにこんなところで冒険を終わらせてもいいのか？　否！！

「なに頭抱えてるのよ」

「はっ！？　ああ、ちよつとこの飲み物が」

後ろから来た赤髪の少女に話しかけられて意識を取り戻す。

「どろり濃厚シリーズの新作じゃない！！　貴方も好きなの？　まさかこんなところで仲間に会えるなんて。私はシルヴィ・ガーネット。貴方は？」

「カンフーマンです」

「カンフーマン、じゃあカン君ね。よろしく、カン君」

「はい」

なんだかこの雰囲気、飲まないといけないような状況になってきたぞ。どうする俺。

ピッ

「はい、奢ってあげるわ」

「ははは、ありがとう、シルヴィ」

全く有り難くねえよ!! 断れよ!! 俺の馬鹿!!

――

結局飲むのか。パックに押し込んで下さいって注意書きがあるが、普通は逆だろ。……………覚悟を決めるか。

「!?!」

す、吸えない!?! 確かに押す必要があるそうだ。

「!?!?!?!」

な、なんだこの味は!?! 甘ったるさの中に変な酸味? いや苦味? いやいや言葉で表現出来ない風味が口を蹂躪する。シルヴィは大丈夫なのか!?!

「ほおおおお……………」

トリップしてらっしゃる！？ もつ……駄目………

――

この刺激的な味、癖になりそう。

「見つけたッスー!!」

「プリニー？」

「シルヴィ様！ お家に帰るッスよ!!」

「嫌よ。またパパがお見合い相手を用意してるんでしょ？ どろり濃厚の新作をぶちまけるわよ」

「それはやめてほしいッスー!! テロッスー!!」

こんなに美味しいのにテロとは何事よ。プリニーには味覚がないのかしらね。

「しょうがないッス。用心棒さん、お願いするッスー!!」

用心棒って神竜！？ そんな幻獣どつから連れてきたのよ！！ 私なんてタイダルウェイブで一撃じゃない！！

「カン君逃げる「最高にハイってやつだああああああ！！！！！！」
「えっ？」

「フツ！！」

ズドン

「「えっ？」」

カン君が蹴りをしたら神竜が消し飛んだ。距離もあるのに一体何をしたのか分からない。

「うっ……………俺は？」

「カン君、何をしたの？」

「悪い。覚えてない」

どろり濃厚のせいかな？ 今回の味はかなり刺激的だったし。

「何をしておるか」

「Mr・師範！！ 邪魔が入ってしまったッス！！」

今度はあいつ？ どこまでパパはお見合いをさせたいのよ。

「うえっ！！？」

「カン君どうかした？」

「いや、なんでも。とにかく倒そう」

「拙を倒すというか。この戯けめ。うおおおおおおお！……！」

なんか沢山の大小の男がぐるぐる回りながら飛んできた。これは防がないと。

「くっ、なんて邪魔な」

「それ以上に煩いな」

「いくッス！！」

更にプリニーまで攻めてきた。ってあの男何か光を溜めている。

「プリニー……！ 避けるのだぞ……！」

「分かってるッス……！」

どういう攻撃が来るか分からないけど、プリニーにも当たる攻撃なのよね。

「流影陣……！」

なんか溜めてた光を撃ってきた。かなりの力を感じる。当たれば痛いじゃすまなそう。動きは遅いし、飛んでくる男も無くなったから

避けるのは簡単ね。

「おいペンギン!!」

「ペンギンじゃないツス!!」

「鉄山靠!!」

「ぎゃあっ!!?」

カン君がプリニーを光の方へぶっ飛ばした。

「むっ!? く、来るな!!」

「無理ツス!!!」

カッ

「ぬああああああああ!!!!?」

「酷いツス!!!?」

プリニーが光に当たると光は爆発して、男もプリニーも光に巻き込まれた。あれって自爆技なのね。

「もっと連携を磨くんだな」

「やるじゃないカン君」

「大した事ないさ。さて、行くか」

「行くって？」

「別に行き先は決まってないな。この街に来たのは初めてだし」

「なら案内してあげるわ」

カン君といたらいろいろ面白そうだしね。楽しませてもらうわよ。

友達が出来ました（後書き）

出す気がなかったキャラがどんどん出てくる。これはどういう事だ？
ではキャラ紹介です。

シルヴィ・ガーネット

出演：AKOF、MUGENオリジナル
甘党でどろり濃厚が大好きなお嬢様、らしい。手から糖分で出来た
ブレードを出して戦う。

プリニー

出演：魔界戦記デイスガイア
ペンギンみたいな生物。魔界から来たらしいが、今はガーネット家
でシルヴィのお世話をしている。爆発する。

神竜

出演：FF
竜。タイダルウェイブという技で敵を一掃する。しかしかませ。

Mr. 師範

出演：MUGENオリジナル
不破刃によく似たすごい漢。流影陣という名のエーテルなど、多彩
な自爆技を所持する。敵を一撃で倒す完全オリジナル技があるらし
い。

ちなみに今回のカンフーマンについて。

カンフーマン（神殺し）

MUGENでは通称名前の長いカンフーマンとして活躍。一発の蹴

りで無量大数を超えるダメージを叩き込む。

未来観光（前書き）

いろいろなキャラが増えてきます。

未来観光

シルヴィに引つ張られて街を進む。やっぱり過去とは景色が違う。家は機械的で、車はガソリンではなく電気で動き、空を飛ぶ。

「そんなキョロキョロしてたら田舎者みたいよ」

「田舎者だし」

過去なんてこの時代からしたら田舎ってレベルじゃないんだろうな。

「あらシルヴィさん」

「霊夢じゃない」

レイム？ もしかして博麗か？ いや未来だぞ。

「そちらの方は？」

「カン君よ」

「カンフーマンです」

見た目は白い博麗だ。ただバカ丁寧で薄ら寒い。

「初めまして、私白麗霊夢と申します。色の白に麗しいの麗、お化けの霊に夢と書きます」

「これは」丁寧」

漢字が違うのを考えると分家とかいうのだろうか。靈姫さんも分家だし。ただ博麗に本当に似てるな。

「いつものメンバーはいないの？」

「獅牙君やゲイル君、ガールちゃんですか？ そんないつも一緒にいるわけでは」

「貴様！ カンフーマン！！ ようやく見つけたぞ！！」

「獅牙、人に突っかかるのは止めた方がいい」

「さっそく獅牙とゲイルが来たじゃない」

「あらら？」

また面倒な敵（獅牙）に見つかっちゃった。しかしゲイルってのはどことなくロックに似てるな。

「あ、みんな！ 何してるの？」

「ガールも来たわよ」

「あらら？」

また来た。今度は俺の服装にどことなく似てる女だな。って待てよ。この面子を並べると……

「ちょっと並んで」

「……はい？」

「いいから、少しだけ、な」

いきなりの事に戸惑っていたが、とりあえず並んでくれた。うん、これ俺らだ。いつも学校とかで集まるメンバーだ。俺の立ち位置に女がいるのがあれだが。

「さてカンフーマン、気が済んだなら勝負だ!!」

「ダブルシュート」

「ぐおっ!? 何するゲイル!!」

「カンフーマンに迷惑だろう」

「元はといえば……」

獅牙が反論しようとするすると全員が獅牙を睨んだ。普段から喧嘩を売ってるんだな。全員のこの反応を見れば分かる。

「今カン君は観光に来てるんだから邪魔しない」

「観光ですか。楽しそうですね」

「良ければ俺らも案内しよう。この馬鹿が喧嘩を売ったお詫びだ」

「誰が馬鹿だ」

「あんだよ、獅牙。その性格と趣味治したら？」

獅牙にも変な趣味があるのか。七夜みたいにロリコンだったりして。

「さあ行くわよ！！」

「」「おー！！」「」

「……おー」

「獅牙、暇があれば試合くらいなら」

「獅牙を甘やかしたら駄目よ、カン君」

不憫な奴。周りから見たら七夜もこうなのかな？ だとしたら帰ったら優しくしてやろう。

――

「カンフーマンさんは学生ですか？」

「まあ一応」

「結構強そうだな。獅牙が戦いたくなるのも頷ける」

「そんな事ないって」

シルヴィを先頭に雑談をしながら歩いてきた。するとピタリとシルヴィが足を止めた。

「ここがこの辺りでは一番の学校。私達が通う夢弦高校よ!!」

「へえ」

校舎も、門も、校庭も、何もかも変わったな。流石に残っている物を探す方が難しいだろう。

「……………あれは」

「どっかした？」

「あの、木」

校庭の端っこ。そこに生える一本の大きな木。

「あれね。立派でしょ。あの木は昔、本当に昔の卒業生が植えたものらしいの。先生や生徒達が代々世話をしてるうちのシンボルツリーなんだから」

「ちなみに柿の木だから毎年秋には沢山の実が採れるぞ」

「美味しいんだよね、あの柿」

懐かしい、つてほどでもないか。俺が一年の頃の三年生が植えていた柿があんなにデカくなるんだな。ちよつと感動。俺も何か後世に残るものを作ってみたいな。

「あの木で思い出したけど、あの木が植えられた前後に校舎が破壊されたつて噂があるんだよ」

「ああ、伝説の4人の話か。俺らもそういうのには成りたくないな」とんでもない4人もいたもんだな。もしかして俺の学年にいたりしてな。

「次は」

「俺がオススメする場所に案内してやる」

「獅牙君のですか。カンフーマンさんは満足されるでしょうか？」

「とりあえず行ってみるよ。やらない事には何も始まらない」

「良い事言っね。じゃあ行っててみよう」

――
獅牙の案内で来た場所はどう見ても危ないお店だった。こいつもまた変態か。

「どうだ!?!」

「何がどうだ、よ!!　カンフーブラックホール!!」

「ぐああああああ!!?!」

おいガール。なんでもかんでもカンフーって付けたらカンフーになるわけじゃないぞ。カンフーはブラックホールなんか作らない。

「この変態め」

「悪いなカンフーマン。この近くに俺のオススメのスポットがあるから行こう」

「そうだな。ゲイルに任せよう」

「はううゝ／＼／＼」

「霊夢!?　大丈夫!?!」

「このお店の前に立っただけで真っ赤になるなんて、霊夢ちゃんはムツツリだなあ」

こういう純粹なタイプも初めてだよな。都古ちゃんはロックには純

粹にしているように見えてガツツリスケベだからな。お兄さんの眼は誤魔化せないぞ。

「お前ら、遊んでないで行くぞ」

「そうですね！！早く行きましょう！！」

「まあ目の前なんだがな」

「ふえええ！？」

確かにあの店から目と鼻の先だな。屋台のようだが、店員がいないぞ。

「おやっさん、いないのか？」

「呼んだかゲイル」

うわっ！？ いつの間に後ろにいたんだ！？ こんな筋骨隆々とした金髪の人がいたのに気付かないなんて。なんか電気みたいのがバチバチしてるし。

「紹介するよ。ラーメン屋台のブローリーのおやっさん」

「お前達、よく覚えておけ」

「おやっさん、ラーメン5人前頼むよ」

「そこで倒れているのはいいのか？」

「あれは消毒すべき汚物だから」

「そうか。スローイングブラスター!!!」

デデーン

どこかで聞いたような効果音と共に獅牙は吹き飛んだ。あれ生きてるよな。流石に目の前で死なれると気分が悪い。

「そんな心配しなくても獅牙ならギャグ補正で生きるよ」

「とても納得した」

ギャグ補正なら誰も死なないな。心臓が止まるうとも、身体がバラけようとも死なない。ギャグ補正は偉大だ。

――

もう暗くなってきたんで別れたが、面白い奴らだった。

「カンフー君」

「ナイア先生、買い物ですか？」

「ええ」

「荷物持ちますよ」

「ありがとう」

ナイア先生の荷物を持って店へ帰る。そんな時、ナイア先生がふとこんな事を言った。

「あんまり人と親しくならない方がいいわ。よく言われる事だけど、別れる時に辛くなるわよ」

「そうですね」

「その様子だと遅かったみたいね」

この先会えなくなるのは確実。親しくなって別れが悲しくなるなんてのは分かってたのにな。

「貴方の性格じゃあ無理なのは分かっているけど気をつけなさい」

「了解です」

しかし無理って断言するなんて、俺の性格はどんなだよ。

未来観光（後書き）

未来でもあのメンバーは健在なのです。
ではキャラ紹介をしましょう。

白麗霊夢

出演：MUGENオリジナル
白い霊夢。本気になるとにかく凄い。エロい事への耐性が全くない。

ゲイル

出演：MUGENオリジナル
ロククっぽい人。常識人。それでも周りに流されず自分の思うように生きる。

ガール

出演：MUGENオリジナル
カンフーガール。でもカンフーなんて使わない。カンフーと言う名の変な技を使う。

ブローリー

出演：ドラゴンボール
屋台のおやっさん。激しいツッコミが特徴。

異形がなんぞや(前書き)

白麗霊夢とハクレイム、博麗トキを混同してる人がいるので簡単な説明。

白麗霊夢…神キャラ、四大霊夢、ふつくしい

ハクレイム・博麗トキ…ナギツ、スマイルビーム、世紀末

異形がなんぞや

未来での初睡眠と初起床は別に変りありませんでした。当然なんだけどな。強いて言うなら枕が違ってから寝にくかったって事だな。修学旅行ではマイ枕を持って行く事にしよう。

「起きた？　ならさっさと朝食を食べなさい。話があるから」

「分かりました」

まだ5時だよな。そんな時間から話って、あんまりいい予感はないな。

「はい、パンとコーンスープ」

「トーストしてないんですね」

「コーンスープに浸すなら生でしょう」

焼いたあの食感が好きなのに、ナイア先生は生派なのか。これくらい自由にさせてくれよ。

「話だけど」

「早いですね」

「早い方がいいでしょう。話というのは昨晚から出たっていう怪物の調査よ」

どうして俺がそんな事をしなくちゃいけないんだ。居候って辛い。

「怪物ってなんですか？ こないだ神竜とかいうのは見ましたよ」

「情報は少ないけど人型みたいだね。ただ暗闇に光る目は一つだったとか。それと被害者は泥まみれだそうよ」

となるとその怪物ってのは泥を操る隻眼の人間なのかな？ 何にしろ情報が少ない。

「これって依頼か何かで？」

「そうね。八雲紫からよ。社員が被害者みたいだから」

「生きてるんですね」

「妖怪ババアですもの」

そうだった。霊姫さんから聞いてたが、あの人は妖怪だったな。霊姫さんと同級生だからそういうイメージがなかった。

「貴方は暇でしょう。街を隅々まで探しなさい」

「了解です。地図下さい」

「分かってるわよ」

ナイア先生から地図を受け取る。もちろん紙ではなく地図が映っているタッチパネル式タブレットだ。

「行ってきます」

「私と八雲紫も探してるから、見つけたら連絡するわ。もちろんそ
つちもね」

「分かってますって」

――

相手は人型。普通に街中を歩かれたら分からないだろう。隻眼つて
のも決定的な証拠にはならない。しかし気になるのは怪物という言
葉だ。泥を使う力が怪物という事なのか？

「その男」

「……………」

「黙って立ち去ろうとするな!!」

「俺？」

「そうよ。あんた以外いないでしょう」

本当だ。考え込んで気付かなかった。だけどこの少女はどうして俺を呼び止めたんだ？

「占ってあげるから椅子に座りなさい」

「金が勿体ないから」

「金なんていらないわ。あんたを占つと面白そうなもの。さ、座りなさい」

タダならやってみるか。占いは基本的に信じないタイプだけど。

「私はフィサリス。あんたは？」

「カンフーマン」

「！へえ……」

占い師、フィサリスは何か驚いたような顔をしたけど、すぐに水晶に向き合い始めた。

「あんた、死ぬわよ」

「えっ!?!」

「嘘」

嘘でも簡単にそういう事言っつなよ。

「とりあえず、並々ならぬ苦労があんたを襲うわ。ただあんた自身はそうは考えないでしょうね。大した根性よ」

「普段が普段だから」

あいつらのダチをやってるだけで苦労だよ。でも一番苦労掛けるのはロックなんだろうな。

「それとこの先運命的な出会いがあるかも。これは当たる確率が低そうね。でも何か出会いがあるのは確かよ」

「ふーん」

出会いか。人間って常に出会いと別れがあるし、これって適当じゃね？

「ラッキーアイテムは、ないわ」

「ないのかよ」

「あんたがラッキーになれるアイテムはこの先もないわ」

そこまで断言しなくてもいいだろうに。つまり俺は幸せになれないというのか。

「まあいい気分転換にはなったよ」

「そう。こんなペテン師の言葉はその程度に考えておくのが一番よ」

「ペテン師？」

ドブン

何の事が聞こえたと思ったらあいつは地面に沈んでいった。ペテン師って、あれ全部嘘だったのか？

――

カンフーマンがフィサリスの事を考えながら歩いているとあるものを見つけた。足跡だ。乾いたアスファルトの地面にある湿った泥の足跡。

「……連絡するか」

カンフーマンは地図の映るタブレットを通話モードに切り替えナイアに電話をした。

『何か見つけたのかしら？』

「周りに泥がない場所で泥の足跡を」

『怪しいわね。八雲紫にはこっちから連絡するわ。場所は、その夕

ブレットの位置端末を使えば分かるから別に聞かなくていいわね』

「では足跡を追ってみます」

『気をつけなさい。私の生徒だから大丈夫だと思うけど』

カンフーマンは通話を切り、足跡を追いかける。足跡はしばらく進んだ先の廃ビルの中に続いていた。カンフーマンはそれを見上げた後に中に入る。

「暗いな。電気点くかな？」

カンフーマンが電灯のスイッチを探して歩いていると、何かグチャツとしたものを踏んだ。

Bannon

「!？」

突如カンフーマンが踏んだものが爆発をした。カンフーマンは咄嗟に後ろへ跳んで無事ではあった。

「地雷！？ しかもこれは、泥！？」

「……誰」

カンフーマンが入ろうとした部屋から聞こえてきたのは女の声だった。

「お前こそ誰だ？ さっきのもお前の仕業か？」

「……クス」

女は何も答えずに攻撃を始めた。泥で出来た巨大な爪や手足による中距離攻撃。しかし地雷とは違いあらかじめ構えていたカンフーマンはそれを避け、近くにあった廃材の板を投げつけた。

「そんな板で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ねえ！！」

しかし女には当たらなかったようで

「やっぱり今回も駄目だったよ。あいつは話を聞かないからな」

「くっ、一番いい板を頼む」

この2人、ノリノリである。

そういつまでもボケてはられないのか、カンフーマンが飛び出した。

「コレデヨイ……」

女はカンフーマンが来る前に地面に何かをしたようだが、暗くて何かは分からなかった。そのまま突撃するカンフーマンは、またあの泥を踏んだ。

「カンフーに同じ技は二度通用しない！！」

バァン

カンフーマンは泥の地雷が爆発するよりも早く女の方へと駆け抜けた。

「アッパーーーーー！！！！」

「ひでぶっ！？」

懐に入り込んだカンフーマンのアッパーが女の顎に決まり、女は倒れた。更にカンフーマンは手足を抑えるために覆い被さった。そこでカンフーマンは気が付いた。女は自分が予想していたような隻眼ではなく、一つ目小僧のような単眼という事に。

――

一つ目とは、これが怪物と言われた理由か。

「見ないでよお／＼／＼」

「でも逃がす訳にはいかないからな」

「……怖くない？ 化け物だよ？」

「別に」

怖さならコマチや市さんの方が怖いし、化け物とかいうならナナエマンの爺ちゃんなんて棒だぞ。それに比べたら一つ目なんてな。

パッ

「うおっまぶしっ」「」

突然光を向けられたのでついネタを言ってしまった。しかしこいつもさつきから結構ネタを出すよな。

「カンフー君、久しぶりね」

「紫社長、お久しぶりです」

「お盛んね」

「あっ、いやこれは！！ 違うよな、な！！」

「ポッ／／／／」

「否定しろ！！」

なんなんだよこいつ。さつきまでのお淑やかさはどこへ消えた。

「ふふっ、一旦ナイアの家に行きましょう。話はそこでね」

「はい」

「それとカンフー君」

「なんですか？」

「浮気は駄目よ」

浮気って……

――

ナイア先生の家で女からいろいろと話を聞いた。まず名前はモノ・フリークスという事。改造人間という事。

「改造人間、いい響きはしないな」

「でも勘違いしては駄目よカンフー君。過去から来た貴方にとっては聞こえが悪いかもしれないけど、立派に医療に役立つ技術よ。ただこんな非人道的なのは初めて見たけど」

「ごめんなさいねモノちゃん。うちの社員にはキツク言っておくわ」

「大丈夫」

社員にもあんまり非はないと思うんだけどな。

「それじゃあモノはこれからどうしたい？」

「カンフーと一緒にいる」

「なぬっ!？」

俺は過去に帰るんだぞ。なのに俺と一緒にとは何事か。モノは知らないからしょうがないんだが、二人になんとかしてもらおう。

「いいんじゃない？」

「そうよね」

「良くない!!」

この二人は頼りにならない。ここは直接説得するしかない。

「ならモノ」

「嫌だ」

「まだ何も言っていないよな!？」

「絶対に嫌」

……………諦めんからな。

異形がなんぞや（後書き）

モノ・シルヴィがヒロインと思ったかい？ 私だよ！！」

今回未来編のヒロインとなるモノ・フリークスの登場です。ヒロインの理由？ 趣味ですが何か？
では彼女の紹介です。

モノ・フリークス

出演：AKOF、MUGENオリジナル

単眼黒髪の少女。改造人間。泥を使う能力を持つ。豊富なネタを戦闘中だろつと使う。素顔を見られると顔を真っ赤にする。カワイイ！

学校潜入（前書き）

前回フィサリスの紹介を忘れてたんでここで。

フィサリス

出演：MUGENオリジナル

自称占い師兼ペテン師。突然現れては適当に占う。収入はもっと別の仕事で手に入れているらしい。

学校潜入

前回、とにかくいろいろあったような感じがしたけど、まだ午前中なんだよな。濃い午前だった。

「カンフー君、学校に行ってみなさい」

「どうしてです？」

「暇でしょう」

いや、確かに予定はないんだが。だからって未来の学校へ行く義理はないというか。

「面白いものがあるわよ」

「うーん」

「いいじゃん。私と行」

「一緒に来る気が。モノは顔を隠すものがないと」

「八雲紫からモノ用バイザーを貰ったわよ」

いつの間にそんなものを。普通に考えればモノの目を隠すくらい大きなバイザーなんてダサいんだろうが、そんな事もなくよく出来ている。

「どう、似合っ？」

「よく似合うよ」

「いゃん／＼／＼」

何がいやんだ。恥ずかしがるなら聞くなよ。しかし行かなきゃ駄目かな？ 駄目だよな。

「行ってきます」

「待ちなさい」

「なんですか」

「モノの身支度しないといけないでしょう。女の準備は時間がかかるのだから」

「へいへい」

母さんも出掛ける時には化粧とかで時間掛かってたからな。それくらいは待ってやるか。

――

モノと一緒に学校へ向かっているのだが、ジロジロと見られる。やっぱりモノのバイザーは目立つのだろうか。

「みんなの視線を独り占めなんて、私って罪作りなお・ん・な」

「そーですね」

こいつは素顔が見えないと本当に調子に乗るよな。バイザー無しで街に放り出してやるうか。……………それは可哀想だな。

「あれじゃない？」

「あれだぞ。ただ入るのは裏からだけだな」

「こちらモノ。これよりミッションを開始する。どうぞ」

「了解。十分に注意せよ。ってこら」

ポカッ

「あたっ」

「遊んでないで行くぞ」

勝手に入るのは忍びないが、あれだ、俺はOBだから問題ない！！

――
校内は過去とは全く違うと思ったら、意外と教室の場所とか職員室の場所とかは変わっていないようだ。

「見つからないね。カンフーって隠密性能高い？」

「地味と言いたいのか？ 今授業中だからだろ」

目的なく歩いているように思えるが、実はナイア先生から手紙を貰っている。教頭先生に渡せばいいらしいけど、教頭先生ってきつと

……

「カンフー、教頭室だよ」

「おう」

コンコン

「どちら様です？」

聞こえてくるのは安心のあの声。

「カンフーマンです」

「カンフーマン君？ 何故生きて」

「その話は入ってからでも？」

「そうですね。どうぞ」

教頭室に入ると神々しい光が見えた。

「うおっまぶしっ」

「二度ネタはつまらんど。お久しぶり、というべきでしょうか、マ
ハヴィロ教頭先生」

「お久しぶりです」

――

教頭先生に俺の事情を話すと納得してもらえ、ナイア先生から貰った手紙を渡した。

「……成る程、モノさんでしたね」

「はい」

「貴方について分かりそうな人を知っています。呼びますから待って下さい」

ナイア先生の手紙になんて書いてあったかは知らないが、モノについてだったようだ。そして心当たりがある教頭先生は流石だ。

「こんにちは、マハヴィロです。……………ネスツの技術関連でしてはい」

教頭先生が電話をしているのだが、ネスツ？ そういえばモノは改造人間。そんな事が出来そうなのはネスツぐらいか。

「では」

ピッ

「すぐに来るそうです」

「来ましたよ」

「「はやっ!」「」

瞬間移動してきたのか何か知らないが、黒い服の少女がやってきた。

「彼女はイグニス・スカーレット。カンフーマン君を未来に送ったイグニス君の子孫です」

「我が先祖が迷惑を掛けた。謝罪しよう」

「いえ、それより」

「うむ。一目見れば分かる。モノとやらはクーラのクローンの改造人間だ」

クーラ？ クローン？ なんだか壮大な話になってきたぞ。

「まずはクーラについて説明しよう。クーラはネスツの最初にして最後の改造人間だ。クーラはまだ胎児の時に母親が死に、そのままではクーラまで死んでしまいそうなのをクーラの父親に頼まれ、改造人間として生き延びさせた人間だ。漫画、ブラックジャックのピノコみたいなものと考えてくれ」

「生き残らせる手段が改造だったと」

「ああ。もちろん倫理的に批判もあったが、それを無視して我らネスツはクーラを生き残らせた。その成果からか改造人間は医療技術として認められたのだが、我らも倫理を考えない訳ではない。これを特例とし、改造人間技術は封印した」

だからクーラは最初で最後の改造人間って事か。ならどうしてモノは改造人間としてそこにいる。

「数年前にこの技術を持ってネスツから消えた人間がいる」

「じゃあそいつが」

「可能性は高い。奴はクローン技術も得意分野としていた。確か名

は、ザトー」

ザトー。そいつがモノを勝手に創って改造人間にした奴か。

「ただ不自然なのはザトーは倫理的に非常に優れた人間であった。改造人間やクローン技術に手を出したのもそれらが悪用されないようにするためであったのに」

「段々それに魅入られたとかじゃないの？ それで私を創ったとか」

「可能性としては無きにしても非ず、なのだがな」

イグニスちゃんは残念そうな顔をして言う。それだけ信用に足る人物だったのか。

「ありがとうございます。いろいろ分かりました」

「あんがとね、イグニスちゃん」

「私は25だ!!」

「マジ?」

「マジだ!!」

これで25。あ、イグニス社長も50超えてたっけ。

「なんだロリババアか」

「ババアじゃない!!」

「なあに、聞こえんなあ」

「う、うー!!」

モノ、あんまり苛めるなよ。

――

校内から外に行くまでは先生を付き添わせるといふ事で教頭先生がある先生を呼んでくれた。

「まさかスペランカー先生まで生きてるなんて」

「驚いたのはこっちだよ」

「ちっちゃい先生」

「はっはっは」

スペランカー先生曰く、残機がある限り生きていけるらしい。マジパネエッス。

「ではさようなら。過去の私によるしく」

「分かりました」

「じゃあね」

学校からの帰り道。なんかさっきのイグニスちゃ……イグニスさんの話を考えるとモノに何を話せばいいか。ここははっきり聞いてみよう。

「モノ」

「ん？」

「もしザトーってのを見つけたらどうする？」

「そんな事よりおうどん食べたい」

「……………なら今日はぶっかけうどんだ」

「やーらしー」

「お前の思考がな」

悩んだ俺が馬鹿だったか。それとも照れ隠しか。まあ今晚はナイア先生に頼んでぶっかけうどん決定だな。

学校潜入（後書き）

なんかややこしい事になってますが、なに、気にすることはない川（ー、、）
ではキャラ紹介です。

イグニス・スカーレット

出演：東方＋KOF、MUGENオリジナル

イグニスっぽいレミリア。もしくはレミリアっぽいイグニス。普段はカリスマ。弄られるとかりちゅま。うー

クローン軍団（前書き）

シリアル、なのかな？

クローン軍団

習慣というものはどうにも抜けない。朝からランニングをして走っている。と獅牙に会った。

「ようカンフー」

「よう獅牙。お前もランニングか？」

「いや、お前を探してた」

「俺を？」

「お前、昨日学校に来てたらしいな。しかも女の子連れて」

うわっ、見られてたのか。なんて言うかな。適当な言い訳じゃあ聞いてすらくれなさそうだし。

「そんなの誰から聞いたんだ？」

「ゲイルが見たんだよ」

くそ、知り合いじゃないのが見たなら勘違いとかで済まそうと思っただのに。

「みんな気になってんだからな。ちゃんと話してもらおうぞ」

……どうしようか。

――

獅牙に連れられて残り4人が待つ場所へとやってきた。全員がなんか言いたそうな顔をしてる。

「何か聞きたい事は？」

「じゃあ、俺からいいか？」

「ならゲイル」

「あれは彼女か？」

「ちやうわ!!」

つい関西弁でツッコこんでしまったが、仕方ないよな。あいつは彼女でもなんでもないってのに。

「ならどうして彼女でもない人とどうして学校に来てるのよ」

「そもそも学校に来る理由が分からないですよね」

「シルヴィと白麗の疑問にも答えよう。ナイアさんに頼まれたから

だ

「ナイアさんだと!? お前、ナイアさんとそんな仲だったのか!」

そんな仲ってどんな仲だよ。全く獅牙の奴何をそんなに興奮してるんだ? ……待て、七夜がロリコンだから、もしかしたらこいつは……

「獅牙はお姉さん好きなんだよ」

七夜とは逆な変態かよ。もうこいつもどうしてくれようか。

「何を頼まれたかは教えてくれないの?」

「悪いなガール。そればかりは」

「いいわよ。教えたって」

「ナイア先せ……さん」

「ナイアさん! 俺といい事」

「消えなさい」

ドガッ

「あべばー!?!」

ナイア先生の棺桶にぶっ飛ばされる獅牙を見てホッとした俺がいる。

人物は違ってもやってる事が同じだからだろうな。

「それで、どうしてこいつらまで？」

「貴方には時間がないじゃない。それに相手は1人じゃないのよ」

「！ その言い方だと、まさか」

「ザトーを見つけたわ」

早いな。多分紫社長やイグニスちゃんの協力もあつたんだろうが。とにかくこれで気に入らないのをぶん殴れる。

「すみません、説明をお願い出来ますか？」

「いいわ。ただ聞いたら協力してもらおうわよ」

全員、いや気絶している獅牙以外が頷くとナイア先生は話を始めた。

――

「改造人間……」

「封印された技術なのに使うのがあるなんて。カン君もとんでもない事に巻き込まれてるわね」

「まあ、な」

「そんな奴許せねえな」

「獅牙起きたんだ。あ、私も意見は同じ。許せないね」

「なら行きましょう。車は用意してあるわ」

みんなが用意してあった車に乗り込んでいる時、ゲイルは1人だけ考え込むように動いていなかった。しかしさつきも何も言っていなかったな。

「ゲイル、どうした？」

「あ、いや、何でもない」

何でもないって雰囲気じゃなかったが、無理に聞くのは悪いな。

「ふみゆくくくく」

「れ、霊夢ちゃん!？」

「どっした？」

車の中では白麗が顔を真っ赤にしていた。これは前に獅牙にあれなお店の前に連れて行かれた時と同じ、いやそれ以上だ。

「カン君、モノって子の発言が凄まじいんだけど」

「お前か」

「私だ」

ビシッ

「いたひっ!？」

デコピン一発。馬鹿娘はどうしてそういう話をするかね。シルヴィも顔が赤いし、相当な話をしたんだろうな。

――

ザトーとかいうのがいる場所は廃業したホテルだった。ナイア先生が言うにはこの地下にいるらしい。

「モノ、見覚えは？」

「あるよ。嫌ってくらいに」

なら正解か。だが真正面から行くのは馬鹿のやる事だよな。

「おし行くぜ!!」

いたよ馬鹿が。獅牙が突撃するのは想定すべきだろう。仕方ない。俺らも行くか。

「ケホケホツ、埃っぽいです」

「まあ廃業して結構経ってるみたいだからな」

「敵はどこだ!？」

「モノ、貴女なら分かるでしょう?」

「任せなさい」

モノはカウンターの裏に回ると何かをしていた。すると小さな音がした。

「ここだ!!」

そしてモノが古びたカーペットをめくると……

「何も無いぞ」

「ここに隠し扉があるの!! さっきのは鍵を開けた音!!」

そう言ってモノは床をこじ開けた。確かに下には階段が続いていた。

そこを進むと研究施設みたいな場所についた。

「これは……」

そこにはポッドに入った人間や脳、臓器が大量にあった。B級映画のようだけどやっぱり生はグロい。更に奥へ進むと今度は広間に出て、男が1人立っていた。

「やあやあ、よく来たね。そしてお帰り、とでも言おうか？」

「ハア？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「お前がザトーだな」

「そうだよカンフーマン君。私がザトー。その出来損ない達を創った創造主とでも言おうか」

「………達？ おかしい。モノだけでは達とは言わない。ならそれが意味するのは。」

「お友達には言ってないのかい？ ゲイル」

「黙れ、屑が」

「ゲイル君、貴方は」

「白麗、お前の想像通りだ。俺は改造人間だ」

「正しく言えばロック・ハウードのクローンをメインに改造したそのモノ・フリークスと同じ存在だね」

ロックのクローンだと！？ 成る程、良く似ているはずだ。

「ゲイルは親の言う事を全く聞かないから大変だったよ。家出もするしね。でも君達が連れてきてくれて助かったよ」

「何がだ！！ ゲイルは俺らのダチだ！！ お前に渡すか！！」

「そうです。ゲイル君は渡しません」

「あんたみたいな外道が親？ 笑わせてくれるわ！！」

「ゲイルは大切な友達なの！ 覚えておきなさい！！」

「……みんな」

「これは手厳しい。モノ、君はどうする？ 過去の人間といつまで共にいる気かね？」

「過去の人間？」

知っていたか。ロックのクローンを創るぐらいだから当然と言えば当然か。

「そのカンフーマンはそこにいるガール君の先祖だ」

「私の！？ ならどうして今にいるの！？」

「それは分からないな」

「いろいろ理由があるんだよ」

「だがお陰で面白い事になりそうだ。ナイア・ルラトホテップだけでも楽しめた予定だったが」

「なら楽しませてもらいましょうか。貴方の影だけでも面白いけど影？ 確かに影がおかしい。光ではなく、もっと別の理由で動いているような。」

「よく見てらっしゃる。ですが私が楽しんでもらいたいのはこちらでね。ではご覧あれ」

奥から数人の人間が出てきた。全員がこっちの知り合いのクローンみたいだ。

「どうかね？ この巫浄翡翠のクローンは機械人間にしてみたのだよ」

「ヨロシク、オネガイイタシマス」

機械人間。そのままと捉えるべきか。無頼が見たらキレそうだ。

「こちらの博麗霊夢のクローンは本人とは逆方向へねじ曲げてみたのだよ」

「ハイ」

「私のご先祖様まで」

黒い博麗って感じが。雰囲気も口調も違うからなんとも言い難いな。

「そして草薙京のクローン、KUSANAGIだ」

「さっさとやるっぜ」

「「ぶっ」」

「何笑ってやがる!!!」

俺とナイア先生が嘖くとキレられた。でもあんな色黒なのが京先輩のクローンとか。いや、それ以上に普通じゃない。

「落ち着きたまえKUSANAGI。次はモノと同じクーラクローンの改造人間、ネージュ・ペブル」

「やつほネージュ。暇してる？」

「忙しいわ。裏切り者の欠陥品」

「グサツ」

モノと似た雰囲気の奴だな。バイザーも付けてるし。

「最後は私の最高傑作だ。その獅牙君の先祖でもある七夜のクローン。殺人鬼・七夜」

「……………」

「俺の先祖だと!？」

なんだあいつは。あれが七夜のクローン？ あんなかつこいいの七夜と認めるもんか！！

「さあお前達。あの愚か者達を殺せ」

「あー、それは構わないけどさ。一ついいか？」

「なんだい七夜」

トスッ

「カツ……！？ なに……を！？」

「俺は俺を呼ぶモノを殺す存在だ。あんたはカンフーのクローンでも創るべきだったんだ。あれは地味だが一番潜在能力があり、逆らう可能性が一番低かった。あんたは、最初の一步を間違えたんだ」

「く…そ…」

ドサッ

ただナイフで突かれただけなのに、死んだのか？ 七夜にあんな力は無かったんじゃない。

「直死の魔眼ね。そんなの持ってるなんて」

「改造されまくって臨死体験でもしたのかね。便利だから好きだけどね。さあ、殺し合おう」

「おは、シンヤバそつだ。」

クローン軍団（後書き）

いろいろ出しちゃいました。やっちゃいました。そういえば皆さんが好きなMUGEN動画はなんですか？
ではキャラ紹介です。

ザトー

出演：ギルティギア

元ネスツの社員。大量のクローン改造人間を創った。七夜に刺される。

クローン翡翠

出演：メルティブラッド

メカヒスイ。ただ原作とは違い、100%機械ではなく、生身の翡翠のクローンを改造したもの。

クローン霊夢

出演：東方project、MUGENオリジナル

闇巫女。黒いとカンフーは言っていたが、色は群青。性格が悪い。

KUSANAGI

出演：KOF

京先輩のクローン。普通じゃないから笑われてもしょうがない。色黒。

ネージュ・ペブル

出演：AKOF、MUGENオリジナル

クーラシリーズ。バイザーを付けているがビームは出ない。ザトー曰く、モノと同じく失敗作らしい。

殺人鬼・七夜

出演：メルティブラッド、MUGENオリジナル

正しくは殺人貴・七夜。ザトーの最終兵器だが、ザトーを殺す。直
死の魔眼を持ち、高速戦闘をする。

終わりへと(前書き)

かなり急ぎ足で書きました。

終わりへと

誰と戦うか。相手より人数は多いが、強さはどうか。特に七夜は1人で対処するにはキツイ。

「モノ、貴女を倒すわ」

「ご指名されちゃった。じゃあやってくるわ」

モノはネージユってのと戦うようだ。互いに手の内を知る者同士だ。無難な組み合わせではあるが、無理はしないでほしい。

「白麗ちゃん、やりましょう」

「ご先祖様を侮辱する存在である貴女は許せません」

向こうはクローン博麗と白麗か。クローン博麗の強さは当然だが、白麗の強さも俺は知らないんだが、誰も止めないのを見ると大丈夫のようだ。

「俺はあの色黒を相手しよう」

「逃げ出した腰抜けに俺の相手が務まるのか？」

「俺は以前の俺とは違う。ここで過去にけりを付ける!!」

普通な京先輩ならともかく、あのクローンは普通加減がない。だってゲイルなら勝てるはずだ。

「私はあの翡翠つて子を倒すわ」

「シルヴィちゃん、私も手伝うよ。強そうだもんね」

巫浄のクローンはシルヴィとガールか。となると最後は……

「3人掛かりか？ 大人気ないね」

「お前が俺の先祖のクローンだろうと倒してやる……！」

「私の七夜もあれくらいクールだったら」

「本人なら『俺はあんたのじゃない！ 幼女のだ……！』って否定しますよ」

「違うないわ」

こうやって遊んでいられるのも七夜が仕掛けてこないうちだけだ。みんなは大丈夫だろうか。

――

モノとネージユは研究施設内の闘技場にて既に戦いを始めていた。

「凍れ!!」

ネージユは不純物を大量に含んだ汚れた氷でモノを閉じ込めようとしたが、モノは軽くそれを避ける。

「そうカッカしないでよ」

「黙りなさい!!」

「貴女つてそんな性格だった？ もっと大らかだったでしょう」

「裏切り者が何をいけしゃあしゃあと!!」

ネージユは止まる事なく攻撃を続けるが、モノには一切当たらない。

「羨ましい?」

「! 黙れ!!」

「逃げ出した私が1日もしないうちに仲間が出来てるのがそんなに羨ましいの?」

「黙れ黙れ黙れ!!」

「五月蠅い弱虫!!」

モノはネージユの攻撃をかいくぐり、渾身の一撃をネージユの腹に叩き込んだ。

「う……!?!」

「そんな悲観的になってさ、どうして自分で行動しないの。どうして無理って諦めるの。あんたにだって幸せになる権利はあるの!?!」

「……………モノ……………」

「泣いていいのよ。さあ私の胸の中においで」

モノは両手を広げ、ネージユを迎え入れる体勢をとった。

「嫌」

「うえっ!?!」

無駄になった。

「ふ、ふふふ、貴女の馬鹿さに感化されたのかしらね。探してみろわ、私の幸せ」

「その意気よ!?!」

「一言だけ。さっきのセリフ、臭くて痛くてウザかったわ」

「一言じゃないし酷い!?!」

そんなやり取りをしながらも2人は笑顔だった。

――

「なんで！ どうしてー！」

こちらはクローン霊夢と白麗霊夢の戦い。クローン霊夢が一方的に攻撃をしているのだが、それが白麗に効いている気配はない。

「おかしいわよ！ 同じ博麗の力を持っていながら何故私の攻撃が効かないの！？」

「簡単な話です。悪の意思では博麗の力は使いこなせない。例外は貴方のオリジナルにして私のご先祖様、博麗霊夢ただ1人」

「くそおおおおおー！」

クローン霊夢は青黒い霊力の炎を纏って突撃してきた。だが白麗が片手を振るとその炎は消し飛んだ。

「あ……ああ……」

「お終いです」

白麗が再度手を振るとクローン霊夢は吹き飛び、壁に激突して気絶

した。

――

「食らえええ!!」

「くそつ!!」

ゲイルとKUSANAGIの戦いではゲイルが圧倒されていた。遠中近、あらゆる距離での戦いにおいてKUSANAGIが勝っていた。

「つまらねえな。その程度でよく吼えやがる」

「ハア、ハア」

「反応する気力もねえのか。なら終わりだ。真っ赤に燃えろおお!!!!!!」

KUSANAGIが大きく振りかぶった腕を振ると巨大な炎がゲイルを飲み込んだ。

「バスター」

「!?!?」

「ウルフ!」

だがゲイルは炎から飛び出し、KUSANAGIに拳を当てて吹き飛ばした。

「んだよ。やれば出来るじゃねえかよ。ならもっと楽しませてくれるよな!」

「遊びに付き合うつつもりはない。それにもうお前の動きは覚えた」

「言ったな。なら見せてみるや!」

「そこだ」

KUSANAGIが地面を走る炎を放つが、ゲイルが片手を上げると地面から小型の竜巻が巻き起こり炎を消した。

「何!？」

「ダブルシュート!」

「こんなもん当たるか!」

地を走る衝撃波を跳んで避けたKUSANAGI。ゲイルはそのKUSANAGIの下に飛び込んだ。

「レイジングストーム!!」

「なっ!?! うおおおおお!!?!」

ゲイルがKUSANAGIの下で地面に手を叩きつけると衝撃が巻き上がり、KUSANAGIを吹き飛ばした。

「くっ……いい攻撃、おつと?」

「無理に動くな。戦いたいならお互い回復してからやるっ」

「なんだ。お前も動けないのかよ」

2人は座り込んで全ての終わりを待った。

――

クローン翡翠と戦っているガールとシルヴィは苦戦を強いられた。

「カンフーゴーストアタック!!」

「ピピッ、バリアー」

ガールが気の霊を放つがバリアーで防がれる。

「そこっ!!」

バリアーが切れた瞬間を狙って、シルヴィが手から伸びるブレードで斬りかかる。

「ピイツ、ワイヤー」

「キヤアアアツ!!?」

だがそれを感知していたかのように、クローン翡翠は電気の通ったワイヤーでシルヴィを投げ飛ばした。

「シルヴィちゃん、大丈夫?」

「正直キツいわ」

「ナパーム」

「させないわよ!!」

クローン翡翠はスカートの下からナパームミサイルを飛ばそうとしたが、ガールの伸びる拳打で狙いをずらされる。その隙に2人は遠くへ逃れた。

「やっぱりわよ」

「強いわね。大きな隙があれば私の斬撃を叩き込めるんだけど」

「……………バリヤー貫通出来ない？」

「糖分消費を気にしなければいけるかも」

シルヴィのブレードは糖分消費によって発動する。もちろん大量に消費すればそれだけ強力になるが、それだけの糖分消費は人体への影響がデカい。

「ここにどろり濃厚が3本あります」

「…！ どうして!？」

「今日はシルヴィちゃんの誕生日でしょ」

「ガール……………それ来週」

「えっ？」

「とにかく有り難いわ」

ゴク

3本のどろり濃厚を一気に飲み干すシルヴィ。その間にもクローン翡翠は向かってきていた。

「ご馳走様!! あつまいわあ!!」

「敵影再確認。排除開始」

「来たわね。カンフーゴーストアタック!!」

「無駄デス。バリアー」

「使ったわね」

シルヴィの手のブレードが一気に巨大化する。ブレードは先ほどまでとは桁違いのエネルギー量である。

「ピピッ、危険危険危険」

「危険でもバリアー解除は出来ないのでしょ。斬れなさい!!」

シルヴィの振り下ろしたブレードがバリアーごとクローン翡翠を引き裂いた。

「行動……不能……」

「ごめんなさいね」

「でも斬ったのは機械部分だけだったみたいだね。生身部分だったから危なかったかも」

「……そういえばロボットじゃなかったわね」

「忘れてたの!?!」

――

残る戦いはカンフーマン達とクローン七夜の戦いであるが、大変な状況に至っていた。

「どうしたよ。その程度か？」

「ハアハア……これが、俺の先祖」

「これが、七夜かよ」

「全く……強化が、過ぎるわよ」

獅牙は七夜の動きを知らないがために苦戦をし、カンフーマンとナイアは七夜の動きを知りすぎているがために、僅かに違うクローン七夜の動きに苦戦しているのである。

「斬刑に処す」

「流石にそれは見慣れてるんだよ！！」

クローン七夜の連続斬撃を全て防ぎきるカンフーマン。その後ろから飛び込んできたナイアが大剣をクローン七夜へと振り下ろした。

更にクローン七夜の後ろからは獅牙がアッパーを繰り出していた。しかし七夜はそこから消えていた。

「遅すぎるんだよ!!」

「しまっ」

ザンツ

「「ナイアさん（先生）」」

いつの間にか天井に張り付いていたクローン七夜は、ナイアの背中に飛びかかり、ナイアを押し倒すと背中をナイフで斬り裂いた。

「てめえ!!」

「落ち着け獅牙!!」

「カンフーの言う通りだ。ただか1人倒れただけだろう」

「この、野郎!!!!!!」

獅牙は七夜への間合いを詰めて殴りかかろうとしたが、カンフーマンに殴り飛ばされた。

「何しやが……」

獅牙はカンフーマンに文句を言おうとしたが、カンフーマンはクローン七夜に斬られ、地に伏していた。

「馬鹿な奴だ。あんなの庇わなければ勝率は上がったろうに」

「俺……は……」

「理解したか？ お前が勝手な事をしなければこいつは無事だったはずだ」

「……」

「ん？」

クローン七夜が何かに気付く。それは獅牙から湧き上がる目に見えるほどの闘気だった。

「許せねえ。これで決めてやる！！」

今までとは比べものにならないスピードでクローン七夜に迫る獅牙の拳。流石にクローン七夜も防がざるおえなかった。そこから獅牙の連撃は続くが、クローン七夜は防ぎきりナイフを振った。獅牙はバク転でそれを避けた。

「「終わりだ」」

2人は同じような構えをし、そして次の瞬間には2人の立ち位置が入れ替わっていた。

ザンッ

獅牙は大きく一閃を食らい倒れた。

「しかし下手だね、どうも」

そう言った後にクローン七夜も倒れた。理由は獅牙がすれ違いざまに叩き込んだ無数の打撃によってだった。

「俺の、勝ちだ」

「なん、だ。もう…立てるの、か」

「頑丈だが、らな」

立ち上がりクローン七夜に話しかける獅牙。

「無理、するなよ」

「お前も、な」

「違うない。さて……」

トスッ

「!?!」

「自分殺し。こういう結果も、悪くない」

クローン七夜は直死の魔眼を使い、自らの死点を突いて消滅した。

――
――
全てが終わった。獅牙が言うには七夜は自害したらしい。そこが少し残念だったな。

「カンフーマン君、治ったよ」

「ありがとうございます……………って治ってる!？」

今俺らはイグニスちゃんが手配してくれたファウストって医者に治療を受けていたのだが、治すの早すぎ。

「しかしあの七夜も馬鹿ね」

「どうしてです？」

「私達に直死を使わなかったじゃない。埋め込まれた記憶の情に流されたのかしら」

「だったら七夜らしいですね。そういえばザトーは直死で殺されたのに消えませんでしたね」

「彼は死んでないわよ」

死んでない？ でもあの時確かに刺されていたはず。

「死んだのは彼に憑いていた悪霊。本当に七夜は」

悪霊。もしかしてあの時ナイア先生が言っていた影がそれか。

「そろそろ休みなさい。明日帰るんだから」

「分かりました」

いよいよ過去へ帰るのか。短かったけど濃い日々だった。もう来れないのかと思うと少し、いやとても残念だ。

終わりへと（後書き）

次回で未来編は終了。どんな結末が待っているのか。
ではキャラ紹介です。

ファウスト

出演：ギルティギア

超長身の外科医。とんでもない腕の持ち主で大抵の怪我ならすぐに治せる。

帰還（前書き）

まあ適当に書けばこんなもんでしょう。

帰還

ついに帰る日が来てしまった。本当はこんな事考えたら駄目なんだろうけど、もっと居たかったな。

「準備は出来たわよ」

「ありがとうございます、ナイア先生」

周りは何もないだっ広い平原。車を飛ばすにはぴったりだ。さて、別れだ。

「みんな、ありがとう」

「水臭い事言うなよ。しかし遂に戦えなかったな」

「獅牙はそればかりだな。だが俺も会えなくなると思うと寂しいな」

「う、うう、ガン、フーマンさん、お、元気で」

「霊夢ちゃん、泣いてないで笑顔で送ってあげなよ。じゃあね、ご先祖様」

「カン君、楽しかったよ。またどろり濃厚を一緒に飲もう」

獅牙、ゲイル、白麗、ガール、シルヴィ……駄目だ。ここで泣くんじゃない。男は人前で泣いたら駄目なんだ。

「カンフーマン君」

「ザトー……さん」

「ありがとう。君達のお陰で私は影から開放された」

「あれは七夜がやった事ですよ」

「それでも礼を言わせてくれ。私はこれから贖罪の意を込めて、あの子達の親として、あの子達に真つ当な人生を歩ませるよ」

「もちろん、ネスツで死ぬまでこき使っがな」

「社長はお厳しい。ではカンフーマン君、過去に行っても忘れないでくれよ」

「はい。あの、モノは」

あいつなら真つ先に飛び出してきて文句なりなんなりを言いそうなんだが、影も形も見当たらない。

「モノか。彼女は寂しがり屋でね。別れなんてしたくないと」

「そう、なんですか。ならこう伝えて下さい。お前も大切な仲間だ、と」

「了解した」

俺は車に乗り込みエンジンを点ける。いい調子だ。

『もついいのか?』

「ええ、行きましょう」

『座標と時間軸はこちらで設定しよう。さあ行きたまえ!!』

アクセルを蒸かし発進する。車はスピードを上げ、そしてトップスピードに乗った瞬間、時間移動をした。

――

カンフーマンがいなくなった未来。全員がカンフーマンが消えた地点を見つめていた。

「不思議な奴だったな」

「たったの3日。それだけで俺らの中に入り込んできていると変えていった」

「ぎびじい、でずう」

「れ、霊夢ちゃん、チーンして。みっともないよ」

「もう会えないのかな。タイムマシン、造ってみようかな」

全員が感傷に浸る中、クローン翡翠やってきた。

「オ父様」

「どうしたヒスイ」

「御報告ガアリマス。モノガ居ナクナリマシタ」

「全くあの子は。何処へ行ったかリーダーで解らないか？」

「イエ、ソノ……」

珍しくはっきりと発言しないクローン翡翠に疑問を覚えたザトー。
そしてその頭の中ではある意味悪いシナリオが想像された。

「モノノ生体反応ガコノ世界カラ『ロスト』シマシタ」

『えっ』

全員が固まる。ザトーの想像が当たった瞬間であった。

――

ああ、寮だ。帰ってきたと実感させられる。

『今は君がいなくなった時から12時間ほど経った夜だ』

「そうですね」

俺が車から出るとそこにはイグニス社長が待っていた。

「帰還したか」

「まさか」

「流石に立って待ち続けてはいない。君の部屋に邪魔をした」

マジかよ。カルマとか怖がらなかつたらうな。イグニス社長って雰
囲気がゴツイから。

「未来はどうであった？」

「機会があればまた行きたいですね」

「そうか。良い事があったようだな」

「そうですね。とてもいい経験でした」

「それで、そこで吐いてる娘はなんだ？」

「はい？」

車の反対側に回るとOrzの体勢で吐いているモノがいた。

「どうしてお前が!!」

「うっぶ、か、カンフー、オッスオッ、オロロロロッ!!」

「ぎゃああああああ!!? こっち向いて吐くな!! 未来へ帰れ!!」

「に、逃げないでえ」

「……カンフー」

「あ、コマチ」

「風邪をひいたと聞いて人が卵酒を持ってきてやったというのに、なににしてやがるうううううう!!」

何って……

現状

モノがカンフーマンの下半身に抱きついていてる。

この野郎おおおおおお!!!!!!

「一発で沈めてやるよ。覚悟は出来たか？」

「出来てない出来てない!!」

「返事など聞いてない！！ ワールドデストロイヤー！！！！！！」

「「ぎゃあああああああ！！！！？」」

数日ぶりのコマチの一撃は激しかった。モノも過去に来て早々にとんでもない洗礼を受けたな。

帰還（後書き）

モノはタイムトラベル酔いです。仕方ないね、酔わないカンフーがおかしいんだ。

コマチはやっぱり激しい。

しかしカンフーはコマチ、お市、モノ。

七夜はナイア、アナブラ、桜。

なんだか残念なハーレム。

中学転入（前書き）

今回はカルマちゃんの出番ですよ。

追記：書き忘れてたADSの紹介を後書きに書きました。

中学転入

こんにちは、カルマです。今日はこの街での中学校生活初日です。

「着付け終了。綺麗だぞ」

「ありがと、にいちゃ」

まだ自分では上手く出来ないからお兄ちゃんに着物を着させてもらう。初日はしっかりしていかないと舐められるってお父さんが言っていた。

「わざわざ着物じゃなくても」

「モノ姉さんの言う通りニヤ」

「カルマが着たいからいいんだよ」

昨日突然家族になったモノお姉ちゃん。一つ目だけどナナーマンお爺ちゃんの方が人間としておかしいと思う。

「忘れ物はないか？」

「ん」

筆記用具とハンカチとティッシュ。時間割りが分かんないから教科書は持ってけない。

「行ってきます」

「行つてらっしゃい(ニヤ)」「」

部屋から出て寮の前に行くとき美鈴さんが待っていてくれた。今日は美鈴さんが車で送ってくれる。

「綺麗な着物ね。でも制服とかじゃないの？」

「自由」

「あ、夢弦高校と同じだったわね」

これから私が通う夢弦西中学校は制服がなくて服装自由だからこれでも大丈夫。

「さあ乗って。ちゃんと道を覚えるようにね」

「はい」

――

美鈴さんが道を丁寧に教えてくれて覚えるのも簡単だった。

「職員室とか分かる？ 分からなかったらちゃんと聞かないと駄目よ」

「はい」

もう中学三年生なんだから何事も自分の力で出来るようになっていないと駄目ってお兄ちゃんが言ってた。だから頑張る。

「……………」

早速迷った。そうだ、迷ったら聞かないと。あそこにいるスーツの人に聞いてみよう。

「あの……………」

「何か？」

「びっ……………」

「こ、怖いよ。でもやらないと……………」

「君は我が校の生徒ではないようだな」

「……………」

「……………」

「……………」

し、知ってたみたいで助かった。それでも怖くて動けない。

「おやグスタフ先生、どうしましたか？」

サングラスを着けたなんだか優しそうなお爺ちゃんがやってきた。

「オズワルド先生。実は転入生の子を見つけたのですが、固まってしまうって」

「グスタフ先生は強面ですからね。大丈夫ですよ、こんな顔してグスタフ先生は優しいですから」

「こんな顔とはなんですか」

「さあ職員室に行きましょう」

「……はい」

なんとか動けるようになったよ。

私の担任となるのはあの見た目怖い先生だった。なんだか資料を見て微妙な顔をしている。

「ご両親や祖父母は、本当にこの人かい？」

「……」（コクリ）

おかしなところがあるのかな？ お兄ちゃんもたまたまうちの家系はおかしいって言うてるけど。

「……せんせ」

「あ、ああ、少し見覚えがあったものでね。特に君のお母様には」

「？」

「なんでもない。では君のクラスへ行こう」

お母さん何したんだろ。多分ろくでもない事だと思っけど。

――

今私は教室の前で待っている。緊張するよ。

「ではカルマ君、入ってきてくれ」

「はひっ！」

声が変わりなっちゃった。落ち着いて私。手に人を書いて……吹くんだっけ？

「し、失礼します」

教室に入るとみんなの視線が異様に気になる。私が気にしすぎなだけだろうか。（着物のせいです）

「自己紹介を」

「か、かりゆま……カルマ、です」

噛んじゃったよ。うう、恥ずかしい。

「カルマ君はご両親の事情でこの学校に転入してきた。仲良くするように」

『はい』

「では……カルマ君、あそこのADS君の隣に座ってくれ」

「……分かりました」

ADS君って外国の人なのかな。どうやって話せばいいんだろ。

「よろしくね、カルマさん」

「……………」

ボール？ 黒いボールだね。それが浮いて挨拶してきた。もしかしてこれがADS君？ 遂に人型じゃない知り合いが私にも出来た。

「…………よ…………よろしく」

これが授業受けてるんだよね。気になる。

――

ADS君はボールだけど優しかった。そして鉛筆とかは浮かせて使ってるのが分かった。手がないから仕方ないね。

「カルマだったな」

「…………」（コクリ）

休み時間になってすぐに金髪の女の子と無精ひげの生えた男の人がきた。

「アンジェリア、そう高圧的に迫るな。俺はトキ、クラス委員長だ」

「同じくクラス委員長のアンジェリア・アヴァロンだ。よろしくな」

「……よろしく」

委員長さんなんだ。そうなんだ。なんとというか対照的な2人だね。

「今日は私が学校を案内してやってもいいんだぞ」

「是非とも案内したいそうだな」

「勝手に改変するなあ!!」

「ありがとう」

せっかくだからお世話になろう。また迷子にはなりたくないもん。

――

放課後に案内してもらった事になったけど、アンジェリアちゃんとト

キ君、それとA D S君以外にも人が来た。

「ジャギ、来たのか」

「姉者に誘われてな。お前が転校生か」

「……」(コクリ)

「ジャギ、カルマを怖がらせたら駄目だぞ。紹介するな。私の弟のジャギだ。あっちにいるボインは妹のミルドだぞ」

「俺がジャギ様だ。覚えておけよ」

「ミルドレッドだ。よろしく」

「……よろしく」

どう見てもアンジェリアちゃんの方がちっちゃくて妹みただけのお姉ちゃんなんだね。というかジャギ君とミルドレッドさんが大人すぎるよ。

「浪清は何故いる？」

「転校生が格闘部に入れるような奴が見たかったのだが、駄目そうだな」

「……」(ジーツ)

「そう睨んでくれるな。俺は右浪清。格闘部主将だ」

私だってちゃんと戦えるもん。お兄ちゃんにだって負けないもん。というか三年生だからほとんど参加出来ないんじゃないかな。

「ははっ、悪かったって。さて、彼女の見学はどうする？」

「今日は主要な施設を見て回ればいいと思うよ」

「ADSの言う通りだな」

「あ」

「どうしたんだ？」

「今日はお迎えがある」

帰りも美鈴さんが車で迎えに来てくれる約束になっているのを忘れてた。

「えー、ならどうするんだ」

「姉様、我が儘を言うものじゃないよ。カルマ先輩にだって用事があるんだから後日にしよう」

「……」
「ごめんなさい」

「そう気にする事でもねえよ」

「ありがとう、ジャギ君」

「ジャギ様だ。ま、先輩だから許してやろう」

残念だけど、また今度で我慢してもらわないと。でもみんな優しく
て良かった。ちよっとは無口が治るかな。

中学転入（後書き）

実はカルマちゃんは三河弁キャラにするつもりでしたが、文字にするのが難しい。

ではキャラ紹介と北斗一族とアヴァロン一族の関係です。

グスタフ・ミュンヒハウゼン

出演：KOF

カルマちゃんの担任。ちょっと怖い雰囲気だけど優しい先生。元々要人のSPだったらしく今は娘が受け継いでいる。

オズワルド

出演：KOF

ベテラン教師。生徒にも教師にも人気。

ADS

出演：MUGENオリジナル

三年生。カルマちゃんの隣の席の黒い球体。みんなのアイドル。

アンジェリア・アヴァロン

出演：アルカナハート

ちっちゃいけど三年生。クラス委員長。いじよ。

トキ

出演：北斗の拳

見た目がおじさんだけど三年生。クラス委員長。ユクゾツ。

ジャギ・アヴァロン

出演：北斗の拳

二年生。よくアンジェリアと一緒に戦う。ある事情からヘルメットを被っている。その事情は後ほど。

ミルドレッド・アヴァロン

出演：アルカナハート

大人の女性みただけで一年生。短髪だったり長髪だったりする。

右浪清

出演：MUGENオリジナル

三年生。格闘部主将。背が小さいのが悩み。

北斗一家とアヴァロン一家の関係

元々ラオウ、トキ、ジャギ、ケンシロウの北斗四兄弟だった。ジャギは拳法家としての才能が低かったが、努力は欠かさなかった。そんな時に目覚めたのが錬金術の才能がある。しかし初めての火の錬金をした時に暴走し顔を焼いてしまった。

北斗神拳を使えば治せるそれをジャギは戒めとし残した。だが問題となったのは錬金術の才能である。武術に精通していてもその手のものはさっぱりだった北斗一族が頼ったのはアヴァロン一族である。アヴァロン一族の養子になったジャギは才能を伸ばし、若くして石油の錬金術という称号を手に入れた。養子になっても拳法の鍛練も怠らなかった。

ジャギは重い病気に掛かっていたトキへ、石油の錬金によって出来た金を仕送りするなど兄弟への思いも忘れていない。そして新しい家族であるアンジェリアやミルドレッドにも優しくして慕われている。

なげえ……

花火祭りへ行こう・前編（前書き）

注：SMH（スーパーメカ翡翠）は出ません。

花火祭りへ行こう・前編

連休だ。暇だ。ロックでも誘ってゲーセンにでも行くか。

「にいちゃ、電話」

「おう。もしもし、今替わりました」

『ワシじゃ、ワシ』

「せめて名前を」

『マーシャルじゃ』

「なんだ、マーシャル爺ちゃんか」

電話をしてきたのはナナーマン爺ちゃんの弟になるマーシャル爺ちゃんだ。もちろん棒人間である。

『明日こっちで花火祭りがあるから見に来んか？ 友達も好きなので連れてこい』

「マジで。さんきゅ、爺ちゃん」

『では明日に迎えに行くからの。準備しとけえよ』

「わーたよ」

『で』

「カルマ、明日マーシャル爺ちゃんと一緒に花火祭り行くぞ」

「！ やた！！」

誰を連れて行くか。モノとあの3人は確定。ついでにコマチも居た方がいいか。あ、都古ちゃん辺りも呼ぼう。

「カルマも友達呼んでもいいぞ」

「……まだ、恥ずかしい」

「そか。無理にとは言わないが、もうちょっと積極的にならないとな」

「……」（もじもじ）

兄としてはこれで大丈夫か心配だ。

――

次の日、沢山集まりました。ちょっと数えてみよう。俺、カルマ、

モノ、七夜、ロツク、博麗、コマチ、煉、都古ちゃん、ゼノンちゃん、知らない人。

「どちら様で？」

「ゼノンの兄のアーデルハイド・バーンシュタインだ。今日はゼノンと俺が世話になる」

「いえいえ」

都古ちゃんがゼノンちゃんを呼んで、ゼノンちゃんがお兄さんと呼んだって構図でいいのかな。

「カンフーお兄ちゃん、今日はありがとうね」(上手く行けばロツクお兄ちゃんと2人で……むふふ。カンフーお兄ちゃんにはジュースを奢ってやろう)

「気にする事はないさ」(9本でいい)

「!?!」

驚いているようだが、ここはギャグ空間なのだよ都古ちゃん。主人公の俺に君と同じそれが出来ないはずがないだろう。

「ねえカンフー、この人数で大丈夫？」

確かにモノの疑問ももっともだ。これだけの人数では普通の車だと乗れないだろう。まあ普通じゃない車なら大丈夫って事だ。

ブロロロロッ

「待たせたの」

颯爽とバスで登場するマーシャル爺ちゃん。そしてそれに呆然とするみんな。仕方ないよな。年寄りがこんなバスを運転してるんだから。

『棒だー！ー！』

あ、うん、そっちね。確かに棒人間だよ。

「早く乗れい。行くぞい」

これから楽しいバス移動の始まりだ。カラオケとか設置してあったっけな？

――

「バス内での事が描写されると思ったかね？ 残念、カットだ」

――

あー、楽しかった。まさか伝言ゲームでああなるとは。アーデルハイド悔りがたし。

「出店が多いな。これにつられて幼女が沢山」

「七夜はその思考を捨てろ」

「不可能だ」

はっきり不可能と断言した。誰かこいつに神罰を。

「祭りが終わるまで自由行動にしよう。そっちのがみんな楽だろ」

「ロックお兄ちゃんに賛成」

「じゃあそうすつか」

それが決まるとそれぞれがバラバラに行動を始めた。俺もカルマと手をつないで出店回りを始めた。

――

まず七夜と煉、霊夢から見てみよう。

「煉、縛るのはやめてくれ」

「駄目。七夜はほっとくと大変だもん」

「あんたらも相変わらずね」

七夜は煉に紐で上半身縛られて、霊夢は隣でたこ焼きを食べながら歩いていて、その様子を周囲の人は奇異の目で見ているのだが、それを気にしていないのは流石と言っべきか。

「やめて下さい！！」

「いいじゃんwwwwwwwwお祭りだからさwwwwwwパーツwwwwwwとさwwwwwwwwwwwwww」

そんな3人の前に金髪の鎧男に絡まれている女の子が現れた。

「あらやだナンパかしら？」

「七夜、やってしまいなさい」

「俺は助さんか角さんかつての」

そう愚痴りながらも七夜は金髪退治に歩き出した。もちろん紐は解かれています。

「その頭の悪そうなの」

「なにwwwwwwww俺様のwwwwwwwwことwwwwww言つてんのwwwwwwww」

「ああそうだ。不愉快だから消えろ」

――閃鞘・迷極沙門

「うはつwwwwwwww不意打ちwwwwwwww修正されるねwwwwwwww」

七夜が一撃で金髪男を倒す。ナイフでの攻撃したものの、峰打ちなので怪我はしていない。

「あ、ありがとうございます」

「そのデカイ刀は飾りか？　そうでないならそれで倒せ」

「すみません」

「別に謝らなくてもいい」

「あの、私はナコルルと言います。貴方の名前は？」

「七夜だ。じゃあな」

七夜は煉と霊夢のところへ戻り、祭りの喧騒の中へと消えていった。それを見ていたナコルルは歪んだ笑顔をしていた。

「あれが私の王子様」

――

場所は変わってナイア家。そこには家主のナイアと友人のアナブラと桜がいた。

ピキーン

「!?!」

「どうしたの桜」

「なんだか同じ気配がしました」

「桜ちゃんと同じ気配? あのお市って子かしら?」

「いえ、七夜君に近付くヤンデレです」

同じ存在は引かれ会うのか。それとももっと別な理由なのか。とにかく桜はナコルルの気配を感知したらしい。しかし何故3人が集まっているかというと……

「あ、クーラードリンク忘れました」

「クーラーミートならあげるわよ」

「アナブラはどうしてそんな微妙なものを持ってくるのよ。ほら、アルバが来るわよ。さっさとなさい」

女3人モンハンパーティーである。

花火祭りへ行こう・前編（後書き）

区切りがいいから前編後編に分けました。もしかしたら明日は更新が難しいかもしれませんが。
ではキャラ紹介をします。

マーシャル

出演：MUGENオリジナル

棒人間。ナナーマンの兄。何故かバスの免許とバスを持っている。

アーデルハイド・バーンシュタイン

出演：KOF

ルガールの息子。次期社長として期待をされている。意外とおちゃめらしい。

内藤

出演：FF11

金髪の剣士。セリフにWを入れるのが特徴。七夜に瞬殺される。

ナコルル（ナコ月ルル娘）

出演：サムライスピリッツ

この作品では巨大な刀を使うナコ月ルル娘状態。白馬の王子様を信じるような純真無垢なヤンデレ。

花火祭りへ行こう・後編（前書き）

1万アクセスを超えました。やったねたえちゃん、アクセス数が増えるよ。

花火祭りへ行こう・後編

前回花火祭りに来たカンフーマン達、そんな彼らの様子を見てみよう。

「やっぱり繋ぎは大切だな」

「ああ、一撃で攻めるのはいいが、それだけ破壊力のある技があるわけでもない」

ここはロック、アーデルハイド、都古、ゼノンの4人組。中でもロックとアーデルハイドは互いに格闘技談話に夢中になっていた。

「相変わらず男というものは自分の好きなものには熱いですわね」

「そこが可愛いんだよ」

都古とゼノンはそんな2人を見ながら苦笑していた。そして何気に自分の食べたいものを買っていたりする。

「ヘイツ！ そこなヤング達！ ちょっと寄ってかないか？」

そこへある出店から声がかかり、ロックはその店員を見て驚いた。

「テリー！？ 何やってんだよ！！」

「ロックか。祭りと言ったら出店、出店と言ったら焼きそばだろ！」

「どんな理屈だよ」

そこにいたのはロックの師匠とも言える存在、テリー・ボガードだった。普段料理をしない彼が焼きそばの出店をやっているのはその場のノリというやつだろう。

「貴方が伝説の狼か。是非とも手合わせを願いたいものだ」

「祭りでそんなのはナンセンスだぜ、ルーキー」

「むう」

「それよりうちの焼きそばを食ってきな。今なら1人前タダだぜ」

「なら4人前くれないか？」

「OK!! すぐに作ってやるよ!!」

テリーが焼きそばを作っている間に4人は談話を始めた。

「お兄様、ロックさん、テリーさんは凄い人なのですか？」

「ゼノンちゃん知らないの？ 有名人だよ」

「テリーさんは伝説の狼とも呼ばれている格闘家だ。実力は父さん並みかもな」

「お父様並みですか」

このメンバーで知らないのはゼノンだけらしく、テリーがそこそこの有名人というのが分かる。そして実力もルガー並みとかなり高

いようだ。

「お待ち！！ 祭りをエンジョイしてこいよ！！」

「ありがとうテリー」

余談だがテリーの焼きそばは濃かったらしい。だがそんな微妙な味の焼きそばもまた祭りの楽しみかもしれない。

――

「わー！ 何あれ！！」

「落ち着けての」

こちらはカンフーマン、カルマ、モノ、コマチなのだ、過去の祭りが初めてのモノにとっては全てが新鮮であり、興奮するなという方が酷である。

「カンフー、こっちこっち」

「出店は逃げないから安心しろ」

カンフーマンを引つ張り回すモノ。そんな2人を快く思わない者もいるようだ。

「……………」

「コマチねえちゃ」

「なあんでもない。カルマは気にするな」

コマチである。妹であるカルマならともかく、いきなり出てきたモノがカンフーマンに引つ付いているのが気に食わないようだ。このままではまたワールドデストロイヤーだろうが、ここに1人、空気の読める子がいた。

「にいちゃにいちゃ」

「どうしたカルマ」

「あれみんなで食べたい」

「チヨコバナナか。よし、買ってやろう」

ねだられたカンフーマンがチヨコバナナを買いに行く。すぐに買えたのかカンフーマンは4人分のチヨコバナナを持って小走りに戻ってきた。そこへ駆け寄るカルマ。そして……

ガッ

「へっ？」

そうな。

――

もうすぐ花火という時間になり、全員がバスへと集まってきた。

「カンフー、顔真っ赤よ。お酒でも呑んだ？」

「……事故だ」

「事故か。察しよう」

「ありがとうロツク」

察してもらって心に余裕が出来たカンフーマンはある事に気が付いた。なんか1人多い、と。

「誰だあんた!!」

「なんでいる!?!」

「すみません。やっぱりどうしてもお礼がしたくて」

それは七夜が助けた少女、ナコルルだった。

「なんじゃ、友達が増えたのか？ ならそれでも構わん。花火のベ
ストスポットに行くから全員バスに乗りなさい」

全員どうでもいいか、といった感じの顔でバスに乗り込む。ただ七
夜だけは異様な寒気を感じていた。

――

マーシャル爺ちゃんの運転するバスで俺らは高台に着いた。それと
同時に花火が打ち上げられ始めた。

「綺麗」

「そつだな」

全員が静かに空を見上げる。大きい花火や小さい花火、変な形にな
る花火。花火の名前なんてのは知らないが、風情が楽しめればいい
んじゃないかな。

ドドドドドドッ

花火が連射され始め、そして最後に大輪の花火が咲いて、そして散っていった。

「良かった」

ポツリと呟く。これはまたみんなで来たいな。

――

花火は良かった。だがこのナコルルという女はなんだ。ずっと俺に着いて歩いて。なんだか間桐桜臭がするんだが。

「七夜さん、ずっとこうしてたいです。ずっと、ずっと……アハッ」

ゾッ

やべえよやべえよ。助けて煉。この状況を察知出来るのはお前しかない。

「ナコルルさん、七夜は変態だから気をつけてね」

「大丈夫ですよ煉君。七夜さん、優しいですから」

ちっがー！うー！！ 煉の馬鹿！！

「ゼノンちゃん、七夜お兄ちゃん達あつたよ」（でもあの女の人やばいかも〜）

「邪魔してはいけませんわね」

幼女達、勘違いしないでくれ！！ 俺はこんな女には興味の欠片もないんだ！！ ってか誰か気付いてなかったか？

「な・な・や・さ・ん」

「は、ははははは」

帰り際に運命と称されて半ば無理矢理連絡先を交換させられた。着信拒否とかにしようか考えたが、そうすると直接乗り込んできそう
で怖いからやめた。

花火祭りへ行こう・後編（後書き）

ヤンデレのストレスで七夜の頭痛がマッハ。
ではキャラ紹介をしましょう。

テリー・ボガード

出演：餓狼伝説

ロックの師匠。世界を旅しているはずなのに日本以外での目撃情報がない。ノリでいろいろやっってしまう。

MUGEN昔話(前書き)

自分でも何がしたいのか。教えてエロい人。

MUGEN 昔話

それはある日の事、モノがうちの本棚の奥からそれを見つけたのが始まりだった。

「カンフー、これ何？」

「おお、懐かしい。これは絵本だよ」

「それは見れば分かるよ。見た事ないタイトルなんだけど」

「マイナーだからな。どれ、読んでやろう」

俺が絵本を広げると、どこからともなくカルマとアイルーがやってきた。

「お前らも聞くか？」

「うん」

「懐かしいですニヤ。僕もパパに読んでもらったのを思い出しますニヤ」

「アイルーのパパって？」

「ご主人のパパのアイルーが僕のパパですニヤ」

よく知らんがこいつの一族はなんかうちの家系に引っ付くように仕えている。だから昔から一緒にいるんだよな。この絵本を知ってる

理由もそれ。

「じゃあ読むぞ」

「絵本なのに絵は見せてくれないの？」

「絵は重要じゃないからな。では、昔々ある村に……………」

――

昔々ある村に、1人の男が住んでおりました。男は若き時に修行を重ね、大層強かったそうです。そして心も優しく、何不自由なく生活しておりました。しかしそんな男にも悩みがありました。

「おはよう」

「……………」

人に気付いてもらえない事です。何を言っても最初には気付いてもらえない。何度も話し掛けてようやく気付いてもらえる。そして気付いてもらえても……………」

「えっと、誰だっけ？」

名前も覚えてもらえてない。何度教えても次に会う時には忘れられてしまうのです。彼は悲しかった、悔しかった、何故自分はこんなにも地味なのか。男はそんな地味な自分が大嫌いでした。

「フウツ！！ ハアツ！！」

彼はそんな気を紛らわすように鍛錬に打ち込みました。しかし彼がどんなに頑張っても彼は忘れ去られ、ついに彼は自分の名を名乗る事すら止めてしまいました。

――

「壮絶ね」

モノが言う。確かにこんな人生を送ってる人がいたら同情する。まあいた事を忘れて同情も出来ないだろうけど。

「お前みたいに一つ目だったら覚えられたかもな」

「冗談で言ってる？」

「比較的本気だが」

「本気なら良し」

「いいんだ」

「きつといいんですニヤ」

こいつの性格が分かる奴はいないんじゃないかな。まあ本人がいいならそれはいいんだろう。さて絵本の続きを読もう。

――

男はあらゆるものに興味を無くしました。自分が関わろうがなんだろうが結局忘れられるのだからです。そんなある日、魔王ミクトランが村を襲撃してくるとい話を聞きました。

魔王ミクトラン、彼は天才でした。しかし天才故にその力に溺れ、自分のように優れた人間を神のように天に住まう者、天上人とし、それ以外を地に這いずる者、地上人と分けました。そして地上人を排斥し、天上人のみが住む完璧な世界を創ろうと考えていました。

「くだらない」

男は自分の村にそんなとんでもないのが攻めてくるといっつのに日常を満喫していました。

ドガッ

そんな時、誰かが男の家のドアを蹴破ってきました。それはミクトランの手下でした。

「家がいるから人がいるかと思ったら、誰もいねえじゃねえかよ」

「人の家に入ってきて偉そうだな」

「!?!?」

「シャドウ・ドラゴン!?!」

男は巨大な気弾でミクトランの手下を吹き飛ばしました。また家を荒らされては面倒と考えた男はミクトランを倒しに外へ出ました。村では既にミクトランの手下が村人を捕まえていました。流石に男もこれは見逃せません。

「アース・ドラゴン!?!」

『うわあああああああ!?!?』

男に気付かないのが運の尽き。男が地面に手を付けると地面から沢山の気の柱が出てきてミクトランの手下を薙ぎ倒しました。

――

「絵本なのに『気』なんて単語が出るんだ」

「いや、これは俺が変えた」

実際に書いてあるのは超パワーだからな。これはある意味ぶち壊しだ。

「これからクライマックスなのかな？」

「それは聞いてからのお楽しみな」

――

男がミクトランの手下を一掃すると遂にミクトランが出てきました。ミクトランは手に持った黒い禍々しい剣を男に向けて言いました。

「貴様、よくもやってくれたな。たかだか地上人如きが」

「知るか。私の平穩を邪魔したお前が悪いのだ」

「なんだと？」

「消えたくなければ去るがいい」

「やはり地上人は野蠻で馬鹿者だな。貴様のような者は死ねい！！
ヘルスライサー！！」

「ドラゴン・スラッシュュ！！」

ミクトランが剣を振ると斬撃が飛んだが、男は気の刃でそれを撃ち落としました。そしてすぐに男はミクトランの首を掴みました。

「ぐっ！？」

男が掴むとミクトランの身体を黒い龍が這いずり、爆発しました。

「ガアッ！？ ハアハア！！」

「どっした」

「ひいっ！？」

ここでミクトランは理解しました。男は相手にしてはならない存在だったと。ミクトランはすぐに逃げ出しました。男は追いませんでした。彼は自分の周りを荒らされないならそれで良かったからです。この事がミクトランの心に深い傷を残し、二度と同じような事をしませんでした。

きつとこんな事があったのも忘れられるでしょう。しかし私はこの絵本を描く事によって彼を忘れません。

――

「小さな村人に住んでいた『J』の事を。おしまい」

「変な話。普通絵本とかは教訓とかを教えるんじゃないの？」

「そうだな」

でもこの絵本はこういう風でいいかもしれない。この著者はただこの男の事を残すためにやったのだから。誰もが忘れた英雄を残したかったんだろう。

MUGEN昔話（後書き）

カンフーの家に代々伝わる謎の昔話。地味な人でも大切に。
ではキャラ紹介をしましょう。

村人J

出演：レイジ・オブ・ザ・ドラゴンズ、MUGENオリジナル
地味な人。でもとても強い。

ミクトラン

出演：テイルズ・オブ・デステイニー

魔王役。テイルズシリーズで救いようのないラスボスナンバーワン
だと作者は信じている。オリジナルデステイニーでの弱さからテイ
ルズシリーズで最弱なラスボスナンバーワンとも作者は信じている。

期末試験(前書き)

面倒だよね。やりたくないよね。だがやらないといけないんだ。

期末試験

今年もこの時期がやってきたわね。あの恐怖の期末試験の時期が。

「博麗、勉強やってるか？」

「うっさいわよ。やってないから焦ってるのよ。そういうカンフーはどうなのよ」

ロックは何気に頭がいいし、七夜は煉が見張ってるから勉強せざる負えないのよね。

「今年はカルマがいるからな」

「カルマちゃん？ あの子がなんなのよ」

「カルマは頭がいいからな。俺が分からん問題は教えてくれる」

「兄としてどうなのよ」

しかしカルマちゃんって高校の問題が分かるなんて偉いわね。ってそんな事考えてる場合じゃないのよ。

「博麗、大丈夫か？ 教えてやるつか？」

「本当ロック！！」

「ああ」

助かるわ。ロツクに教えてもらえるとっただけで安心感が増し増しよ。まずは何から聞こうかしら。

「じゃあこれから」

「なんだ博麗、この程度も分からないのか？」

「七夜、あんたはいらないの」

「博麗の巫女の名が泣くぞ」

「別に博麗の巫女は勉強出来なくてもいいのよ。お祓いとかが出来たら十分」

「案外楽な仕事なんだな、博麗の巫女って」

まあ実際には銭勘定出来るくらいには数学が出来ると便利ね。それは自然に覚えたから数学もいらないけど。

「しかしそこまでして点を取らないといけないもんか？」

「天才は赤点の恐怖を知らないからよ」

大門先生やWind先生、スペランカー先生ならともかく、他の先生は赤点取ると危険なのよ。

「それで何を知りたいんだ？」

「この英文法なんだけど」

「座りなさい。時間よ」

ナイア先生、タイミング悪過ぎよ。謀ったわね。

「今回からテストの形式が変わるから」

「形式？ マークシートにでもなるんですか？」

「惜しいわ博麗。校長が今回決めた方式はこれよ」

問題：この中で空手の技はどれでしょう。

A：震脚 B：昇竜拳

C：双掌進 D：ウルトラバックドロップ

ミリオ アか！！ ってか今の答えないでしょう。しかも一つカタカナだし。

「ちなみに今の答えはウルトラバックドロップよ」

「分かりますよ」

「常識だな」

ちよっ、みんなおかしいわよ。それは空手でも何でもないわよ。

「これは全39問あるわ。そしてこのクラスは40人。この意味が分かるかしら？」

「もしかして、勝ち抜け？」

「そうよロツク。最後まで残った生徒が赤点。早押しだけど間違えたら一回休みよ」

完全にクイズじゃない。でもこれなら勝ち目があるわ。やってやるわよ。

「では第一問」

――

まさか最後まで残るなんて。他に残っているのは……

「くそっ！！ 全然わかんねえ！！」

……なんだキワミか。

「最終問題。次のうち年間売上が一番の企業は？」

A：ボーダー商事

B：ルガルル運送

C：ネスツ医療

D：ハワードコネクション

「あれ？ 英語じゃ」

「サービス問題よ」

サービス問題でも難しいんだけど。どの企業かしら。

「はい！！」

「ではキワミ」

「実は全部同じ！！」

「違うわよ。博麗は分かる？」

「……ネスツ医療」

「正解」

「ちくしょおおおお！！」

良かった。なんとなく医療関係は高いと思ったら当たったわ。さあこの先も当てていくわよ。あいつがいる限り負ける気はしないわ。

あれから何度もテストがあったけど、結局キワミが負け続けてた。私だって得意科目では早めに抜けたのに。

「F O O、日本史最終問題です」

日本史は苦手でキワミと一緒に最後まで残ったけど、今回だって大丈夫よ。あ、紹介忘れてたけど日本史の先生は天草四郎時貞先生。うちの学校、日本史と世界史と社会科は別なのよね。

「赤報隊結成の「滋賀県愛知郡愛荘町にある金剛輪寺！！ 別名は松尾寺！！」F O O！！ キワミ君お見事！！」

「えっ？」

なんでそんなに詳しいの？ 普通あそこまで知らないわよ。ファンなの？

「博麗君、汝のカルマ、救い難し」

「ウゾダンドドコドーン！！」

シヨックだわ。赤点とかそんな事よりもキワミに負けた事が何よりもシヨック。夏休みの補習が鬱だわ。

期末試験（後書き）

まさかキワミが出るとは思わなかったろう。うちの霊夢は頭か？ほ
どではないけどよろしくない。
ではキャラ紹介です。

キワミ

出演：るろくに剣心、ニコニコ動画、MUGENオリジナル
もつニコニコ動画のキャラでいいと思う。自爆技が豊富。

天草四郎時貞

出演：サムライスピリッツ

F o o これが彼を表す一言である。日本史の先生。

煉君バイトする(前書き)

題名通りです。

煉君バイトする

僕は悩んでいた。居候なのに働かなくていいのだろうか。いや、ただ七夜の世話をするだけではないけない。仕事を探そう。幸い夏休みに入ったからその手の短期バイトは多いはず。新聞のチラシとかに

……

「うーん」

どれも条件が厳しいな。僕って子供に見られちゃうし、あんまり長い期間だと七夜の世話が出来ないし。

「……………あ」

あった。年齢性別不問の短期バイト。給料もかなり高い。早速連絡してみよう。

ピッポッパッ プルルルルプルルルル ガチャ

『はい、ありがとうございます。ルガール運送です』

「あの、バイトの記事を見たんですけど」

『ありがとうございます。お名前とお住まいをお教えいただけますか？』

「煉です。夢弦市在住です」

『煉様ですね。夢弦市在住でしたらルガール運送本社にて面接にな

ります。明日の午前10時となります。身分証と筆記用具をお持ちいただけますでしょうか？」

「大丈夫です」

『ありがとうございます。ではお待ちしております』

やった。とりあえず面接をしてもらえろぞ。上手く受かるといいな。

――

次の日、七夜がまだ起きないけど朝食兼昼食を作っておけば大丈夫かな。

「行つてきます」

小声でそう言つてから家を出る。ルガール運送本社は徒歩15分と結構近所にある。

「やっぱり大きい」

普段見慣れたルガール運送本社だけど、面接のために入るとなると

緊張する。入るの自体初めてだし。

「いらっしゃいませ。ルガル運送本社へようこそ」

「あ、あの、バイトの面接なんですけど」

「でしたらこちらのマップのこの場所になります」

会社内のマップがあるなんて、流石ルガル運送。まずは教えてもらった場所に行こう。

「この部屋かな」

「！ 煉にいちゃ」

「カルマちゃん。カルマちゃんもバイト？」

「ん。人生経験」

「受験生なのに大丈夫？」

「推薦通った」

つまりもう高校が決まったの？ カルマちゃんって凄いな。七夜も見習わせたいよ。

「えっと、順番は」

「モニタ」

カルマちゃんが指差す電子モニターに名前がいくつも書いてあった。ピンポーンという電子音と共に名前が赤くなり、人が部屋へと入っていく。

ピンポーン

「きた」

「頑張つてね」

「ん！」

カルマちゃんが部屋へ入っていく。それにしても随分人数が多いな。受かるか心配になってきた。

ピンポーン

「もう僕か」

これだけの人数がいるから流れ作業みたいにやってるのかも。

「失礼します」

「おや、煉君……だったか」

「アーデルハイドさん！　なんで面接官を？」

「まあ夏休みの小遣い稼ぎみたいなものさ。コンビニとかでも良かったんだけど、バーンシュタインの名を出すと変な扱いをされてね」

「御曹司も大変ですね」

「全くだよ」

面接官がアーデルハイドさんって事で緊張がなくなった。僕も単純だな。

「君の人格は知ってるから、殆どの質問は省くよ。聞きたいのは1つだけだ」

「何でしょう?」

「運送技は使えるかな?」

――

ハッハッハ！ 突然ですまないね。私はルガール・バーンシュタインだ。ここでは運送技を知らない人のために運送技の説明しよう!!

通常運送

これは基本的な運送技だな。私のギガンティックプレッシャーはこ

れに属するな。技の内容としては相手を掴んでそのまま壁に叩きつけるものだ。中には地面に押し付けながら走るものもあるぞ。

縦運送

これは相手を掴んで縦に投げる技だ。掴んだまま持ち上げるものもあるぞ。見た目は地味だが破壊力は抜群だ。私も使える技だ。

仕分け

これは相手を壁に押し付けた後に無数の攻撃を叩き込む技だ。この作品ではクリザリッド君やオズワルドさんなんかが使い手だな。

空輸

これは運送技でも掴みが必要としないものがある珍しい種類だ。1度当たっただけでは運送技としては成立しないのだが、連続で当てることにより運送技となるのだ。私の会社の子会社であるマスターアジア空輸の社長、東方不敗マスターアジアさんなんかはこれの名人だ。

さあ運送技を理解したかな？　だがこれはMUGEN用語のほんの一部。みんなもMUGEN用語を理解して楽しいMUGENライフを！　では本編へ戻ろう！！

――

何か挟んだ気もするけど、とりあえず答えないと。

「使えますよ」

「なら少し見せてくれないか？」

「荷物がないんですけど」

「このサンドバッグ君に頼むよ」

アーデルハイドさんが持ってきたのはサンドバッグに可愛い目が付いたもの。ちよっと罪悪感があるんだけど。

「行きます。ふう……たあああ！！」

爆発による推進力でサンドバッグ君を掴んで壁へ持つて行く。荷物と考えるとぶつけないように気をつける。というかこんな可愛い目をしてるものをぶつけない。

「いい技だ。合格だよ。あっちの扉から出て行くと会場に着くから」

「ありがとうございます！でも会場って？」

「合格者は集められるんだよ。君は典型的に通常運送に回されるだろう」

それぞれ配属先に分けられるのが会場なんだな。早速行こう。

――

会場には沢山の人がいた。ここにいるのが全員バイトなんだ。

「皆さん注目して下さい！ 私がルガール・バーンシュタインの妻のサユリ・バーンシュタインです！！」

あの人ガールさんの奥さん？ まるで学生みたいに若いんだけど。よく考えるとアーデルハイドさんのお母さんでもあるんだよね。

「皆さんが運送したサンドバッグ君には特別な機械が入ってて、その機械が運送データを記録して皆さんに合った部署を自動検索してくれます」

サユリさんの言葉が終わると同時にサユリさんの後ろのモニターにバイトの名前と配属先が映された。僕は通常運送だった。

「頑張った人には出来高ボーナスがありますからね」

そんなのもあるんだ。よし、明日から頑張るぞ。

――

「このバイトはさして面白いトラブルもなく進んだので、カット」

――

バイトを始めて早一週間。今日のバイトも無事に終わり、そして給料を貰う時がきた。

「やあ煉君。七夜君達は元気かね？」

「お陰様で」

なんでか僕は直接社長室に呼ばれてお給料を貰うことになった。

「君の働きは実に素晴らしい。そこでどうかね。我が社に入らないか？」

「えっ、それって」

「もちろん無理には言わない。入るかどうかは君の自由だ」

入ればそこらの企業より圧倒的な好待遇を受けるのは間違いない。でも……

「ごめんなさい」

「そうか。だが君が謝る必要はない。これはバイト料だ。多少色を付けておいた」

「ありがとうございます」

社長から封筒を受け取り、僕はルガー運送本社を出た。そしてうちに戻ると七夜がご飯を作っていてくれた。

「どうしたの？ 普段そんな事しないのに」

「仕事を頑張ったお前への礼だ」

「似合わないの」

「五月蠅い。そんな事より給料はどうなんだ？」

全くもつ。でも僕も気になるから見てもよつ。

「しかし薄い給料袋だな。数万じゃないか？」

「でも十分だよ」

ピラッ

封筒を開けると出てきたのは紙1枚。

「嘘……」

「……マジか」

紙はお札なんかじゃなくて数字の書いてある紙。つまり小切手だった。そこに書いてあった数字は……

「99万円……」

「税金が掛からないギリギリか。しかしくれすぎだろ」

……七夜に手が掛からないようになったらルガー爾運送に就職しようかな。

煉君バイトする（後書き）

あの99万円は大半が社長のポケットマネー。そしてカルマちゃん
は仕分けをやっていたようです。
ではキャラ紹介をしましょう。

サユリ・バーンシユタイン

出演：EFZ、MUGENオリジナル

マジカルステッキを持って戦う奥さん。旦那であるルガルと同じ
ような技を使う。カンフーマンやカルマのお母さんと知り合いらし
い。

ついでにこの人も。

カットの人

花火祭りの前編にも出たこの人、実は一度名前が出ただけのワラキ
ア先生だったんだよ！！

四者面談（前書き）

なんとなく会わせてみました。

四者面談

俺、カンフーマンは現在非常に危険な状況に置かれている。とにかくこの状況を見てほしい。こいつをどう思う？

「カンフーと一緒に暮らして何が悪い！！ 私がガンダムだ！！」

「なあと訳の分からん事をいやがる！！ この寮にはまだ部屋が空いてるだろうがあああああ！！」

「カンフーマンさんの迷惑を考えた事がありますか？ この国で育ったのならば一歩引くのが礼儀というもの」

そう、すごく、危険です。モノとコマチと市さんがいるだけでこんな状況になるなんて。カルマはアイルーが逃がしたから大丈夫だが、俺が大丈夫じゃないんだよ。本当に、どうしてこうなった……………

――

それはいつもの朝、とはちょっとぴり違う朝。

「ゲーゲー」

「……漫画みたいなびきだな」

ツッコミどころが違うだと自分にツッコミたくなる。問題はモノが俺のベッドの中にいるって事だろ。

「起きろ。邪魔だ」

「うん、後5刹那」

「はい起きた。今刹那と言った瞬間にお前起きた」

「ゲーゲー」

「……まさか、本当に寝てるのか？」

だとしたらとんでもない寝言だ。これだけはつきりした寝言を言うなんてある種の病気じゃないのか？

「いい加減起きて離れろ」

「ん」

ガチャ

「にいちゃ、お客」

「……カンフー、何をしている？」

「これは説明してもらいませんかね」

どうしてコマチと市さんの2人が一緒にいらっしやるのですか？

「五月蠅いなあ」

「やっと起きたか！！ 何故俺のベッドの中にいた!？」

「酷いわ！！ 私を弄んだのね!!！」

こ、こいつ、こんな時に限ってこんなボケをかましやがった。ああ、
2人の殺気がぐんぐん上がっている。俺オワタ＼(＾o＾)／

――

もう嫌だ。俺はあの後すぐにワ―デスとオーモ―イーガーが食らって
て身体がボロボロだよ。

「結局あんた達のは嫉妬じゃん！！ カンフーと一緒に寝たいんで
しょ!？」

モノ、何を言ってるんだ。そんな事あるはずがないだろう。

「ば、馬鹿か貴様あ！！ そんな事があるかあ！！」

ほらコマチだってこう言ってるのにモノは何を考えてんだか。俺は今まで告白された事もラブレターを貰った事もない人間だぞ。

「私はしたいです」

「へっ？」

「ほれ見なさい」

「私はカンフーマンさんが好きです。いい機会ですからはっきり言います。コマチさんにもモノさんにも負けません」

市さん、一歩引く精神はどこへ消えた。

「おい！ あたしは」

「ふふん、市にそんな事出来る？ コマチには無理みただけど」

「当然です。コマチさんとは違いますので」

いやいやいや、何故そうなるんだ！！ そうか、夢なんだ。これは夢に違いない。だから起きれば全てが日常に戻るはず。

「……やってやるうじゃねえか！！ カンフーと一緒に寝る程度お、朝飯前だあ！！」

「コマチさーん！？」

落ち着けカンフーマン。夢なんだから何でもあるんだ。コマチがこんな有り得ない事を言うのだからおかしくない。

「表へ出るお！！ 誰が上かあ、はっきりさせてやるうっじゃねえか
ああああああああ！！！！」

「野蛮ですね。力でなんでも決められると思っておいでで？」

「来いよコマチ、鎌なんて捨てて掛かってこい！！」

「あの、お二方？」

「ハッハー！！ 一騎打ちだモノ！！」

「負けるのが怖い弱虫市はいらないね」

「っ！！ いいでしょう。相手に、カンフーマンさん？」

夢だ夢だ夢なんだぞ。だから何をしても大丈夫。何をしてもおかしくない。だから俺が空を飛ぶのだから出来るんだ。

「アイ」

窓を開ける。ここは4階。

「キャン」

窓に足を掛ける。後ろで声が聞こえるが気にしない。

四者面談（後書き）

北斗神拳ってすげー！！ カンフーが自分を鈍感と気付く回でしたね（えっ

キャラ紹介もないのでちゃっちゃと終わらしましょう。では。

海水浴（前書き）

夏休みなんて海水浴。

海水浴

今日は俺と煉の2人で海水浴の予定だった。プールでも良かったんだが、煉が海がいいというから海水浴にしたんだ。海までは無事だった。誰にも見つからず、海に着いたんだ。

「なのはどうしている!?!」

「七夜をストーキングしたからかしら」

「七夜が逃げるからよお」

「私達はいつも七夜君と居たいのですよ?」

この変態3人はどうにかならないのか? 助けてくれ、煉。

「七夜! 泳いできていい?」

「……………行ってらっしゃい」

「わーい!?!」

子供だなあ、ほろり。

「七夜じゃんか。お前も海水浴か?」

「カンフー! カンフーじゃないか!?!」

「うちも海水浴に来ててな。さっき向こうで博麗とかロックも見た

ぞ」

神はいたのだ！！　こんなBBAから俺を救ってくれる女神様（幼女）が！！

「カンフー、もしかして霊姫とかも？」

「いましたよ。ロックも博麗も霊姫さんの家族と一緒に来たみたいですから」

「そう。挨拶してくるわ」

な、ナイアが俺より他を優先しただと？　同じ教師であるジョンス先生に挨拶なら分かるんだが、どういう知り合いだ？

「カルマちゃんや取り巻きはどうした」

「取り巻きって、コマチとモノと市さんか？」

「そうそれ」

「3人はカルマを交えてビーチバレーでもやってるはずだ。俺はなんか食い物探しに。じゃあな」

「あー！」

逃げられた。俺の近くにあれがいるのを見て見捨てるとは、お前はそれでも幼なじみか！！

「七夜さん、こんな所で会うなんて奇遇ですね」

ビクウッ

「えっ、な、ナコルル、だっけ？」

「はい。覚えていてくれたのですね。嬉しいです」

覚えてたくなかったよ！！ けどもし忘れてもしようものなら殺される気がしたんだよ！！

「あらあ、誰かしら？」

「随分馴れ馴れしいですね。七夜君、彼女から離れた方がいいですよ」

間桐桜、今回はあなたに全力で賛成したいが、そんな事しようものなら……

「大変ですね七夜さん、あんなのに縛られてしまつて。大丈夫ですよ、私はあんな風に縛りません。ただ一緒にいければそれだけで」

「ふふ、昔の桜ちゃんみたいね」

「あの時に感じたのは彼女ですか。それにしてもあれが昔の私なんて」

「自分の事は気付かないものよ」

「ナイアさん、お帰りなさい」

この中では一番常識のあるナイアが戻ってきたか。助かるか？

「私はナイア。貴女の名前は？」

「ナコルルです。貴女も七夜さんを縛るつもりですか？」

「まさか。貴女も私達の仲間になろうと思って」

なん……………だと……………！？

「どういう事が分かりかねます」

「もし貴女が七夜を独り占めしようものなら私達は貴女を全力で排除するわ。だけど仲間になれば七夜を共有出来るわ。七夜と同じ学校、クラスに入れるようにも手配してあげる」

「ぜ、ぜ、絶望した！！　なんか変なのが増える事に絶望した！！
女神様（幼女）助けて！！」

「分かりました」

分かるな……………！！

「もうナイアったら」

「仕方ないですね」

……………あーあ、出会っちゃったか（号泣）

――

今日、俺は博霊家に誘われて海水浴に来ている。

「ロックお兄ちゃん!! 海の家に行こ!!」(シャワー室でも可
!!) むしろバッチコイ!!)

「そう急がなくても大丈夫だよ」

「ロックく、私と霊姫姉さんとジョンス先生になんか飲み物お願い」

「分かった」

博麗は泳ぐわけでもないし、焼くわけでもないし、何の目的に来たんだ？ お呼ばれたからか？

「いらっしやい」

「おじさん、焼きトウモロコシ2つとポカリス ット5つ頂戴!!」

「都子ちゃん、おじさんなんて言ったら駄目だろ」

海の子供の店員さんはまだまだ若く見えるんだから。だけど子供から

見たらおじさんなんだろうな。

「ははは、ワカメとかピアノストって言われるよりはいいさ」

「分かる〜」

「やっぱりか〜」

普段どんな風に言われてるんだ。そっちの方が気になるぞ。

「店員さん、こっちにビールくれ」

「ちょっとお待ちを。トウモロコシ焼けたぜ。熱いから気をつける

よ

「ありがとう!」

「んじゃ戻るか」

「うん!」

随分心の広い店員さんだったな。

ー
ー
楽しいと時間の流れは早い。だが苦しいと遅くなる。それを実感したよ。今はカンフー組と合流して帰り支度をしている。

「七夜、顔色悪いぞ」

「当然だろ」

あの4人に囲まれての海水浴なんか楽しめるか。幼女を追っかける暇もなかったぜ。煉も……………

「煉はどこだ？」

「何？」

「煉、煉！！」

「おい！！」

俺はどこにもいない煉を探して走り出した。あいつは勝手にいなくなったりしない。もしかしたら事件に巻き込まれているのか？
そっ！！ どうしてもっと早くに気付かなかった！！

「いない。こっちか！？」

夕方の砂浜には人が少ない。とは言っても探索は容易ではない。

「お前は七夜じゃないか」

いきなり声をかけられて振り返るとジョンス先生とその家族＋がいた。

「ジョンス先生！ 煉を見ませんでしたか！？」

「煉？ 俺は知らんな」

「私見たよ」

「都子ちゃん本当か！！」

「うん、あっち。飲み物買った」

「すまない！！」

無事であってくれよ。

――

「んんー！！」

「騒ぐんじゃねえ!!」

今、僕は変な男に捕まっている。1人で行動せずに七夜と一緒にいれば良かった。

「んー!! んんー!!」

「いい加減にしろよ? このナイフで首をかつきるぞ、嬢ちゃん」

僕は男だ!! でも縛られて猿轡もされてる状態じゃそれも言えない。セパレートな水着なんか着ずに海パンにすれば良かった。

「海のゴミがここにもあったか」

「あゝあん? なんだてめえは」

「海の家の店員だ」

人が来てくれた。でもこの男、不意打ちとはいえ僕に勝った奴。危ないよ。

「俺様は闇のアギトだぞ? 海の家のピアニスト如きが勝てるかよ!!」

男はナイフを店員さんに投げつける。それは店員さんの麦わら帽子だけを貫いていった。

「これで実力の違いが分かったか?」

「ああ、よおく分かった。曲芸の実力じゃぼろ負けだ」

「曲芸、だとお！？ ぶち殺してやる！！」

「吠えるのはいいが、遅いんだよ」

店員さんが消えたかと思うと、男に無数の攻撃が全方面から加えられた。今のは七夜が弾幕状態になった時に使うセブンスヘヴン！？でも威力が桁違いだ。

「く、殺す！！ ぜってえ殺す！！」

「まだ動けたのか。まあそんな事をほざくのはいいが、足元注意しろ」

「！？」

「アホか、上だ」

「なっ！？ ぎゃあああああ！！」

足元に注意をいかせておいてからの落雷攻撃！？ この人、戦い慣れている。

「この、闇のアギト様があ……………」

「闇なんて使うのは深淵を理解してからにしろ、ガキ。お前は今世に見込みがない。来世に賭けるなら、転生料は安くしてやるぜ」

「煉！！」

「あ、七夜!!」

七夜だけじゃない。いろんな人が来てくれた。こんなに僕を探してくれたんだ。

「おつ、カンフーに七夜。それにさっきの坊主に娘に、意外に知り合い多いな」

「げっ、ロア」

「げっ、とはなんだ七夜。セブンス使いこなせるようになったのか？」

「まあまあだ」

この人って七夜の知り合いだったの？ しかもセブンスを教えた人みたい。

「ロア兄、久しぶり」

「久しぶりだなカンフー。カルマまでいるじゃんか」

「ん」

「相変わらず無口だな」

「貴方も相変わらずね、アカシヤの蛇」

「そつちもな、這い寄る混沌。俺は清掃の仕事があるからもう行く」

そう言って店員さんは行っちゃった。何だったんだろ。帰ったら七夜に聞いてみよう。

海水浴（後書き）

実はモノって片手片足が泥の義手義足なんですよ。だから海に入れません。ちなみに内臓も欠けてたり、位置がバラバラだったりする。それにしても七夜にとって厄介な同盟が出来ちゃいましたね。ではキャラ紹介をしましょう。

ミハイル・ロア・バルダムヨオン

出演：メルティブラッド

昔、カンフーや七夜の近所に住んでた人。通称ロア兄、アカシヤの蛇。七夜にセブンスを教えた人。見た目が変わらなかつたり、裏とパイプがあつたりするらしい。ピアニストやらワカメと呼ばれるが慣れたもの。かつこいいロアを指摘した結果。

闇崎アキト

出演：大番長

自称闇のアギト。使い捨てキャラ。

宇宙からの来訪者（前書き）

ロックは自由研究をしたかっただけなのに……

宇宙からの来訪者

ここは地球の外、つまり宇宙である。そこに一機の巨大宇宙船が浮いていた。

「出来た、遂に完成だ!!」

「これにより地球は我々の物となるのだ!!」

宇宙船内にいた彼らはジュラル星人。地球を侵略しようとする悪の宇宙人である。彼らは今回、なにやら凄い兵器を造ったようだ。だがそんな悪を見逃さない存在がいた。

「お前達、何をしている!!」

「むむっ!? ウルトラマン!!」

ウルトラマンは宇宙の悪を排斥する、警察のような存在である。

「いつもは負けているが、今回はそうはいかないぞ!! あれを出せ!!」

「了解です!!」

1人のジュラル星人がボタンを押すと、扉が開き……………

「な、ない!?」

「あ、ハッチが開いている!? まさか地球に!?!」

「何がしたかったのか分からないが、まずはお前達から成敗してくれるー!!」

「くそおおおおおおお!!?」

――

よう、ロックだ。俺は今、公園で夏休みの自由研究として星の観察をしている。なんとも地味だが、晴れていればいつでも出来るのがいい。

「おっ、流れ星」

かなり光ってるな。このままだとこっちに降ってきそうくらい…

……

「って来てる来てる!?!」

滅茶苦茶こっちに飛んできてるぞ!! 隕石なのか!? 自由研究がはかどるな!!

「って考えてる暇じゃねえ!!」

チュドーン

「うおおおおおおおお!!!!?」

落ちた。目の前に隕石が落ちたぞ!! 公園に巨大クレーターが空いたが大丈夫か?

みよーん

「ん?」

今の変な音、いや声はなんだ? 隕石から聞こえた気が……

「隕、石? これは機械か?」

どう見ても鉄の塊だよな。宇宙金属とかそんな感じか。近付いたら熱いからしばらく離れていよう。

みよーん

また聞こえた。確実にこいつだよな。

ウィーン

「!?!」

動いた! なんだか知らないがやばいな。戦闘準備くらいはしておこう。

ガチャガチャ ウイーン みょーん

鉄の塊から脚が四本、そして少女の上半身が出てきた。って少女！
？ しかも胸を僅かに隠す程度のものしか着けてない。

「起動確認」

「……」

「マスター認証を開始します」

「な、なんだあ？」

「ピピッ、お名前を」

「あ、えー、ロツクだ」

「ロツク様、認証完了しました」

これって彼女のマスターになったっていう事でいいんだよな。訳が分からなくなってきた。自由研究はどうなってしまっただ。

「ロツク様、ご命令を」

「命令？ 君は何が出来るんだ？ いや、その前に君の名前を聞こうか」

「了解。個体名みよメガです」

「みよメガ……また変な名前だな。分かりやすくみよんでいいか？ さつきもみよんみよん言ってたし」

「個体名変更。みよんに変更しました」

「ありがとうございます。じゃあ出来る事って？」

「破壊活動です」

うん、見た目からなんとなく想像出来た。最終兵器彼女よりよっぽど凄いインパクトだよ。

「いたぞ！！ みよメガだ！！」

「宇宙人！？」

「あれはみよんを造ったジュラル星人です」

「なんだあの地球人は」

「まさか、マスター登録をしてしまったのか！？ ええい、あの男を殺せ！！」

「いや、みよメガのマスター再登録は面倒だ。あの男を洗脳してやる」

こつちの事情をお構いなしに物騒な事を話しやがって。懲らしめてやる。

「限界まで、飛ばすぜ」

キユイイイイイン

「みよん？」

「波動砲」

チユドーン

「「「ぎゃあああああ！！？」」」

「き、貴様！！ 我々に造られた兵器のくせに！！」

「みよん、ここは俺がやる」

「ロツク様、いけません」

「いいから見てる」

「地球人如きで我らジュラル星人に適うと「ダンクッ！！」ぐへっ
！？」

「御託はいいから来な」

「この卑怯者め！！」

ジュラル星人とやらは光線銃みたいのを取り出して構えるが、いちいち無駄ばかりだ。

「終わりだ。シャイン……ナツクル！！」

「ぬおあああああ！？」

「よええな。さて宇宙人、さっきからずっと気になっている事がある。彼女はどうかやって造った」

「……地球より500年進んだ科学力を持つジュラル星人にとって簡単な事。人間の小娘と超兵器オメガを融合させたのだ」

「んだと？ その子の幸せを考えた事があるのか！？」

「地球は我々が支配をする。だというのに小娘の幸せを考えると？ それにあのような姿ではもう幸せなど掴め「黙れ」ぐべっ！？」

俺はペラペラと喋るジュラル星人を黙らせるために顔面を殴りつけた。

「彼女は幸せになる。俺がしてやる！！」

「素晴らしい決意だ、地球人の青年よ」

「えっ？」

ズーン

「で、デカイ」

突然赤と白の巨人が近くに降りてきた。手に籠を持っていて、その中にはジュラル星人が入っていた。

「ロック様、あれはM78星雲に住むウルトラマンです」

「初めまして、私はウルトラマンだ」

「ロック、です」

「何故私がいるのか不思議そうな顔をしているね。理由は簡単だ。そのジュラル星人を捕まえにきた」

「はあ」

事情はなんとなく掴めた。しかし本当にデカイ。

「彼女はこちらで保護すべきかと考えたが、君に任せよう。さらばだ！ 心優しい青年よ！！」

飛んでったな。さて、みよんはどうしようか。ああ言ったからにはちゃんと世話をするつもりだけど、問題がある。

「ロック様？ 悩み事ですか？」

「その下半身どうかならない？」

そう、問題とは彼女の下半身の機械。多分これがオメガなんだろうけど、これがあると街を歩くどころか部屋に入る事すら

「分かりました」

「えっ？ 何とかなるのか？」

「はい。よいしょ」

「はあっ！？／／／／」

突然彼女は湯船から出るようにオメガから離れた。いや、それはいい。けど下半身に何も着てないってどういう事だよ！？ いや、上半身が申し訳程度に隠してない時点で気付くべきだった。

「心拍数急上昇を確認。大丈夫ですか？」

「大丈夫！ 大丈夫だから家まではそれ穿いてて！！」

「了解」

ああ、なんか大変だ。もう今回の出来事を文章に纏めてそれを自由研究にしよう。

宇宙からの来訪者（後書き）

ロックのロリロリハーレムは順調に形成中。残念なハーレムよりかはマシかもしれない。マシ、なのかな？
ではキャラ紹介をしましょう。

ジュラル星人

出演：チャージマン研！

キチガイ宇宙人。高度な科学力を持ちながら持て余しているようにしか見えない。みよメガは唯一の成功例かも。

ウルトラマン

出演：ウルトラマン

みんな大好き星の巨人。宇宙の警察的な事をしている。

みよメガ

出演：FF、東方project、MUGENオリジナル

みよんという少女（魂魄妖夢に非ず）をオメガに組み合わせた存在。主に忠実。改造されたせいで背中からミサイルが出たり、腕が変化したりする。オメガは着脱可能。中は蒸れるらしい。羞恥心はない。

そうだ。ちょっと皆さんに聞きたい。今まで出演したキャラで、そのキャラメインの話を書いてほしいという人がいれば感想にキャラ名を書き込んで下さい。あくまで新規ではなく今まで出演したキャラですからね。

これが中間中国だ！！（前書き）

上手く書けなかった。

「これが中間中国だ!!」

ふふふ　　今日も美味しい朝ご飯が出来ました。

「クリザリッドさん、朝ですよ!」

「……美鈴がキスしてくれたら起きる」

「もう、甘えん坊さん」

チュッ

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

クリザリッドさんったら休日はいつもこんな感じなんだから。でもいつも頑張ってくれているから許しちゃう。

「今日の飯も美味しいな」

「食べる前からそんな」

「美鈴の飯が不味いわけがないだろう」

「うふふ」

今では料理の腕も上がりましたが、昔はお米を洗剤で洗っちゃうよ
うな感じだったんです。でもクリザリッドさんはいつも無理して全

部食べてくれて、いつか本当に美味しいご飯を食べさせてあげたか
ったんです。

ピンポン

「こんな朝から誰が来たんだ？」

「出ますね」

「いや、美鈴は座っていてくれ」

「じゃあお願いしますね」

クリザリッドさん優しいな。だから大好き。

「君達が来るとは珍しいな」

「帰ってきたからな」

「朝からごめんね」

今の声は聞き覚えがある。あの2人が来るなんて、今日はいいい日
なりそう。

「美鈴、久しぶりだ」

「久しぶり、姉さん、シヨボン君」

「メイちゃん幸せそうだね」

「だってクリザリッドさんと一緒なもの」

「ははは……………リア充爆発しろ!!」

「君が言うな、シヨボン」

やってきたのは私の色違いみたいだけど鋭さが全然違う紅魅^{ホンミレイ}霊姉さんと、姉さんの戦闘のパートナーで幼なじみのシヨボン。2人の夕ツグは強力で相性もばっちり。でも私達も負けてないけどね。

「父さんには会いに行ったの？」

「まだだが」

「心配してたわよ。自分の跡を継いで傭兵なんてやってるから」

「好きでやっている事だ。だが後で連絡は入れよう」

姉さんはそういうのに鈍いというか興味がないというか。でも私には絶対に会いに来てくれるのを考えると、父さんって…………

「しかし困ったな。2人の食事は用意してないぞ」

「問題ない。私達はただ顔見せに来ただけだ」

「ミイちゃんが戦地から帰ってきたからね。僕は付き添い」

「そうなんだ」

「ではな、美鈴、クリザリッド」

「またね」

2人共もつとのんびりしていけば良かったのに。でも今日はクリザリッドさんとお出かけするからちょっと嬉しかったりして。

「今日はどこに行きましようか？」

「美鈴が行きたい場所ならどこでもいいさ」

「いつもそう言って。たまにはクリザリッドさんも我が儘を言ってもいいんですよ」

「そうか？　なら我が儘を言わせてもらおうよ」

――

いつもは美鈴の好きな場所に行くんだが、今回は気を使わせてしまったかな。

「映画ですか。いいですね」

「観たかったのがあったからな。なかなか楽しそうだぞ」

「『ポルターガイスト』ですか。名前は普通なホラー映画って感じですかね」

「俺も話に聞いた程度だからなんとも」

ただ楽しいと知り合いに言われただけだから情報が少ない。宣伝もあまりしてなかったのを見るにB級な雰囲気もするな。だがそれがいい。

「飲み物は買うか？」

「それじゃあ私が」

「いや俺が」

「今日はクリザリッドさんは休んで下さい」

「美鈴はいつも俺のためにいろいろやってくれるだろう。だから」

「私だってやりたくてやって」

ジッ ジジッー

「「あ……」」

館内が暗くなり、テープが動く音が聞こえた。口論をしている間に映画が始まってしまったようだ。

「……今度からはどっちかが引きましょう」

「そっだな」

そうすると両方が譲り続ける結果しか見えないが、今は映画に集中しよう。

「なんだか映像が汚いです」

「映画撮影用のカメラではなくハンディカメラで撮っているのか」

成る程、無駄に綺麗な映像よりかはホラー感が出ている。始まりは新居に引っ越してきた夫婦が家の中を撮影しているという設定か。

『すっごくいいお家ね』

『……………そっだな』

なんだ？ 今の夫役の間は。

「ひっ!？」

「どっした美鈴」

「い、今、画面端に女の子が」

「ホラー映画だからな」

俺は気付かなかったな。けどそんな気付かないようなくらい小さ

なものを入れるか？ まさかホラー映画に映った本物とやらか？

1時間後……

所々奇妙な点もあったが、ここまで目立った霊現象はないのか。珍しいホラーだ。

『引っ越してきて1ヶ月です』

妻役的女性がVサインをして映像に映っている時、その背後を何か走った。

『おい！！』

『今、後ろに何か』

夫役男性が慌て、妻役女性も何かに気付いたようだ。映像は一旦途切れ、また映り出す。2人が映像を確認していたのだろう。

『幽霊だよ』

『そうだったな』

スタッフロールを眺めているとある事に気がついた。スタッフが異常なまでに少ない。出演者や映像を編集した人物の名前しか見られない。そして最後、真っ暗になった画面にあるものが映し出された。

――この物語はノンフィクションです。

――

「なんですかあの映画はー!!」

「そう怒らないでくれ。俺だってあんな結末なんて知らなかったんだ」

「ノンフィクションなんて怖いじゃないですか!!」

ノンフィクションというだけでそんなに怖いものだろうか。まあこうやって怒っている美鈴も可愛いから役得か。

「美味しいレストランを予約してあるから許してくれ」

「……………中華ですか？」

「もちろんだ」

「なら許してあげます」

美鈴は本当に可愛いな。全部が可愛い。

「では急ごうか」

「ひゃっ!?!」

俺は美鈴をお姫様抱っこで持ち上げてレストランへと向かう。今まで鍛え抜いた運送技は全て美鈴のためにあるのだ。

――

クリザリッドさんったら、恥ずかしいんだから。

「機嫌を直してくれ」

「ふーん」

レストランの料理が本当に美味しくないと言いません。私は中華に

は厳しいんですよ。

「お待たせ致しました。エビチリになります」

見た目は合格。食欲をそそるいい色。問題の味は……

「うん、美味しい」

「良かった」

しっかり下味も付いてるし、辛みも強すぎない。日本向けにアレンジしてあるけれど、ご飯が欲しくなるいい味です。これならデザートも楽しめそう。

ピロリロリン

「ケータイか」

「会社からですか？」

「みたいだな」

クリザリッドさんはケータイを開くと通話をせずに電源を切った。

「いいんですか？ 大切な連絡だったら」

「いいんだ。本当に大切な連絡なら直接伝えに来る。ケータイにという事は今から仕事に入れないかという事だろう。せっかく美鈴と一緒になのに仕事に行けるか」

「ふふ、いけない人」

「許してもらえます。それとこの後にも予約があるんだが」

「何のですか？」

「ホテルだ」

それって、もしかして……

「そろそろ、子供もな」

「エッチ」

「嬉しそうな顔をして言われてもな」

「ウフフフ」

私、とっても幸せです。

これが中間中国だ！！（後書き）

子供を作るなら紅クリザリッドを子供にしようと考えている。
ではキャラ紹介をしましょう。映画の出演者は面倒だから出さない。

紅魅霊

出演：MUGENオリジナル

MUGENでの名前はヘイ魅霊^{メイリン}。ヘイはケータイでは漢字で出ないし、メイリンは美鈴と被るし姉妹だから紅魅霊^{ホンミレイ}に。シヨボンとはMUGENで白黒スタイリッシュとして活躍。グスタフの娘。紅は母の姓。

職員戦争（かいぎ）（前書き）

夢弦高校の職員会議はこんな感じですよ。

職員戦争（かいぎ）

夏休みになっても教師の仕事は終わらない。僕は今は関係ないけど、来年になったら修学旅行の準備とかもあるんだろっな。

「オム君先生、好き、愛してる」

「ブツ!? い、いきなりなんですかGM先生!」

「諏訪子って呼んでね」

「諏訪子先生、ピュアなおム君先生で遊ぶのは感心しませんよ」

「あつちやく、ナイア先生が来ちゃったか」

いつも酷い冗談だ。僕が耐性がないのを知ってこうやって遊ぶんだもん。

「そろそろ会議だよな」

「そうね。準備しないと」

「会議ですか？ 聞いてませんが」

「まだ通達されてないだけよ。毎年この日に会議があるの」

「そうなんですか」

今日はいつもより出勤している先生が多いのはそういう理由か。僕

も呼び出されたからな。

「皆の衆！ 集まっているようだなー！！」

キラ校長が職員室に突撃してきた。ドアをスライムで破壊して入ってくるのは止めて下さいよ。

「会議室に集まれー！！」

どこかの子供向け番組ですか。ツッコんでいたらきりがない。早く行こう。

――

既に会議室には何人もの先生が集まっていた。それにしても広い会議室だなあ。

「オム君先生、こっちですよ」

「ありがとうございます、大門先生」

ちゃんと席決めはされているみたいだ。ネームプレートも置いてあ

る。でも僕のネームプレートはオム君じゃなくてSTGF0394にしてほしかった。

「これで全員か？」

「私を忘れないでもらいたい」

なんか金髪でマントを羽織った人が何も無い所から出てきた。僕は知らないんですけど。

「ワラキア先生お帰り」

「諏訪子先生、私の代わりに数学の授業をしてもらったようではない」

「いーのいーの。お菓子奢ってね」

この人がワラキア先生か。確か世界的に有名な数学者なんだっけ？

「ハッハア！！俺を忘れてないかあ？」

今度は黒い球体から筋骨隆々とした青髪の男の人が出てきた。この人は知ってる。コマチさんのお父さんのバルバトス先生だ。

「これで全員だな！ 会議を始める！！ 会議内容はこれだ！！」

運動会の競技について

キラ校長があんなノリだからどんな事を会議するののかと思えば意外に普通だった。でもみんな殺気立ってるというか。

「さあこの場でやりたい競技のある者は力で勝ち取れ!!」

『オオオオオオオオオオ!!!!』

待つてよ。おかしいよ。なんで競技決めて戦わないといけないのさ。

「オム君先生、よく聞きなさい」

「大門先生……」

「MUGEN故致し方なし」

そんなの認めません。

――

何この会議。ただの戦争じゃん。怖くて逃げる事しか出来ない。

「愚か者共が！ 皆殺しにしてくれるわ!!!!」

「貴様らの死に場所は、ここだああああああ!!!!」

特に勇次郎先生とバルバトス先生が怖いよ。

「逃げてばかりじゃ駄目よ」

「でもナイア先生、怖いです」

「そうかしら？ 楽しみましょう」

そう言つて僕に向かって大剣を振りかぶるナイア先生。つて本気で
すか！？

「うわーん！！」

「待ちなさい。それでも戦闘部の顧問？」

「「ほお、戦闘部の顧問」」

ぎゃあ！ 目を付けられてはいけない人達にまで目を付けられてし
まった！！ 絶体絶命だ！！

「もう終わりにしたまえ。残っているのは少ないのだから」

ワラキア先生の言葉で気がついた。残っているのは僕とナイア先生
とワラキア先生、それと凶悪なお二方にGM先生だけだ。

「6人ね。まあこれならいいでしょう」

「そういえばバルバトス先生、風の噂で聞いたのだが娘が出来たそ
うではないか。おめでとう」

「拾っただけだがなあ」

「私も娘がいるから気持ちは分かるよ。娘が男に取られる気持ちはね」

「なああにいいいい？」

「ワリア先生何言ってるの！？カンフーマン君に何か恨みでもあるんですか！？」

「すこおし出掛けてくる」

ああ、行ってしまった。南無南無。

「戦鬼と呼ばれたバルバトスも人の子か」

「そう言う勇次郎先生も息子さんに彼女が出来たと聞きますよ。気になるのでは？」

「軟弱な事だ」

「じゃあ会議しよ」

会議の始まりがこんなので本当にいいのかな？

職員戦争（かいぎ）（後書き）

カンフーマンがどうなったか？ 察して下さい。

オム君は生き残ったのだ。まあ耐性が高い彼なら生き残るのは容易だったかもしれないがね。ちなみにキラ校長は真っ先にやられました。

何気に新キャラ出てないな。仕方ないか。

アイドルを捜せ(前書き)

風邪気味です。皆さんも気を付けて下さいね。風邪から肺炎になつたりしますから。

アイドルを捜せ

ある日の晩、私はザンギエフのおじさんと連絡を取り合っていた。

「その情報に嘘偽りはないわね？」

『間違いない。主婦アイドルのリリス・エルロンが今その街にいる』

これは有益な情報だわ。彼女は長い間人気を保つアイドル。見た目は若いけど一児の母なのよね。だからアイドルなんてやってられるのだけど。

「ありがとう。ホテルは？」

『流石にそこまではな』

「分かったわ。自力で探すとする」

一流アイドルの泊まるホテルなんだからそこその場所、いや彼女はそういうのを好まない。小さな場所を探っていくとしましょう。

――

下手に人に聞いたら駄目ね。私だけの特ダネなんだから。

「すみません。夏休みの自由研究でホテルの利用率を調べているんですけど」

「そうですか。利用率なら」

今私がやっている利用率調査はもちろん嘘。撮影とかで来ているならスタッフとかも連れてきているでしょうし、沢山のスタッフも同じホテルに泊まるでしょう。それなら利用率も上がるはず。

――

おかしいわ。どのホテルもガラガラ。逆に言うところの街って観光名所とかがないって事よね。本当に夏休みの自由研究にしちゃおうかしら。いや、まだ諦めるには早いわ。もしかしたらプライベートかも。

「しかしお前もいきなり過ぎるぞ」

「だから悪かったって言ってるじゃん」

「別に謝る必要はねえんだけどよ」

あれは普通な京先輩に京子だ。私が言うのもなんだけど、こんな時間は何をしてるんだろ？

「普通先輩！ 京子！！」

「だから普通って「霊夢！ どつたの？」」

「人捜し。主婦アイドルのリリス・エルロンを見なかった？」

「この街に来てるの！？」

「うん、そうみたい。京子は何してたの？」

「アニキと一緒に映画にね。深夜割りとカップル割りで超お得」

カップルって兄妹で使えるわけないでしょう。ここらへんが京子の抜けてる場所というか。

「リリス・エルロンだったよな？」

「京先輩、知ってるんですか？」

「裏からの依頼で明日護衛する事になっている」

それって言うてもいいのかしら？ 普通に許されないはずよ。

「今行る場所は、確かロアとかいうのの家だったか。完全プライベートらしい」

やっぱりプライベートだったか、ってロア!?

「ミハイル・ロア・バルダムヨオンですか!？ アカシヤの蛇の!？」

「そんなだったな」

なんであいつがこの街にいるのよ!! 聞いてないわよ!!

「どこにロアの家はありますか?」

「夢弦寮近くだ。表札でもあるはずだ」

そんな場所にいるなんて。リリースさんには会いたいけどロアにはちよつと……………我慢しよう。

――

本当にあった。いつの間に家を構えたのよ。あいつの財力ならすぐ

に建ててても違和感ないけど。さて、インターホンを押せばいいかしら。

ピンポン

………まだかしら？ 気付かなかったのかも。もう一回。

ピンポン

………出て来ない。こうなったら殴り込んで

「霊夢か？ どうしたんだよ」

「うげ、ロア。ってリリースさんも!？」

後ろにはロアとリリースさんが立っていた。コンビニの袋を持ってるって事は出掛けてたのね。

「あら？ もしかして私のファンかしら？」

「はい!! それでロア、あんたはなんでリリースさんと一緒にいて、この街にいるのよ」

「故郷に帰ってきてきて悪いか。昔は可愛かったのにな。『ロアお兄ちゃんのおよ』わああああああああああああ!!!!!!」
五月蠅いぞ

「ロア君、後で教えてね」

「やめてええええ!!!! 黒歴史を掘り返さないでええええ!!!!」

どうしてリリースさんはそんな事言うの！？ 苛めなの！？

「まあ中に入れよ」

「今回はリリースさんがいるからよ。いつもなら入らないんだから」

「これがツンデレっていつのなのかしら？」

「いんや、こいつの場合デレツンだな」

「うっさいわよー！..」

――

家の中は綺麗なのね。もっと研究機材とかでゴチャゴチャしてるのかと思った。

私が見回しているとリリースさんが料理を作ってきてくれた。

「はい、お夜食ですよ」

「ありがとうございます」

「サンキュー、リリース。お前の分はどうした？」

「馬鹿ねロア。現役アイドルが夜食なんて食べたら体重管理とかが大変でしょう」

「そうなのよ。ごめんね、ロア君」

「アイドル稼業も大変だな」

それにしても随分親しそうな間柄ね。気になるけどはぐらかされそう。

「あん？ 結界に何か引つかかったな」

「結界なんて張ってたの？」

「まあな。ほら来るぞ」

ドガア

扉をぶち壊して入ってきたのは、青い甲冑に6本の刀を携えた独眼の男。独眼Pの弟である伊達政宗だ。

「ヒュー、搜したぜリリース」

「政宗君、今はプライベートよ」

「仕事をエスケープしてプライベートはねえだろ」

リリスさんは逃げ出してきたのね。それで知り合いのロアの所に来たと。

「霊夢」

「なによ」

「足止めさせた」

「はっ？」

ロアはリリスさんを連れて外へ逃げ出した。勝手に足止めを任された私の前には既に刀を抜いている政宗さんがいた。

「アンラッキーだな嬢ちゃん。だが俺も仕事でな。リタイアしてもらうぜ！！ これでジ・エンドだ！！」

大きく後ろに振りかぶられた6本の刀が雷を纏い、前へ振られると巨大な蒼い雷の竜が飛んできた。こんな時って何を言えればいいのか。とりあえず、オーモイーガー！。

アイドルを捜せ（後書き）

霊夢、再起不能^{リタイア}

ロアとリリスは知り合いであって付き合ったりはしてません。ではキャラ紹介をしましょう。

リリス・エルロン

出演：ティルズ・オブ・デステイニー

最強の妹。乱入のプロ。初代デステイニーではある種の隠しキャラとして使用が可能だった。作者の愛用キャラでもあった。リメイクデステイニーでは正式キャラとなって嬉しいが、ネタ臭がありすぎて悲しい。ちなみに初代デステイニーで隠しキャラの一人にコングマンがいる。彼がOPにいないのはそういう理由。

伊達政宗

出演：戦国BASARA

パリーイーで有名。独眼Pの弟で、芸能人の護衛や、今回のように逃げ出したものの捕獲なんかをする。彼の会話を見た瞬間に、それってなんてルー大柴？ と思った人は作者だけじゃないはず。雷神モードなんてとんでも状態がある。

出校日（前書き）

俺はこの日が大嫌いだった。皆さんは？

出校日

夏休みに何故あるのか分からないものの一つが出校日だと思う。今日は俺もカルマも出校日だ。

「アイルー、留守は頼んだぞ」

「はいニヤ」

「行ってきます」

出校日には出校日までにやらないといけない宿題とかがあるからな。一応俺は終わらせてるぞ。

「そういえばモノはどうした？」

「モノさんは寮長さんの所ですニヤ。なんでも料理が習いたいか」

「ふーん」

まああいつがどんな事を習ってもあいつの自由だからな。俺がとかかく言う必要はないか。っと早くしないと遅刻しちまう。行くか。

来る前は嫌だったが、来てみると学校つてやっぱりいいな。

「ロック、久しぶり。元気にやってたか？」

「ああ。ちよいと居候が出来て忙しいけどな」

「なんか大変だな」

こいつのどこにも居候か。俺は仕送りがあるけど、こいつは断つて
るからバイトが忙しいだろう。

「幼女だな。俺には分かる」

「いつも通りで安心した。七夜はどうだった？」

「煉が稼いだくらいだな。俺にはいい事なんてないさ」

確かカルマも行ったルガール運送のバイトだったな。煉はなんでも
出来るんだな。

「……おは、よ」

「博……麗？　なんか死にそうぞぞ」

「ちょっと、死んだ」

死んだのかよ！！ 「冗談を言ったつもりだったのにな。 事實は小説より奇なりだな。

「静かにしなさい」

「みんな、座ってね」

「宿題はやってきたかしら？」

「……………やばっ」

もしかして七夜の奴忘れたのか？ あーあ、大変だぞ。 1日2日じや出来ない代物だつてのに。

「じゃあ提出してね」

みんなが提出をしていく中、七夜だけが動かなかった。

「どうしたのかしら、七夜？」

「まあ、あれだ。分かるだろう？」

「忘れたのね。条件を飲めば見逃してあげない事もないわよ」

「……………飲むっ」

「なら後で職員室に来なさい」

「ナイア先生、いいんですか？」

「いいのよ、オム君先生。相応のものだから」

大体読めるな。七夜だって覚悟してるんだろっな。南無南無。

「ナイア先生がそう言うなら。それであの報告しますか？ まだ早
いと思うんですけど」

「構わないわ。どうせ分かるなら早めに教えましょう」

どうやら何か重要な報告があるようだ。早い早くないという事は夏
休み明けにでも報告する予定だったのだろうか。

「じゃあ報告しますね。みんな、夏休み明けになるんだけど転校生
が3人来ます」

「3人もですか？ 普通他のクラスに分断させるものでしょう」

「普通はね。でも2人がこのクラスを希望したからついでにもう1
人も入れちゃえてキラ校長が言ったんだ」

キラ校長らしいな。でもなんでその希望した2人はこのクラスをわ
ざわざ望んだんだ？ このクラスの事を知っていたって事だよな。

「オム君先生！ 男子ですか？ 女子ですか？」

「女子が2人で男子が1人だよ」

「私の個人的な見解だけど美男美女よ」

『おぉー』

あれ？ 今ナイア先生こっちを見て笑わなかったか？

「じゃあ七夜は職員室に。みんなは解散していいわよ」

――

終わったわね。早く帰ってアイドルDVDの編集をして疲れを取りましよう。

ドシ

「あ、ごめんなさい」

「なんだあ？ このオレ様にぶつかっておいてごめんなさいだけかあ？ 誠意を見せてほしいな。せ・い・い」

うっわー、めんどくさいのに捕まったわ。何よこいつ、天狗のお面に緑の胴着とか趣味悪。

「こんな時代にこんな奴がいるもんなんだな」

「誰だ!？」

「忍者だ」

いや、あんたも人の事言えないでしょう。こんな時代に忍者って。しかも目線を隠してる黒い線は何よ。犯罪者？

「このMr・サイキョー様相手に勝てると思ってんのか!？」

「思ってなきや手出さないでござる」

「あんた。これは私の問題だから」

「いいんだよ。入学手続きだけで暇だったし」

「先手必勝!！」

天狗面の男が突撃してきたけれども、突然爆発をした。

「地雷に引つかかるとかざまぁw」

「き、汚いぞ!！」

「汚いは、褒め言葉だ」

「ちつくしょー!!! これでも食らえ!! 我道翔吼拳!!!」

なんかしょっぱい気弾が飛んできて自称忍者に当たった。でもそこに忍者はおらず、代わりにあったのが……

「ちくわだ」

そう、ちくわ。って忍者の奴、いつの間に男の後ろに!?

「天元突破——!」

「うわああああ!? おやじiiiiiiiiiiii!」

よく分からないけど忍者が強いというのは分かった気がするわ。

「貴様等にそんな玩具は必要ない……………なんちゃって」

「ねえ忍者、ありがとう」

「礼なんていらねえよ」

「あかさ、その目線のやつ取れる?」

なんかずつと気になってたのよね。やっぱり人と話す時にはちゃんと目を合わせるべきだし。

「いや、これは」

「取れるんですよ。ちょっとだけだからさ」

「や、やめる!」

「抵抗するな!! えいつ!」

無理矢理目線のを奪い取ると、意外に綺麗な目をしていた。顔も整

ってるし、悪くないわね。

「返せ!!」

「あつ、ケチ」

「ケチで結構。忍者は金を食うんだ」

「そうなの。私は博麗霊夢。あんたは？」

「汚い忍者とでも覚えておけ」

変な奴。まあ面白そうだからいつか。

出校日（後書き）

ブロントさんか汚い忍者かで迷ったけど汚い忍者にしました。だってブロント語って使いにくいもん。ブロントさんを楽しみにしていた人はすいませえん。
ではキャラ紹介をしましょう。

Mr・サイキョー

出演：SVC、MUGENオリジナル

我が道進む捨てキャラ。

汚い忍者

出演：FF11

本名を明かさない謎の汚い男。汚いながらもその実力は一流。そんな
じよそこらの相手なら簡単に倒してしまう。ツンデレ。

ヒーローショー（前書き）

ここ最近で一番どうしてこうなったと思える作品が出来た。

ヒーローショー

「おはよう、みよん」

「おはようございます、ロック様」

朝起きるとみよんが朝食を作っていてくれる。これが最近の俺の日常だ。みよんは最初は料理なんて全く出来なかったが、インターネツトからインプットしたらしい。便利なもんだ。

「うん、美味しい」

「ロック様には劣ります」

「そこは長年の経験だな。みよんがやっているのはあくまで基本なんだ。ここからみよん自身が発展させればいい」

「ありがとうございます」

みよんは素直でいい子なんだが、何故か命令しないとオメガを脱ごうとしない。気に入っているのだろうか。

「さてと、バイトに行くかな」

「行ってらっしゃいませ」

――
バイトに行く途中とある光景を目にした。子供が沢山集まっている。どうやら特撮番組の撮影をしているらしい。まだ時間もあるし、見に行くか。

「おお、ドラクロじゃん」

撮影していたのは『緋炎竜爪・ドラゴンクロウ』だった。通称ドラクロと呼ばれ、スタイリッシュなアクションが売りの特撮番組だ。そして変身シーンがない、つまり最初から最後までドラクロはドラクロのままという奇妙な番組でもある。そのせいかメインは敵側のストーリーだったりする。

「ブオオオオオオオ!!」

「ぐあっ!?!」

「はっ? 牛?」

なんかトラックから牛が飛び出してきてスタッフらしき男の人を跳ね飛ばした。そしてこっちに向かってくる。何故だ? 赤ジャケ

「ブオオオオオオオ!!」

「危ない!!」

確かに周りの子供達は危ないな。何とかするか。

「ほいつ」

「ブオオ!？」

ズドン

相手の突進力を利用した投げをすれば例え巨大な牛だろうと軽い。それにもし突撃を食らっても、学校でやってる喧嘩よりはマシだろう。

「凄いな君」

「あんたは？」

やってきたのは物凄いメカメカしい人。どっかで見た事がある気がするんだが。

「私はアイアンマン」あー！ トニー社長!!」「いや、なんで本名を」

「ロックですよ。ロック・ハワード!!」

「！ ロック君か。大きくなったものだな。気付かなかったよ」

この人は親父の知り合いで、昔はよく玩具を持ってきては俺と遊んでくれたもんだ。

「ふむ、今の君ならいけるか」

「何がですか？」

「実はこの番組は大まかなストーリー以外は完全アドリブで、更にスタントマンを一切使っていないんだ」

「大丈夫なんですか？」

「ドラゴンクロウスーツは私のアイアンマンスーツと同じ技術を利用している。着るだけで能力はグンツと上がる。だが使用者が未熟では暴走してしまう」

「凄いですね。でもそれと俺はどんな関係が？」

「さっき牛にやられたのはドラゴンクロウスーツを着ていた役者なんだ」

分かった。それってつまり俺に代わりにドラクロをやってほしいという事だな。

「分かりました。頑張ります」

「そうか。ドラゴンクロウにセリフは必要ないから安心してくれ」

「あ、待って下さい。ちょっとバイト先に連絡しますんで」

ケータイでバイト先に電話をするとすぐに店長が出てくれた。

「もしもし、ロックです」

『むっ、どうしたかね?』

「豪鬼店長ですか? えっと、知り合いの社長さんに誘われて特撮番組に参加する事になったんですけど」

『それは大変だな。だがうちよりも時給はいいだろう。そちらを優先したまえ。こっちはベガを利用する』

「すみません」

これでよし。でもベガって誰だ? 新しいバイト?

――

ドラゴンクロウスーツを着る。まるでオーダーメイドのようにピッタリだ。この金と赤の配色に心くすぐられるな。

「ロック君、彼女が今日共演するルシファー君だ」

「よ、よろしきゅお願いしましゅ! うう、噛んじゃった」

「そんなに緊張しないでいいよ。俺は素人だし」

確かドラクロと敵対する魔女ベアトリーチエの手下の子だよな。作中では過激なキャラだけど普段はこんな子なんだな。長い黒髪が綺麗で

「可愛いな」

「ひゃうっ!？」

「ハハハ、ロック君よ、あまり彼女をからかわないでくれ」

「すみません。それで今回のストーリーは？」

「では説明するよ」

今回撮るストーリーは終盤のバトルシーンらしい。ベアトリーチエが街の巨大モニターに現れて魔法人形の12(トウエルブ)を大量に召喚。街を混乱に陥れる。そこへ現れたドラクロが12(トウエルブ)を倒していく。そして最後にルシファーと戦う。うん、おおざっぱ。

「まあやってみるか」

「その意気だ。頑張ってくれ」

――

「スタート!!」

監督の声が響き撮影が始まる。街には各々の日常を満喫する人々。そんな中突然巨大モニターが砂嵐になり、直るとベアトリーチエが映っていた。

『聞こえるかな愚民共。この街はこれより私の領地とする。それにはお前達は邪魔だ。行け！ 人形共よ!!』

「キュアアアアアアアア!!」「」「」

街中に現れる白い人型の物体達。街を破壊し、人々を襲っていく。そこへ空から一筋の炎、ドラクロが飛んできた。

ガキーン

金属音を鳴らし、手と一体化している錨型のブレードを展開するドラクロ。そこからは一方的な蹂躪が始まる。ブレードによる斬撃、素早い格闘、燃え盛る炎。やられた12（トウエルブ）達は次々と溶けるように消えていった。

『腕を上げたなドラゴンクロウ。まるで見違えるようだぞ』

「……………」

『答えるつもりはないか。だがその力、ますます妾のものにしたくなつた！！ ルシファーよ！！』

「傲慢のルシファー、ここに」

ビルの屋上に現れたルシファーはビルから飛び降りると、右手のブレードをビルに突き立てて落下スピードを調整しながら降り立った。

「さあドラゴンクロー、貴様を倒してベアトリーチェ様への手土産としてくれる」

「……………」

無言で構えるドラクロ。そして始まる戦闘。どちらも速さを重点に置いた戦いをする。ルシファーが斬りつければドラクロは一瞬で後ろに回り込み回転切りをお見舞いする。

「ハアツ！！」

「……………！！」

高速での空中戦。自由に飛び回れるドラクロに対し、ルシファーは動きの遅い十字の斬撃でドラクロの行動範囲を制限する。そんな時、ルシファーはある事に気が付いた。

「どづしたのよ。もっと攻めないの？」

そう、いつものドラクロらしい怒涛の攻めがないのだ。まるで手加

滅しているかのように。

「まさか女だからって手加減をしているの？」

「……………」

「ふざけるんじゃないわよ！！ 私はベアトリーチエ様の家具、道具よ！！ 女なんてとうに捨てたのよ！！」

「……………」

首を横に振るドラクロ。それにルシファアは完全にキレた。

「あんたはベアトリーチエ様に相応しくないわ。手土産なんて考えは止めよ。ここで殺す……殺す殺す殺す！！！！」

ルシファアを中心に魔法陣が現れ、魔力が噴き出す。そこからのルシファアはまるで別人だった。より速く、より強く、ドラクロを追い込んでいった。

「八つ裂きじゃ足りないわ。百裂きにしてやる！！！！！！」

強力な斬撃がドラクロを捉え、ドラクロを引き裂いた。そしてドラクロはビルにぶつかり、スーツの裂け目から素顔が見えた。

――
――
本当に撮影となると変わるもんだな。女の子だからって手加減したらボロボロだ。

「あんたみたいな優男がドラゴンクロウだったなんてね」

楽しいな。撮影だったのにこの戦いを楽しんでる自分がいる。ストリーなんてどうでもいい。全力で戦いたい。

「死になさい!」

ルシファーさんのブレードをボロボロになったドラクロのブレードで受け止める。ブレードは崩れ、それに連動するようにスーツ全体も崩れていった。だが構わない。元々慣れない動きで戦いにくかったスーツだ。

「詫びるよルシファー。俺は俺としてあんたに全力の勝負を挑む」

「今更、遅いんだよ!」

「甘い!」

斬撃を上手く素手で止めると、俺は一回転して踵落としを叩き込む。

「チィッ!」

「オラアッ!!」

怯んだところへパンチをお見舞いしてやる。だが流石の速さで間合
いから抜けられた。

「食らえ!!」

「烈風拳!!」

十字の斬撃を地を走る拳圧で相殺する。そして互いに走り出す。こ
ういう戦いは本当に楽しい。

「はああああああああああああああああ!!!!!!」

突然ルシファーさんのスピードが速くなる。突進技で締めるつもり
だな。だけどその突進……

「まるで牛だ」

「えっ?」

ルシファーさんは何があったか分かっているかのような声を出し
た。それもそうだ。俺を突き刺そうとしたら空中を舞っていたのだ
から。俺がやったのはさっき牛を投げたのと同じ事をしたまで。

「くらいな……!! オラアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

落ちてくるルシファーさんに合わせてパンチを叩き込む。だが空中
で体勢が悪いながらも受け止めるルシファーさん。それでも俺の攻
撃は終わらねえ。逆立ちのような体勢になって腕に気を流し、一気

に飛び上がる！！

「どりゃああああああああああああああ！！！！！！」

「きゃあああああああ！？」

回転するように飛び上がった俺に巻き込まれて吹き飛ぶルシファーさん。だけどルシファーさんはその途中で魔法陣の飲まれて消えた俺は降り立つと手に違和感を感じた。昔はよくあった力の暴走か。

「うう……はあ」

青紫の炎のような気が溢れそうになる手を押さえ込む。これどうにかならないのかな。

『ビューティフォー！！ 素晴らしいぞドラゴンクロー！！ スーッを身に着けず我がルシファーを倒すとは予想外であったぞ！！』

「どうも」

アドリブでもこんなに出来るなんて凄い演技力だな。これがプロか。

『次は詰める。覚悟しておけ』

「はいカット！ オーケーだ！！」

えっ？ 今ので通るの？ 俺かなり好き勝手やってたぞ。

「ロック君、これから君がドラゴンクローだ」

「……………ウエツ!？」

いや、そういえば今のが通るなら俺がドラゴンクロウを着ていたから当然といえば当然で。

「ちょうど中の人欲しい時期だったんだよ」

「トニー社長、それでいいんですか？」

「もちろんだ!！」

「お疲れ様です」

あ、ルシファーさんだ。演技が終わると本当に緩い。

「ルシファー君、ロック君がこれからドラゴンクロウをやるからね」

「ひゅえっ!?!? そうなんですか!?!？」

「そうなっちまった。それより怪我はないか？」

「ロックさんこそ! 私やりすぎちゃって」

「俺はいいんだよ。でも君は女の子だろ。女の子は傷が残りやすいし、何より女の子を傷物にするなんて最低な男だからな」

「へみゅ／／／／」

ルシファーさんは顔を真っ赤にしまった。何故だ？

「学校やギース社長にはこっちから説明しよう。給料もしつかり用意するよ」

「そうですか」

不安定な仕事だけど、ドラクロが続く限りは大丈夫かな。でも他のバイト止めないとな。豪鬼店長に後で謝ろう。

ヒーローショー（後書き）

どうしてこうなった。ルシファーはどうしてこうなった。ロックはどうしてこうなった。訳が分からないよ。ではキャラ紹介をしましょう。

オックス

出演：ファイターズヒストリーダイナマイト牛。

アイアンマン

出演：MVC

玩具メーカー兼兵器メーカーの社長。普段から自作のパワードスーツ、アイアンマンスーツを着ている。理由はボディガードの経費が浮くから。本名はトニー・スターク。でも実際はもうちと長い。

ドラゴンクロウ

出演：MUGENオリジナル

カンフーマンと並びMUGENを代表するキャラ。かっこいい。この作品ではトニー社長が作ったパワードスーツであり特撮『緋炎竜爪・ドラゴンクロウ』の主人公。着れば誰でもドラゴンクロウ。ただ着ている人の技術も問われる。

ルシファー

出演：うみねこのなく頃に

原作と全く性格の違う人。演技をするとキャラにのめり込むが、普段は乙女。驚いたりすると変な言葉を口走る。

ベアトリーチエ

出演：うみねこのなく頃に
一流女優な魔女。プライベートでは気のいいお姉さん(?)で、いろいろな人に高評価されている。

12 (トウエルブ)

出演：ストリートファイター

緋炎竜爪・ドラゴンクロウのためにベアトリーチェが本当に創った魔法人形。粘土のように姿形を変える。

豪鬼

出演：ストリートファイター

ロックがバイトしていた雑貨屋の店長。何故か裏のトップクラスであるベガをバイトに出来る。

ロアってどんな人？（前書き）

今回はロアメインにしてみました。

ロアってどんな人？

今回はなんでか俺の日常を描くそうだ。暇だな作者も。まずは朝飯にするか。

「……………ないな」

冷蔵庫の中には本当に何も無い。ご飯はあるから、沢庵でもいいからおかずになるものを…………

「…………鰻のタレか。これをかけるか」

なんとも寂しいな。昨日作ったおでんも温めておこつ。今日は買い物決定だな。

ピロリロリン

「電話か。もしもし?」

『おはようございますロア様』

「キャミィか。ベガはどうした?」

『引きこもっています。理由は語ってもらえませんでした』

おそらく豪鬼だな。あいつがベガに厳しいのは昔からだ。

「それで要件は?」

『後でお伝えします。朝食はこちらで用意してあります』

「助かる」

なら準備をするか。服は普段着でも十分。道具や金はいらんがブラックカードぐらいは持って行こう。

「よし」

家の外に出るとナイアが七夜に首輪を着けて歩いてた。

「おはよう混沌。早朝から激しいな」

「おはよう蛇。これは七夜の希望よ」

「あんな2択を出されたらこっちを選ばざるおえないだろうが!!」

七夜は罰ゲームが何かをやっているのだろうか。俺は助けてやれないんだ。悪い。

「だがナイア、ほどほどにしてやってくれ。変態ロリコンでも俺の弟分だ」

「貴方がそう言うならあと町内2周にしてあげる」

「虐めだ!!」

バババババババッ

そんな中上空にヘリコプターがやってきて縄梯子を下ろしてきた。

迎えが来たようだ。

「じゃあな。俺は出掛けてくる」

俺が縄梯子に掴まるとヘリコプターは飛び立ち、俺は縄梯子ごと引っ張り上げられた。ヘリコプター内にはさっき電話をしたキャミィとフランドールっていう金髪の吸血鬼娘がいた。

「おじさま!!」

「元気だなフラン。今日はどうしているんだ？」

「もしもの時の戦力として招待しました」

「そうか。何から何までご苦労だなキャミィ」

「いえ。朝食のサンドイッチです」

「サンキュー」

サンドイッチをパクつきながらフランを見る。昔はちんちくりんだったのに今じゃそこそこ大きくなって。いきなり転職するとか言っ
て出て行った時には驚いたもんだが、十分な戦力となるくらいにな
ったからよし。

「どうしたのおじさま？」

「マントと帽子、よく似合ってるぞ」

「えへへ」

「キャミィ、どこへ向かうんだ？」

「京都です。退魔本部より要請がありました」

退魔本部に吸血鬼を呼ぶとはよっぽどだな。とはいえ知り合いがないわけでもないし、過ごしやすい場所ではある。

――

夢弦を飛び立ってからしばらく、京都上空に來たので趣ある景色をフランと眺めていた。

「おじさま、金閣寺だよ！！」

「男は渋く銀閣寺つてのが相場だ」

「到着しました」

ヘリコプターは退魔本部のデカイビル屋上へ降り立つ。お出迎えは誰だろな。

「お待ちしておりました」

「おはようございます、ロアさん」

「神依に扇奈か」

セーラー服に刀を持った女が朱鷺宮神依。巫女服にマントを羽織って刀を持った女が京堂扇奈。どっちも知り合いだ。知り合いなだけだ。

「さつさと女狐を出しな」

「あくまでうちのボスなんですけど」

「仕方あるまいよ扇奈。ボスとロア殿は旧知の仲だ」

「それで？」

「部屋にいますからお連れします」

「事態が収まりましたらご連絡を」

キャミィはフランを置いて先に飛び立っていった。本当にフランまで一緒か。

俺らが連れてこられた部屋はとにかく豪華だった。そして豪華な椅子にはちんちくりんな狐娘が座っていた。

「久しぶりじゃの」

「いいから要件を言え。俺も暇じゃない」

こいつが女狐の小牟シヤオムウだ。妖狐のくせに退魔組織を抱える大層な輩だ。本人にはそこまで力はないが、カリスマと頭脳で組織を纏め上げている。

「実は西洋の妖魔がやってきてな。それが強力で」

「被害は？」

「死者はおらぬ。だが重傷28人、軽傷72人じゃ。全員プロの退魔師だったのじゃがな」

「そんなになるまで放っておくなよ。扇奈、神依、案内をしてくれ」

「はい」

「フランは」

「一緒に行くよ」

だよな。あんまり危ない事はさせたくないというのが心情だが、本人の希望なら仕方ない。

「小牟、報酬は俺には美味しい湯豆腐の店。フランには甘味だ」

「任せい」

京都の湯豆腐は美味いから楽しみだ。さっさと終わらせちまおう。

――

ロア達が向かったのは西洋の妖魔が一時的に封じられている結界。その途中にも1体の妖魔と出会った。

「ぐふっ、うまぞう」

「餓鬼か」

それは身長4メートルは超えている巨大な鬼のような妖魔だった。扇奈と神依が前に出るが、それ以上に速くフランが突撃した。

「あ！」

「安心しろ。フランなら一瞬だ」

フランを追いかけようとした扇奈をロアが止める。妖魔は身体から飛び出している骨をフランに突き立てようとしたが、マントにすら掠らなかつた。

「壊れちゃえ！！」

フランが爪を一閃。それだけで妖魔の上半身は消し飛んだ。

「凄まじい子だな」

「あれでも吸血鬼だ。目的地は近いのか？」

「もうすぐですよ」

それから数分で着いた場所は既に異界であつた。

「結界が強すぎて世界が変わってるな。まるで固有結界だ」

「この中にいます」

「分かつた」

ロアは結界の起点に行くと、それを蹴飛ばして破壊した。

「ちよっ！!?」

「何を!？」

「出すんだよ。さっさと片付けるためにな」

起点を無くした結界は砕け散り、中から出てきたのは巨大な角と体軀を持つ4足歩行の魔獣だった。

「グオオオオオオオオオオオ!!!」

「キングベヒーモスだったか」

「ど、どうするんですか!？」

「我々ではどうしようもないから結界に入れて弱らせていたのに!」

「大丈夫だよお姉ちゃん達。おじさまなら勝てるよ」

「フランは優しいな。さて、おいデカブツ」

「グオオオオオオオオオオ!!!」

「消える。オーバーロード・ゲマトリア!!!」

次の瞬間にはロアとキングベヒーモスはこの世界から消えた。正確にはロアが創り出した固有結界という名の世界に移動したのだ。そして数秒もしないうちにロアだけが戻ってきた。

「どうなっただんです?」

「消した。肉片すら残らず綺麗にな」

「なんと……」

「帰るぞ。帰って美味いもん食おう」

――

「ハフハフ、湯豆腐うめえ」

「そんなに美味しい？ 夏なのに熱くない？」

「大人になれば良さが分かる」

俺とフランは報酬の美味しい湯豆腐と甘味を味わっていた。フランは宇治金時を食っている。夏に氷菓子は涼しげでいいが、湯豆腐もいいんだぞ。

ピロリロリン

「誰だよ。はい、もしもし？」

『ロア君？ 霊姫だけど今どこ？』

「京都だ」

『えー、都古の家庭教師やってもらおうと思ったのに』

いや、一応夫であり教師でもあるジョンスに頼めよ。でも聞かないんだろうな。

「明日からな」

『ありがとう』

何を言っても無駄と知っているから引き受けちまう。なんとも損な性格してるよな、俺って奴は。

ロアってどんな人？（後書き）

こんな事をよくやっているのが彼の日常です。
ではキャラ紹介をしましょう。

キヤミイ

出演：ストリートファイター

ベガの秘書的存在。以前は全身タイトのような戦闘着を着ていたが、最近はスーツである。

フランドール・スカーレット（ジョブチェンジフラン）

出演：東方project、MUGENオリジナル

お嬢様からハンターへと転職を果たした吸血鬼少女。ロアに貰った帽子とマントが宝物。ロアをおじさまと呼んで慕う。

京堂扇奈

出演：大番長

退魔組織に所属する少女。一応巫女である。神依とは親友でありライバル。

朱鷺宮神依

出演：アルカナハート

退魔組織に所属する少女。何かと真面目な性格。実力は扇奈と同等らしい。

小牟

出演：ナムコクロスカブコン

妖狐の娘。退魔組織を立ち上げた張本人。お偉いさんになっても遊び癖が抜けないらしい。

妖怪腐れ外道

出演：サムライスピリッツ
フランに瞬殺された餓鬼。

キングベヒーモス

出演：FF11

強大な力を持つ魔獣。単純な力だけでなく魔法も使える。キングベ
ヒンモスがMUGENにおける正式名称だったりする。

夏の終わり（前書き）

夏休みの終わりに友達と出掛ける。そんな事ないですか？

夏の終わり

夏休みもあと数日で終わる。だからいつもの4人だけで出掛けてみる事にした。

「カンフー、どこへ行くとか決めてるのか？」

「山なんてどうだ？」

「俺はナイア達から逃られるならどこでも」

「あんたも大概ね。そういえばロック、あんたテレビに出たんですつて？ 私は観てないけど」

「はは、成り行きでな」

成り行きでテレビに出れるもんなのかよ。確かドラクワの主人公になったんだつたよな。夏休み明けに学校で人気が出そうだ。

「なかなかいい演技だったぞ。とても演技とは思えないほど迫真だった」

「七夜は観てたのか」

「煉が観てるからな」

俺もカルマが観てなきゃ知らなかったかも。

「それにしても山ね。近所の山かしら？」

「小伊吹山に行こうと思う」

「ならバスですぐだな」

小伊吹山つてのは夢弦市にある小さな山だ。小さな鬼がいるとしても有名だ。会った事はないんだけど。

「じゃあ出発」

「「「おー」」」

――

バス内では菓子を食いながら夏休みの思い出を語り合っていた。

「ロア兄に会ったのは意外だった」

「ロアは意外だったな」

「ロアには会いたくなかったわね」

「ロアって誰だ？」

「ピアノリスト」

「おいおい」

「あの人かな」

「心当たりがあるのかよ、ロック」

俺と七夜は海水浴場だったけど、博麗とロックはどこで会ったんだろうな。ロア兄って神出鬼没だから意外な場所かもしれない。

「私が気になってるのはロックの給料なんだけど」

「言わなくても」

「「給料！！ 給料！！ 給料！！」」

「……8万」

「「少ない」」

「まだ新人だから仕方ないだろ。ってかこれでも多い方だ！！」

早く一流になって俺らに飯を奢ってほしいな。人気になったらあのお昼の番組にも呼ばれたりするんだろうか。

『次は小伊吹前駅、小伊吹前駅です』

あ、着いた。相変わらず小さな山だ。

「誰が一番速く頂上に行けるか競争するか？」

「私は飛べるけどいい？」

「悪かった。勝てない」

よくよく考えると七夜は三次元的な動きで木々を飛び回るから俺とロックが不利すぎ。普通に登るのが一番だ。

――

頂上到着。やっぱり小さいな。30分くらいしか掛からなかったぞ。

「全員弁当は用意してあるか？俺はアイルーが作ったのが」

「俺は煉が作ったのが」

「俺はみよんが作ったのが」

「私は霊姫姉さんが作ったのが」

「どれも酒の肴になりそうだね」

「そうそう、どれも美味そうで酒の肴になりそうなものばかり……………」

「…………誰だ!?」

「鬼の伊吹萃香たあ、あたしの事よ」

「鬼？ 確かに角が生えているが角ならうちのカルマにも生えてるぞ。てかちつこいなあ。」

「俺に鬼退治されないか？」

「七夜だま「いいよえっ?」

「どこからでも来なよ、殺人貴」

「殺人鬼？ 俺は七夜だが」

「?」

何か噛み合っていない気がするな。

「萃香さんとやら、これはうちの変態の七夜だ。殺人鬼とやらじゃないぞ」

「でもそつちに禍巫女も…………人違いだ」

「ちょっと、人の胸して判断したでしょう」

「だって禍巫女まがはそんな貧乳じゃないもん」

すっぱり言ったな。鬼が嘘を嫌うというのは本当だったんだ。

「にしてもよく似てるね。でも考えてみると400年前の事だからなあ。生物的には人間であつた2人が生きてるはずないか」

「面白そうだな。俺の弁当あげるから教えてくれないか？」

「みよんちゃん悲しむぞ」

「大丈夫だつて」

「なら金髪君の弁当に免じて教えてあげるよ」

そう言つて瓢箪から酒を呑みながら小鬼は語り始めた。

――

400年前、人里離れたこの小伊吹山に一組の男女が住んでいた。それが殺人貴こと遠野志貴と、禍巫女こと博零はくれいれいか霊禍である。彼らは

夫婦ではないものの、互いの力に惹かれ、共に生活をしていた。

「おはよ、元気？」

そんな奇人である2人に近付いたのがこの小伊吹山の主、伊吹萃香である。初めは殺人貴は己の退魔の衝動に駆られ萃香を殺そうとし、禍巫女は一応巫女だからという理由で滅そうとした。だが萃香はなんとか生き残り、2人と交流を深めていった。

「禍巫女、殺人貴は？」

「志貴は狩り。いてもあんたと話さないでしょう」

「うん。あいつが飯、風呂、寝る、殺す、これ以外を喋ったのを見た事がない」

「一緒に生活しているともう少し単語を喋るわよ」

ガラガラ

萃香が霊禍と話をしていると件の志貴が帰ってきた。着物ぐらいしかない時代の日本で何故か彼は学生服を着ていた。

「お帰り志貴」

「邪魔してるよ」

「……………」

志貴は何も話す事がないかのように自分の部屋へと入っていった。

と思っただけですぐに出てきた。

「どうしたのよ」

「魔だ」

志貴がそう言って家を出ると霊禍と萃香もそれに続いた。外にはロボロボのローブを着て大鎌を持った骸骨、死神が浮いていた。

「殺人貴と禍巫女だな。貴様らは危険だ。死んでもらう」

「……………」

「言っじゃない。力の差、見せてあげるわ!!」

「私は下がってるね」

「死ねい!!」

死神は無数の小型の鎌を飛ばし志貴達を攻撃する。しかし志貴は瞬間移動のような速さで避け、霊禍は自分を模した赤と青の人形で破壊をした。

「霊禍」

「分かったわ。志貴は寝たいみたいだから終わらせるわよ」

「簡単に出来ると思っていいのか!? 自惚れるな!!」

「出来るわよ。次元の顎あごに引き裂かれよ!!」

霊禍が空間をねじ曲げ死神に攻撃する。空間の歪みに飲み込まれた死神は一瞬にして死に体となったが、それで終わりではなかった。

「……………」

「ぐっ!？」

後ろに志貴が立っていてナイフを振りかぶっていた。そして志貴は口を開いた。

「どうせ一夜限りの幻だろう。あんたには用がない」

志貴がナイフを死神に突き立てると死神は完全に消滅をした。

――

話してみると本当に懐かしいよ。あいつらの全力ってどれくらいだったのか。

「凄い2人がいたんだな」

「博零。博麗の廃れた分家かしら？」

「その殺人貴つて人は奇人だけど変人の七夜よりはいいな」

「ロツク、それは喧嘩を売ってるんだな。全く、幼女を殺そうとするのと一緒にするな」

本当に霊夢と七夜というのは性格は似ていない。でも根底で禍巫女と殺人貴に近いものを感じる。カンフーとロツクつて2人にも不思議な雰囲気がある。

「萃香さん、面白い話ありがとう」

「こんなで良ければまた話してあげるよ。いつでも来な。私はいつもいるよ」

「なら今度はもっと大人数で来るかもしれない。それじゃあ」

帰っていく4人の後ろ姿を見ながらある事を思い出した。禍巫女には未来視の力があって、それで面白いガキ達を見たと言ってたっけ。もしかしたらあの子達の事なのかもね。

夏の終わり（後書き）

おかしいな。こんな話になる予定はなかったのに。でもいつかではキャラ紹介をしましょう。

伊吹萃香

出演：東方project

小伊吹山に住む小さな鬼。見た目に反して実力は高く、七夜が飛びかかっていたら返り討ちにあつたと思われる。

遠野志貴（殺人貴）

出演：月姫、MUGENオリジナル

何故か昔に学生服を着ていた男。退魔を生業としていたが、人との交流はなく、唯一霊禍にのみ心を開いていた。あらゆるものを殺す眼を持つ。

博零霊禍（禍巫女）

出演：東方project、MUGENオリジナル

堕ちた巫女と周りからは囁かれ、人との交流を断った巫女。しかし本当は元々禍々しい力を持っていたため堕ちたわけでもなんでもない。霊夢より胸があつて履いていない。MUGENでは禍・霊夢として活躍。

死神

出演：悪魔城ドラキュラ

志貴と霊禍を世界の危険因子とし殺しに来た存在。萃香と同等の力を持つが、2人の前では無力であった。

始業式（前書き）

書くことねえなあ。

始業式

夏休みも終わり、今日は始業式だ。二学期は一番長くて面倒だけど、楽しい行事が多いんだよな。

『お前ら！ 久しぶりだな！！ 今日から二学期だが弛んだ生活は許さんからな！！』

キラ校長はいつも元気だな。それにしても七夜の反応がないな。いつもならキラ校長に飛びつくはず

「んんー！！ んー！？」

何もなかった。七夜が猿轡をされて簀巻きで転がっているのなんて見なかった。

『以上だ！！ 愉快的な二学期にして私を楽しませろ！！』

「さて、ロック、博麗行くぞ」

「七夜はいいのか？」

「私は放置に賛成よ」

博麗は良い事言った。あいつはたまには反省させないといけない。というわけで放置決定。

――
教室に戻ると既に七夜はいた。しかもさっきのままだ。みんな一瞬動きが止まるが、隣に棺桶が浮いているのを見て安心して席に座り始めた。七夜がああ姿のまま移動してきたのかと思っちまったよ。

「みんな、おはよう。って七夜君どうしたの!？」

教室に入ってきたオム君先生が七夜を見て驚く。

「オム君先生、気にしたら負けですよ」

「負けなの!？」

「負けよ」

ナイア先生もやってきて棺桶を回収した。もちろん七夜はそのまま。

「では出校日にも言っていた転校生の紹介よ。オム君先生」

「あ、はい。ではまずはナコルルさん」

「お邪魔します」

お、ナコルルさんだ。海水浴場で会った時以来かな。こっちが手を

振るとにつこり笑い返してくれた。

「……………」

ギョツ

「いだっ!?! コマチ、抓るな」

「ふん」

「ナコルルさんは、七夜君の隣になってますね」

「んっ!?! ん、んんー!?!」

何を言っているか分からないが、七夜の目を見ると必死に逃れたが
つているように見えた。とりあえず理由はないが、七夜南無。

「次はお市さんです」

「失礼致します」

「えっ?」

市さん? 転校してくるなんて聞いてませんよ。

「お市さんはカンフーマン君の後ろの席ですね」

「はい」

隣からびっくりするほどの殺気を感じる気がする。気のせいだよな?

「カンフーマンさん、これからよろしくお願いしますね。コマチさんも」

「あたしはよろしくなんぞしたくもない」

「そうですか」

険悪だ。誰か助けを…………… ロック！！

「！（サツ）

目を逸らしやがった。なら次は博麗！！

「……………」

アイドル雑誌読んどる！？ お前学校の始まりの日にそんな事してんじゃねえ！？

「では最後の1人、忍者君です」

「汚忍と説明しなかったか？」

…………… 忍者だ。忍んでないが忍者だ。それを言ったら不破先輩はもつと忍んでないけど。あの人は戦う時大声を出すもんな。

「あら？ あの時の」

「あ？ なんだお前このクラスだったのか」

博麗と知り合いなのか。いつ出会ったんだろう？

「博麗さんと忍者君は知り合いなんだ。じゃあ忍者君は博麗さんの隣で」

「知り合いだから、まあいいか」

「知らない人の方が新しい事があって面白くない？」

「俺は保守的なんだよ」

仲良さそうだな。後で質問責めをしてやるつ。

――

転校生紹介後の先生の話も終わって解散になった。さあコマチと市さんの恐怖から逃避するために博麗に質問責めだ。

「博麗、ちよつといいか？」

「何？」

「忍者とはどういう関係なんだ？」

「ん、変なのに絡まれてたのを助けてもらった関係」

なんだ、彼氏彼女とかの関係じゃないのか。かなり普通だったな。

「それで忍者は？」

「あつちよ」

博麗が指を刺す方向にはロックに絡んでいる忍者がいた。

「こんな所でドラクロをやってる奴に会うなんてな。今のうちにサインくれよ」

「サインなんて書いた事ないんだが」

「それでいいんだよ。将来有名になった時に価値が出るからな。日付も書いてくれ」

忍者はドラクロのファンだったか。それとも有名だからサインを貰うだけだろうか。

「しかしあんたも七夜も大変ね」

「何がだ？」

「はいはい鈍感鈍感」

ガシッ

突然両脇をコマチと市さんに掴まれた。

「どうしたんだ？ 何か悪い事したのか？」

「……………」(にっこり)

2人共、無言で笑顔はやめてくれ。威圧感がハンパない。

「んんー!!」

七夜の叫びが聞こえたので見てみると、七夜がナコルルさんに担がれて教室を出て行くのが見えた。そして直感した。俺も同じ運命を辿るんだ。

「や、やめてくれ!!」

「カンフー」

「博麗！ 助けて」南無 「チクシヨウメー!!」

俺がどうなったかはみんなの想像に任せる。

始業式（後書き）

いいギャグが思い浮かばない。というかギャグってなんだ？ 最近元々やっていた小説がおろそかになってきたのでそつちに集中しようと思います。だからこつちの更新は遅れるかもです。

町内運動会（前書き）

出演キャラは殆どが体操服と考えて下さい。

町内運動会

うちの地域では小・中・高・大の学校、幼稚園や保育園も集まって運動会を開催する。幼稚園や保育園は主に観戦なんだけどな。

「今年はずちのクラスが優勝するわよ!!」

『はい!!』

「返事はイエスマムよ!!」

『イエスマム!!』

今日ばかりはみんなテンションが高い。あのナイア先生ですら優勝を目指し、クラスメイト全員が激しく燃えている。それも仕方がない事だ。なんたって優勝クラスには好きな物が贈られるからな。

「こ、これはあ、いつもと違うな」

「凄まじい熱気ですね」

「忍者が有利な競技があればいいんだが」

「七夜さんと一緒なら頑張れます」

これ知らないコマチと市さんと忍者はついてこれてないな。ナコルルさんは変な方向へトリップしてる。

「カンフー!!」

「うわっ！？ モノか」

「応援に来たよ。はい、お弁当」

「ありがとう」

「……………」

「なんだよ」

「当ててんのよ！？ 少しは反応しなさい！！」

「もう慣れたわ！！」

風呂に突撃されたり、ベッドに潜り込まれたり、今更胸が当たって
んのがなんぼのもんじゃない！！ てやんでい！！

「忍者、私と二人三脚出るわよ」

「二人三脚？ 霊夢はカンフーとかロックとか七夜とやれよ。親友
だから息が合うだろ」

「あなたとは身体の相性が良さそう」

「身体って、誤解を招くような言い方するな」

博麗は忍者と二人三脚に出るのか。忍者は博麗式二人三脚に巻き込
まれてしまうなんて運が悪い。

「カンフー、二人三脚に出るか？」

「いやコマチ、出れるのは一組だけだから」

「チツ、そうか」

俺はどの競技に出ようか。楽な団体競技にしようか。

「よし、俺は玉入れにする」

「ならあたしもそれにするか」

「私もそうしますわ」

コマチも市さんも同じ競技を選んだか。女子にも優しい競技だもんな。

「ああ、ロツクは障害物競争よ」

「ナイア先生、それ本気ですか？ まだ死にたくないんですが」

「やりなさい」

「orz」

ロツクも災難だな。一番キツイのに選ばれるなんて。

「七夜は短距離よ」

「ま、妥当かな。今回は協力するさ」

「いよっしゃああああ！！ 俺はクイズ競争に出るぜ！！！」

『やめろ』

キワミ、お前にクイズ競争は無理だ。

――

開会式が始まる。壇上に上がるはキラ校長だった。

『よく聞け！！ 私が大道寺きら様だ！！ 貴様ら！！ 今日
は戦争だ！！ そして無礼講だ！！ 存分にその力を発揮しろ！！』

おお、まともだ。いつもならもつと変な事を言うのに。

『その胴着！！ 失礼な事を考えたな！！』

「滅相もない」

読心術でも心得てるのかよ。迂闊に変な事は考えられないな。

『あー、テストス。うおっほん、俺が夢弦小学校校長のシンだ。この運動会は力こそが全て。勝ち抜いてみせる。その欲望を存分に見せつけてみる。以上だ』

小学校の校長なのに言う事が微妙に過激だな。でもあの小学校だから仕方ないか。

『皆さんおはようございます。今日は夢弦中学校の校長が休みなので私、オズワールドが挨拶を務めさせていただきます。皆さん、怪我のないよう元気に楽しんで下さい』

オズ先生ってまだ校長になってなかったのか。あの人ならすぐになれそうなのに。自分から蹴っているのかな？

『最後に夢弦市立大学の校長の息子である僕が……』

――

「残念。カットだ」

「この僕がつー!!」

『第一競技、短距離走』

早速短距離か。幼女達、俺の速さに酔いしれな。

「七夜あ、頑張つてねえん」

「七夜君なら一番ですよね」

「応援していますよ七夜さん。永遠に」

「今日はクラスのために頑張りなさい」

ナイア以外にまともなコメントはないのか。あの変態共め。

「負けたら犯すわよ」

訂正。やっぱりナイアもどっこいどっこいだった。だがあの言葉のせいで負けるわけにはいかなかった。

「僭越ながら僕、STGF0394がスターターを務めさせてもらいます。それでは全員位置について……………よい」

パンツ

軽快な空砲音と共に全員が飛び出すが、もちろん俺がトップだ。七夜の歩法は瞬間的にトップスピードになれるんだからな。このままぶっちぎりで……

「待つデース」

「!?!」

なんだあれは!?! 後ろから物凄いスピードで巨大な黒い球体が転がってくる。新手的奇襲か!?!

「デスデスデス」

「うおおおおおおお!?!」

トップスピードでは負けている。俺が前にいれるのはスタートダッシュからトップスピードであったからで、このままでは潰されてしまう。だがゴールテープは目の前。間に合うか? 否、間に合わせる!?!

「ハアッ!?!」

俺はヘッドスライディングのように飛び込んでゴールテープを切った。そして瞬時に横へ転がり球体を避けた。

「うーん、負けてしまったデス」

俺以外は全員こいつに潰されたか。なんなんだこいつは。

『ただいまの短距離走の結果です』

1位：夢弦高校2年・七夜

2位：夢弦小学校5年・フェルナンデス

再起不能：2人以外

「小学生かよ!!」

――

七夜のあの動きは忍者のそれに近いんだが、どこで覚えたのか。

「忍者、七夜が勝ったんだから私達も勝つわよ」

「勝つ気はあるんだが」

「何？」

「身長がな」

二人三脚というので有利なのは歩幅に近いコンビだ。俺は180以上なのに対し、霊夢は160程度。これだけ身長差があると歩幅を合わせるのが難しい。

「全部私に任せれば大丈夫よ。いや、あんた任せかしら？」

「よく分からないが、俺が頑張ればいいんだな？」

「そうよ」

「承知」

『第三競技、二人三脚』

出番みたいだな。一丁やってやるでござるよ。

「結べたわ」

「……………なげえ!!」

霊夢が結んだ紐はとにかく長かった。これ反則じゃないか？ どう見ても反則だろ。

「ルールに紐の長さなんて書いてないわ」

「審判!! いいのかよ!？」

俺が叫ぶと満場一致で の札が上がった。この地域何かおかしいぞ。常識というネジが抜けてる。

「それでは皆さん位置について……」

「始まる!?!」

「よーい」

パンツ

これがオム君先生なら止めたんだろうなと思いつながら走り出す。紐が長いから比較的自由に走れるんだが、霊夢はついて来れるのか？

「遅いわよ。引き摺っていてもいいの？」

「飛ぶな!?!」

まさか空を飛ぶなんて。確かにそれは速いけど。

「二人三脚なんだから2人共ゴールしないといけないんだからね」

「分かってらあ!」

霊夢に引き摺られないよう速く走る。そして周りに圧倒的な差を付けてゴールをしようとした。

「時よ止まれ!?!」

そんな声が聞こえたと思ったら金髪娘と猫耳娘が先にゴールをして、

俺達が2位だった。

「残念でしたわね。時間を操れる私の前に速さ勝負など無意味ですわ」

「時間を操るだと!？」

何この非常識。チートはいけないと思います。

「鬼になってキンクリすれば良かったわ」

霊夢が何かとても物騒な事を言っていた気がする。とりあえず順位は

1位：ゼノン・橙

2位：霊夢・汚忍

――

『第六競技、玉入れ』

あたし達の出番だな。博麗が勝つためにあんな事をするならあたし

達だって何をしても問題ないはず。

「市、ルールには載ってなかったか？」

「問題ありません。モノさん、協力お願いします」

「勝利のため、カンフーのため、やるよ」

別にあたしはカンフーなんかどうでもいいんだが、負けたくはない。だからどんな手でも使う。

「おい、やるぞー」

「おうー!!」

「今行きます」

カンフーが呼んだので玉入れの棒の近くへ行く。

「それでは始めます。よーい」

パンツ

「うおりゃあー!!」

スパツ

「へっ?」

あたしはまず鎌で玉入れの籠を切り落とす。棒ごと倒すのは禁止だ

が、籠だけなら問題ない。

「さあカンフー、入れるぞ」

「いや、これって」

「ルールの穴ですわ」

これを見た他のチームが同じような事をしようとしたが、その前にそいつらの足元が泥沼になった。モノ、よくやった。

「念には念を入れましょう」

市は黒い影みたくないなもので他の籠に蓋をした。これで完璧だ。あたし達は玉を好きにだけ入れられるのに対し、他のチームは玉入れどころか立つことすら困難。更に玉を投げても蓋がされて入らない。圧倒的だ。

「妨害し過ぎじゃないか？」

「カンフー、勝てばいいんだあ！！」

「そうですね」

玉入れはもちろんあたし達の勝利だった。

――
――
昼休憩。俺は都古ちゃん家族に誘われて一緒に昼食を取っている。

「ロック君が特撮番組に出るなんてね。ジョンスさんが特撮ファンじゃなかったら知らなかったわ」

「霊姫、あまり言わないでくれ」

「すっごく格好良かったよ!!」(あのルシファーってのが邪魔だけど)

「ありがとうございます」

ジョンス先生って特撮ファンだったのか。だからサインを頼んできたのか。都古ちゃんにあげると思った。

「ロック」

「はい、何ですか?」

「今変身は出来るのか?」

「お父さんだったら、流石に今は「出来ますよ」「えっ?」(ロックお兄ちゃん、本気?)」

「この腕時計があればすぐにでも」

「見せてくれ！ 内申をやる！！」

ジョンズ先生の迫力が凄まじい。そんなのでいいのか教師。だけど生徒としては嬉しいから見せよう。

「じゃあ、変身！！」

俺が腕時計のボタンを押すと、一瞬でドラクロスーツが俺に装着された。凄い技術だな。

「あっ！ ドラクロだ！！」

『わあああああああ！！』

ドラクロになった俺を見つけた子供達が寄ってきた。てか多すぎ。少し待って

ゲキッ

「！！！？」

アシクビラクジキマシター

ロックが怪我をした。本人はとても爽やかな顔で

「もう障害物競争に出れないな。残念残念（歓喜）」

とか言っていた。お前はそこまで出たくなかったのか。

「仕方ないわね。カンフーマン、貴方が出なさい」

「拒否は出来ませんよね？」

「当然よ。主人公でしょう」

メメタア

『最終競技、障害物競争』

「出番よ。行ってきたさい」

ロックめ。恨むぞ。この障害物競争が一番過酷なのに。何が過酷か
と言うと、たった1つだけの障害物が過酷過ぎるんだよ。抜けられ
る気がしない。

「皆さん、これが最終競技です。頑張ってください」

オム君先生、みんなの顔を見てくれ。頑張る頑張らないの問題じゃ
ないって顔じゃないだろ？

「それでは、よい」

パンツ

全員が走り出す。目の前にはいくつもの扉。その中に入っていた選手達はすぐにボロボロになって放り出されていった。

「にいちゃ」

「カルマ、お前もこれに出てたのか。今ならまだ間に合う。棄権しろ」

「やつ」

「……分かった」

本人がそう言うならこの競技の恐ろしさを身体で覚えてもらおう。

「俺はこの扉に入るな」

「私も」

俺とカルマが同じ部屋に入るとスーツを着てグラスンを付けた男と、黒いメイド服の女性がいた。そしてそこには都古ちゃんとツンツン髪の子が倒れていた。

「浪清君？」

「な、何故、疑問系？ 浪清、だ」

「知ってる」

カルマの知り合いだったか。なら中学生だな。

「次はあんたらか？ それじゃあさっさと終わらせて点を頂くぜ」

「妨害大学生か」

この障害物として登場するのが人である。つまりは障害物役である人を倒さないとゴールへ進めない。そして妨害大学生とは障害物役をやる大学生で、全員を食い止めると一発逆転をするぐらいの得点を貰えるのだ。選手側は普通の点なのに。

「んっ！！」

カルマが双剣を取り出しやる気満々だ。

「兄さん、見せてあげましょう」

「ああ当然さ。見せてやろう」

「カーネフェルを！！」

「！？ カーネフェルう！？ まさかオズ先生の！」

「俺は息子のジョーカーだ」

「娘の朔よ。養子だけど」

これはヤバい。まさかオズ先生のお子さんだったなんて。

「少年行くぞ！ ツーペア！！」

「うおっ！？」

カードを振っただけなのに胴着が少し切れた。これがカーネフェルか。カルマは大丈夫だろうか。

「他に意識が行ってるぜ！！」

「シッ！」

「おつと速いな」

攻められる前にジャブで迎撃する。隙があれば大技を叩き込んでやるのに。

「今だ！ スリーカード！！」

「があっ！？」

3連続のカード攻撃。避ける事も防ぐ事も出来ずに切られた。

「その程度か？ なら決めるぜ」

「まだまだよ！！ 食らえっ！！」

挑発をされて突き手を繰り出した。

「甘い。ジャックポット!!」

「うわあああ!?!」

それを待っていたようにカードを円形に広げた攻撃でカウンターを受けて吹き飛ばされた。その時、高速のカード投げを避けながら朔つて女性を倒しているカルマが見えた。

――

「……………」

「起きたかしら?」

目を開けるとナイア先生やクラスメートがいた。

「はい、はっきりと」

「回復力はあるようね。リタイアしてから5分程度よ」

回復力が早くても負けたら意味がないんだけどな。

「ちなみに優勝したわよ」

「マジですか？」

「妨害大学生があの人だけだったみたいで、カルマちゃんもどっちも倒したからね」

……兄として情けねえ。

「好きな物を今のうちに希望しておきなさい」

「カルマに権利を譲ります。俺はもう少し寝てます」

「分かったわ」

俺に受け取る権利はないもんな。あー身体いてえ。

町内運動会（後書き）

主人公があそこから逆転すると思った人。残念でした。
ではキャラ紹介をしましょう。

夢弦私立大学の校長の息子

出演：テイルズオブデスティニー

説明？ この僕がっ！！ で十分ですよね？

ジョーカー

出演：AKOF、MUGENオリジナル

オズワルドの息子。カーネフェルというカード暗殺術を伝承している。イケメン大学生。

朔

出演：東方改変、MUGENオリジナル

普段から黒いメイド服を着ている少女。オズワルドの養子。カーネフェルを使うが、主にカード投げ主体でオズワルドやジョーカーのものとは別物に近い。

ある未来人の1日(前書き)

ちよつと後書きで皆さんに聞きたい事があるんで、出来れば答えて欲しいな、なんて。

ある未来人の1日

地下闘技場で俺とネージユは朝から戦闘訓練をしていた。

「はああああ、真っ赤に燃える!!」

「見えてるわよ」

俺の炎をネージユが避け、ネージユは濁った氷塊を飛ばしてくる。それを当たる前に溶かしきる。

「少しいいか？」

「お父さん」

「親父か。なんだ？」

そんな戦いの中やってきたのはザトー、親父だ。子煩悩なのか我が儘なのか知らないが、俺らに自分の事を父親と呼ばせたがる。まあ変態だな。

「今回はKUSANAGIに用があつてな」

「俺にだ？　なんだよ。一応聞いてやる」

「（自称）侵略者の制圧なんだが」

「つええのか？」

「なかなかと」

「乗った」

どんな奴かは知らないが侵略者を名乗るんだ。しっかりと楽しませてくれるよな。

「侵略者ってのはどんなのだ？」

「イカらしい」

「イカ？ 海産物のイカか？」

「イカだ」

イカに侵略宣言される日本ってどうなんだか。というかイカ程度なら漁師を呼べ。

「まあいい。焼きイカを手土産に戻ってきてやるよ」

「期待しているよ」

――

イカの情報なら海だろ。という事だから海にやってきたぜ。

「荒れてるな」

今日は風が強いからか海が荒れている。そのせいでサーファーとか
が沢山いやがる。まあそんな事より今は情報だ。あそこの海の家で
いいか。

「誰がいるか？」

「はいはい、いらっしや……KUSANAGIか」

「ああん？ ゲイルじゃねえか。何やってんだよ」

「バイトだよ。学生は金がいるんだ」

「親父から貰えよ」

「そうはいかん。自分で稼いでこそ意味がある」

真面目だな。もうちょっとちゃんぽらんでもいいだろうによ。

「それで？ 何を買った？」

「情報をな。とりあえずラーメンでも食いながら話をしようじゃね
えか」

「バイト中なんだが」

「こまけえ事は気にすんな」

こんなに人がいないんだ。ちょっとサボっても誰も文句言わねえよ。

――

「ほら、ラーメンだ」

「美味そうだな。ボロい店なのに」

今の建築物に比べたらしょっぱい木造だ。そこら中にシミとかも目立つし。

「ボロいは関係ないだろ。オーナーの意向なんだ。昔の海の家をそのまま残しているそうだ」

「昔ってどれくらいだよ」

「それは知らないな。それより聞きたい情報とは？」

「侵略者とか聞いた事ないか？」

「侵略者？　どんな」

「イカ」

「イカ！？　だから海か。安直だな」

うっせえな。それ以外情報がないならそうするしかないだろ。イカが川や湖にいるか？　いないだろ？

「残念だが、俺は知らない」「うわあああああああああああああ
あ！！　イカの化け物だ！！」今知った」

「出やがったな！！」

俺とゲイルは海の家から飛び出した。そこにいたのは……

「さあ、この海岸を侵略してやるでゲソ！！」

「「ちがつ！」「」

そこにいたのは巨大な、まるで大王イカのようなイカだった。そして俺とゲイルは何故かそいつの喋り方を否定したかった。それおめえのじゃねえから！！

「這え！」

「ダブルシュート！」

俺は炎を、ゲイルは風を飛ばす。イカはそれに気がつくとそのゲソ

で払い落とした。意外にやるな。

「危ないじゃないカ!!!」

「てめえを倒せと言われてるからな」

「俺は、まあ付き添いだな」

「ゲソ!? 私の邪魔をするゲソね!!! 許さないでゲソ!!!」

イカは水中に潜るとゲソを俺達に向かって振ってきた。だがおせえ。

「ヨノカゼ!」

「燃えちまえ!!!」

ゲイルが風でゲソを切り刻んで、それを俺の炎で炭にする。こんな事されたら当然痛みには耐えられずにイカが飛び出てきた。

「ゲソ!? 裂けた焼きイカになってしまっじゃないカ!!!」

「馬鹿め。水中から出やがったな。焔に……還れえ!!!」

「ゲ、ゲソオオオオ!?」

腕に溜めた炎を思いつ切りイカにぶち当てた。イカは焼けて香ばしい匂いを放っていた。

「食えるか?」

「止めておけ。イカにはアンモニウムが含まれている。特に巨大なイカほどその含有量は多く、とてもじゃないが食べられたものじゃない」

「ほー」

ゲイルは物知りだな。トリ アにでも出せよ。

「仕事は終わったから帰るか。あんまり楽しめなかったが、ヒスイやレイムとの試合で発散するか」

「暇があれば俺らもそっちに邪魔をするとザトーに伝えておいてくれ」

「俺『ら』って、あの3人も来るのか？」

「駄目か？」

「いや。あいつらとも戦いたいだけだ」

だが白麗霊夢の本気は勘弁な。流石の俺でも絶対に勝てない戦いはしたくない。

ある未来人の1日（後書き）

侵略イカ。娘に非ず。イカ娘と思った人、残念でした。
ではキャラ紹介をしましょう。

クラーケン

出演：シャイニングフォース

見た目は完全にイカ。ただの巨大なイカ。しかし人語を解し、語尾に『ゲソ』や『くじやなイカ』を付けるなど、どこかで聞いた事のあるような言葉を話す。食べられません。

さて前書きで書いていた聞きたい事とは、次回から未来編のようなストーリーを始めようと思うのです。それでこれから挙げる2つのどちらがいいか答えて欲しいのです。

・過去編

・異世界編

いずれどっちもやるのですが、先に読みたい方を答えて下さいな。
では次回もお楽しみに。

拉致られて過去へ行く(前書き)

5:1で過去編が多かったので過去編スタートです。

拉致られて過去へ行く

……なんか揺れてる。地震だろうか。まだ眠いの。でも地震だったら危ないから起きよう。

「……箱の中、なのか？」

「ようカンフー、起きたか」

「ロック。それに七夜に博麗も。どっという事なんだ？」

「俺も起きたらこうなっていた」

「俺は逃げる少女の写真を追っていたら」

「私は逃げるアイドル写真集を追っていたら」

「お前らは予想出来たよ」

その2人は欲望が足りすぎだよ。もっと自重すべき。

「それでここは？」

「」「」「さあ？」「」

『全員起きたようだな』

箱の中に響く声。以前にも何度か聞いた事のある声だ。嫌な予感しかしない。

「イグニス社長ですよね」

『如何にも』

「もしかして、また……ですか？」

『まただ』

「イグニス社長？ カンフー、何を知ってるんだ？」

「俺達はネスツの実験に巻き込まれたんだよ」

『今回は過去へ行ってもらおう』

過去か。未来とは違う方向で大変なんだろうな。しかし今回は4人一緒か。

「私達は許可してないわよ」

『アイドル写真集と幼女の写真はあげよう』

「仕方ない。やりましょう」

「「「「」」」」

これから何が起こるか考えずに目先の利益に捕らわれやがって。こいつらだけじゃ心配だし、タイムトラベル経験者の俺もついて行くしかないな。

『過去へ行く前にもう1人ほど拾っていく』

誰だろうか。運が悪い奴だ。

――

寝坊をしてしまった俺はパンをくわえながら走っていた。まあ忍者の脚力を持ってすれば家から学校までなんて数分で……

ドンッ

「っ！ す、すみません」

「いや、こちらにも不注意だった」

十字路の角でおっさんとぶつかってしまった。パンをくわえながら走っていたからだろうか。それでもおっさんは嫌だな。

「君は、忍者君だね」

「はっ？ 何で知ってたよ」

「うちの社長に連れてくるように頼まれてね。来てくれるかい？」

「あんたの名前と会社ぐらいは知りたいな」

何にも知らないのについて行くのは馬鹿のやる事だ。何かあった時のために愛刀をいつでも抜けるようにしておこう。

「それもそうだ。私はゼロ。ネスツの社員だよ」

「ネスツのか。そんな大企業の名前出されたら逆に信用ならねえよな」

「君は疑り深いな。流石は忍者といった所か」

「言っとけ。だがついて行ってやる」

「いいのかな？」

「ああ」

対峙していて分かったが、このおっさん、隙がない。下手に逃げよりかはついて行った方が安全だ。

――

箱の中で待っていると箱の一部が開き、忍者がやってきた。こいつだったのか。

「なんでお前らが。まさか本当にネスツ関連か？」

『その通りだ。初めましてだな、忍者』

「これってイグニス社長の声か？」

「だぞ。過去に行くんだと」

「過去お？」

忍者が疑わしい顔をする。でも事実だからしょうがない。

『そろそろ全てのエンジンが温まっただろう。ゼロ』

『ハッ！！ では君達、これからタイムマシンが動くから注意してくれ』

俺達の身体にシートベルトが自動的に巻き付けられた。そして箱が回りだす。さっきまでの揺れはエンジンを動かしていた揺れか！！

「「「「「うわあああああああ（きやあああああああ）！！

？「「「「

――

タイムマシンが現代から消失する。成功だな。

「ゼロ、マーキングは出来ているな？」

「……………」

「ゼロ？」

「マーキングは出来ています。しかし……………」

「なんだ？」

「彼らの行き先がそれぞれバラバラなのです」

「なんだと？ 全員タイムマシンの中ではないのか。もしもを考えて
彼ら1人1人にマーキングをしておいて良かったな。」

「時代はどうなっている？」

「バラバラなのは場所だけです。時代は400年前です」

……………何かあればうちの社員を送ろう。

――

いてて、激しすぎるだろ。

「あれ？ ロック、七夜、博麗、忍者、どこだ？」

箱の中には俺以外は誰もいなかった。どういう事だ？ とりあえず外へ出よう。

「おお……」

見事に何も無い。いや、川があるだけありがたいな。水の確保は大切だ。川には魚もいるだろうし、箱は家にもなる。

「此処を拠点とする……！」

……
つく、頭がぐらぐらする。タイムマシンってのはあんなに乱暴な
か。

「！ 博麗！！」

「……ふあ、何？ せつかく寝てたのに」

「何って、よく寝れるな」

「この原っぱ気持ちいいもん」

確かに気持ちいいんだが……

「ちよっ！？ 何あんたら！？ 見てよ志貴！ 私とあなたそっく
りなのがいるわよ！！」

「……」

……色違いの博麗と超イケメンがいる。あのイケメンはいつたい誰
だ！？ そして色違い博麗は胸がデカいな。

「なんかムカつく事考えたわね」

「気のせいだ」

――

「うわああああああ！！？ 落ちてる――！！！」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！ このまま落下したら死ぬ！！ 俺には飛行能力なんてないんだぞ！！

「いや待て、あつた！！ 変身！！！」

俺は腕時計を使ってドラゴンクロウに変身する。ドラゴンクロウスーツの飛行能力で上手く飛んで地上に着陸した。

ざわざわ

あ、ヤバイ。村に着陸したせいで沢山の村人に見られてしまった。

「神様だ！！！」

「神様が降りられたぞ！！！」

……………はい？

――

気がつくと牢屋に入れられていた。手足は縛られていないが愛刀の鬼哭がない。あれがないとどうにも寂しい。

「起きたな。出る」

「あいよ」

俺が起きてしばらくすると人がやってきて俺を外に出した。その時には手を縛られたが、縄抜けぐらひは習得しているから問題ない。

「頭首、連れてきました」

「入られよ」

「ハッ!!」

立派な部屋の中に入るといかにも忍者がいた。人の事言えない格好をしてるけどな。

「これは汝の刀でござるな？」

「人から取っておいてよく言う。鬼哭を返してもらおうか」

「鬼哭と呼ぶのか。良い刀だ」

そう言うのと素直に鬼哭を返してくれた。

「返す代わりに聞こう。汝はどの流派の忍だ？ 我ら伊賀ではないのは分かる。甲賀か？」

「俺か？ そうだな。強いて言うならヴァナ流の汚い忍者だ」

「うゝ あな流とな？」

しかしここが伊賀の里か。忍者の憧れの1つである場所に来れるなんて。

「聞いた事のない流派でござるな」

「俺は今この場が伊賀と知ったんだが。此処が伊賀って事は頭首のあんたは」

「服部半蔵でござる」

拉致られて過去へ行く（後書き）

それぞれがバラバラな場所に飛ばされてしまいましたね。作者としてはカンフーがどうなるか一番心配です。
ではキャラ紹介をしましょう。

ゼロ

出場：KOF

ネスツの重役の1人。とても常識人で子供好き。最近はクリザリツドと美鈴の子供が早く出来ないか楽しみで仕方ないらしい。

服部半蔵

出場：サムライスピリッツ

伊賀の里の頭首。里の人々にも尊敬をされている忍者。覆面を取るとイケメンらしいが、家族の前と風呂以外で取る事は滅多にないらしい。

サバイバルなカンフー編（前書き）

それぞれの現状。まずはカンフーから。

サバイバルなカンフー編

基本的な主食はタイムマシンの中であって助かった。でもなんか味気ないから山菜やキノコを採ってこよう。

「これはいける。これは無理」

食用と非食用を分けながら選んでいく。これだけあれば十分だ。次は川に帰る。そして出発前に仕掛けてあつた罠を引き上げる。

「いるいる」

そこそこな数の魚が引っかかっていた。ちなみにこれらは全てボーイスカウトで習った事だ。

「やってて良かったボーイスカウト。っとあれは雉か」

貴重なタンパク源を発見したぞ。近くの石を拾って、狙いを定めて

……

「じらっ……」

バサバサ

後ろから突然大声で怒られた。その声に反応して雉は逃げてしまった。

「何を……」

「どうした？ 何をの続きは？」

後ろにいたのは女性だった。ただ普通の女性ではない。黒い翼に黒い髪。女子高生みたいな服に赤い小さな烏帽子。そして黒い羽団扇。だが一番異常だったのは真っ黒な顔に強者としての威圧感だった。

「勝手に私の縄張りに入って随分好き勝手やってるみたいだな」

「……………生きるためだ」

「なら里にでも行け！」

女性が目を開く。真っ赤なその目からは脅威しか感じない。だけど引いたらいけない。引いたらやられる。

「里とかに居場所があれば行くな」

「居場所がないって言うのか？ 人間なのに？」

「未来から来たからな」

「その証拠は？ あの箱が証拠というのは認めないから理不尽な。どう見ても過去にはない代物なのに。」

「ちょっと待ってて下さい」

俺はタイムマシンの中に入って未来らしいものを探す。そして見つけた。未来の証拠になる癒やしアイテムを。

「これでどうだ！ー！」

「？　これは？」

「梱包材。またの名をプチプチだ！！　さあこのエアを潰すんだ！」

食料の梱包に使われていた代物だが、過去には絶対に存在しないものだ。

「ぶちぶち？　えあとというのはこの凹凸物か？　どれ」

プチ

「……………」

プチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチ

「……………」

「顔がにやけてますよ」

「！　そのような事はない！」

真っ黒な顔に赤い目と白い口が浮かぶ姿はホラーだ。しかもにやけてるから余計に怖い。

「とりあえず、こんなものは見た事がない。お前を未来から来たと認めよう」

「ありがとうございます。一つ質問いいですか？」

「なんだ？」

「その顔は元々？」

「いや、威嚇や戦闘時のものだ。普段はこれだ」

おっ、普通に肌色になった。目は赤いけど。

「さて、お前の名は？」

「カンフーマンです。ちょっとした実験で飛ばされてきました。貴女は？」

「私の名は天帝絶。はぐれ天狗だ」

「はぐれ天狗？」

「天狗社会から外されたんだ」

「強すぎますか？」

「ほう、なかなかの観察眼じゃないか。気に入ったぞ。いじ、鍛えてやる」

「今苛めてやるって」

「そんなのは気のせいだ」

絶対気のせいじゃない。だって目がにやけてるもん。

「どれ、まずは私に攻撃してみる。話はそれからだ」

「分かりましたよ」

一泡吹かせれるか分からないが、全力でやってやるからな。

――

「も、もう駄目」

どれだけ攻撃を仕掛けても避けられるし、当たっても手応えがない。天狗ってこんなに強いのか？

「頑張った方ではないか？ 基礎も応用も出来ている。これなら大丈夫だな」

「何がですか？」

「お前なら黄金状態になれそうだ」

黄金状態？ どこかで似たような言葉を聞いた事があるような。

「己の全てを解放するのが黄金状態だ。そのための授業は過酷だといふのにやるといふのだな」

「いや、俺はまだ」

「そこまで言ふのなら仕方あるまい！！ 私も全力で手伝ってやろう！！ 報酬はぶちぶちで構わんぞ」

この人、話を聞かないんじゃない。端から聞くつもりがないんだ！！ なんて性質が悪い！！

「さあ、やるぞ？」

「お手柔らかに」

「断る」

「ですよー」。

サバイバルなカンフー編（後書き）

実はカンフーマンの中のカンフーマン2009というキャラにはゴールドカラーが存在します。ゴールドカラーについては後ほど。ではキャラ紹介をしましょう。

天帝絶

出演：東方project改変、MUGENオリジナル
強すぎて天狗社会から外された天狗。カンフーが落ちた森に暮らしている。結構な年齢で、いろいろな事を知っている。戦闘時などでは顔が黒くなる。

黄金状態

つまりはゴールドカラー。元々はGGのキャラ達のものだが、MUGENでは沢山のキャラがこれを持つ。

そっくりさんな七夜・霊夢編（前書き）

今回は七夜と霊夢編です。

そっくりさんな七夜・霊夢編

世界には似た人間が3人はいると聞く。しかしこんなイケメンが世に2人もいていいのだろうか。幼女達が放っておくはずがない。これは大変だ」

「ちょっと、あれ頭大丈夫なの？」

「大丈夫だったらあんな事口に出さないわよ」

「……………」

「志貴に似てるのは見た目だけみたいね」

「私もそっちのいいわ」

おいおい博麗。それはないんじゃないか？ そんな無口より俺の方がいいに決まっている。

「しかし未来からなんて不思議なものね。あんたら、私達の子孫？」

「そっちは私の分家じゃないの？」

「分家？ もしかしてあんたは博麗？」

「そうよ。未来の鬼に聞いたのを思い出したけど、あんたは博零霊禍と遠野志貴でしょう？」

そつえばそんな話もあったな。すっかり忘れていた。しかし俺の

先祖だとしたらあのイケメンも納得だな。

「七夜、今回のあんたおかしくない？」

「正直に言う。過去に来る＋自分と同じ顔がいるという異常体験に混乱している」

「七夜もそんな事があるのね。意外だわ」

果てしなく失礼な奴だ。俺だって人の子だ。そんな事だってあるんだよ。

「鬼って萃香？ あいつも長生きね」

「……………妖魔」

「それは分かってて言ってるのよ」

「今ので会話が成立するのか？」

「夫婦ね」

「馬鹿言わないで。こいつは同志よ。夫ではないわ」

「同志って何のだ？」

「いろいろあったの」

いろいろか。それは気になるな。夫婦でもないのに男女が一つ屋根の下なんて……………カンフーやロックがいるな。リア充爆発しろ。

「それで分家とか言ってたわね。残念だけど違つわ」

「なら何？」

「本家だけど破門されたの」

「えっ、あゝ、ごめん」

「下手に謝るのは相手を侮辱しかねんぞ」

「あら七夜つてのはよく分かつてるじゃない。特別に志貴と戦う権利をあげる」

「ハアツ!？」

「頑張りなさい」

どつしてそうだった。そして志貴とかいうのは既に準備してやがるし。やるしかないのかよ。

――

七夜が志貴って人と戦う事でこの時代の人の実力が測れそうね。

「全力でやりなさいよ」

「志貴、勝ちなさい」

「はあ、仕留めるか」

「殺す」

ちよっ、殺すなんて物騒な事を言ってるけど大丈夫なの？　これが試合ってのを忘れてないわよね。

「フッ！」

七夜がナイフを無数に飛ばすけど志貴さんは高速移動でそれを避ける。七夜の動きに似てるけど、洗練されている。

「くそっ！　セブンスへブン！！」

七夜が姿を消すと同時に無数の攻撃が志貴さんを襲う。はずだった。

「遅い」

「!?!?　ぐあっ!?!?」

あれを掴んで投げた!?　どんな動体視力と反応速度よ!?!?

「……………斬刑に処す」

倒れていた七夜が立ち上がると、自分を中心に魔法陣を展開させて宙に浮いた。しかも刃物を無差別に飛ばしてきてなんかヤバいんだけど。

「うわわ！？ 何あれ！？」

「あんた仲間なのに知らないの？」

「知らないわよ！！」

刃物で地面すら抉ってるし、山の木々も粉碎していく。ただ志貴さんは普通に立っていた。

「あーあ、志貴本気よ。よく志貴に本気を出させたものね。十分評価に値するわ」

「本気？」

「ええ。今の志貴は殺人なんて甘いものじゃない。殺神よ」

「極彩と散れ」

一瞬だった。見たのは志貴さんの初動だけで、気がついたら七夜は倒れていてその後ろに志貴さんが立っていた。

「やだ… かつこいい…」

勝ち誇るわけでもなく、それが当然であるかのような姿はかつこよかった。七夜にこれの半分くらいのかつこよさがあればいいのに。

「この時代の人ってこんなに強いよね」

「志貴は特別。もちろん私も。面白いものを見せてくれたあなた達はうちで暮らす権利をあげるわ。志貴、構わないわよね？」

「……………ああ」

七夜の努力も無駄にならなかったわね。感謝するわよ。

そっくりさんな七夜・霊夢編（後書き）

今回は新キャラもいないので、七夜が葬式モードになっても勝てなかった殺人貴の殺神状態について紹介をしましょう。

殺神状態

殺人貴こと遠野志貴が本気になった姿。文字通り神すら殺す。ちなみにMUGENでは殺人貴はsatsuzink i、殺神貴はsatsuzink iと表示されるよ。

僕は神様なロック編（前書き）

さあ神様にされたロックの話だよ。

僕は神様なロツク編

「お受け取り下さい」

神様として村人達からお供え物を貰っている。人を騙しているように申し訳ないが、食料が得られるのは嬉しい。

「では頂きます」

変身を解いてお供え物を食べる。この姿を人に見られたら神様って言われなくなるんだろうな。

「神様！ お願い……が」

「あっちゃ〜」

早速見つかった。もう追い出されるのは確定だな。

「神様が我々に近い姿に変わられたぞ……！」

「えっ？」

どれだけポジティブなんだよ。そこまで神様を求めていたのか。

「おお、人になられても神々しい」

いや、嘘だろ。無理しなくてもいいよ。もう恥ずかしくて顔を隠したい。

「神様、我々はどうしてもお願いしたい事があります」

「……何でしょう？」

もういいや。ここまで来たら神様をやり通してやる。

「村の外れの廃寺に女性の僧侶が住んでおるのですが、危険な思想の持ち主なのです」

「危険？ どのように危険なのですか？」

「人も妖も神も仏も、全てが平等などと言って妖魔共を引き込んでおるのです。もしその妖魔共を連れて攻め込まれたら我々はやられてしまいます。どうかお力をお貸し下さい」

俺は立派な思想だと思ふな。つまりは差別を無くしたいって事だろう。だけど村人達にとっては妖魔をたぶらかして仲間になっている危険人物といったところか。

「とりあえずなんとかしましょう」

「ありがとうございます！！」

これが終わったら他の所へ行こう。いつまでもこんな場所にいたらいろいろ巻き込まれそうだ。

――

村人に言われた廃寺へと向かう。そこまでボロボロな訳ではないよ
うだ。人がいるから当然といえば当然だな。

「すみません、誰かいますか？」

「どちら様ですか？」

出てきたのは金髪と紫が混ざったような髪をして、白黒のゴスロリ
つぽい服を着た女性がいた。

「村人に廃寺にいる僧侶を追い出してくれて頼まれてな」

「そうですね。貴方もそのような考えをお持ちですか」

「俺は「問答無用です!」っ!?!?」

速い蹴りを繰り出される。僧侶、しかも女性なのにこんな攻撃を出
来るのかよ。

「食らいなさい!!--」

「なんだ!?!?」

女性は手から魔法の弾丸みたいのを撃ってくる。遠距離攻撃なら烈

風拳があるが、この弾幕に比べたらそよ風程度にしかない。そもそも戦う事が目的じゃないんだ。どうにかして話をしないと。

「変身!!」

「姿が変わった!?!」

この弾幕を突破するには耐久力と速さが必要だ。ドラクロスーツにはその両方がある。一気に終わらせる。

キュイイイイ

エネルギーを溜めて一気に放出する。そして僧侶の後ろ高速移動をして、ブレードを僧侶の首に突き付けた。

「話を聞く気になったか？ 俺は話し合いに来たんだ」

「……………分かりました」

――

なんとか説得(?)をして話し合いに持ち込めた。

「話とは？」

「俺はあんたを追い出すつもりはないんだ。勝手にやらされてるだけ。でも何もやらずに戻ったら大変なんだよ」

「そうですね」

堅いな。こんな空気だとやりにくくてしょうがない。

「……実は俺、未来から来たんだ」

「未来、ですか？」

「ああ。聞きたくないか？ あんたの平等の思想が未来でどうなってるのかさ」

「でも証拠が」

「さっきの変身じゃ駄目かな？」

だんだんとこっちのペースになってきた。このまま畳み掛ける。

「未来になっても別に差別が無くなってても、悪人がいないわけでもない。それでもみんな歩み寄っているんだ。人も、妖怪も、神も、みんなが同じ目線で生きている。普通に近所に暮らしたり、仲間だったりする」

「本当にですか？」

「もちろんだ。特に俺らの周りは顕著だな。なんでもいる。でもそれが普通なんだ」

「……………私は」

「ん？」

「私は未来へ希望が持てませんでした。人が人以外を拒む姿しか見てこなかったから。でもその話が私を安心させる嘘であろうと、とても嬉しかったです」

「嘘なんかじゃない！！ 全部本当だ！！ なんなら未来に連れて行ってでも見せてやるよ」

俺がそう言うと僧侶は静かに首を横に振った。

「それは出来ません。私は今、この時代を変えなくてはならないから。でも、もし私が貴方の時代まで存在したら、この寺まで呼びに来てくれませんか？ 私は貴方が暮らす時代が見てみたい」

「お安いご用だ。でもあんたは大丈夫か？ そんな夢みたいない約束をして。いなかったら怒るぞ」

「私は魔法使いですから」

そうだったのか。でもさっきの弾幕を思い出すと納得だ。しかし魔法使ってそんなに長生きなのか？

「じゃあ俺は帰るよ。村人には適当に誤魔化しておく」

「その必要はありません。私は旅に出ますからいなくなつたと伝えて下さい」

「そうか。っと大切な事を忘れていた。俺はロック・ハワードだ」

「私は聖白蓮です。ロック、貴方のような出会えて幸せです。また会いましょう」

白蓮は寺を出ると空へと飛んでいった。さてと、村人に白蓮がいなくなつたのを説明してさつさとおさらばしようかな。

僕は神様なロック編（後書き）

ロック爆発しろ。それ絶対フラグだろ。お前は何勝手にフラグを建てるんだ。

ではキャラ紹介をしましょう。

聖白蓮

出演：東方project

肉体派弾幕僧侶。あらゆるものが平等な社会を主張するも迫害されてきた。そんな中、不思議な事を言っ自分と安心させてくれたロックスに好意を持った。今はまだ若く二十歳程度。魔法使いとしても未熟で、不老長寿などではない。

割と普通な汚忍編（前書き）

もう12月ですね。クリスマス？ リア充^{ロッケ}爆発しろ。

割と普通な汚忍編

伊賀の里で数日過ごして分かったんだが、意外に開けた里のようだ。普通にお役人やら商人もやってくる。もちろん厳しいチエック体制は敷かれているんだが。

「おばちゃん、なんかいい野菜はあるか？」

「この里芋なんていい出来だよ」

「じゃあそれ貰うよ」

里の中には普通に店があり、特に野菜なんかは新鮮で美味しい。今日は里芋の煮つ転がしに親子丼なんていいな。

「汚忍殿、よろしいでござるか？」

「おつと半蔵さん、何か？」

「少しお灸を据えてほしい子がいるのでござるよ」

「俺がやるんですか？」

「いつも拙者達が怒っていても効果は薄れよう。たまには新しい刺激も必要なのでござる」

まあ確かに、怒られる事に慣れられたら困るよな。しゃあない。お世話になってる半蔵さんのためだ。一肌脱いでやるか。

――

「あのガキンチョですか？」

「うむ、名はうずまきナルト。とんだ悪戯小僧でござる」

金髪にオレンジの服とは随分派手な格好してるなおい。おっ、動き始めた。どんな悪戯をしてるのか。

「そりゃ！」

「キヤー！？」

女子にカエルや虫を投げつける。

「いただき！」

「あ！ こらー！..！」

人の家の柿を盗む。

ズボツ

「うわぁ!?!」

「かかってやんの」

落とし穴に人を嵌める。

「成る程、これ以上ないくらいお手本な悪戯小僧だ」

「どうにか出来るでござるか?」

「やってみせましょう」

あのガキンチョは多分、エネルギーが有り余ってる馬鹿かだ。だっ
たらエネルギーをぶつける方向を変えてやればいい。

「おいガキンチョ」

「あんた誰だつてばよ」

「貴様のような雑魚に名乗る名はない」

「なにを〜!?!」

「雑魚ではないというならば悪戯ではなく実力を見せてみる」

「よし、やってみるつてばよ!?!」

こっちに走ってくるガキンチョ。そのまま真っ直ぐ来いよ。

ドゴーン

「ぐえっ!?!」

「地雷に引つ掛かるとかざまぁw」

「き、汚いぞ!?!」

「汚いは褒め言葉だ。行くぞ!?!」

尻餅をついているガキンチョの首を掴んで持ち上げる。

「ストームブリンガー!?!」

「ぐああ!?!? ち、力が……」

体力を奪ってるんだから当然だ。しっかし弱いなぁ。

「ほい」

掴んでいたガキンチョを投げ捨てる。なんか動かない。死んでるはずもないし、死んだふりか?

「そこだ!?! 螺旋丸!?!」

当然地面から飛び出してきたガキンチョ。分身での変わり身だったか。だけど奇襲で大声出したら駄目だろ。

「ちくわだ」

「なにい!?!」

「からのお、天元突破あああ!?!」

「うわあああああ!?!?!」

こっちも変わり身をして回転しながら突撃をした。今度こそ変わり身じゃないみたいだ。

「悪戯ばつかで修行しないからだ。へっぽこでござるな」

「く……そお!?!」

ガキンチヨの周りに赤い気のようなものが纏わり始める。なんだかヤバそうだ。

「忍者が1人、忍者が2人」

「うがあああああああああああああ!?!?!」

「ファイナル分身!?!」

赤い気の爪でただ乱暴に攻撃をしてくるガキンチヨ。これはヤバイ。空蝉を張ってなければ即死だった。だが空蝉がある限りは俺は無敵。このまま逃げ切ってやる。

「あああああああああ!?!?!」

このまま逃げ切って……

割と普通の汚忍編（後書き）

他に比べたら汚忍の平和な事。まあうちの汚忍は非常に常識人ですから。

ではキャラ紹介をしましょう。

うずまきナルト

出演：NARUTO

ご存知主人公。この作品では修行をサボる悪戯小僧。しっかり修行をしていれば汚忍に勝てたかも。

みんな、集まれ（前書き）

一週間ぶりの駄文更新になります。

みんな、集まれ」

し、死ぬ。いや何度も死んだ。実際は死んでないけど気持ちが悪んだ。あまりに酷い修行だった。

「これで黄金状態は完全にお前のものだ。おめでとう」

「あい」

「まさかあんな無茶な要望まで聞くとは感心したぞ。お前には奴隷の素質がある」

「嬉しくない素質だな。ていうか今の発言、もしかしてあそこまでやる必要なかったんじゃないか？」

「その通りだ。今更気が付いたのか？」

「こんのドS天狗め！！ 俺の苦勞を返しやがれ！！」

「じゃあな」

「どこへ行く弟子。飯を作れ。肩を揉め。ぶちぶちを用意しろ」

「うぜえ」

下手に甘やかしたのが運の尽き。こいつは俺がいろいろやるようになってから全てを俺に押し付けるようになった。

「やれ」

「離せ！！ 引っ付くんじゃない！！」

「殴るぞ」

「じめんなさい」

情けないと思った奴、絶対に殴られてみる。痛いなんてもんじゃないんだぞ。

「お前がいなくなったら私はどうすればいい！！」

「今まで1人だったんだろぅが！！」

「ならお前はここから離れてどうする！！」

「知り合いを探すんだよ！！」

「未来から一緒に来たという奴らか？ 場所も分からずにどう探す」

「それは……」

「ほれ見ろ」

正直あいつらがどこにいるかは分からない。だけど帰る時には一緒に帰らないと……

「そういえば……」

前回タイムマシンにはAIが入っていた。もしかしたら今回のタイ

ムマシンにも何か有用な機能があるかもしれない。

「希望が見えた」

「諦めが悪いな」

「生憎性分だな」

俺はタイムマシンの中に入っている探る。そして気が付いた。なんか食い物の減り方がおかしい。最近この中に俺は入ってなかったから、絶が食ったのか？ それはないな。いつも一緒に食べてたから。間食にしては多すぎる。

「ワフツ！」

「なんだ犬が迷い込んでたのか。ほれ、危ないから外にいる」

そういえばこの犬ってボストンテリアとかいう品種だったような。これってこの時代の日本にいたっけ？

「ワン、ウワツフ」『兄ちゃん、馬鹿にしちゃいけないぜ』

「！？ 誰だ！？」

突然男の声が聞こえてきた。少なくとも俺は知らない声だ。

「ウウ。アンツ！！」『酷いな。目の前を見な！！』

「……お前か？ 犬」

「ワン、ワフン」『おうよ、イギーってんだ』

どうやって喋ってるのか知らないが、この犬が喋っているようだ。犬のイギーならみんなを探せるかな？

「イギー、頼みがあるんだが」

「ワンワンワフン。ワオン」『兄ちゃんの友達を探したいんだろ。条件があるがな』

「条件？」

「ワオンウワツフワンワン」『未来に帰ったらコーヒークラムをくれ』

「ハハハ、いいぞ」

「ワオン!!」『良しきた!!』

イギーがそう言うのと突然変なものが現れてイギーを乗せて飛んでいった。あれは確かスタンドって奴だっけ？ 犬でも使えるのか。

「お、おいカンフー!! いい、犬が喋って」

「慌てるなよ絶。そういうもんなんだ」

「どついうものだ!!」

――

「お主が最近噂のろっくとやらだな。拙者は佐々木小次郎。手合わせ願おう」

「ああ」

白蓮を説得してから俺は武者修行の真似事をしている。今は長い刀を持った侍の相手だな。

「そこ」

あれだけ長い刀なのに的確に、そして速く人体の急所を狙ってくる。だからこそ見え見えだ。

「こつちだ!!」

「見えておるよ」

侍の後ろに高速で回り込んだが、侍は俺の動きについて来て刀を振ってきた。

ガッ

「!?!」

「どつちがだ？ クラックカウンター！！」

俺は刀の腹を叩いて軌道を変え、踵落としを叩き込んだ。だがまだ終わらない。

「ハアツ！！」

「ぐうつ！？」

倒れそうになった侍をダブル烈風拳で吹き飛ばす。そして俺は侍の落下地点へと跳んだ。

「レイジングストーム・ネオ！！！」

「ぐおおおおおお！！！！？」

侍が落ちるより速く着地し、それと同時にレイジングストームを使った。地面から噴き出す気の奔流に飲まれた侍は気絶した。

「ウォン」「やるな」

「今度は誰だ？」

「ワン」「俺だ」

……………この時代は犬が喋るのか？

「ウォンウォンワンツ。ワンワンウワッフ」「カンフーの兄ちゃんに頼まれてな。この場所に行ってくれ」

カンフーか。久しぶりだな。やっと会えるのか。犬のタブレット端末の地図を見る限り、小伊吹山の麓か。ってこれ俺ら全員が印されてるな。全員が小伊吹山付近にいたのかよ。

「ありがとなわんこ。俺は行く」

「ウォン」『頑張れよ』

――

「汚忍殿、またナルトが来ておるでござるよ」

「んあ」

人が昼寝をしていた時、たまに一緒に修行をするじゃじゃ丸くんがそんな報告をしてきた。実にめんどくせえ。

「追い返せよ、じゃじゃ丸くん」

「帰ってくれないのでござる」

じゃじゃ丸くんなら簡単だろ。じゃじゃ丸くんは上忍だろうに。

「しゃーない。開けてくれ」

「御意に」

じゃじゃ丸くんが扉を開けるとナルトの馬鹿ガキが突っ込んできた。

「汚忍の兄ちゃん！！ 勝負「サマソオ！！」ぐえっ！？」

向かってきたナルトをサマーソルトで気絶させた。

「ウーーン、オニーン、パーフェクト」

「ウワツフォン」『楽しそうだな』

「犬が喋っている！？ 妖でござるか！？」

「ワンワン」『ちげえ』

いや、普通は犬が喋らないから驚いて当然だろ。まあ首輪から音声が
出ているのは確認した。バウリンガルのな何かだな。

「犬、何か用か？」

「バウワオンワオン。ワンワンワオン」『ここに行ってくれ。カン
フーの兄ちゃんが待ってるぜ』

カンフーマンだって？ こいつが本当の事を言っているのか分らないが、この時代にはないタブレット端末を持ってるし、信用して

やるか。

「じゃじゃ丸くん、ダチの手掛かりが見つかったから俺は行く」

「そうですか。ではまた会いましょう」

「ああ」

――

「靈禍のお茶は美味しいわね」

「あら、靈夢の菓子もなかなかよ」

私と靈禍は縁側でのんびりとお茶を飲みながら、七夜と志貴さんの殺伐とした訓練を眺めている。

「終わり」

「くそっ！ また勝てなかった」

「俺らの本分は暗殺。まだ無駄だらけだ」

七夜だって常に本気だっというのに、志貴さんは本当に強いよね。

「志貴は楽しそうね。あんなに喋っちゃって」

「普段は一言二言しか話さないのに七夜には良く喋るのよね」

「志貴は七夜が気に入ってるのよ。私も貴女が気に入ってるのよ？」

「近い近い近い!!」

ちよっと動いたら唇が触れるくらいの距離に近寄らないでよ。百合は趣味じゃないの。

「ワンワンウオン、ワオン？」 『お楽しみ中悪いが、いいか？』

「誰がお楽しみよ!!」

「キヤイン!? キューン!!」 『ひえ!? 死にたくない!!』

突然やってきた喋る犬にキレたら犬は何かに乗って飛んでいった。なんか落としてるし。

「! 七夜! これ見て!!」

「何がだ? これは、俺らの場所か？」

「みたいね」

犬が落としたタブレット端末には地図と私達の位置が名前付きで示されていた。ロックと忍者はカンフーのそこへ向かってるみたいね。

「靈禍、私達行くわ」

「行ってらっしゃい。機会があればまた来なさい」

「志貴、次はあんたを倒す」

「……楽しみだ」

――

おっ、イギーが帰ってきた。無事に終わったみたいだな。

「お帰りイギー」

「……ワン」『……寝る』

イギーは疲れたのかすぐにタイムマシンに入っていった。

「もう帰るのか」

「みんな集まったらな」

「私の美味しい飯があゝ」

「もう相手にしないからな」

「それはそれで悲しいぞ」

絶とこんなやり取りを何度もしているうちに最初にやってきたのは忍者だった。

「一番乗りか」

「忍者、久しぶり」

「互いに元気そうだな」

「ふう、やっと到着か」

「「ロック！」」

次にやってきたのはロックだった。以前よりボロボロでワイルドになっっている気がする。

「久しぶりだな。お前達も強くなってるな」

「死にかけたから」

「伊賀の里にいたしな」

忍者の奴いいな。見た目もあれだから簡単に馴染めたるう。

「ちゃんといるわね」

「ようお前ら。幼女はいないか？」

「「「いねえよ」「」」

七夜が変わらずに安心した。博麗が一番変わってないな。これで全員集まった。やっと帰れる。良かった良かった。

みんな〜、集まれ〜（後書き）

全然ネタが思い浮かばない。次回で過去編は終わらせてやる。にしても絶ちゃん、カンフーに依存しすぎだな。誰か絶ちゃんを買ってやって下さい。

ではキャラ紹介をしましょう。

イギー

出演：ジヨジヨの奇妙な冒険

スタンドというなんか守護霊のような特殊なものを持った犬。首輪型パウリングルで話せる。実は当初からタイムマシン内にいた。

佐々木小次郎

出演：F a t e / s t a y n i g h t

物干し竿という長い刀を操る侍。必殺の燕返しを使う前にロックにやられる。

じゃじゃ丸くん

出演：忍者じゃじゃ丸くん、MUGENオリジナル

半蔵の技はもちろん、すごい漢やストライダーの技すら使いこなす忍者。低身長すら武器とする。

そういえば活動報告でもやっているのですが、この小説で好きなキャラを3人まで挙げてもらえると嬉しいです。ではでは。

ただいま現代（前書き）

モンハン楽しいなあ

ただいま現代

遂に帰る日が来た。絶があんまりに五月蠅くて1日延びたけど、やっと俺達の夢弦に帰れるんだ。

「良かったわ、まだいたのね」

「……」

なんか博麗と七夜そっくりな人が来た。中身は別物のようだけど。

「靈禍、どうしたのよ」

「靈夢に報告。かくかくしかじか」

「……本気？」

「本気」

博麗が滅茶苦茶迷惑そうな顔をしているんだが、一体どうしたのか。

「七夜。戻ったら付き合いなさい」

「生憎俺は幼女としか」

「意味が違っわよ」

「汚忍殿、お見送りに参ったでござる」

「半蔵さんに里のみんなじゃんか」

今度は大量の忍者がやってきた。気配がないから驚いたぞ。忍者だから当然なんだけど。この人達が伊賀の忍者か。

「……ロックのお見送りはいないのか？」

「喧嘩売ってんのかカンフー。いなくて悪いかよ」

いや、俺には絶、博麗と七夜にはそっくりさん、忍者には忍者達がいるんだからお前にもいてもおかしくないかなと思ったのに。というかロックにいないのはおかしいだろ。

「カンフー、お前達がいるのは400年後だな？」

「多分そうだけど」

「400年……覚えたからな」

絶の発言に嫌な予感を感じてしまった。絶対何か当たるよね、これ。

「おいカンフー、早く乗れ」

「お、おう」

ともかく帰ろう。そうしよう。

「……うげえええええ……」「」「」

やっぱりこのタイムマシンの回転は堪える。は、吐きそつ。

「よく帰ってきた。いいデータが取れた」

「イグニス社長、話の前にこの子達を休ませてあげて下さい」

ゼロさんは優しいなあ、憧れちゃうなあ。

「バウ」『ただいまだぜ』

「お帰りイギー」

「ワンワン、ワァン」『ご主人、ガムくれ』

「家についたらな」

イギーはゼロさんのペットだったのか。てつきりイグニス社長のペ
ットだと思った。

「あれから6時間経っている。学校の方には我々から連絡したので
出席扱いになっている。今日は自由にしたまえ」

「…………はい…………」

全員が怠そうに返事をするとバラバラな方向へ向かい始めた。なんだ、みんな家に帰るんじゃないんだな。俺は早く帰ろう。今いる場所は家にかなり近いし。

「見えた。久しぶりの我が家だ」

数日ぶりの我が家は安心感がある。ここ数日はほぼサバイバルだったしな。

「ただいま」

「うえ〜ん！ カンフー！！」

「どうしたモノ？」

「変なの来たー」

「誰が変なのだ、小娘」

……………どうして絶がいる？

「400年待ったぞ馬鹿弟子」

「待て。家はどうやって調べた」

「匂い」

そうかー、天狗だもんなー、天の狗だもんなー、匂いくらい分かるよなー。

「納得出来るか!！」

「ご主人、お師匠さんには優しくしないとイケないですよにゃ」

「にゃんこはいい子だなあ。うりうり」

「アイルーですよにゃ」

「ではカンフー、これから私はここで暮らすからな」

断りてえ……

――

博麗め。付き合えって言うから何かと思えば、小伊吹山じゃないか。わざわざ2人で来る必要もない場所だろ。

「おお? 霊夢に七夜だっけ? やっほ」

「久しぶり、萃香」

「元気だな。やらないか？」

「いきなりどうしたの？」

「スルーですかそうですか」

いいんだいいんだ。合法ロリなんて興味ないからいいんだ。畜生。

「この辺りかしら」

博麗が突然スコップを取り出して地面を掘り始めた。

「楽しそうだね。手伝うよ」

「ありがと。ほら七夜も」

「へいへい」

3人で地面を掘っていると何かスコップに当たる感覚がした。石とかじゃないな。

「当たりね」

「これは、棺桶か？ まさか」

「あの2人のよ」

お前、現代に帰ってきて早速墓荒らしはないだろ。死者を愚弄する

つもり

パカッ

「ん〜、よく寝た。もう400年？」

「……………硬い」

「そりゃ400年寝てたもの」

あれ〜、おつかしいぞ〜。ただの人間がどうして400年も寝てるんだ〜？

「ま、禍巫女に殺人貴!？」

「あら萃香、しぶといわね」

「鬼」

「分かってるわよ。鬼だから400年くらい余裕よね。さて、準備運動しますか」

霊禍が腕を軽く振るとそこらへんの木々が抜け、加工され、簡易的なログハウスとなった。400年前より強くなってるかい？

「いい感じね」

「わけが分からないよ」

「萃香に賛成だ」

ナイア達も相当だが、これは格が違いすぎたな。

「霊夢、七夜、いつでも遊びに来なさい」

「……………待っている」

……………たまに来ないと殺されそうだ。

――

今俺が進む道には妙に妖怪とかが多い。過去の武者修行でも妖怪と戦ったが、現代でもこんなにいるもんなんだな。

「着いた」

ボロボロになった寺。表札にはなんとか見える程度に命蓮寺と記されていた。

「お邪魔します」

中もすつかり風化しているようだ。その中に大量の札が貼り付けられた扉があった。

「これか？」

とりあえず札を剥がしていく。この中にミイラとかいたら嫌だな。流石にそうなら泣くぞ。

ギイイ

「おっと」

札を全て剥がすと鈍い音を立てて扉が開き、中から女性が倒れてきた。

「スウ……スウ……」

「随分大人になってるな。とりあえず、迎えにきたぞ白蓮」

「ん……」

まだ起きそつにないな。仕方ない。家まで運ぶか。

「よっ、と」

白蓮をおんぶして家へ帰る。しかしあれだ。本当に大人になってるな。背中に胸が当たる。

――

なんとなく伊賀の里があった場所に行く。現代ではどうなっているかが気になったからな。

「団地になったのか」

400年って本当に長いんだと思い知らされる。仕方ないっちゃ仕方ないんだが、多少の虚しさがあるな。

ドンッ

「うおっ!?!」

「わふっ!?!」

ポーっとしていたらガキンチョにぶつかられた。

「大丈夫か?」

「心配ご無用。このはは忍者だから大丈夫なのでござる」

「忍者? お前があ?」

「むむっ、このはは服部の姓を継ぐ由緒正しい忍者でござる……!」

服部か。よくある姓だが、もしかしたらな。

「へいへい、じゃあお前は忍者だよ」

「信じてないでござるな!!」

「信じてますよお」

「むー!!」

このガキンチヨの戯れ言が真実か知らないが、真実としたら案外400年も長くないな、半蔵さん。

ただいま現代（後書き）

みんなの要望を聞いたら更にカオスに。ちなみに靈禍は400年前が1Pとしたら、現代では12Pです。ではキャラ紹介をしましょう。

服部このは

出演：アルカナハート

この作品では自称服部半蔵の子孫。この先出番があるかは不明。

今回はクリスマス企画。その次は新年企画の予定です。

クリスマス・イブ（前書き）

クリスマス・イブですね。七夜と煉メインのお話です。

クリスマス・イブ

今年もこの季節がやってきた。クリスマス・イブ。巷ではアベックがイチャイチャする大変不純な季節だ。しかも今年は土日ときた。

「嫉妬の炎がメラメラとお」

「どうしたのさ七夜」

「煉か。今年もロリが彼女のアベック殺しに向かおうかと」

「馬鹿な事言わない」

サクッ

頭にトランプが刺さる。なんか久しぶりだ。

「せつかくのクリスマスなんだから楽しみなよ」

楽しめるか。こうしてる間にも腐ったアベック共が……

「どうせなら2人でクリスマスらしい事しようよ」

「クリスマスらしい事？」

「クリスマス会とかでケーキ食べたり、クリスマスツリーを飾ったり、プレゼント交換したりさ」

「2人ですか？ 寂しくないか？」

「そりゃ人数がいる方がいいけど」

クリスマス会か。煉のためにやってやるのも悪くないか。クリスマスツリー程度ならすぐ手に入るし、外へ出る口実になる。

「よし、クリスマスツリーを買ってきてやるっ」

「本当に!!!」

「そのくらいなら安い」

クリスマスツリーは安いのもいいか。待ってるアベック共。この俺が斬刑に処してやる。

――

意外にクリスマスツリーはないな。やっぱりイブには売り切れなのか。それに不健全なアベックも見当たらない。せいぜい手を繋ぐ程度のアベックばかり。

「せーつな」

「つと久那岐、あまり引つ付くな。って酒臭いぞ」
「いいじゃないか今日くらい」

いたな腐ったアベックめ。女は幼女ではないようだが、斬刑に処す
！！

「死ねえ！！」

「なんだ貴様！？」

「腐ったアベックを成敗する正義の「刹那と私の邪魔をするな！！」
うべらっ！？」

お、男にならともかく女側に反撃されただと？ しかも超はええ。

「こういう嫉妬に燃える男は嫌だな。行こう刹那」

「あ、ああ」

悔しいのお悔しいのお。これがギャグキャラの運命か。

「どうした七夜」

「その声はロツ……ク」

「その間はなんだよ」

お前がなんだよ。えっと、1、2、3、4人の女を侍らせやがって。

「どうしてそうなったか説明しろ!！」

「は？ まあいいけど、まず白蓮がクリスマスに染まった世間を見たいと言いついてな」

「まだ現代というものをしっかり把握しておりませんので」

よし、1人は納得してやろう。

「ついでだからみよんにクリスマスプレゼントをやるつという話になってな。俺と白蓮とみよんでしまらに行ったんだ」

「しまらは素晴らしいと思います」

俺も煉にプレゼントを買う途中だから納得してやろう。

「そんでたまたましまらで都古ちゃんとルシファーさんに会った」

「それはおかしい」

お前はなんだ？ 人間ホイホイか？ こういうのがいるから非リアは救われないんだ。おのれロック、そしてカンフー。

――

「ぶえくしょん!!」

「にいちゃ、風邪？」

「どうせ誰か噂してんだよ」

――

ロックを斬ってもいいが、こいつとやり合つとこつちも怪我をする。
今回は退いてやる。

「そついえばクリスマスツリーを見てないか？」

「お前がクリスマスツリー？ 煉にプレゼントか？」

「まあな」

「俺は知らないな」

「私知ってるよ」

「都古ちゃん、本当か？」

流石幼女。使い物にならないロックとは違うな。

「あっちにあつたよ」

「そうか、ありがとう。じゃあな」

さっさと手に入れて帰るか。

――

クリスマスツリーを探している途中に面倒な奴に会ってしまった。

「そんな顔すんなよ七夜」

「黙れよロア。何してやがる」

「見ての通りケーキを売ってるんだぞ」

クリスマス・イブにこいつのサンタの格好を見るとは思わなかった

な。

「さて、お前1人か？ 煉はどうしてる？」

「お前には関係ない、と言いたいが別にいいか。家だよ。俺はあいつのためにクリスマスツリーを手に入れる途中だ」

「そうか……」

こいつにしては珍しく神妙な顔をしてるな。それでも昔からの知り合いだ。何かを隠しているのは分かる。だが絶対に答えないのも分かっている。

「お前は煉の事を疑問に感じたりしなかったか？」

「そりゃ最初はな。だが今は気にする事もないだろ。家族なんだしよ」

「ならいいんだ。クリスマスツリーはすぐ近くだ。ただ本気でやるんだな」

本気？ 何を言ってるんだこいつは。そうか。クリスマスツリーの近くにはリア充が集まる。それを全力で倒せという事だな。こいつもなかなか根暗だな。

「情報は感謝する」

――

七夜を見送ったロアの元に3人の女がやってきた。ナイア、アナブラ、桜だ。

「七夜ならもう行ったぞ。追いつけたらどうだ？」

「今は貴方に話があるの」

「煉ちゃんについて聞きたいのよお」

「彼は七夜君と何の関係もない少年だった。それなのに何故か七夜君と一緒に暮らしているんです？」

「少し話しづらいな。空間を切るぞ」

ロアが手を振ると、それだけで空間が分断された。

「これで堂々と話が出るな」

「相変わらず魔術の無駄使いをするわね」

「今回の話はその魔術に関係するんだぞ。じゃあ何から聞きたい？」

「何から何まで」

「なら話してやるよ」

ナイアの言葉に少し怠そうにしながらもロアが口を開いた。そしてそこから発せられた言葉に3人は驚愕した。

「煉は七夜の『元』妹だ」

「なっ！？ 有り得ない！！ 彼女はいない人間よ！！」

「そうよ！！ 病気で死んだじゃない！！」

「死んだのを直接見たわけではありませんが、確かにお墓もありますし、この世にはいないはずですよ」

「混乱させて悪いな。正確に言うならば煉は七夜の妹、紫紀の生まれ変わりだ」

「生まれ変わり？ それこそ有り得ないわ。それが出来るのは貴方の転生の術でしか……まさか！！」

「そういう事だ。あいつは俺の転生の術を使ったんだ」

ロアはいったん休憩と言わんばかりに椅子を魔術で召喚して座った。そしてお茶を飲んで話を続けた。

「昔はよくあいつらと遊んでやったよな。その時にあいつらを俺の研究室に連れてつたりしたっけ」

「あのね、貴方の思い出話なんて興味ないの」

「まだ話は始まったばかりだったの。それで研究室に連れて行ったら紫紀が特に喜んでな。つつい魔術について教えまくっちゃまった」

「その時に転生の術を教えちゃったのお？」

「流石にねえよ。ただ魔術と一緒に研究室にある物を教え過ぎた。俺の研究資料とかもだ」

「なんとなく分かりました。紫紀ちゃんが死にそうになった時、紫紀ちゃんは転生の研究資料を見つけて実行、そして煉君に転生をしてみました」

桜の導き出した答えに困ったように頷くロア。彼にとっても資料だけでその魔術を公使するのは想定外だったようだ。

「でも転生の術って記憶とか受け継げたりしないのねえ」

「馬鹿言え。あれは紫紀がやったからだ。俺がやれば記憶はもちろん。性別から容姿まで全てが引き継げる。ただ紫紀は記憶を失っても、性別が変わっても、それでも七夜は忘れなかった。大好きな兄とはずっと一緒にいたかつたんだろ。大層なブラコンだ」

「そうね。でも七夜が彼を家族として自然に受け入れてたのは無意識下で妹と気付いているからなのかも」

「話は終わりだ」

ロアがまた腕を振ると切り離されていた空間が元通りに繋がった。

「さあ情報をやっただからケーキを買え」

「仕方ないわね。ショートケーキを12個頂戴」

「あいよ。桜は食い過ぎに注意しろ」

「私はそんなに食べません」

「ならナイアちゃん、1人2個でケーキ6個にしましょう」

「そっしまししょうか」

「12個をお願いします」

――

七夜まだかな。結構時間経ってるけど。

「ただ、いま」

「おかえり、ってどうしたの!？」

帰ってきた七夜はボロボロだった。でもクリスマスツリーはちゃんと持っていた。

「まさか葬式モードを使う事になるとは、クリスマスツリーも侮れん」

いやいや、本当に何があったのさ。クリスマスツリーと戦ったの？
信じられないよ。

ガタン

「なんだ？」

「玄関だね」

何かが置かれた音を聞いて玄関に向かう。そして玄関を開けるとそこには綺麗に包装された大きなプレゼント箱があった。

「煉君へ、サンタより、って書いてあるぞ」

「サンタさん！？ 開けてみるね！！」

サンタさんからのプレゼントを開けてみると、箱の中には最新掃除機『アトモス』が入っていた。僕がずっと欲しかったやつだ。

「やったよ七夜」

「よく分からんが良かったな」

「うん！！」

今年のクリスマスはなんだかとってもいいクリスマスになったな。
来年も楽しいクリスマスが来るといいな。

クリスマス・イブ（後書き）

煉本人も知らない秘密が明らかになりました。最後のプレゼントはロアサンタからの贈り物です。ではキャラ紹介をしましょう。

紫紀

出演：メルティブラッド（？）、MUGENオリジナル
七夜の妹。生きていればカルマちゃんと同じくらいの歳。天才であったが病で倒れ、転生の術で煉になった。ちなみに彼女が死んだ後、一週間ほど七夜は廃人同然だったらしい。カンフーに蹴り飛ばされて目が覚めたとか。

クリスマスツリー

出演：MUGENオリジナル
クリスマスツリー。七夜に狩られる。とりあえず強い。

アトモス

出演：FF5

ネスツ製のゲート型掃除機。吸引力は変わらず、ゴミを亜空間に飛ばして処理するためにゴミ処理も不要。吸い込まれないように注意。

新年会

今日はカルマが友人に呼ばれて新年会に行ったようだ。そこまで友人と仲良くなっているとは、兄として嬉しいぞ。

「カンフー、飯を出せ」

「まだ待て」

「そつだよぜつちゃん」

「誰がぜつちゃんだ。この泥娘」

カルマが新年会をやるなら俺も新年会をやるうと思っただが、博麗は家が神社だから忙しいし、ロックはロックで初詣に行っだし、七夜には連絡付かないし。というからお前らケンカするな。

「止めるおああああああ！　来るなあああああああ！」

「逃げられると思ってるのかしら？」

「追いついちゃうわよお」

「うふふふふふふふふふふふふふ」

「七夜さん七夜さん七夜さん七夜さん七夜さん七夜さん七夜さん七夜さん」

なんか外から声が聞こえてきたから窓から外を見ると、七夜がナイア先生とアナブラさんと桜さんとナコルルさんに追いかけてい

た。ハイワダナー。

ピンポーン

「誰だ？」

元旦の朝から誰が来たのか。

「よおカンフー」

「あけましておめでとございませう、カンフーマンさん」

「……あけましておめでとございませう、コマチ、市さん」

七夜、ハイワダナーなんて言うてごめんな。

――

今日はアンジエちゃんに誘われて新年会に来ました。アンジエちゃんのお家は凄く大きいです。

ピンポーン

「あけましておめでとうございます。カルマです」

『おおカルマか！！ あけおめだ！！ さあ入れ入れ！！』

門が自動的に開きました。ハイテクです。

「よく来たなカルマ」

「あけましておめでとうございます、カルマさん」

「アンジエちゃん、ミルドちゃん、あけましておめでとうございます。ジャギ君は？」

「ジャギなら兄達と初詣だぞ」

初詣か。私もお兄ちゃんに行けば良かったかな。でもアンジエちゃんに先に誘われちゃったもんな。

「あいつは家族を大切にしているいい奴だ」

「ジャギ兄様は悪ぶっていても優しいですからね」

「誰が悪ぶってるって？」

「ジャギ兄様！？」

「俺は悪だっつってんだろ」

「兄様痛いです！！」

突然現れたジャギ君にミルドちゃんはうめぼしをされていた。痛そう。

「ようカルマ、あけましておめでとうだ」

「あけましておめでとう、ジャギ君。お兄さん達は？」

「兄者達とは現場解散だ。だがたまたま面白いのを見つけたぞ」

「やあ、あけましておめでとう」

「あけましておめでとう、ADS君。相変わらず丸いね」

こんな事言ってるけど、ADS君が丸くないとどうなるんだろう。四角くなるのかな？

「それにしてもカルマもよく話すようになったな。私も嬉しいぞ」

「そうかな？」

「そうですね。カルマさんは明るくなりました」

「ああ、町内運動会で実力も見せつけられたしな」

「あれは凄かったよね」

こんな風に言われると恥ずかしいな。家族以外に褒められた事なんてないに等しいし。でもいい気分。

「よし、スゴクするぞ!!」

「アンジェは弱いから別のゲームにした方がいいぞ」

「うるさいぞジャギ!!」

「ならテレビゲームにでもしましょうか？」

「いいね、僕はテレビゲームは得意だよ」

ADS君はテレビゲームは得意というか機械全般が得意だよね。以前に学校の警備システム直してたし、凄いなと思う。

「ならやるぞ!!」

よし、負けないぞ。

――

遊んでいたら帰る時間になっていた。楽しい時間は過ぎるのが早い。

「あ、もう時間だ。帰らないと」

「もうか？ 泊まっていけよ」

「姉様、無理を言うものじゃない」

「そつだぞ姉者」

「僕は残っていいのかな」

「また学校でね」

お兄ちゃんは今頃何をしてるのかな。友達を呼ぶって言ってたけど、まだやってるかな？ 家まで近いし走る。

「到着。ただいま」

……………返事がない。

「にいちゃ？」

気になってお兄ちゃんの部屋に入ると……………うん。秘密。皆さん、よいお年を。

新年会（後書き）

カンフーとカルマの新年会でした。カルマが何を見たかはご想像にお任せします。
では次回もお楽しみに。

遊園地に行こうよ（前書き）

遅れて申し訳ない。でもこれからしばらくリアルな理由で遅れるかもしれないです。

遊園地に行こうよ

騒がしい。400年という時の流れはこつも世界を変えるのか。人は増え過ぎ、物は溢れ過ぎ、欲望は止まるところを知らない。全てが嫌いかと言えばそうではないが、不得意であるのは間違いない。

「志貴、何してるの？」

「何も」

俺に比べて靈禍は適応力が非常に高い。俗世にもしつかり染まっている。とてもではないが俺には真似できないな。

「最近ね、移動遊園地つてのが来たみたいよ」

「？」

「移動する巨大な遊技場よ」

よく分からないが、遊技場が動き回るのか？ なかなかに奇っ怪な光景だな。このご時世にはそんなものが平然と存在するのか。

「無料みたいだし、行く？」

「……ああ」

騒がしい場所へは行きたくないが、靈禍一人だと何をするか心配だ。見張るためにもついて行くか。

――

広いな。ここが移動遊園地か。だが動き回っていないぞ。こんな巨大な施設がどう動くんだ？

「ほら志貴、行きましょう」

「……………引つ張るな」

「いいじゃない。もっと遊びましょうよ」

こいつも元気なものだ。俺は遊ぶより鍛錬がしたいのを知っているだろう。だが言っても無駄だろう。そういう奴だ。

「じゃああれに乗るわよ」

「……………?」

「『珈琲かつぷ』ですって」

……………熱そうだな。

「お二人様どうぞ」

器の中に珈琲が入ってるわけではないのか。これは円盤だな。

「これを回すみたいよ」

「回す……」

「どンドンやるわよー!!」

霊禍が霊力まで使って円盤を回し始めた。すると俺達が乗っている器も回り出した。円盤と器が連動しているようだな。

「回れ回れ廻れまわれまわれ廻れマワレ!!」

「いじ」

サクッ

「イタッ!? いきなり短刀刺さないでよ!!」

「落ち着け」

「軽い冗談じゃない」

もう少しで円盤が破壊されるところだった。さっきの霊禍は頭も壊れてた気もするが、冗談だな。

「あー楽しかった」

「……そうか？」

「そうよ」

あれが楽しかったのか。こいつの思考は分からん。

「ほら次はあれよ」

「……………」

「今日は志貴もやる気あるわね」

いつも俺の気持ちを察してくれる事は有り難い。だが今は違う。そんな気持ちではない。

――

逢魔が時まで連れ回されてしまった。あのじえつとこーすたーとやらは大した事なかったな。観覧車などという車輪に霊禍と乗った時に周りの視線を感じたのは何故だろう。

「どうだった志貴？」

「……………まあ」

「そう。でも気分転換にはなったでしょう」

「……………まあ」

霊禍がわざわざ気を使ってくれたのだったとしたら感謝はしよう。悪くはなかった。

「フハハハハハ！ この街は我が征服してくれよう！！」

……………なんだあれは。目玉の付いた帽子に橙色の服、極めつけは青い肌。人ではないの是一目見れば分かるが。

「我が名はゾーマ。貴様らを征服する者だ！！」

そうか。これは劇だな。観覧車内で霊禍が移動遊園地では劇をやると言っていた気もする。

「何ですか貴方は！？」

「愚民が。失せるがいい！！」

従業員が投げ飛ばされたか。なんとなく分かってはいたが、やはり劇ではないか。

「志貴、やるわよ」

「……………いや」

あるものを確認してわざわざ俺達が手を出す必要はないと判断した。

「何だよ。私達がやらないでどうするの？」

「見る」

「……あー、はいはい。分かったわ」

ゾーマとやらの前に歩いてきた2人の男を見て霊禍も理解したようだ。1人はこの時代の緑の軍服を着た髭。もう1人は身を最低限隠す程度の服しか着ていない鉄仮面の変態。実力は確かなようだ。

「魔王である我に用か、虫けら？」

「全く。最近の魔王はやんちゃで困る」

「ガイアが貴様を倒せと囁いているのだ」

「邪魔立てをするか。ならば死ねえ！！」

「俺の踊りの前には無意味！！」

変態がゾーマとやらの攻撃を踊りのような動きで完全に避けている。無駄だらけに見えるが相手の動きを完全に読み切っている一切無駄のない動きだ。おそらく数十人が一斉に攻撃しようともあの変態にはかすりもしないだろう。

キーン

「彼ばかり相手をしていてよろしいのかな？」

「いつの間にも後ろに!?!」

「はっはっは」

軍服の男が高速、いや瞬間移動でゾーマとやらの後ろに回ると頭を掴んでそのまま地面に叩きつけた。地面は陥没し、ゾーマとやらは気絶した。

「おーいヴぁーん、ジェネラルの旦那、待たせたな」

そこへやってきたのはわかめのような髪をした男。そいつがこちらを見ると少し驚いたような顔をして近づいてきた。

「お前達が志貴と霊禍か？」

「誰よあんた」

「ロアと言う。カンフー達の兄貴分だ」

「あんたがねえ」

だから俺達の事を知っているのか。しかしこの男も実力者だな。

「ロア君、知り合いかな？」

「彼らには俺達並みのビートを感じるぞ」

「俺の弟分達の知り合いさ。デートの邪魔したら悪いし行くこうぜ」

この時代には大した奴らはいないと思ったが、あのような3人がいるならまだまだ捨てたものではないか。

「靈禍……」

「どうしたの？」

「でーとは？」

「分かんないわね」

靈禍も知らないか。この時代の言葉は難しいな。

遊園地に行こうよ（後書き）

この2人は夫婦でもなけりや恋人でもありません。でもお前ら結婚しちまえよ。

ではキャラ紹介をしましょう。

ゾーマ

出演：ドラゴンクエスト

魔王。しかしMUGENにおいてはかませである。

ヴぁーん

出演：FF11

どう見たって変態な踊り子。しかし実力は超一流。ロアとは旧知の友。

ジエネラル

出演：カイザーナツクル

最強の尖兵。しかし現在は現役を引退している。ロアには旦那と呼ばれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0580x/>

MUGENな日常

2012年1月10日16時45分発行